

オーバーロード 四方山話 《完結》

ラゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間種のマジックキャスターなオリ主がナザリック勢同様に転移してしまう話。

軽いノリで進行していきますのでシリアスは特にありません。

最後にギャグで落とすためにシリアスっぽいのはあります。

目次

プロローグ1	1
プロローグ2	5
プロローグ終	9
漆黒の意思と嗤う骸骨	18
快樂殺人者でアルティメットな女神様	22
こんなの絶対おかしいよ	37
うっかりモモ兵衛様	46
美姫ビキツ!!	51
突撃!隣のナザリツク	63
もう絶望する必要なんて、ない。	78
あるべどっ!!	89
日常	97
カリスマEX	108
さすデミ×さすアイ×さすオデ	116
カリスマ(偽)	128
アレコレ	139
そうして彼は墜ちていった	145
予想される未来凶	154
童心と道心と同心	162
繋ぎのお話	175
命永やか恋せよ乙女	181
愛しき名 それ故に	196
ようやく登場、その名は…	206

学院編	6	481
学院編	5	468
学院編	4	457
学院編	3	444
学院編	2	434
学院1		422
外伝		
その後		411
四方山話		385
続く。		372
悪気はなくとも		358
兆し		350
悪魔が笑う		337
それぞれの思い		327
革新		316
一欠片		303
死が二人を別つまで		286
不死鳥の如く		262
再会		248
老人と猫		233
どうしてこうなった		218

プロローグ1

目の前には緑色をした醜悪な小鬼が首から血を流し事切れている。いまだに慣れない、ゲームとは違う生々しさを感じながら報酬部位の耳を切り落としてつ男はこの世界に来た時の事を思いたため息をついた。

〈Dive Massively Multiplayer Online Role Playing Game〉『ユグドラシルへYggdrasil』

おおよそ12年前に開始された体感型のRPG。

サービス開始時にはかなりの話題となり、最盛時には一世を風靡したといっても過言ではない程に膨大なプレイヤーがこのゲームを楽しんでいた。

とはいえ何事にも終わりはある。

オンラインゲームでは最大数のアクティブユーザーを誇っていた事もあるこの『ユグドラシル』も本日をもってサービスを終了する予定となっていた。

そう、なっていたのだが――

「今日でユグドラシルも終わりか…」

鬱蒼と緑が生い茂った森に一人の男が陰鬱な気を纏いながら歩いていた。

「明日から何して過ごしゃいいんだよホント」

全身をゴツズアイテムで武装したその男はユグドラシルで最も多い人間種、そしてカンストプレイヤーであった。

とはいえサービス終了間際のゲームでカンストプレイヤー等珍しくもなく、それこそ掃いて捨てるほどに存在しているものではあるが。

そんなどこにでも居るようなこの男が何をしているかというところ――

——端的に言えばブーツとしていた。

「ここも久しぶりに来たけど変わってないな」

男がいるこの森はユグドラシルでも序盤のフィールドでありそんな所にアツプデートが入るはずもなく、となれば当然ゲームであるからして景色が変わっているわけもないのだが男はサービス終了のやるせなさに気落ちしているため深く考える事もなく見たままをそのままぼつねんとつぶやいていた。

「7年間くらいか、思えば結構やってたんだな」

途中別の体感型のRPGやソシヤゲ等に浮気することもあった男だが結局はユグドラシルに戻るのはこのゲームが性に合っていたということなのだろう。

へユグドラシルの最後を何処で過ごそうかと考えていた男であったがギルドにも所属せず、たまに野良パーティと狩りに行く程度の人付き合いしかしていなかったためこれといった場所もなく適当に移動していたらこのフィールドに来ていたのだ。

「あと5分か…」

別に人付き合いが嫌いな訳ではなく、さりとして進んでギルドに入ろうという性格でもなかった。惰性でソロを続けていただけではあったがそれが嫌だという性格でもなかった。

ギルドに誘われなかった訳ではなく幾つかのギルドから勧誘されたりもした男だが、個人的な付き合いの部分とはともかくギルドそのもので気が合いそうなものがなかったのである。

異業種を狩る事に精をだすギルド——PKに否定的な訳ではないがそこまで情熱を傾ける程でもなかった。

ひたすら可愛いものを愛でるために存在するギルド——まあ自由度の高いゲームなのでやりたいことは人それぞれである。

異形種のみで構成されたギルド——個人的な付き合いのある連中はいるがそもそも条件を満たしていない。

結局機に恵まれなかったただけなのだろう。

それでも充分楽しんでいた、楽しめていた。

満足はしているのだけど寂しさは拭えない。

しかしなにより男が気にしているのは。

「課金した30万円返ってこないかなー。…ちくしょう」

みみっちい男である。

趣味に掛けた金額が7年間で30万円。それを高いととるか安いととるかは人それぞれではあるが、月額使用料金1500円と合わせれば一つのゲームに掛ける金額としては中々ではある。

後悔はしていない、だがそれだけお金を掛けたデータが自分の都合以外の要因で消えてなくなるというのは悲しくなるのが人情というものであろう。

セコケチなのは変わらないが。

「あー終わる、終わる、終わっちゃう。20、19、18…」

人生の4分の1近くを共にしたへugdラシルの終わりである。何かしなければ、何をすればいいのかとよくわからない焦燥感に駆られる男。

ちなみに今から26年前の西暦2100年の時分、5歳であったこの男は世紀を跨いだ瞬間机から大ジャンプをすることで「その時地球にいなかったんだぜ」と100年前からある阿呆な行動を大発見とばかりに満面の笑みで実行した挙げ句、捻挫で新年早々に病院に迷惑を掛けたことのある大馬鹿者でもある。

そんな男がとったへugdラシル最後の行動とは。

《フライ／飛行》

まったく成長を感じさせない行動である。

そして——カウントが0を刻む。

美しい眺めと共に有終の美を飾ろう、等と所謂「ちよつと感傷に浸ってる俺ってカッコいい」とちよいナルシーな阿呆加減を発揮した結果。

「はっ？ちよまっ？！」

突然変わった景色、いきなり感じた高所であるが故の強風、終わる筈だった世界の継続に対する混乱。

それらがもたらすのは当然——

かつて世紀を跨いだジャンプより遥かに高い所からの墜落であつ

た。

プロローグ2

その日、冒険者パーティ「漆黒の剣」はトブの大森林近郊でゴブリンやオーガの討伐を行っていた。

これらのモンスターの討伐を行いギルドへ討伐証明部位を持ち帰る事である程度の褒賞金を得ることが出来るためである。

目ぼしい依頼もなく、懐が寂しくなってきた低位の冒険者の貴重な収入源であるこの活動を未だ銀プレートのパティである「漆黒の剣」は恒常的に続けている。

それは褒賞金のためであり、そしてパーティの目標でありパーティ名そのものでもある「漆黒の剣」のためでもある。

かの十三英雄の一人「黒騎士」が持っていた4振りの剣の名前が漆黒の剣であり、それを追い求め得ることが目標である彼等はそんな伝説とも云える宝物を得るに足る実力を有しているかというところ——否定せざるを得ないだろう。

だが彼等はそれを自覚しており今は無理でもいつかもつと強くなり4人で夢を叶える、そのためにモンスターとの戦闘も積極的に行い経験を得ているのである。

つまり今日も今日とて経験とお金のためにモンスターをシコシコと狩っているのだが、ちょうど前日から数えて通算16匹目のゴブリンを討伐したところで上空から謎の声が舞い降りた。

最初に気付いたのはレンジャーでありパーティにおける「目」の役割を持つルクルットだった。

「たっ助けっ」

ちなみに気付いた1秒後には謎の声の主は地面と激突していた。

パーティ「漆黒の剣」は硬直していた。当然だろう。上空からなにかが猛スピードで落下してきたと思ったならそれが人間だったのだから。

「だっ大丈夫ですか!？」

「いや、大丈夫なわけねえだろ…」

マジックキャスターのニヤが駆け寄り安否を確かめようとする傍ら、ルクルットが至極当然の台詞を返す。

さっきのスピードで人間が地面に激突して大丈夫だったら化け物だろ。

そんな心の声がニヤ以外の3人で共有された瞬間、今度は驚愕がその心を埋め尽くす。

「おあつ…ーっ！」

落下した男がうめき声をあげつつ上体をむくりと起こす。

「良かった、無事だったんですね。怪我は有りませんか？」

まず無事なことに突っ込めよお前はいつから天然キヤラになったんだ。

とまたもやニヤ以外の3人の心の声が一致したところで全員が墜落した人物のところへ駆け寄った。

この一事をもって見てもこのパーティのお人好しさが見てとれるだろう。

粗野で粗暴な者が少ないとはけして言えない冒険者稼業において、いきなり空から落ちてきた不審者をまず心配して駆け寄るなどお人好しが過ぎる。

むしろベテランの冒険者から見れば無用心にも程があると嘲笑の対象となるかもしれないレベルだ。

とはいえそれが「漆黒の剣」であるし、そんな人情味の溢れているところがギルドにおいてシルバープレートながらも信頼され期待されている理由でもあるのだろう。

「あつ、と…すみません。いや、ありがとうございます」

戸惑いながらもしつかりとした足取りで男は立ち上がる。

「いえ、それより怪我はありませんか？　すごい勢いで地面とぶつかってましたけど…」

「ええ、特に体に支障は無いようです」

さっと体全体を確認した後、男は安堵した様子で頷く。

「サービス終了の時間がきたと思っいたらいきなり景色が変わるわ変な

感覚になるわで散々でしたよホントに。延期かなにかですかね？
まったく最後なんだから、もちつとしつかりしてほしいものですよ
ね」

何を言っているか全くわからない。今度こそ4人全員心が一つ
になった。

「あー、無事だったみたいだし取り敢えず自己紹介でもしないか？
俺はペテル・モーク。このパーティ「漆黒の剣」のリーダーをやっ
ている」

精悍な顔つきをした好青年が自己紹介を始める。

「俺はルクルト・ボルブ。パーティじゃレンジャーを任されてる」

少し軟派な印象の男がウイंकを決める。

「あ、えと、僕はニニヤと申します。マジックキャスターで後方支援を
担当しています」

肌の白い中性的な容姿の少年がペコリと頭を下げる。

「ダイン・ウツドワンダーである。宜しく頼むのであるよ」

いかつい見た目をしているが優しい笑みで人を安心させる雰囲気
をもった男が独特な口調で握手を求める。

「あ、はい。オデンキングです。私もマジックキャスターのジョブを
取っています…っ」

ここにきてオデンキングは酷い違和感の正体に気付いた。

アバターの表情が動いている、口が動いている、匂いを感じる、土
の一粒一粒まで再現されている、どれもヘグドラシル<では有り得
ないことだ。いやヘグドラシル<どころか体感型のRPG全て含め
てもこれは有り得ない。

「(それにさつきからのこの方達の態度も含めて、これはまさか、いや、
有り得ない、だが俺は、まさか——)」

混乱しながらもオデンキングが出した結論は

（ユグドラシルのキャラのまま異世界に転移してなおかつこの世界の人々はユグドラシルよりかなり貧弱で相対的に私は神levelではつきりいって単騎で世界を滅ぼせるような強者で今邂逅しているのはメタ的に私の最強さを確かめさせる方達でついでにこの美少年はよくある男装美少女で明確なフラグ的なものがある、よって今俺はすばらしい異世界LIFEの入口に立っているのでは――）

多分に妄想が増し増しであるが奇跡的な直感によりおおよその現状を把握したオデンキングであった。

プロローグ終

「お、オデンキングさん…ですか…」

ペテル達は戸惑っていた。いくらなんでもその名前は無いだろう。あからさまな偽名を名乗られている、いや偽名ならもつとそれらしい名前を付けるだろう。

では偽名ではないのだろうか、いやいやそのほうがもつとありえないだろう。

そういえば顔立ちが見たことの無い人種な気がする。

彫りが浅く黒髪黒目、この辺ではまず見かけない容姿だ。

というか良く考えたらさっきので死んでない時点で人間じゃないのかも、等と各自色んな事を考えていた。

そんな時オデンキングはこちらもちらで色々と考えていた。

「まあさっきの阿呆な妄想は置いて、しかし異世界云々はあながち間違っていないんじゃないだろうか。さすがにこの質感が仮想現実とは思えないし、体もゲームキャラそのものだ。

とすれば俺が取るべき行動は…」

「いえいえオデンキングではなくオーデイン・キニングと申します。さっきの落下のせいかわ呂律が回らなかつたようで」

既に名乗ってしまったゲーム用の変な名前を、出来る限り自然に取り繕う事であった。

「《フライ／飛行》で飛んでいたらいきなり…ですか」

オデンキングは現状を確認するため「漆黒の剣」へ同行を願い出たところあつさりと快諾した彼等と共に、踏み締められ固くなった道を進んでいた。

「ええ、あまりにも異常な事態に驚いて恥ずかしながら墜落してしまっています」

少しでも情報を得たいオデンキングは積極的に彼等に話しかけることにする。

「そんな、全然恥ずかしいなんてことありませんよ！《フライ／飛行》を使えるだけで尊敬しちゃいます」

《フライ／飛行》は超位魔法を除くと全部で10段階に分けられる魔法の内の下から数えて3番目。

つまり《ユグドラシル》でいうと魔法職なら誰でもすぐに使えるような初歩の呪文である。

「マジか。第3位階の魔法で尊敬されるのか」そう、ですか。私の居たところでは割と誰でも使える魔法だったんですけど……」

オデンキングは《ユグドラシル》の事について隠すつもりはない（態々説明することもないが）。楽観的な性格をしているというのもあるが、そこそこの人生経験から得た教訓として嘘はなるべくつかないほうが結果的に上手くいくことが多いということを知っているからだ。

嘘を誤魔化すために嘘を塗り重ね、結局整合性もとれずに信用を失う。

そんな人を長いとも短いとも言えない人生の中で幾人か目にした。もちろん嘘をついたほうが角が立たない場合があるのは理解しているし、そもそも価値観は人々であり自分が正しいなどは欠片も思っていないがそれでもオデンキングはなるべく嘘はつかないように生きてきたし、ここがどこであろうともその気質を変えるつもりもなかった。

ちなみに名前については嘘をついた訳ではなく、オデンキングの自己認知的にもきつちり改名していた。

ゲームならともかくリアルであんな名前を常用するほどオデンキングは非常識ではないのだ。

そう、けっして恥ずかしくてとっさに嘘ついちゃったからではないのだ。

「おいおいどんな魔境だよそこは、それとも超エリートが集う学院とか？ その装備もちよつと見たことないレベルで凄そうだしな〜」

ルクルットが少し羨望が混じった目でオデンキングの装備を眺め

て言葉が続ける。

「魔境と言えるところは確かに沢山ありましたがそれでも皆楽しんでいましたよ。装備については…フフ、苦労しましたからね」

全身をゴツズ級の装備で揃えるのは中々に苦労するのだ。誉められて悪い気がするわけもない。

「ふむ、やはり凄そうな場所であるな、そのへユグドラシルという国は」

ダインがその立派な顎髭を撫で付けながら感嘆の声を上げる。

「あー、正確には国という訳ではないんですが…。やっぱり聞いたことありませんか？」

すべて説明すると時間も掛かるし面倒臭いためそのまま話を進めていく。

「うーん、申し訳ないけどやはり耳にしたことはないかな」ペテルが謝意を含んだ声色で返す。

帰る当てのつきそうにないオデンキングの心情を気にしているのだろう。本当に良い人である。

「ま、もしかしたらギルドで聞けばなにか情報があるかもしれないしそう悲観的になりなさんなって」

ルクルットが持ち前の明るさで気さくにオデンキングを励ましてくる。

別に帰りたいとかそういった感情は今のところオデンキングにはなかったが、その心遣いはやはり嬉しくなるというものだ。

「もうすぐエ・ランテルに着きますし何か情報があればいいですね」
ニニヤが屈託のない笑みで会話を締めた。

「では俺たちは一度宿によってからギルドに向かいますので一旦お別れですね」

「ええ、本当に助かりました。このお礼はいずれ必ず」

ギルドへの道を教えてもらった後、先に宿に寄るといいう「漆黒の剣」

と別れ単身ギルドへ向かうことにしたオデンキング。

「いえ、困った時はお互い様ですから。ではまた後ほどに」

言うのは簡単だが実際に行動が伴っている人間がどれほどいるだろうか。

異世界に転移して一番最初にこの4人と出逢えたことはきつとてつもない幸運だったのだろうと、それを噛み締めながら4人と別れる。

「やっぱニニヤちゃん女の子だよなあれ……。ああ結婚してえ……」

オデンキングもといオーディン・キニング。

本名 佐々木 鉄平 実年齢31歳 現在の身体年齢19歳。

女性に余り縁のない独身貴族である。

ギルドの扉を開けると屯している屈強そうな男達から視線が飛んでくる。

オデンキングを目にした彼等はまずその装備の威容に驚いた。

今までの人生でお目にかかったことのない程に質の高そうなローブ、淡く光る宝石を幾つも嵌め込みそれでいて嫌みにならず芸術性を感じさせる杖、おそらくマジックアイテムであろうシンプルだが美しい輝きを放つ指輪。

人の印象の50%は最初の第一印象で決まるといいますが、オデンキングを見た冒険者達は間違いなく凄腕のマジックキャスターだと認識しただろう。

「冒険者登録をしたいのですが、こちらのカウンターでよろしいのでしょうか？」

オデンキングは自分にかかる視線の意味をしっかりと理解し――

「(優越感で蕩けそう)」

顔がにやけそうになるのを必死で堪えていた。

「はっ、はい。こちらで間違いございません」

ギルド嬢は緊張していた。確かにこのギルドにも高ランクの冒

険者は存在するし、手続きをしたことも一度や二度ではない。

リ・エステイーズのギルドを拠点にしているアダマンタイト級冒険者も遠目になら見たことはある。

しかし今日の前に居る男が持つ雰囲気はそれと比べても遜色が無い、いやそれどころか――

「あの、大丈夫ですか？」

「えうつ？あ、も、申し訳ありません。すぐに手続きをさせていただきます」

我にかえったギルド嬢はすぐに手際よく手続きを始める。

「（私が考えても仕方ないことだし仕事に集中しなきゃ…）」

真面目に仕事を進めるギルド嬢に対しオデンキングはといえば

「（誘ってきてもいいのよ）」

優越感と自尊心、その他諸々をくすぐりまくられるこの状況を楽しんでいた。

というかぶつちやけると調子に乗っていた。

異世界様様である。

「オーデインさん」

「あ、皆さんもう来られたんですね」

無事手続きも終わり依頼を探そうとしていたところで「漆黒の剣」がギルドへと入ってきた。

「あれ、冒険者登録されたんですか？」

ニニヤがオデンキングの銅のプレートを見て少し驚きながら声を掛ける。

「ええ、へユグドラシルの情報もなかったので取り敢えず地に足をつけようかと」

「ハハッそりゃいいや。また墜落したらかなわねえもんな」ルクルツトがからかい気味に話しかけてくる。

「ぶつ、ちよつ、とルクルツト、オーデインさんにフフっ、失礼だよ」ツボに嵌まったのか笑いがとまらずに、泣き笑いのような表情で

謝ってくるニニヤ。

「(天使がここにいた。ニニヤちゃんマジ天使)」

女の子に余り縁がないオデンキングは可愛い女の子に少し気安く話し掛けられただけで舞い上がってしまうのだ。

俗に言う「オタ男子がビッチギャルに普通に話し掛けられただけで惚れちゃった現象」である。

そんなこんなでギルドでの談笑を終え、依頼を受ける時間もなくなってしまったため4人と別れ宿を探す段になってオデンキングはようやく気付いた。

「この国のお金もってねえや」

結局、聴いた筈の「漆黒の剣」が泊まる宿の名前もド忘れしたオデンキングは誰にも頼れず途方に暮れ、街を駆けずり回って見つけたアングラな雰囲気漂う怪しげな商人によって「ユグドラシル」の金貨を王国の通貨に替えることに成功したのである。

買い叩かれたのと言うまでもない。

「ほら、もつとしつかり杖を握って」

「は、はい。あ、あの…」

「ほら、また重心がずれてる。後衛だからって体術に無関心つてのはいけないよ。相手が前衛を抜けて突進してきた時に上手く避けられるかどうかでパーティの命運を別つときだってあるんだから。」

…それっ!」

「ひゃんっ!?! あ、あああのそこまでくつつく必要はないのではない

でしょうか」

「ごつちのほうが効率がいいんだ」

「あ、あの、でも…」

「男同士なんだから何も問題ないだろう？ …それとも何かあるのかい？」

「い、いえ、その…大丈夫です」

「よ、よし今度は関節技だ。実際に掛けてみるから、が、頑張つて脱け出すんだ」

「い、いやどう考えてもマジックキヤスターの鍛練じゃ…ちよつ…あ、あの、目が怖いですつ、て、きやつ！」

イヤーーーーー……

「…良い夢だった」

爽やかな朝の目覚め。

オデンキングは夢ですら調子に乗り始めていた。

朝、目が覚めたオデンキングはへユグドラシルへから異世界に来たことが夢では無かったことにほっとしたような残念なような何とも言えない気分になっていた。

「やつぱ多少の未練はあるのかな？」

こんな状況になって悩まない人間の方が少数派であるのは間違いない。

どちらかといえばオデンキングは割りきっているほうだろう。

精神の安寧に、前日の羨望の視線がどれだけ役に立っているかは本人のみぞ知るところである。

はつきりしているのは、帰る手段があってもそれが一方通行ならばこちらに残るのは決めているということだ。

「さて、と」

そう、これから始まるのだ。伝説の魔物を軽々と倒しあつという間にアダマンタイトに上り詰め、呼ばずとも美少女が集まってくる夢の生活が。

現実では居るはずもないような悪徳奴隷商人。そいつに虐めぬかれる、普通に考えれば売れ残ってるのは有り得ない美少女奴隷を助けて惚れられる展開が。

たまたま街でタイミング良く悪漢に襲われる美少女を救ったら偶然にも御忍びで街に出ていた第三くらいの王女で都合良くその次の日くらいに悪の大臣が謀反を起こして王女なのになぜか護衛もなく逃げるところをたまたま目撃してなし崩し的に同行して、愛を育むのに程よい距離の王女の庇護者を頼る旅が始まるのだ。

「俺の勝ち組人生が今始まる…!」

オデンキングはまだ知らない。

へugdドラシルでも悪名高い、異形種のみで構成されているPKギルド「アインズ・ウール・ゴウン」が同様に転移してきていることを。

「美少女…いや異世界なんだから美少女もありか？ アグ〇スだつて流石にこんなところまでは…」

オデンキングはまだ知らない。

ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」のNPCが自我を持って動きだし、その95%以上が人間を嫌悪し、侮蔑し、下等生物だと見下ろしていることを。

戦力比でいえば100対1かそれ以上で負けていることを。
調子に乗っているこの男はまだ何も知らない。

漆黒の意思と噛う骸骨

「あー…疲れた」

森の中で気だるそうに薬草を摘んでいる男が一人。

名前はオデンキング。

今は紆余曲折あってオーデイン・キニングと名乗っている元へユグドラシル∨プレイヤーである。

廃人プレイヤーだったわけではないがカンストしたマジックキヤスターであり、集めるのが難しいゴツズ級装備を全身に纏っていることから上位プレイヤーだということが見てとれる。

つい先日ユグドラシルから訳もわからずこの異世界に転移してきたこの男が何故こんなことをしているかというところ――

「うーん、もう少しいい依頼とかないでしょようか…。難度40程度の敵ならば余裕を持って倒せるぐらいの実力はあるつもりなんです」
銅クラスが受けられる依頼に難度の高い魔物の討伐等あるはずもなく、オデンキングはカウンターのギルド嬢に相談していた。

言葉は丁寧だが要はいちやもんである。

確かに言っていることは間違っていない、難度40どころか本気を出せばその3倍の難度だって問題なく討伐出来るだろう。

しかし。

「本当に申し訳ございませんが、当ギルドの規則でございまして銅クラスの冒険者にはこちらの依頼のみしか受注することが出来ません」
ギルド嬢もわかつてはいるのだ。

目の前にいるのはまず間違いなく凄腕のマジックキヤスターであり、このギルドにある依頼なら難なくこなせるであろうことも。

しかし規則は規則である。

そうぼんぼん破っていては存在する意味がない。

「そうですか…では、この薬草採取の依頼をお願いします」

ようやく諦めたオデンキングはギルドを後にしてトブの大森林へ向けて出発したのであった。

「ホント今更だよなー!…」

さっさと成り上がってちやほやされたいオデンキングにとって今の現状は不服そのものである。

挙げ句のはてに街に強大な悪魔がやってきてそれを倒したりすれば手っ取り早いんじゃないだろうかと不謹慎なことを考えだしていた。

ちなみにこの男、この異世界にきてからたった幾日も経っていないというのに既に少し性格が変わってきている。

この世界に来たばかりのオデンキングならば地道に薬草採取することに文句などなく、それどころかギルド嬢にいちやもんをつけるなど考えもしなかったであろう。

何故変わってしまったのか、その答えはいたって単純明快である。ギルドに限らず、街を歩けばその装備の威容に羨望と称賛、そして嫉妬の感情を隠すことなく向けられる。

裏路地で幅をきかせている犯罪者、表通りで肩で風をきって威風堂々と歩く冒険者、この街で何だっと思いついて思いつき出来るような権力者。

こいつらだっって所詮自分が本気を出せば指一本で無力化出来るその事実。

そう、人は持った力が大きければ大きい程に自制心を保つのが難しくなる生き物だ。

それはオデンキングだっって例外ではない、むしろ持っている力を考えれば自制できているといえるだろう。

だけどやっぱり人は弱いのだ。

もう転がらだした運命は止まらない。

堕ちてゆく精神に歯止めは効かず、非道な暴力を振るうことの暗い楽しみは宛ら麻薬のような依存性がある。

そのうちに男であった時の面影は消えて無くなるだろう。

一匹の、狂った獣が、怯える羊達の上で、ただ血に酔いしれるまで
後――

「そんな厨二心をくすぐるダークサイド★墮りヌシに、私はなりたい。
…わけないな。少し現実逃避してた」

辺りには血の鉄臭さが漂い、事切れた小鬼の生々しさを強調している。

「うう…意外とグロい…」

薬草採取中に襲ってきたゴブリンに驚いてつい腕をおもいつきり
振ったら首から上がロケットの如くポーンと飛んでいったの巻

「当然発射台の真ん前にいた俺は燃料まみれ、と。こんな大量の血、初
めてみたわ」

ちなみにロケットは無事に発射台の近くに不時着した。

「なんかショックで変な電波受信してた気がする…。」

うん、大丈夫大丈夫。俺はいたって健全なロリコンで、紳士で、大
人の美女も好きで、ギルドにいちやもんつけるような最低系オリ主で
もない。うん。大丈夫大丈夫」

ちなみにギルドでの問答は真実である。

「ちよつとリアルな血をみて冷静になれたな。少し浮かれてたみたい
だし、いい経験にはなった…のか？ 謙虚にいこう謙虚に。「漆黒の
剣」の皆さんを見習おう、うん」

耳を切り落としたあと薬草採取を再開する、ちよつと謙虚になった
NEWオデンキング誕生の瞬間であった。

——ナザリック地下大墳墓——

へユグドラシル」の中でもトップクラスの規模を誇るギルド「アイズ・ウール・ゴウン」の拠点、ナザリック地下大墳墓で一体の骸骨が不気味に笑っていた。

「いよいよ明日か…冒険者モモンとして活動するのは」

異形種が殆どを占めるこの「アイズ・ウール・ゴウン」でギルド長をつとめ、ギルドの名を冠した不死の王もまた——

「やっぱり一旦馬鹿にされた後からの実力披露イベントでへ嘘…だろ…へお、俺達は何て奴を馬鹿にしていたんだ…!!」とかが一番いいよな…ウムム」

少し厨二病を患っていた。

快樂殺人者でアルティメットな女神様

トブの大森林での採取を終えたオデンキングは今後の身の振り方を考えていた。

このままエ・ランテルのギルドで地道に冒険者ランクを上げていくか、それともリ・エステイーゼ王国に向かい新天地にて新たな出会いを求めるか。

王国よりも魔法を重視しているというバハルス帝国にて立身出世を目指すのもいいかもしれない。

この異世界に来て幾日か経ったがエ・ランテルでの情報収集は順調に進み、オデンキングはこの世界における自分の特異さや実力、どの程度の魔法を使えばどういった風に見られるかを大まかには把握していた。

それに加え「ユグドラシル」の情報である。

「ユグドラシル」という名詞こそ発見は出来なかったものの、明らかに「ユグドラシル」のプレイヤーの痕跡が各所に散見される。

それはお伽噺に近いような扱いをされている六大神や八欲王の話であったり、史実として認識されている十三英雄の話、それに「口だけの賢者」という実在した人物の情報もあった。

この世界の戦闘における平均値は「ユグドラシル」と比較すれば非常に低いのは間違いないだろう。

そのおかげで、というのもあれだが高レベルの「ユグドラシル」プレイヤーは世界に名を遺しやすかったというのは想像に難くない。

この異世界に転移してきたプレイヤーがいたというのは確認出来た。

過去に転移したプレイヤーが居るのならば、今もプレイヤーがそこらあたりに普通に生活している可能性はないとはいえないだろう。

オデンキングから見ると未来に転移してくるプレイヤーがいる可能性だつて充分にある。

そんな情報を得てオデンキングが出した結論は。

「あんまり好き勝手やっているとDANZAI系オリ主に肅正されるか

もしれないな…」
身も蓋もなかった。

「ホントにどうしようかな…。美女美少女美幼女を侍らして楽しんでる生活を元の世界の人間に見られて白い眼で見られるのは嫌だし…」
別に悪事をはたらくつもりはない。

真っ当に働いて真っ当に稼いで金に物をいわせて美少女達を侍らしたいのだ。

その行動が真っ当なのかは置いておく。

努力して手に入れた強さではないことに若干の後ろめたさはあるものの、だからといって使わないなどという選択肢は有り得ない。

この力で稼いで女の子達と遊ぶのだ。

ニコポナデポなんてものは持っていないが、そんなオデンキングだってカネポなら出来るのだ。

お金を持っているという事だって魅力の一つだ。

江戸時代だって金持ちの証明であるデブ体型が人気だったではないか。

純真無垢で人の善性を信じる清楚な美少女に愛されるなんて無謀なことは毛ほども考えていない。

金無垢好きで金の魔性を知ってる淫蕩な美少女でいいのだ。

「いや、むしろそっちのほうがエロいな。うん、エロは正義だ」

オデンキングも本気でDANZAIされるなどは思っていない。
というか現実には於いてそんな物語の敵役として都合のいい思想の偏った人間がそうそう居るはずもないだろう。

オデンキングが気にしているのは人の眼である。

何も知らない異世界の人達が見れば

〈好色という欠点はあるものの十三英雄レベルの凄まじい力を持ったマジックキャスターである〉

という認識だって、プレイヤー…つまり元の世界の感性を持つ者から見た場合

〈幼稚園児の群れでお山の大将を気取ってる残念な大人〉

として認識されるかもしれない。

まあ残念な大人というのは間違っではないがつまりオデンキングは羞恥心が人一倍ということなのだ。

オデンキングを見たプレイヤーに耳元で

「異世界にきて凄いい力を持ったから無双して美少女を集めて」ねえ、今どんな気持ち？」

などと言われたら顔から《ファイヤーボール／火球》が噴き出すかもしれない。

「まあ取り敢えず女の子については置いて、金を稼ごう。懐の豊かさは心の豊かさだ、うん」

懐に余裕があれば心にも余裕が出来る。

中流階級の社会人ならば身に染みて感じるこの事実を、当然オデンキングも世知辛い元の世界で嫌というほど経験していた。

ちなみにオデンキングは《ユグドラシル》のアイテムや金貨を換金することは考えていない。

少量の金貨ならともかく億万長者と言えるほどに金貨を放出すれば経済に混乱がおきるかもしれないからだ。

金に価値があるからこそ金貨として成り立っているのだ。

その量に大幅な変動があれば市場は混乱するだろう。

勿論只の考え過ぎかもしれないし、オデンキングが所持している金貨の量など国にしてみれば誤差とすら言えないレベルでしかないかもしれない。

それでも考えなしに行動した結果経済が荒れました、なんてことになれば笑い話にもならない。

金持ちという存在は安定した国と市場があつてこそなのだ。

アイテムに関しては何をか言わんやである。

補充出来るかどうかとも判明していないこの状況で消耗品を手放すなど愚の骨頂だろう。

「悩んでても仕方ないし…よし、次の目的地は帝国に決めた。魔法を重要視する国だし、行っても損はないだろ」

生来の楽観的性格が顔を覗かせる。

「あと何件か依頼を受けたら、世話になった人達に挨拶回りして出発するか」

次の日、「漆黒の剣」が依頼を受けカルネ村へと向かった事を知ったオデンキングはタイミンクの悪さに苦笑しつつ彼等が帰還するまで出発を延期することを決めた。

異世界に来て一番世話になった彼等に、顔も会わず旅立つなんて礼を失することは出来るわけがない。

「ま、遅くとも5日以内には帰ってくるだろ。それまでは…遊ぶか」
転移してきて9日間、情報収集と依頼で休みを取っていないオデンキングは「漆黒の剣」が帰還するまで遊び呆けることに決めた。

「……………ふう」

娼館からの帰り、オデンキングはマジックキャスターから賢者へとジョブチェンジしていた。

「まさか元の世界より満足できるとは思ってたなかつた」

中世に近いこの世界で娼館など衛生的にもビジュアル的にも期待してはいなかった。

しかしどうだろうか。いざ行ってみれば生活魔法のおかげで衛生的にも問題なく、日本では自動的に付いてくる年齢増し増しサービスもなく、進歩し続ける画像加工技術によるミラクルなパネルマジック詐欺にも合わなかった。

「明日は朝から夜まで居ようかな…」

帝国に行く意思すら揺るぎはじめる始末である。

「……………」

想像以上に居心地が良かったため随分夜更けになってしまい、人の気配が一切なくなった路地を進むオデンキングだがふと先を見ると暗い夜道に人間大の何かが倒れ伏しているのに気がついた。

「フラグだ、間違いない。病気で倒れた美少女だ、間違いない」

賢者タイムは一瞬で終わり、異世界9日目の夜にしてようやくフラグゲットかと期待に胸を膨らまして急ぎ駆け寄る。

「そんな都合良いことあるわけないよね。知ってた」

駆け寄った先には恐怖に歪んだ表情で死んでいる男の死体があった。

というかよく見たらその先にも死体らしきものが幾つも見える。

「こんなフラグはいらないだよ、ちくしょう！」

嫌な予感をビンビンに感じながら周囲を見渡す。

「やつほー、こんばんわー」

すると暗がりから身を現した女が血臭の漂うこの場に全くそぐわない、能天気とも言える声でオデンキングに話し掛けてきた。

今オデンキングに、この世界に来た時に一度だけ発揮された奇跡のような直感力がまたも脳内に展開されていた。

ぞくりと鳥肌が立ち、背筋に嫌な汗がツウと流れ落ちる。

かつての自分も経験した悪夢が脳裏に過り、体温が数度程も下がったような錯覚に襲われる。

いや、直感がなくなっただってオデンキングはきつと確信していただろう。

血の滴る武器を携え、口裂け女もかくやといったほどににんまりと口の端を限界まで歪め、それでも端整な美貌は損なわれていないこの女。

「どうしたのー？ 恐怖で動けなくなっちゃたのかなー、フフっ。かわいいねー」

間違いない、この女は元居た世界でも類をみない程の

——重篤な厨二病に罹患している——

秘密結社ズーラーノーンの幹部《十二高弟》の一人。

スレイン法国が誇る六色聖典の内の一つ、漆黒聖典第9席次であり人類最高クラスの戦士。

「元」ではあるがそんな肩書きを名乗ることが許されていた女の名前はクレマンティーヌといった。

六色聖典の一つ、風花聖典から秘宝ともいえる「叡者の額冠」を強奪し闇の巫女姫を発狂に追い込み逃走した彼女はスレイン法国からみれば最悪の犯罪者である。

エ・ランテルまで逃亡したはいいもの予想以上に追跡の手がしつ

こく、この街にいるブローラーノーンの同僚カジットを利用し追っ手の眼を眩ます事を決めたクレマンティヌであった。

あからさまな追跡者に関してはさっさと殺しておくに越したことはない、と快樂殺人者である彼女は本能が求めるままに殺しを楽しんでいた。

そして全てを殺し尽くした後、殺人の余韻に浸っていた彼女の前に新たな生け贄が現れた。

「痛い…。心が、折れそうな程に苦しい。助けて」

血の滴るステイレットやニタニタ笑い、演技っぽい猫なで声で語尾の最後を伸ばして、↑をつけたような喋りかたにオデンキングは戦慄していた。

出会は確かに求めていたがこれはないだろう、と。

打ち切り漫画に出てきそうな「作者が考えた格好いい狂人」みたいだな、とオデンキングは内心で一人ごちた。

ちなみに生命の危機は微塵も感じていない。

からかうように台詞を続けるクレマンティヌであったがその心の内は全くと言っていいほど油断はしていなかった。

見るからに凄腕のマジックキャスター、おそらくここ最近噂になっている冒険者に間違いないだろう。

過信とも言えるレベルで自分の強さを誇っているクレマンティヌであったが、強者を前にして油断する程に傲りはしていない。

自分が英雄級であると自称する彼女だからこそ距離を取られた時の上位マジックキャスターの恐ろしさは理解している。

そう、距離を取られた時の、だ。

完全に自分の間合いに入ったこのマジックキャスターは既に詰んでいる。

今からどう詠唱を始めようとも自分の刃が先に男の命を奪うだろ

み〱であった。

——チクリツ——

「痛つ!? ちよ、嘘、わわつ、《ショック・ウェーブ／衝撃波》っ!!」
混乱した頭で深く考えずに反撃として放った魔法は低位階のものではあったが、そのレベル差によって致命的な一撃となってクレマンティーンを襲った。

具体的に言うとお胸から下、腰から上がグロ過ぎる程にへこんだ。

フルプレートすら歪むこの魔法で即死しなかったのは人類最高の戦士（笑）の面目躍如である。

とはいえ殺すつもりも覚悟もなかったオデンキングにはこの状況——ボン、キュツ、ボンな美女が目の前でボン、ギュツ、ボンになっているのはちよつとしたホラーである。

「ギヤアア—————!!」

「キヤアア—————!!」

翌日、オデンキングがこの世界に転移してちようど10日目の朝。オデンキングが宿泊していた宿屋の一室でクレマンティーンは眼を覚ました。

「知らない天井だ…」

「（お前が言うんかいっ!）」

異世界テンプレもので何故か良く眩かれる、某人造人間に乗って戦う少年のセリフは22世紀を過ぎてもなお有名であった。

前日の夜、危うく殺人犯になりかけたオデンキングは滅茶苦茶に焦りながらクレマンティーンの体に上位ポーシオンをドバドバとかけていた。

「よ、良かった、生きてる…」

過剰にかけられたポーシオンはその効果をきつちりと発揮して、クレマンティーンを完全回復させた。

だが死にかけたせい意識が戻らないクレマンティーンを心配して取り敢えず宿屋にお持ちかえりするオデンキングの、心配と下心の割合がどのくらいであったかは不明である。

ちなみに死体達は放置している。

明らかにあの者達を殺害したと思われるクレマンティーンを宿屋に持ちかえたのは、やはり美女だからである。

むさいおっさんであれば治療した後は確実に放置していただろう。

差別と言うなかれ、美女美男子はそれだけで人生のハードルの25%くらいは低くなるのが世界の真理である。

大量殺人者だろうが重度の厨二病だろうが可愛い正義なのだ。

それにどっちが悪人かだってまだわからない。

実は暴漢に襲われた彼女が反撃して殺しちゃった後に急に現れたオデンキングにびっくりしたせいで封じ込めていた厨二心が暴発してあんな状況になった可能性だってあるのだ。

「ねーよ」

「此処は…？」

未だ状況を理解していない彼女にどう説明したものかと思案するオデンキング。

はたと見つめ合う二人。

そしてクレマンティーヌに前日の夜の記憶が甦る。

「オラアツ!!」

「どわあっ!?!」

オデンキングに殴りかかった勢いのままに素早く周囲を把握し、逃走を計るクレマンティーヌ。

「ちよっ、待った待ったあー!」

一応殺人者を匿っているという認識はあるので逃がすのはまずいと思ったオデンキングは逃がすまい、とレベル差による身体能力で無理矢理ベッドに押し返し動けないよう全身で押さえつける。

ちなみに昨夜、血のついた防具のままベッドに寝かせる訳にはいかなかったのでこれは仕方ないよねと自分に言い訳しつつオデンキングは視姦しながらクレマンティーヌの装備を脱がしていた。

そんな彼女の服装は現時点で薄手のシャツとスカートのみ。

傍から見ればまさに、マジでレイプの5秒前である。

「ちよ、何もしないから大人しくしろって」

努めて冷静にクレマンティーヌの体を堪能しながら説得するオデンキング。

「既にしてんだろうがっ! どこ触ってたんだ変態!」

息を荒げながら抜け出そうとするクレマンティーヌだがビクともしない男の強さに次第に抵抗を弱くしていく。

そして少し冷静になった頭で考える。

「(私の一撃を受けて痛いだけですみ、《ショック・ウェーブ／衝撃波》一発で私を戦闘不能にする絶大な魔力を持ち、戦士である私を力で上回っているマジックキャスター? 何の冗談よそれ)」

今更ながらに絶望を感じるクレマンティーヌ。

「あー、取り敢えず昨日どういった状況だったのか教えてもらえないか?」

そんなクレマンティーヌをよそに軽い雰囲気事情を聞きはじめるオデンキング。

体の一部がエレクトロカルパレード中なのは内緒だ。

オデンキングは悶絶して倒れた!!
クレマンティーヌは勝利したことで精神の安寧を手にいれた!!
クレマンティーヌは超格上を単独撃破したことによってレベルが大幅に上がった!!

「ごめんなさい」

オデンキングは取り敢えず謝っていた。

「……」

「あの、一応言い訳させてもらおうとですね、あの、徹夜で見張っていたのでテンションがおかしくなってしまうてですね、」

「……」

「そんな状態で密着していい香りがしちゃってですね、息子が勝手にエレクトリカルパレードしたいと聞かずにですね、」

「ウザ、キモ、死ねば?」

「うぐうっ!」

レイプ魔の謗りだけは避けたいオデンキングは必死に謝罪していた。

異世界だろうがどこだろうが性犯罪者の汚名だけは被りたくはない。

誰だってそう思うだろう。

実際のところクレマンティーヌは別段怒っていない。

うぶな処女でもあるまいし、たかだかあの程度のことでは恨んだり恥ずかしくったりするほど貞淑なわけではない。

ただこの状況から自分の利益になるよう上手いこと持っていくために、思考するための時間を稼いでいるのだ。

「(こいつの力を利用すればきつとクソ兄貴を殺せる…いや、なんか自分だけでいける気がしてきたけど。なんか力が溢れてきてるし)」

「…ま、いいよー。私も悪かったんだしー」

「(その恥ずかしいキャラは続けるのか…)」

「スレイン法国の追っ手、ねえ」

「そ、ホント鬱陶しいんだーあいつ等。ちよろつと秘宝を盗んだだけなのにさー」

「いやいやいや」

オデンキングに説明を求められたクレマンティーヌは全部ぶつちやけていた。

オデンキングからは害意なんて欠片も感じないし、なにより協力を求めるならば理由を内緒にして手伝ってもらえるわけもない。

「で、まあ、そーゆーことだからティンちゃんにはー、兄貴をブツ殺すのを手伝ってほしいなーって」

クレマンティーヌがこてんと首を傾けながら上目遣いでお願いする。

あざとすぎるこんな仕草も目の前の男には効きそうだと思っただ。

「う、うーん」

靦面である。

「(可愛い顔でえらいことおねがいしてきとる…)」

殺害されていたのは後ろ暗いアングラな連中だったと知って、取り敢えずクレマンティーヌを衛兵に突き出す気はなくなった。

甘いと言われるかもしれないが、この世界は命の価値が低いのだ。

加害者と被害者、両者共に裏の人間ならどちらが悪いかなんて自分

が判断するものでもない。

まあ、クレマンティーヌが悪人なのは間違いないようだが。

「あはは、ゴメンねーいきなりこんなこと言われても困るよねー」

寂しそうに俯きながら呟く。

ちなみにこの演技は次のお願いで肯定を引き出すための、罪悪感を煽るためのものである。

「じゃあ、せめて旅に同行させてもらっちゃダメ？ さっき帝国に行くって言ってたよねー？ まだ襲ったお詫びも出来てないし、ね、ダメ、かなー？」

「追っ手を一緒に撃退してなし崩的に俺をスレイン法国の標的に追加させる作戦ですね、わかります」

「うん。ダメー？」

「いや、駄目に決まって…」

甘い香りが柔らかな感触と共に鼻孔に突き刺さる。

「ねー…？」

「ま、まあ帝国までならいい、かな」

「(落ちんの早すぎい!!)」

後10手以上用意していたクレマンティーヌだが意味はなかったようだ。

この日、パーティ「ビリオネア」が結成された一幕である。

こんな絶対おかしいよ

オデンキングとクレマンティーヌがパーティを結成した翌日、夜も更けたころ「漆黒の剣」がエ・ランテルに帰還した。

「そーいや叡者の額冠だっけ？ 結局あれどうすんの？」

オデンキングがクレマンティーヌに問いかける。

「んー、もう騒ぎを起こす必要もないしー、目的の目処もたつたからいらないんだけどー…」

オデンキングに会わなければスレイン法国の追っ手をかわすために必要な物だったが、庇護者を得て自身も明らかに成長した今では無用の長物である。

「それ返せば取り敢えず追っ手も緩むんじゃないのか？」

色気に引つ掛けられたオデンキングではあったが出来る限り面倒は避けたい。

「んー、どうだろ。そんな殊勝な連中でもないと思うけどなー」

数百万に一人の適正しか持たない巫女姫を使い物にならなくしたのだ。

国の面子を考えると追っ手がやむというのは考えづらいだろう。

「そっか…。あぁー…」

「そんだけ強かったら何も問題なんてないでしょー？ 何でそんな悲観的になるの？」

この娘、割りと脳筋である。

「俺は可愛い女の子達と平穩に暮らすのが夢なんだよ。何が悲しくて国に追われる事態に足を突っ込まなきゃならんのだ」

まだ追っ手とやらは見掛けていないが時間の問題なのは間違いないだろう。

「…へー。今日の朝まで散々楽しんでいってそんなこと言うんだー。ふーん」

越えてはいけないラインを易々と飛び越えていく男。

それがオデンキングである。

「い、いや、まあ追っ手が来たらちゃんと守るさ、うん」

美人局より厄介なものに引つ掛けられた。

今のオデンキングの心情はそんな感じであるが、完全に自業自得だから仕方ない。

だが後悔はしていない。

据え膳を食わないなんてのは鈍感型の難聴系主人公だけでいいのだ。

美女に誘われたらついていくのは当たり前。

たとえそれが地雷だと知っていても男にはやらねばならぬときがある。

取り敢えず大後悔しているのを自分自身に誤魔化すように脳内で理論武装していくオデンキングであった。

痴話喧嘩、ともいえないやり取りをした二人は気を取り直して夜の街へ呑みに繰り出していた。

「どこにするー?」

「遠くまで行くのも面倒だしギルドの近くの居酒屋でいいか?」

「はいはい」

何気に仲良くなっている二人である。

「そういやさ、そのカジツちゃんやらはほつといて大丈夫なのか?」

「さー? でも叡者の額冠が無かったら大したこと出来ないだろーし、ほつといていいんじゃないかなー?」

いかにも興味なさげに言葉を返すクレマンティヌ。

まあ事実ではある。

急に姿を消したクレマンティヌに対しカジツトは、所詮は信用など出来ぬ小娘であったかと死の宝珠に負のエネルギーを注ぐ日常に戻った。

大方、ドジを踏んで風花聖典にでも捕まったのだらうとカジツトは推測している。

ズーラーノーンには仲間意識など欠片もない。
あるのは利用し、利用される関係だけである。

ギルド近くの居酒屋に向かう道すがら、二人は酒が入る前から話を弾ませていた。

「で、そのバードマンが言い切ったんだ。「技術の発展は最初に軍事、次にエロと医療に使われるのだ。これはエロの偉大さを物語っている」ってさ。」

感動したよ、まさにその通りだって。人間はもっとエロに対して敬意をはらうべきなんだ」

「へー。変態に種族は関係ないんだねー」

「いや、だから変態じゃないんだって。仮に変態だとしても、変態と言う名の……ん？」

「どしたのー？（変態と言う名の何なんだろ）」

ギルド方面から伝説の魔獣に乗った男がオデンキング達に近づいていた。

その獣は伝説というだけにはあり、目を引く程の巨体に力強い瞳、強者の雰囲気を感じた体で威風堂々と表通りをのし歩いている。

そしてその魔獣に跨がるのもまた並々ならぬ強さを感じさせる漆黒の騎士。

黒い輝きを放つその立派な鎧の背には巨大な剣が2本くりつけられていた。

男の名はモモン。2日前に登録した冒険者でありながらトブの大森林の主を従えし、銅のプレートとは全く実力が釣り合っていない強

者である。

新人でありながら凄腕の冒険者である二人が、今ついに邂逅した。

「ぶふおつ W W W ちょ W W W ハム W W W ハム W W W
「っ!？」

冒険者モモン。真の名は栄光あるギルドと同じ名前である「アインズ・ウール・ゴウン」といい、ナザリツク地下大墳墓の主であった。へぐドラシルからギルドごと転移してきた彼は自我を持って主へと忠誠を捧げるNPC達に最初は驚いたが、戸惑いつつも手探りで彼等との接し方を模索していた。

そしてNPC達の狂信と言ってもいいほどの忠誠を理解した彼は、彼等に失望されないよう支配者のロールを取り繕うことに決めたのであった。

転移して数日、紆余曲折ありながらもこの世界の情報はそれなりに集まってきた。

しかし問題が一つ。

NPC達の忠誠心が少し、いやかなり重いのだ。

一般人からいきなり天皇にでもなったかのように敬われ、傳かれ、謙られる。

この状況、あくまでも一般人（自称）であるアインズにとっては息苦しさを感じるのだ。

勿論忠誠を捧げられること自体は嬉しさを感じるし、かつての仲間達が作った設定が実際に動き出したことには感動を覚える。

しかし重い。具体的にいうと腰から美しい羽根を生やす美女からの愛が重い。

そんなこんなで少し息抜きでもしたいな、と思案したアインズは天啓とばかりに良策を閃いた。

情報収集のため冒険者としてこの世界を調査する。

そんなNPCに大反対を受ける策を、支配者ロールで若干ごり押ししたアインズ。

結局供を一人付けることを条件に折れたNPC達。

それが冒険者モモンの旅立ちの始まりであった。

それからは中々に楽しい日々が続く。

お互いを信頼しあっている仲の良いパーティ「漆黒の剣」。

アインズから見れば初心者だったかつての自分達を思い出して微笑ましさを感じる彼等との出逢い。

ゴブリンやオーガ達との戦闘、魔獣との邂逅。

拍子抜けするような部分も多々あったものの未知の世界を自らの足で踏破していくというのはやはり楽しかった。

たとえ「はじめてのおつかい」ばりに裏でお膳立てが整えられていてもだ。

そして初めての依頼を完遂しエ・ランテルに戻ってきたアインズは手懐けた魔獣——ハムスケを自分が管理する魔獣だと登録するためにギルドで手続きをしていた。

「しかしこの巨大なジャンガリアンハムスターが賢王だの伝説だの呼ばれていて、他人から見れば素晴らしい魔獣に見えるってのは正直慣れないよなあ……」

「どうかされましたか？ モモンさ——ん」

供にとつてきたナザリツクの戦闘メイドの一人、種族ドツペルゲ

ンガールのナーベラル・ガンマが心配そうに問いかけてくる。

「む、いや、何も問題ないとも、ナーベ」

この美しいメイドも少し頭痛の種だったりする。

アインズに対しては最高の忠誠を見せるこのメイドも、こと人間と話す時には蔑みや見下しの感情を隠しきれていないのだ。

冒険者として活躍する予定のモモンにとってこれはいただけじゃない。だが人間社会に紛れこめる人材というのはナザリックでは驚く程に少ない。

「(そうだ、少し対人関係に不安のある新人が部下についたと思えばこれくらいなんてことないさ)」

ギルド員に写生されているハムスケを見てアインズは軽く溜め息をついた。

自分の感性ではこの可愛い系のハムスターに騎乗して街を歩かせるなんて羞恥プレイ以外の何物でもないが、他人から見れば立派な魔獣に跨がる勇壮な戦士であるらしい。

登録も終わり「漆黒の剣」と合流するためギルドを出たアインズ一行。

「さ、殿。拙者の背にお乗りくださいませ」

ハムスケが伏せながら申し出てくる。

「(やつぱりかー…) ああ」

こうなることは予想していたがやはり気が乗らない。

しかし横のナーベラルを見ても、当然だとばかりにアインズがハムスケに跨がるのを待っている。

部下の期待は裏切らない優しいアインズであった。

「(大丈夫だよな、実は馬鹿にされてたりしてないよな?)」

キヨロキヨロ辺りを見回しているのをバレないように慎重に周囲を確認するアインズ。

道の端にいる冒険者らしき男が感嘆の声を上げながらアインズを見上げる。

「(良し)」

家の窓からこちらを見つめる少女の、キラキラした目がアインズに突き刺さる。

「(良し良し)」

母親に手を繋がれた子供が凄じい凄じいと興奮した様子ではしゃいでいる。

「(良し良し良し。なんか自分でも格好いいような気がしてきた。フフフ、住民どもよもつとおどろくのだー)」

上等な装備に身を包んだ女と、その相方らしきこれまた素晴らしい装備をしたマジックキャスターであろう男が近づいてきた。

「(フハハハハハハ、さあ驚愕し)」

「ぶぶおっ W W W ちょ W W W ハム W W W ハム W W W
「っ!？」

アインズは一気に頭が冷えた。

マジックキャスターらしき男がハムスケに跨がっている自分を見て吹き出したのを見たアインズは羞恥心が湧きあがる。

「(やっぱ恥ずかしいんじゃないかー！ー！！ 黒歴史がまた増えたあー！ー！……ああ)」

緑光と共に上限突破した羞恥心が抑制された。

前方から巨大なジャンガリアンハムスターに乗った男が近づいてきた。

何を言っているのかわからないと自分でも思うが事実である。

「ううんっ、ごほっごほっ……ぶふっ……ごほんっ！」

一目見て吹き出すなんて失礼すぎる。

そう思ったオデンキングは誤魔化すように咳き込む。

「モモン様、少々お待ち下さい。すぐにあの下等生物をぶち殺してまいりますので」

「へ？」

「え？」

今のナーベラルに理性はほとんど無かった。

目の前の男は我が主人を見て笑ったのだ。

至高の41人の内、ただ一人残って下さった慈悲深き御方を笑った

のだ。

それも下等生物の分際で。

許せない、許せない、許せない、許せない。

早く殺さなければ。

この男の生存は絶対に許されない。ありえない。

狂気とも言える激情がナーベラルを駆け巡り、その拳が男の顔を捉

えようとした瞬間。

ガキンツ

鈍く輝くステイレットを突きだした女によってその拳の軌道が無
理矢理変えられた。

うっかりモモ兵衛様

クレマンティーヌは予想外の事態に少し焦っていた。

オデンキングと楽しく喋りながら道を歩いているクレマンティーヌ。

彼女の人生を振り返ってみても、こんなことはもしかしたら初めてかもしれない。

弱者を殺すことに愉悦を感じ、自分より強い人物には敵愾心をたぎらせ、ただ強くあることが彼女のアイデンティティであった。

自分より格上の人物を見たことは今までだつてある。

だが永遠に敵わないなどと思った人物はいなかったのだ。

オデンキングに会うまでは。

心を折られているというわけではない、いや一度は折られかけたが今は立ち直っている。

強さに屈伏した訳ではない、むしろ精神的には現状対等である。

ただ、ストン、と胸の内を理解出来たのだ。

きつとこの男には未来永劫敵うことは無いだろうと。

それなのに何故か敵愾心も嫉妬もわきあがらない、こんなことは初めてだった。

だからかも知れない、その疑問を知りたくて似合いもしない色仕掛けで無理矢理ついでいこうとしているのは。

何故かは知らないが力も速度も昨日の自分とは比べ物にならないくらい強くなっているのだから、法国の追っ手から身を守ってもらう必要なんてなかった。

ただ何となく別れたくなかったから体で繋ぎ止めた。

それだけだ。

隣を歩きながら馬鹿なじやれあいに興じているのは楽しかった。

本当かどうかもわからない変態バードマンの話や、スライムの最強種なのに何故か体に鞭打って働いている友人の話。

エルフの吟遊詩人と旅をして、天使や悪魔と笑い合う。

お伽噺のような世界の話なのに、不思議と嘘とは思えずつつい話に聞き入ってしまった。

そして話を急に打ち切って前方に意識を向けた彼に釣られて見たものは、立派な魔獣に跨がる勇壮な黒騎士とその傍らに添って歩く美しい女性だった。

横の相方がいきなり吹き出した。

「どこに吹き出す要素があっただろ…」

クレマンティーヌは少し呆れながら相方に目をやろうとした瞬間、心地好い殺意が黒い騎士の隣の女から迸るのを感じた。

良い機会だ、とクレマンティーヌは嗤う。

強くなったという確信はあるものの、やはり実感を伴わせるには試し切りをしなければ。

いきなり襲いかかってきたのだから非は向こうにある。

相方を守るという大義名分があれば彼も怒るまい。

そんな言い訳を考えながら、かなりのスピードで拳を振るう女の首を狙ってステイレットを振り下ろした。

「なっ…!?!」

「…ちっ!!」

クレマンティーヌは手首を突き刺すつもりで斬撃が拳を反らすことにしかならなかつたことに驚愕の声を上げ、ナーベラルは全力の拳

を弾かれた上にこの世界にきて初めてまともにダメージを受けたことよって舌打ちした。

「(一体昨日からどうなってるのよ!!)」

クレマンティーンは自他共に認める強者である。

彼女より強いものなど世界を見渡しても一握りだ。

そしてそれは昨日までの評価であり、更なる力を得たクレマンティーンは今の自分に敵うものなど横の相方か六色聖典でも最上位クラスの化物だけだろうと思っていた。

しかし今の一合の撃ち合いで目の前の女の強さを、一端ではあるだろうが把握した。

「(Deinちゃん程じゃないけど、明らかに格上…!!)」

世界はいつの間にか強者に溢れていたのだろうか？

詮なきことを考えながら目の前の女に勝つため、クレマンティーンは思考を加速させていた。

「(未だに Deinちゃんを狙ってる。頭に血が昇って典型的な視野狭窄に陥ってるわね…)」

ならば、と

「こんな街のど真ん中で何のつもりー？ 追い剥ぎかしらー。そういえば隣の鎧さんも品がなさそうなものねー？」

さらに頭に血を昇らせようと、ニタニタと嗤いながら女を煽った。

そして、ナーベラルから一切の理性が消え去った。

「塵すら残さん…!! 《チェイン・ドラゴン・ライトニング／連鎖する龍雷》!!」

もはやナーベラルにはこの下等生物達を消滅させる以外のことは何も考えられなかった。

誰に静止の声を掛けられようが、もはやこのマグマの様に煮えたりする狂気と憎悪は止まらない。

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す。

ただし例外はある。自らが忠誠を誓う、いと尊き至高の御方だ。

それでも通常の制止の声だったならば耳に入るのは殺し尽くした後だったかもしれない。

ナーベラルを一瞬で正気に戻したアインズの声は。

「止まれ、ナーベよ」

初めて聞く、怒気を孕んだ声だった。

アインズはナザリツク大墳墓の支配者であり、ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」の頂点だ。

望んでそうなったわけではないが自分を慕う配下達が忠誠を捧げるのならば、支配者として君臨し彼等に報いなければならぬと思っ
ている。

だからこそ、いま全ての計算を御破算にしようとしているナーベラルには支配者として厳しく当たらねばならないと心を鬼にして叱責する。

「ナーベよ……貴様は今何をしようとしていた……？」

底冷えのするようなアインズの声で正気に戻ったナーベラルは、自分が起こそうとした事態を想像し身を震わせ、自身の死を決意した。

アインズが望まぬ騒ぎを起こそうとし、あまつさえ危険時以外では第4位階以上の魔法は使わぬようにと厳命されていたにも関わらず、激昂し我を忘れて使用しかけた魔法は第7位階だ。

制止があと一瞬遅ければ計画の大部分が変更を余儀なくされていただろう。

死を以ってしても償いきれない大失態。

ナーベラルの身にはいまや絶望以外の感情は欠片もなかった。死の恐怖からではない。

たった一人残って下きつた優しき御方に迷惑を掛け、あろうことが怒気を孕んだ声まで出させてしまった。

もはやこの身に価値などなく、これ以降至高の御方の役に立つ事が出来ないのがどうしようもなく悲しくなった。

「自分のしようとしたことが理解できたのならば下がれ、ナーベよ。罰については追って沙汰を言い渡す。…死を持って償おうなどとは考えるなよ？ お前達の命すら私の物であると知れ。それに、まだまだ役立ってもらわねば困るからな」

罰を与え、慈悲を与える。

まさに完璧な支配者であり、ナザリツクの者達にとって理想の王だろう。

今が衆目を浴びている最中だ、ということのを忘れていなければの話だったが。

美姫ビキツ!!

「本当にうちのナーベがご迷惑をお掛けして申し訳ない」

「こちらもうちのクレマンティーナがご迷惑を」

宿屋の店主に男二人が平謝りする光景がエ・ランテルにある宿屋の一階で繰り広げられていた。

あの一騒動が終わり、慈悲の言葉に泣き崩れるナーベラルをアインズが宥めている傍らでクレマンティーナが第7位階って何なのさ、つべー、マジやつべーと命拾いしたことに安堵する横でオデンキングがハムスケの頭を撫でていた。

「あの一」

「はいっ、あ、終わりましたか?」

泣き止んだナーベラルを後ろに連れアインズがハムスケを撫でくりまわしているオデンキングに声を掛ける。

「ええ、お待たせして申し訳ない」

「とんでもありません。元はと言えばこちらが発端ですから。本当に申し訳ありませんでした」

「いや、そんな…」

「いえ、初対面の方をみて笑いを溢すなど非常に礼を失する行為でした。彼女が怒るのも当然です。どうか謝罪させていただきたい」

そう言いながらオデンキングは深く頭を下げる。

「…わかりました。その謝罪、受け取りましょう。もう気にしていませんのでそれ以上は結構ですよ」

アインズは真剣に謝罪を繰り返す目の前の男を許した。

というかそもそも怒ってもいかなかったがこのままでは頭を上げそうもなかったためだ。

「ナーベさん」

ナーベラルがビクンと体を震わす。

主が謝罪を受け入れたのだ、従者の自分がこれ以上何かを言うこともない。

至高の御方を笑ったことは業腹ではあるが目の前の男の謝意は充分に伝わってきた。

我を忘れ、殺そうとした負い目もある。

何より下手な受け答えをしてこれ以上、主に失望されるわけにはいかない。

「貴女の大事な人を馬鹿にしたこと、本当に申し訳ありませんでした。お詫びにもなりません、私に出来ることならなんでも致します」

「だっただだっだっ大事な、そそそ、いえ、私如きがっ…」

「ちよつ、ナーベ、戻ってこい！」

絶対失望された。死のう。

正氣に戻ったナーベラルは本日2度目の絶望を味わった。

「それですね、先程仰った詫びの分と言ってはなんなんです。少しどこかでお話出来ませんか？ 幾つかお聞きしたいこともありまして」

アインズが意味ありげに問う。

「…ええ、構いませんよ。ちよつど私も話を聞きたいところでしたので。私が滞在中の宿屋でしたら防音もしっかりしていますから、こちらでよろしいですか？」

きつと聞きたい事は同じなんだろうな、と薄々気付きながらも二人共明言は避けていた。

宿屋の前についた一行はドアをくぐり二階へと向かう。

「悪いクレマンティーン。ちよつと込み入った話になると思うから、

「一階で待ってもらってもいいか？」

オデンキングの想像が正しければクレマンティーンにとっては疑問だらけの話になる。

話の途中であれこれ聞かれるのも面倒だったので後で話が纏まっ
てから、聞かれたら答えるくらいでいいだろう。

「えー、仲間外れー？」

「聞きたけりや後で話すよ。今は…。な？」

「はあ、わかった。りよーかいー」

手をヒラヒラと振りながら、一階のカウンター席に向かうクレマン
ティーンヌ。

「…彼女は違うんですか？」

主語を抜いたアインズの問いかけだが、オデンキングはしっかり理
解している。

「ええ、此方に来てからの付き合いです」

「そうですか…」

アインズが少し考える素振りを見せた後、ナーベラルに声を掛け
る。

「ナーベよ、私はオーデインさんと二人で話したいことがある。お前
はクレマンティーンヌさんの相手をしておいてくれ」

「は、いえ、ですが」

「命令だ」

「っ、かしこまりました。では一階でお待ちしております。何かあれ
ばすぐにお申し付け下さい」

ナーベラルは深くお辞儀をしたあとクレマンティーンヌの元へ向
かった。

部屋に入った二人は向かい合う。

アインズは勧められた椅子に腰掛け、オデンキングはベッドの端に腰を落ち着ける。

見つめ合う二人。

そしてオデンキングが最初に口を開いた。

「止まれ、ナーベよ」キリッ

ピクリ。アインズの肩が震えた。

「命令だ」キリリッ

ガタリ。アインズが動揺と共に思わず立ち上がり椅子が倒れる。

「お前達の命すら私の物であると知れえーーーーー!! ぶふっww
w」

「ヤメテエーーーーー!!!」

まったく懲りていないオデンキングと、無効化されても再度わきあがる羞恥心に悶えるアインズであった。

「すいません、なんか同郷の人に会ったらなんかテンションあがっちゃって…」

「い、いえ」

ややあつて落ち着いた二人は仕切り直して話を始める。

「改めて聞くまでもありませんが、へユグドラシル<プレイヤーの方で

すよね?」

アインズが核心に触れる。

「はい。あちらではオデンキングと名乗っていました」

「オデンキング：オーティン・キニング。成る程」

確かに現実には名乗る名前としては不適當だろう、とアインズは納得した。

「モモンさんのネームはそのままなんですか?」

「いえ、そちらは冒険者用の名前にしてへユグドラシルではモモンガという名前でプレイしていました」

そして今は、と改名した名前を名乗ろうとしたところでハタと思案する。

「アインズ・ウール・ゴウン」はへユグドラシルでも有名なギルドである。

但し悪名高いDQNギルドとして。

勿論、最盛期にはギルドランキング9位に輝いたり最強のプレイヤーの一角「たち・み」が所属している等、純粹に賞賛する者も多くいたがそれでもプレイヤーの大半は良い印象は持っていないだろう。

そしてそれはギルドメンバー全てが異形種であることにも起因している。

見た目が醜悪なものが多い異形種を嫌っているプレイヤーはそれなりにいるのだ。

目の前の男はどうだろうか。

自分がアンデッドだと知れば顔を歪めるかもしれない。

へユグドラシルではそうではなかったかも知れないが現実となった今、生理的に嫌悪を催すかもしれない。

だがどちらにしてもこの世界に「アインズ・ウール・ゴウン」の名を轟かせることを目的としている以上、この男は無関係ではいられないだろう。

アインズの正体を知って負の感情を見せるなら、計画の邪魔になることは間違いない。

その時は…。

「どうかされましたか？ モモンさん」

急に黙りこんだアインズを見てオデンキングが首を傾げる。

そうだ、どのみち事ここに至って隠し通せるわけがない。

まず異形種であることを見せて反応を見よう。

アインズは黒騎士の姿を解き、本来の姿を現す。

どうなるのだろうか。そして、否定されたら自分はどうするのだろうか。

反応が無いアインズを見て心配したオデンキングはどうしたものかと迷っていた。

するとアインズはおもむろに立ち上がるとオデンキングを見て少し逡巡した後。

骨になった。

「おわっ!! ビックリしたー。モモンさんオーバーロードだったんですね。…あ、今もしかして笑うとこでした?」

一発芸だったのか?とオデンキングは首を捻っている。

「(軽いつ!! 悩んでた意味なかったよ!!)」

アインズは内心で突っ込みをいれる。

「へー、今はアインズ・ウール・ゴウンって名乗ってるんですか。…ん？ アインズ・ウール・ゴウン？」

「はい」

「あのアインズ・ウール・ゴウン？」

「そのアインズ・ウール・ゴウンです」

同郷を見つけたと思っただら有名なPKギルドの異形種だったで御座る。ナニソレコワイ。

聞けばこちらにはギルドごと転移したあと、世界にその名を轟かせギルメンやプレイヤーを探すために改名したらしい。

「…やっぱり印象悪いですかね？」

アインズが気まずそうに尋ねる。

「へ？ あ、いやいや別にそういったことに偏見とかはないですよ。異形種のフレンドも結構いましたし。というか、そうだ、ペロロンチーノさんとヘロヘロさんって「アインズ・ウール・ゴウン」所属でしたよね？ あの人はフレンド登録してましたし」

「本当ですか!!」

アインズが興奮しながら身をのりだしてくる。

どこか琴線に触れる言葉があったのだろうか。

「ええ、特にペロロンチーノさんとは変だ、じゃなかった紳士の集まりによく参加して議論しあったものです」

「ああ・・・」

オデンキングの性癖を大体把握したアインズであった。

「ユグドラシル紳士同盟第4部門〈フォーティーンエイジス〉」

ペロロンチーノとオデンキングが所属していた変態の集まりである。

「そこでペロロンチーノさんが啖呵を切ったんですよ。「エロに敬意を払わぬものに負ける道理などあるものか」って。凄かったですよ。流星群でも降ってきたかと思いました、あの属性ダメの連射」

「あははは!!ペロロンチーノさんらしいです」

アインズとオデンキングの間で話が弾んでいた。

「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーとフレンドであったと判明してから随分とフレンドリーになったアインズ。

アインズ様はギルメンを誉められるとアインズからチヨロインズに変身するのだ。

「ふー…あ、もうこんな時間か。クレマンティーヌ達、随分待たせちゃってますよ」

「うわっ本当だ。まだまだ話し足りないんですが…そうだ。良かったらギルドの方に招待させていただきませんか？ オーディンさんなら大歓迎ですよ」

「おお、マジですか？ あの1500人のプレイヤーでも最後まで踏み入れなかった場所に…いいんでしょうか」

NPCのカルマ値が極悪をぶつちぎっていることは思考の端の方に追いやっているアインズである。

「ええ、そんなことお気になさらずに。都合の良い日はありますか？」

「そうですね…近日中にバハルス帝国に向かう予定だったので、明日か明後日の朝にエ・ランテルを出発します。その時に寄らせてもらってもいいですか？」

「はい。楽しみにしていますよ」

話を終えた二人は階段を下りナーベラルとクレマンティーンのもとへ向かった。

そこで見たものは死屍累々の冒険者達だった。

「あらー、ナーベちゃんもハブられたんだー。お姉さんと一緒に呑みたいのー?」

さつき殺されかけたというのにナーベラルをからかうクレマンティーン。

懲りない性格はオデンキングとそっくりである。

「黙りなさい下等生物。誰が名を呼ぶことを許しましたか」

膠もなく毒を吐くナーベラル。

「おおこわ。でも私の相手をしろってさつきご主人様に命令されてたよねー。名前を呼ぶことも許さないなんて、相手をしてるとは…言えないよねえ?」

ナーベラルの狂気ともいえる忠誠を見ていたクレマンティーンは、命令された以上は絶対に手を出せないだろうと確信してからかっているのである。

「ぐっ、盗み聞きとはさすが下等生物。ですが命令を受けた以上、相手をして差し上げましょう」

これ以上期待を裏切る訳にはいかない。

そんな心情を完全に見透かされているナーベラルであった。

程よく酒も進んだところでクレマンティーヌは気になっていたことを問いかける。

「で、あんたら何者なのさー。こうも自分より強い奴がポンポン出てくると自信なくなるんだけど」

オデンキングと出逢ってから多少落ち着いたクレマンティーヌ。

嫉妬の感情はあるものの、立て続けに強者に出逢うこの一連の状況は偶然ではないのだろうと思いい好奇心から尋ねてみた。

偶然である。

「あなたが弱いだけでしよう」

ぱつきりと切り返すナーベラル。

「ふーん、第7位階を使えるナーベちゃんが強くないって？ それこそ冗談でしょ。今個人でそこまで使えるマジックキャスターはいないよー？」

ちなみに第7位階だと知ったのは諍いの後にオデンキングに教えてもらったからだ。

「う、そ、その、いやそれは…」

本来ならば第3位階まで使えるマジックキャスターで通すつもりであった彼女はどう返答したものかと答えに詰まる。

そんな彼女に救いの手が差し伸べられた。

「よお、姉ちゃん達。二人で呑んでるのも寂しいだろ？ ちよつとこっちこいよ。俺達が付き合ってやるぜ」

テンプレ異世界物に150%の出現率を誇る、荒くれ系残念絡み屋冒険者だ。ちなみに150%とは一つの物語に出て、さらにもう一回出てくる確率が50%という意味である。

「さつきと目の前から失せなさい下等生物。今なら、その耳に障る不愉快な声で話し掛けたことを許して差し上げます」

窮地を救ってもらった礼として、ナーベラルは話し掛けてきた下等生物に優しい言葉をかけた。

「ごっごいつ、銅のくせしやがって…!!」

もともと自制なんて言葉が脳味噌から無くなっているような荒くれものである。

思いもよらない罵詈雑言を受け、一瞬で頭に血が昇る。

「このクソアマがつ!!」

首にかけてプレートからなりたての新人冒険者だと判断した男は、掴みかかろうとしてナーベラルに手を伸ばす。

そして次の瞬間には左腕の掌に風穴が出来ていた。

「楽しくお喋りしてるんだから邪魔しないでくれるー?」

度数の強いウイスキーを左手に持ち、今男の手に風穴を空けたステイレットを右手でブラブラとさせながらクレマンティーヌはニヤニヤと嗤っていた。

冒険者がメインで宿泊するこの宿屋の一階は食事処兼酒場であり、当然利用客の大半は冒険者だ。

職業上、乱暴なものが少なくない冒険者に酒が入れば揉め事は日常茶飯事である。

それでも暗黙の了解として刃傷沙汰だけは起こさないというのがこの宿屋に宿泊する冒険者の共通認識であった。

それが今、カウンターに座りふざけた様に笑っている女に破られた。

「おいおい嬢ちゃん。流石にそこまでいくと見逃せねえぜ…」

周囲の冒険者達が殺気だちはじめる。

もともと男の誘いが度を超すようなら助け船をだそうと様子を窺っていたのだ。

予想外の展開にはなったが、この店で剣を振るった人間を見逃すわけにはいかない。

悪しき前例を作らないためにも、この女はある程度傷めつけられ見せしめになってもらう必要がある。

そう考えた冒険者達はまずは取り押さえるために立ち上がると、クレマンティーヌとナーベラルを取り囲んだ。

結果は冒頭の通り、そこら中に散らかった椅子と机の残骸と平謝りするアインズとオデンキングの姿が答えだ。

突撃！隣のナザリック

暗い夜道を貴族が乗るような高級感溢れる馬車がガタゴトと進んでいた。

「そろそろでありんすかねえ」

その馬車の中の1人、抜きん出た美貌を持った少女が呟く。

彼女の名は「シャルティア・ブラッドフォールン」

種族は真祖（トウルヴァアンパイア）でありギルド「アインズ・ウール・ゴウン」が誇る拠点、ナザリック大墳墓の階層守護者を任された強者である。

その強さは一対一ならばナザリック最強ともいわれるほど凄まじい実力を持っている。

そんな彼女がこの馬車に乗っている理由はアインズから一つの仕事を任されたからだ。

消えても誰も気にしないような人間、有り体に言えば犯罪者や野盗などの捕縛だ。

そのためにソリュシャンとセバスが扮するわがままお嬢様とその執事を狙う馬鹿共を逆に捕らえるため同乗していた。

そして街から程よく離れたこの場所。

襲撃があるならそろそろだろうと胸を躍らせていた。

だがその時敬愛する至高の御方、アインズから《メッセージ／伝言》が入る。

「これはアインズ様、どうされたでありんすか？・・・はい。・・・はい。任務は順調でありんすが・・・」

声を聞くだけで蕩けそうになるシャルティアだが任務に何か変更でもあったのかと身を引き締める。

「・・・はい。了解したでありんすえ。すぐに行動にうつしんす」

アインズから命令を受けたシャルティアはセバスとソリュシャンに計画の変更を伝える。

「セバス、ソリュシャン。計画に変更がありんした。この襲撃が終わり次第すぐにナザリックに戻るでありんすよ」

「はっ」

「かしこまりました」

そして狙ったかのようなタイミングで馬車が停止する。

そして馬車の扉を開け外に出たシャルティアは下卑た視線でこちらに近づく野盗たちへ向けて、蹂躪を開始した。

「申おーし訳ありません。少し遊ぶ予定だったでありんですが、アインズ様をお待たせするわけにはいきんせんの」

轟、と一陣の風が舞った後に重い物がドサドサと崩れ落ちる音がした。

数瞬後にはもはや眼を開いている野盗はおらず、冷たい馬車道にただ血が染み込んでいくだけであった。

「ソリュシヤン、他に人間の気配はありんすか？」

盗賊・暗殺系の職業を修めているソリュシヤンに問いかける。

「いえ、ございません。監視の目も無いかと」

「そう。では少し離れなんし」

セバスとソリュシヤン、そしてシャルティアの部下であるヴァンパイアブライドがその場から身を引く。

「《フォース・エクスプロージョン／力場爆発》」

死体を巻き込み、そこから一帯を爆発させる。

「これで問題ありませんね。《ゲート／異界門》。皆の衆、さっさと帰りんすよ」

アインズに会うのが楽しみな様子で《ゲート／異界門》を開くシャルティア。

「・・・シャルティア様」

セバスが無残な景観に成り果てた道を見ながらシャルティアを呼び止める。

「うん？ 何かありんしたか？」

「僭越ながらお伺い致します。先程の《メッセージ／伝言》でアインズ様はなんと仰っておられましたか？」

シャルティアは質問の意図がわからず首を傾げながら答える。

「ふむ、アインズ様は任務の進捗を尋ねられんしたあと、迅速に帰還するように仰ったであります。現状を鑑みて、放置して問題のないところまで任務が進んだなら拉致及び殺人の痕跡を消したのち離脱せよ、と」

「見るからに雑魚の集まりでいんしたから、拉致するまでもなく消しんした。アインズ様も帰還の方を優先せよと言いんしたから問題ありません。さ、帰るであり・・・な、何よその眼は、セバス、ソリュシャン」

正気かよこいつ、と言わんばかりの眼で見つめられたシャルティアは思わず口調が素に戻った。

「・・・少々あちらの方でお待ち下さい」

きつと説明しても理解出来ないだろう、とセバスは邪魔をされぬようお願いした。

「え？」

「ソリュシャン、手伝って下さい」

「はい。セバス様」

ヴァンパイアブライドも無言で痕跡を消す作業に入る。

「・・・え？」

「おお、戻ったかシャルティアよ」

玉座の間にてシャルティア、セバス、ソリュシャンを迎え入れたアインズ。

「仕事を中断させて悪かったな。問題はなかったか？」

支配者の威厳を崩さぬ様に謝罪する。

「はははは、はい。何も問題ありません。しっかりと痕跡を消して

「帰還しんした」

動揺しまくりながらシャルティアは答える。

「うむ、そうか。セバスとソリュシヤンも何か問題はなかったか？」

満足そうに頷き他の二人にも問いかける。

「はっ。何も問題ございません」

「同じくでございます。アインズ様」

二人の優しさに感動するシャルティアであった。

「それで、アインズ様。何故任務に変更が？ 何か支障でもありませんか？」

シャルティアが気になっていたことを尋ねる。

「うむ。私が冒険者に扮し名声を得る傍ら、調査を行っていたのは三人共知っているな？」

三人が肯定する。

「その先で〈ヘUGドラシル〉のプレイヤーを発見したのだ」

喜色を滲ませながらアインズは言う。

その様子を見て三人はそれぞれ賞賛の言葉を送る。

「流石はアインズ様でありんす。たった数日で素晴らしい結果を出されるとは」

「おめでどう御座います。アインズ様」

「おめでどうございます」

さすがは我らの主人にして至高の41人の長である。と、もともと限界突破していた忠誠心がさらに突き抜けていく。

「なに、偶然だ」

よせよせとばかりに謙遜する主人に、三人はさらなる忠誠を捧げた。

「それでだな、その者をここに招待したのだがナザリックを挙げて歡

迎するといふのにギルドそのものと言っても過言ではないお前たちが居なくては片手落ちだろう?」

だから呼び戻したのだ、とアインズは三人に説明した。

その言葉を聞いた三人は涙を溢しそうになりながら体を震わせる。

ああ、これが最後まで残って下さった慈悲深き至高の御方。

我等を役立たせ、ギルドそのものとまで仰って下さった。

シャルティアもセバスもソリュシャンも、きっとこれ以上の幸福は存在しないだろうと、心の中で滂沱の嬉し涙が滝のように流れ落ちていた。

そして数時間後。

玉座の間にはヴィクティム、ガルガンチュア以外の階層守護者とプレアデス、セバスが揃っていた。

「全員揃ったようだな」

アインズが守護者達の顔を見渡し会議の開始を告げる。

「それぞれ個別には軽く説明したと思うが、今日エ・ランテルにてヘユグドラシルのプレイヤーと遭遇した」

全員が理解しているのを確認し、話を続ける。

「紆余曲折あったものの、最終的にこのナザリックへと招待することとなった。わざわざ任務中の者達も呼び戻したのはナザリックを挙げて歓待しようと思っっているからだ」

何故ならば、とアインズは言う。

「その男——オーディンと言うのだがな。その男が私の友となったからだ」

ここで初めて守護者達は驚愕を顔にする。

「——アインズ様」

無礼を承知で話を遮りデミウルゴスが言葉を発する。

「なんだ、デミウルゴスよ」

「エ・ランテルで遭遇したということはその男は人間ではないので
しょうか?」

間違っていてほしい、というようにアインズに問いかける。

「その通りだ、デミウルゴス。何か問題でもあるのか?」

「は、いえ・・・」

「よい、言ってみろ。遠慮する必要は無い、忌憚なく意見を述べよ」

「は、それでは僭越ながら申し上げます。下等な人間如きがアインズ様の友となるのは、些か以上に不敬にあたると愚考いたします」

ナザリックの中でもカルマ値のマイナスが最大クラスのデミウルゴスだ。当然の意見だろう。

「ふむ、アルベドはどうだ? 遠慮はいらんぞ」

守護者一人一人に聴いていこうとするアインズ。

「アインズ様のお心のままに———とりたいところですが、私もデミウルゴスと同意見です。下等生物如きがアインズ様の友というのはあつてはいけません」

「シャルティア」

「アインズ様が認めんしたなら問題ありません」

「アウラ、マール」

「私は問題ありません」

「ぼ、僕も大丈夫です」

「コキュートス」

「アインズ様ノ才考エニ間違イハナイカト」

「セバス」

「アインズ様の友となる方ならば、最高のおもてなしをさせて戴きます」

守護者達の意見を聞いたアインズは、大体当人達のカルマ値通りの受け答えだと感じる。シャルティアだけは予想よりもマシだったが。「お前達の意見は理解した。それを踏まえて私は答えよう」

ここからが本番だと、ある筈もない心臓の鼓動が速くなった気がするアインズ。

「私は人間種に対して嫌悪や侮蔑あるいは慢侮や蔑視といった所謂、

悪感情だな。そういったものを持っているわけではない」

今まで守護者達の失望を恐れて言いあぐねていたことを暴露する。「別に好意を持っていてというわけではないぞ？ただあちらが好意を寄せてくるならば多少の情がわき、敵意を持つなら消せばいい。その程度のものだ」

アンデッドにあるまじき意見に守護者達はどう反応するだろうか。「私はナザリックに所属している者を、過去に友人達が作ったお前達を、家族の様に思っている。人間に限らず神だろうが天使だろうが、他の有象無象の弱者などお前たちの爪の先ほどの価値すら無い」

失望されるだろうか。忠誠を失うだろうか。

「だが例外はある。先程言ったような人間でも神でも天使でも、お前たちの様な吸血鬼や闇妖精や悪魔でも。ナザリック以外の者は私にとって全ては等価値だ。だが・・・」

だがこれは必要なことなのだ。

「だが強者は違う」

それは人間や、友となったオデンキングのためではない。

「先の一件で判明した、脅威と言っても過言ではない生まれつきの異能を持ったンファイア・バレアレ。噂が真実ならばデミウルゴスやアルベドに匹敵するやも知れぬ智謀を持った王国の王女と帝国の皇帝」

このナザリックで自分に忠誠を捧げる、何よりも大事な配下達のためだ。

「そして我が友オーディン。彼は純然たる実力で私と同格である強者だ」

そう、オーディンことオデンキング。

彼の存在が、アインズがナザリックの人間軽視の風潮を改善しよう

としている理由だ。

この広い世界でたまたま自分以外の唯一のプレイヤーであるオデ
ンキングと出逢った。

馬鹿馬鹿しい。そんな偶然があるものかとアインズはその考えを
破棄する。

おそらく、自分達以外にもヘUGドラシル<終了時において転移し
たプレイヤーは一定数いるのだろう。そう考えた方が自然だ。

いまだそれとおぼしき情報は上がってきていないが時間の問題だ
ろう。

そしてプレイヤーが多数いるとなれば、人間蔑視が基本のナザリツ
ク配下達はどうなるか。

このナザリツクに引きこもるならそれほど問題は無いだろう。

だがもう、世界に打って出るといふ基本方針は決定しているのだ。
任務の途中で何かしらのミスをするものはいるだろう。

それはいい。

それはいいのだが守護者達の間があれば多少のミスは自身で無理
矢理に解決する可能性がある。

例えば自身の眷属や召喚したモンスターを使ってナザリツクの介
在がバレぬように何処かを襲撃する任務があるとしよう。

そして予想外にも返り討ちにあい目的が果たせなかった。

そんな時アルベドやデミウルゴスならばまず報告してくるだろう。

だがシャルティアやナーベラルなど頭に血が昇りやすい者であれ
ば結果だけを重視して目撃者もろとも殺せばいい、と自身で解決しよ
うとするかもしれない。所詮人間如き、と。

だがそれがプレイヤーだった場合はどうだ？

シャルティアならばガチビルドのプレイヤーと違って対等に闘え
るだろう。一対一の場合は、だが。

ナーベラルはどうだ？ この世界では強いといってもヘUGドラシ
ル<では職業レベルと種族レベルを合わせても60と少しの、カンス
トプレイヤーからすればただの雑魚だろう。

甦らせるのだって限りがある。なにより友人達が手塩にかけて

作ったNPC達が死ぬところなど見たくもない。

だから、アインズは守護者達の意識を改善したいのだ。ナザリツク上位勢の人間軽視の風潮が弱くなれば、その下にいる者達も影響を受けるだろうと考えて。

「このように一口に強さと言っても色々である。だが私にとってそれらは全て敬意を払うに値する、欽慕を持って接するべきものなのだ」
守護者達は沈黙を保ちアインズの言葉に聞き入っている。

内容がどうであれ、至高の御方である主がここまで自分達にその心情を吐露したことはない。

ならば一言一句、聞き漏らしてはならないとその御言葉を頭に染み込ませていく。

「お前達の中には人間達にとって悪であれ、と生み出された者もいよう。私はそれを否定しない。だがこれだけは忘れるな」

「強者に敬意を払え」

「たとえ弱者に見えようとも、その身の内に単純な強さとは言えぬ力を秘めた者もいるということを忘れるな」

これを言いたいがために長々と演説したのだ。

守護者達の心に響いてくれるだろうか。

戦々恐々としながらアインズは守護者各位に視線を送る。

アインズの話が終わった玉座の間にしん、と静寂が訪れる。

最初に口を開いたのは、演説の発端となる疑問を問い掛けたデミウルゴスだった。

「アインズ様」

「う、うむ。どうしたデミウルゴスよ」

少しビビりながらアインズは言葉を促す。

「その慈悲深く、そして全てを受け入れる圧倒的な器を未だ知らずにいたことを、一知半解であったこの身の愚昧を御許してください。その深謀深慮と寛大なお心を少しでも理解出来るよう努めることをお約束いたします」

なんか難しいことをいっているがなんとなく言いたいことは伝わった気がしたアインズ。

「流石はアインズ様でありんすえ」

「か、かつこいー・・・」

「強者ニ敬意ヲハラウコトノ意味ハコノコキユートス、シカト理解シテオリマス」

「アインズ様あ・・・クフリーっ!!」

概ね問題ないようだ。アインズはほっと心の中で溜め息をついた。ちなみにプレイヤーの数とか云々は盛大な勘違いである。

エ・ランテルにある、1階が無惨なことになっている宿屋の前でオデンキングはクレマンティーヌと共にアインズからの迎いの馬車を待っていた。

当初は歩いて向かうと固辞していたのだがアインズがこちらが招待したのだから、と押してきたので好意に甘えることにしたのだ。

それをオデンキングはものすごく後悔していた。

「おい、あいつらが・・・」

「ああ、昨日の・・・」

ひそひそと周りで囁かれる声が、無駄に高性能な耳に入ってくる。怪我人は治療もしたし、宿屋には修繕費も支払ったが事実が消えるわけではない。

宿屋の前で待っているこの状況は針のむしろだった。

「どしたのー？デインちゃん？」

「なんで何も感じてないんだお前は・・・」

弱者の視線など気にしないクレマンティーヌに呆れるオデンキン

グ。

ちなみに昨夜異世界だの転移だのとぶつちやけたオデンキングだが、クレマンティーヌは特に気にした風でもなく「ふうん」の一言で終わった。

クレマンティーヌは強さ以外にはそれほど頓着しないらしい。

益体もないことを考えながら待っていると遠くから馬車の音が近づいてきた。

中級の宿屋の前に停まるには相応しくないほどの格式高そうな馬車がオデンキング達の前で停車する。

馬車の扉が開くと眼鏡を掛けた黒髪の美女メイドが降りてきた。

「オーデイン・キニング様とクレマンティーヌ様で御座いますね？」

ナザリック地下大墳墓の〈プレアデス〉所属、ユリ・アルファと申します。お迎えに上がりましたのでどうぞ馬車にお乗り下さいませ」

見事な礼を見せたメイドに少し気遅れしつつも感謝の声をかけつつ馬車に乗り込むオデンキングと後に続くクレマンティーヌ。

そしてオデンキングはリリースした。

好みにドがつくストライク。理想の美少女がそこにいたからだ。

「お初に。ナザリック地下大墳墓、階層守護者シャルティア・ブラッドフォールンであります。アインズ様の命によりナザリックに到着するまでの間、話し相手をさせていただきますのでよしなに」

シャルティアは目の前で固まっている男を見ながら何故自分がかかるような仕事を命じられたのか不思議に思っていた。

別に自分を卑下するわけではないが、客人を迎えに行くという任務ならばもつと適役がいる筈だ。

少なくとも人当たりがいいとは言えない自分にはこの任務は不適當なのは間違いない。

至高の御方が直々にくだされた命令に不満などないが疑問に思うのは仕方ない。

だがその疑問は数分後には氷解していた。

「シャルティア・・・、もしかしてペロロンチーノさんが作ったNPCのへシャルティア・ブラッドフォールン？」

シャルティアは驚愕した。何故初対面のこの男から自分を作った偉大なる至高の御方、ペロロンチーノ様の名前が出るのか。

「さ、左様でありんすが、何故それを・・・？」

シャルティアの混乱をよそにオデンキングは軽くはしやぎ始める。

「うわ、マジかー。自分の萌えと性癖を全て詰め込んだって聞いてたけど・・・納得。吸血鬼ロリBBAでゴスロリファッション、適当な廓言葉。うわー、ペロロンチーノさんよくやるなー」

「あ、あとう」

「あ、ごめんごめん。えーと君を作ったペロロンチーノさんとは友達でさ。自分の全てを込めて作ったNPCだって、日頃からよく自慢されてたからちよつと会えて興奮したというか」

シャルティアは驚きに眼を見開き、そして納得した。

いくらプレイヤーで同格だからといっても会ったその日にアインズ様から友と認められたのはそういう訳だったのか、と。

そしてこの任務を命じられたことを感謝した。

「そ、そうでありんしたか・・・。あの、もつとペロロンチーノ様のお話を聞かせておくんまし」

シャルティアは頬を上気させながらオデンキングにお願いする。

今はもう会えなくなった我が主。

自分のことを自慢気に話していたのだという我が主。

心地好い充足感に包まれながらシャルティアは楽しいお喋りに興じていた。

「・・・そうそう。で、ペロロンチーノさんは言ったんだ。「確かに吸血鬼ロリBB Aなら廓言葉ではなく、のじやロリにすべきという意見もわかる。だがこれが、これが俺のジャスティスだ!!」って」
「な、成る程。よく解りんせんがきつと崇高な話し合いでありんしたのでしょう」

シャルティアはとても喜んでいた。我が主の知らなかった部分を沢山話してくれるこの男は、ペロロンチーノ様の良き友人であったようだ。

もつと知りたい。もつと聞きたい。だけど時間は有限だった。

「オーデイン様。クレマンティーン様。到着致しました」

メイドのユリ・アルファから声が掛けられる。

「もう着いたでありんすか。では御二人共、パーティー会場の準備は整っていると思いんすがまずはアインズ様がおられる玉座の案内いたしんす」

シャルティアが意識を切り替えながら先導する。

「パ、パーティー会場で、マジかモモ・・・いやアインズさん」

普通に案内されて楽しくご飯でも食べるのかと思っていたオデインキングは予想外の歓迎っぷりに少し引いていた。

「至高の御方の御友人が来るともなれば、ナザリックを挙げて歓待するのは当然でありんすよ」

「ただ崇拝されてんだアインズさん。色々突っ込みたいオデインキングであった」

長い階層を抜けて着いたのは荘厳な雰囲気醸し出している玉座の間。

そこに座るアインズと後方と左右に侍っているメイドと異形種達。そして進み出るシャルティア。

「アインズ様。お客人をお連れ致しました」

「うむご苦労であった、シャルティアよ」

そして定位置に戻るシャルティアとユリ・アルファ。

「よく来てくれた、我が友オーデインよ。歓迎するぞ」

左右に両腕を少し開きながら鷹揚にオデンキングに声を掛けるアインズ。

まさに堂々たる支配者のポーズであった。

歓迎の意を示すアインズ。まさに支配者然としたその様相だがオデンキングにはその横に、必死な顔をした骸骨を幻視していた。

「よく来てくれた、我が友オーデインよ。歓迎するぞ」

（合わせて、合わせて!!）

「ああ、私もかの名高きナザリックの最奥に足を踏み入れることが出来るとは、感動で胸が震えているよアインズ。今日は招待してくれて感謝している」

（何やってるんですかアインズさんwww）

「フ、そう言ってくれれば準備をした甲斐があるというものだ」

（別に厨二病じゃないですよ!? ただ部下の望む支配者を・・・!!）

「君のことだ、まだまだ私を驚かせてくれるのだろうか?」

（厨二病乙）

「ああ、期待しておいてくれ。それとパーティー会場に行く前に軽く紹介しよう。彼等がナザリックが誇る精鋭、各階層守護者達だ」

（やめて、そんな眼で見ないで!）

「もう知っているだろうがシャルティア・ブラッドフォールン。1階層から3階層までの防衛を担当している」

「先ほどはとても楽しかったでありんす。機会があればまたお話してくんなまし」

「コキュートス。5階層の守護者でありナザリツクきつての武人でもある」

「アインズ様ト同等ノ強サトキイテオリマス。ヨロシケレバゼヒ手合ワセラオネガイシタイ」

「アウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーレ。6階層の守護者であり双子の姉弟だ」

「よろしくお願ひします!!」

「こ、こんにちわ」

「デミウルゴス。7階層の守護者でありナザリツク最高の頭脳の一人だ」

「お見知り置きを」

「そしてアルベド。守護者の統括でありデミウルゴスと同等の頭脳を持った智者でもある」

「よろしくお願ひいたします」

アインズは守護者の紹介を終えると立ち上がる。

「それではパーティー会場に向かうとしようか。・・・と言いたいところだが、少しだけオーデインと話したいことがある。セバス、先にそちらのお嬢さんを案内して差し上げろ」

「かしこまりました」

セバスが深い礼をもつて応じる。

「オーデイン、自室の方へ案内しよう」

「あ、ああ」

ドナドナされていく子牛のような眼を向けてくるクレマンティーンにすまなさそうな視線をやりながらアインズと共に歩きだすオデインキングであった。

もう絶望する必要なんて、ない。

セバスがクレマンティーンを案内しアインズがオデンキングを自室へと連れていった後、玉座の間に残された守護者達はアインズの新たな友人オデンキングについて話し合っていた。

ちなみにプレアデスは邪魔にならぬよう、セバスの後に続いて部屋を退出している。

「率直にあなた達の意見を聞かせてくれないかしら」

アルベドが守護者達に問い掛ける。

「ふむ、やはり人間がアインズ様の友人というのは少し不快感はあるが・・・」

アインズが守護者に賜った言葉、強者に敬意を払えという言葉を実践しようとするデミウルゴスだが、どうにも人間相手に敬意を払うというのは難しい。

しかしそれも仕方のない部分はあるのだ。

彼を作った至高の41人の1人、ウルベルト・アレイン・オードルは悪に拘りを持つ男だった。

彼の影響を受けて生み出されたデミウルゴスはその根幹とも言うべき部分が既に人間への悪性を持っていた。

「カノ人物カラハアインズ様ノ仰ルトオリ強者ノ気配ヲ感じタ。ナラバ我等ガ懸念スルコトハナニモ無イ」

コキユートスはアインズに言われるまでもなく、生粋の武人という設定から強者に敬意を払うのは当然のことだと認識していた。

「あたしはアインズ様の御友人に相応しい方に見えたけど？」

「ボ、ボクは別にどっちでも、いいんじゃないかと・・・」

双子の姉と弟はもともとそこまで人間に対する不快感はない。ただ無関心なだけだ。

拷問しろと命じられれば問題なく実行するし、仲良くしろと言われれば努力するだろう。

アウラの方はアインズの友人ということで幾分か好意的に見ているようだ。

「そーいやあんた、随分好意的だったじゃない。来るときになんかあったの？」

基本的に人間など虫けら程度にしか思っていないシャルティアがオデンキングに対してとっていた態度にアウラはそういえば、と先程疑問に思ったことを尋ねる。

「んー？ 知りたい？ 知りたいでありますか？ おチビ。なら相應の態度というものがありませんかしら？」

ぶん殴りたくなるほどのドヤ顔でシャルティアは守護者達に得意げな態度をとっている。

「あ？ なに勿体ぶってるのよ偽乳。なんかあったんならさっさと話せ」

仲が悪いと設定されたこの二人はよく口喧嘩をしているが、実際の仲は気のおけない友人である。

「仕方ないでありますねえ。そこまでお願いされんしたらこの私も口が緩くなってしまうíns」

誰も願ってねえよ。守護者達の心情が一致した。

「んふふ、あの御方、オーティン様は至高の41人の1人であり妾を作りんしたペロロンチーノ様の御友人でもありんしたのよ」

瞬間、守護者達に衝撃が走った。

「マ、マジ？ あんた適当言ってんじやないでしょうね」

アウラが驚きながらシャルティアに再度問いかける。

「おや、心外でありますね。私が至高の御方達のこと嘘などつくと思ínsすか？」

その通りだ。なにがあらうともこのナザリックに所属する者達が、

偉大なる至高の41人を冗談のネタになどするわけがない。

「ほう……。成る程、そういうことでしたか。この一連の流れにも納得がいきました」

デミウルゴスはその明晰な頭脳で、アインズがここにきてその心情を吐露した理由、友とした理由、ナザリツクを挙げて歓待する理由を瞬時に把握した。

「ナント。ヤハリ偉大ナル強者ニハ同ジヨウナ強者ヲ惹キ付ケルナニカガアルノダロウカ」

コキュートスも自身を創造した至高の御方に想いをはせ、もしかして我が主も御友人であったのだろうかと期待する。

「至福の数時間でありんした。私の知らぬペロロンチーノ様の一面、あの御方はたつぷりと話してくれたであります」

はあ。と艶かしい溜め息をつきながらシャルティアは、どうだ羨ましいだろうとアウラを煽りだす。

「う、ぐ……。このニセチチ!! あんただけずるいわよ!!」

私もぶくぶく茶釜様の話を聞いてみたいと気炎をあげるアウラ。

「も、もしかしてぶくぶく茶釜様もお知り合いだったのかなあ……。シャルティアの話を聞いて初めてオデンキングに興味を持ったマーレ。」

内向的なマーレは基本的にナザリツク以外の全てにあまり関心がないのだ。

しかし自身を創造した至高の御方の話を聞けるかもしれないとなれば別だ。興味を示さぬわけがない。

「ぶくぶく茶釜様とペロロンチーノ様は姉弟でありんしたからその可能性は充分ありんすよ」

シャルティアを創造したペロロンチーノと、アウラとマーレを創造したぶくぶく茶釜はリアルでは姉弟の関係である。

その上下関係は完全に姉↓弟であり、よくペロロンチーノが馬鹿なことを言ったときに「黙れ、弟」とぶくぶく茶釜が命令するのはナザリツクの日常風景であった。

「……………」

「どうかしましたか？ アルベド」

オデンキングがペロロンチーノの友人だったと聞いてからずっと沈黙を保っていたアルベドにデミウルゴスが怪訝な顔をむける。

「なんでもないわ」

そう切つて捨てたアルベドの顔には何の感情も浮かんではいなかった。

様子のおかしなアルベドに替わってデミウルゴスが場を締める。

「とりあえず、我等もパーティー会場に向かうとしましょうか。歓迎すべきことに、オーディン様はアインズ様の御友人として相応しい方であったようです。各々、話を聞きたいのは解りますがあまり無礼にならぬよう気をつけましょう」

いまだに悪感情は抜けきらないが、同時に我が主に相応しい御方であつたとも認めるデミウルゴス。

そろそろ御二人の会話が終わるかもしれないと思い、後から会場に姿を見せるなどという不敬を犯すわけにはいかないと守護者達とパーティー会場へ向かう。

拝啓

親愛なるクソ兄貴様。

おだやかな小春日和が続いておりますが如何お過ごしでしょうか。漆黒聖典でのお勤め、御苦労されていることかと思ひます。

私はといえば叡者の額冠を盗んだり闇の巫女姫を発狂させたりと、恥ずかしながら子供の頃からのやんちゃなところは中々治らないことを痛感する日々を送っています。

さて、余り仲が良くなかった私達ですがこうして筆を取らせていただいたのには訳があります。

子供の頃から両親の期待を一身に受けた貴方に、流石私達の子だといつも褒められていた貴方に嫉妬していたことは話したことはありませんがご存知かと思えます。

お前は残りカスだ。産むんじやなかったと言われ続け、必死に努力しても縮まらないその差に絶望したことも数えきれません。

しかしそれも今は昔。

もはや今の私には貴方に対する隔意はきれいさっぱりと消えてなくなりました。

何があったのか、嘘じゃないのかと疑われるのは当然のことかと思えます。

しかし私は知ったのです。この世界には自分の想像を越えたことなどいくらでも起きると。

今までの自分は井の中の蛙、いえ大砂漠の中の砂の一粒にも劣る小さな存在だったのだと今実感しています。

何があったのかはきつと書いても信じられないでしょうから省きます。

だから一言だけ。

助けてお兄様。

「クレマンティーヌ様」

「はいっ!!」

現実逃避から一瞬で帰還したクレマンティーヌはセバスの声に正気を取り戻す。

「お飲み物はワインで宜しいでしょうか」

「はいっ!! 問題ありません!! ありがとうございます!!」

誰だお前は。

「ではテイステイングを・・・」

「いえ!! 大丈夫です!! おおお構い無く」

もはやクレマンティーヌは自信の喪失どころではない。

電気イスに座らされ、五秒ごとぐらいに電源ボタンをギリギリで寸止めされる心境がナザリックに入ってからずっと続いている。

自分でも単独で相手をするのは辛いドラゴン・キンが何故か雑用をせつせとこなしていた。

3体で国を滅ぼしかけた伝説のアンデッドがそこらにふよふよと漂っていた。

イワトビペンギンが廊下をてちてちと歩いていた。

常識ってなんだっけ。強さってなんだっけ。

クレマンティーヌの精神はもうボロボロだった。

「クレマンティーヌ様」

「は、はいい」

セバスが再度声を掛ける。

「どうかお寛ぎくださいませ。このナザリックに客人を害するものはありません。全配下にオーデイン様とクレマンティーヌ様のことは通達しております。貴方に手出しをすることは決してありません」

セバスはクレマンティーヌの心境を正確に把握し優しげに声を掛

ける。

「確かにナザリツクは異形が多く、人間を害するものも少なくはありません。しかし我等の主人は慈悲深く優しい御方です。そしてその主人の命を無視する配下は存在しません」

いくつか例外もあるがクレマンティーンを安心させるためそれについては無視する。

「そ、そうなの・・・？」

いつ殺されるのかと恐怖に怯えていたクレマンティーンは優しげなセバスの声に少しだけ気を緩ませる。

「はい。私共は御二人様に楽しんでいただくために付いております」

少しずつ落ち着いてきたクレマンティーンに歓待の意思を見せる。

「わ、私は死ななくてもいいの・・・？」

「ご心配ならばこのセバス、クレマンティーン様からの敵対かインズ様からの命令がない限りは御身を守ると誓いましょう。これでも不遜ながらナザリツクの最上位勢にも引けをとらぬと自負しております」

執事として普段自分の力をひけらかすことなどしないセバスだが、クレマンティーンを落ち着かせるためここは自分の強さをアピールしたほうがよいだろうと考えた。

主から客人をもてなせと命令をいただいたのだ。

何よりもまず死の恐怖を感じる必要はないと理解していただくべきだ。

「・・・わかった。ありがとうー。ワイン、いただきますわ」

セバスの真摯な言葉によりやく普段通りの自分を取り戻すクレマンティーン。

「かしこまりました。そろそろアインズ様とオーデイン様も来られるかと存じます。ごゆるりとお寛ぎくださいませ」

まさに完璧な対応。執事の鑑であった。

アインズの部屋に着いた二人。

椅子に腰を落ち着かせながら見つめ合う。

「アインズさん」

「・・・はい」

「アインズ様」

「やめて!？」

とりあえずからかうオデンキング。

「なんなんですか、さつきのは。喋ってる途中で吹き出しそうになりましたよ」

さつきの会話を思い出して、自分も大概だなと恥ずかしくなるオデンキング。

「いや、なんとというかその・・・こちらに転移した時にNPCも自我を持ったみたいなんですけど、忠誠がえらいことになってまして」

仕方なく支配者ロールをしたのだとアインズは説明した。

「へえー。面白いですね。・・・とするとヘUGドラシル<時代のことは彼等にどう認識されているんですか?」

「うーん。なんとも言えないというか、現実にそくしたような感じで記憶しているようで。余りボロを出したくないので突っ込んで話が出来ていないんですよ」

「へー。でもいいですねー、あんな美人達に忠誠誓われてるってのは。手え出し放題なんじゃないんですか?」

このこの、と羨ましそうにアインズに言うオデンキング。

「性欲、無いんです。骨だから」

「お、おう。・・・なんだかすみません」

悪いことを聞いた、とオデンキングは謝罪する。

「いえ、いいんです。なんだかんだ言っただけ楽しいこともありますし、オーデインさんにも会えましたし」

嬉しいことを言ってくれるアインズ。

「・・・俺、ノーマルですからね?」

「そういう意味じゃないですよ!!」

なんとかからかいがいのある骸骨だろうか。

オデンキングは会話をしながらそんな風に思っていた。

「性格とかも設定通りなんですか？ シャルティアなんかはペロロンチーノさんに聞いた通りの感じでしたけど。あ、今更ですがシャルティアを迎えに出してくれてありがとうございます。楽しかったですよ」

「いえいえ、シャルティアも喜んでいたみたいですし、こちらこそありがとうございます」

サプライズな目論みはどうやら成功したようだ、とアインズは嬉しがる。

「性格はたぶん設定通りだと思います。ただ、設定の少なかったキャラはそのキャラを作ったプレイヤーの影響を結構受けてるみたいですね」

この10日と少しでそれなりに配下の性格を把握したアインズ。それほど間違った推測でもないだろうと思っている。

「逆に設定ギチギチのアルベドなんかは・・・あ、いや、ううんっ」
言い過ぎた、と誤魔化すアインズ。

それを目敏く見抜くオデンキング。直感が告げている。これは面白いことだと。

「アルベドさんが・・・なんですか？」

「い、いや何でもないですよ？ 設定ギチギチのアルベドは設定通りの性格だなんて話です」

ヤバい。アインズは自分の失言に頭を抱えた。

「ほほう・・・。本当になんでもないと？」

「ええ。むしろ何があるというんですか？」

じー。

骸骨の2つの穴に視線を向けるオデンキング。

内心焦るアインズ。

「そういえば宿屋の修理代俺が全部だしたんですよー」

「うぐうっ!？」

痛い所を突かれた。

アインズはへユグドラシルの金貨は大量に持っているがこちらの通貨の手持ちは少ない。

仕方なしに借りという形でお金を出してもらったのだ。

「是非その借りを返していただきたいな」

「う、うう」

数分後、アルベドの設定を書き換えて自分を愛している、という設定を盛ったとアインズは告白させられた。

「ぶふっ、くっ、あはははは。そ、それは中々、くふっ、面白いですね」

笑いを堪えながらアインズの行動に腹を抱えるオデンキング。

「うう、やめて下さい。自分でも後悔してるんですから」

羞恥心の小さな波が連続しているアインズ。

まさか異世界にきてまであの時の恥ずかしい行動を他人に知られるとは思わなかったのだ。

「くく、つまりアインズさんはアルベドさんが好き、と。良かったじゃないですか、相思相愛ですよ」

「もうやめたげてよう!!」

キャラを崩してまで懇願するアインズ。

「冗談です、冗談。それよりそろそろ行きませんか？ 随分と待たせてしまってます」

そろそろ勘弁してあげるか、とからかいをやめるオデンキング。そういうえばクレマンティーヌのことをすっかり忘れていた。大丈夫だろうか。

自分はへユグドラシルで異形種にも慣れていたがよく考えればクレマンティーヌはこちらの世界の人間だ。

「もしかして生きた心地してないんじゃないだろうか」

「ずばり、そんなレベルではない。」

「おっと、そうですね。オーデインさんと話していると楽しくてつい

つい時間を忘れてしまいました」

アイズは立ち上がってパーティー会場に向かう準備をする。

「では、行きましようか」

「ええ」

部屋を後にする二人。

「俺は、ノーマルですからね？」

「だから違いますって!!」

締まらない二人であった。

あるべどっ!!

パーティーが終わり、オデンキングは非常に幸せを感じていた。華美。煌びやか。絢爛。そんな言葉ですら陳腐に思えるほどに豪華で美しさに溢れたパーティー会場。

そしてこの世の物とは思えぬ程の美味な料理。そして何よりも嬉しかったのがホストをつとめてくれたアインズ。の横に居たシャルティア含む守護者達と近くに侍る美女メイド達との会話だ。

この世界に来て最初に持った目標がナザリックには揃っていた。

「いやー、最高の持て成しだったなークレマンティーン。料理も美味いとかそういうレベル越えてたし」

「恐すぎて味が解らなかった」

不貞腐れ気味のクレマンティーン。

「それにあの音楽隊。神曲つてのはああいうのを言うんだよ。素晴らしくなかったか?」

「その音楽隊が世界を滅ぼせそうじゃなければね」

音楽隊に強さっているのだろうか。

「あー、ごめんつて。ここがどういう場所か伝えるの忘れてたのは謝るからさ。それに別段、誰にも襲われたりしてないだろ?」

憔悴したクレマンティーンを慰めつつ、豪華なベッドの真ん中で体育座りしてる姿に萌えているオデンキング。

「はあ。まあそうだけど、ホント生きた心地しなかったんたからねー」
こてん、と横に倒れ生きている実感を嘔み締める。

「ままま、この埋め合わせはするからさ。んじゃ行ってくるわ」

部屋に戻って人心地ついた後にBarで呑まないかとアインズに誘われたオデンキング。

アインズは飲食が出来ないが雰囲気を楽しむのと、おそらくこちらを気遣ってくれたのだろう。

「出来るだけ早く帰ってきてねー」

もはや精神疲労が限界突破、歩く気力もないクレマンティーンはあ

まり長い時間1人にはなりたくないのか少し不安そうにしながらオデンキングを見送る。

「あいよー」

既にほろ酔い気味のオデンキングは、いつもより砕けた口調で相槌をうつてアインズの待つBarへ向かうためドアを開いた。

クレマンティーンとオデンキングが会話する少し前。

部屋の前にはプレアデスの一人、ユリ・アルファが待機していた。

Barへの案内を仰せつかったためだ。

ピン、と音が聞こえるように綺麗な姿勢はその美貌と相まって男なら誰でも見続けていたいと思うほど絵になっていた。

そんなユリに守護者統括のアルベドが近付いてきた。

「これは、アルベド様」

少し驚きながらもお辞儀をするユリ。

「ご苦労様、ユリ・アルファ。そんなに畏まらなくてもいいわ」

仕事を労うアルベド。しかしその瞳には非常に冷たい光が宿っていた。

「オーデイン様に御用でしょうか？」

態々ここに来た以上は間違いないだろうが、一応形式的に問い掛けるユリ。

「いえ、そういうわけじゃないの。ただ、少しお願いがあるのよ」

守護者統括であるアルベドが態々客人の部屋まで来て何をお願いするのだろうか。

疑問に思いながらユリはアルベドの言葉を待った。

「たいしたことじゃないの、ただ客人を案内する役目、代わってもらえないかしら？」

その言葉を聞いたユリは混乱した。

どう考えても守護者統括のすべき仕事ではない。

一体どのような理由があるのだろうかと疑問に思いながらもユリ

は答えた。

「セバス様から直接仰せつかった役目で御座います。それにそのような仕事を守護者統括であるアルベド様にやっていたかどうかというのも…」

「いいの。セバスには後で言っておくわ。それとこれは守護者統括である私からの命令よ」

そこまで言われてはプレアデスとはいえメイドの一人でしかないユリは引き下がるしかない。

「かしこまりました。では宜しくお願ひします」

身を引き、お辞儀をしつつその場を後にしてセバスへの報告へ向かうユリ・アルファ。

そしてアルベドは憎悪の感情をその身に秘めながらその対象が出てくるのを待つ。

オデンキングがドアを開けるとここまで案内してくれたメイドではなく、パーティー会場でアインズの近くで物静かにしていた守護者統括のアルベドが待機していた。

「あれ？ ユリさんは戻ったんですか？」

ちなみにパーティー会場にて本来の口調は割りと軽いと暴露していたのでアインズのような苦勞は回避している。

「ええ、私が案内します」

ぞんざいな口調でアルベドが答える。

「そっか…？ 態々すいません。じゃあ案内をお願いします」

少し怪訝に思いつつも案内を頼むオデンキング。

「ええ、ではこちらへ」

アルベドはBarとは逆の方向に向けて歩き始めた。

ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」の拠点ナザリック地下大墳墓、階層守護者統括。

それがアルベドの肩書きだ。

彼女はアインズを除くとナザリックでは最高の地位と言えるだろう。そんなアルベドには他の守護者達と明確に違う点がある。

それはアインズだけに最高の忠誠を誓い、アインズだけを最高に愛している、ということだ。

一見すればそれは他の守護者と変わりないだろう。

だがその心情はともすれば、意味合いが真逆と言ってもおかしくないほどに他の守護者のそれとは乖離していた。

アルベドを除く守護者達は皆アインズを崇拜し、ナザリックを愛し、自分達を作った至高の41人を尊敬し敬愛している。

シャルティアなどはアインズを愛しているとは言うものの、自分の想像主ペロロンチーノと比べてどちらが素晴らしいかと聞かれれば後者を選ぶだろう。

それはシャルティアに限らず、皆それぞれ自分の想像主を特別視しているところは多かれ少なかれあるのだ。

だが共通しているのは、アインズ、ナザリック、至高の41人を愛し、それより少し下がって同僚達を大事にしているということだ。

しかしアルベドは違う。たしかに同僚達はアインズと比べるべくもないが大事には思っている。

しかしそれ以外については別だ。

アルベドは自分達を見捨てた40人を、ナザリックから去った40人を、そしてなによりもアインズを悲しませると言う許されざる行いをした40人をもはや憎悪している。

アルベドは思う。

アインズ様だけがお側に居ればそれでいい。

アインズ様だけを愛することが出来ればそれでいい。

他に何もいらぬ。アインズ様以外の至高の者など帰ってくる必要はない。

他の全てが敵にまわってもアインズ様のお側に私がいればそれでいい。

「狂おしいほどの愛が、アルベドと他の守護者達との意識に隔絶した違いをもたらしていた。」

そして今、目の前にいる男は人間でありながらアインズ様の友などと思いがつた勘違いをしている。

アインズ様に友など必要ないのだ。

またいずれどこかに消え、アインズ様を悲しませるかも知れない存在など必要ない。

この男は憎むべき40人の亡霊そのものだ。

さつきと消してしまわなければ。

アインズ様には、彼等は急用が出来てナザリックを去ったとでも言っておこう。

オデンキングはアルベドの後ろを歩きながら考えていた。

「(もしかして嫌われてる?)」

さつきの素っ気ない態度、パーティー会場では一度も会話しなかった事実、そして今の冷たい雰囲気や纏った彼女を見てまず間違いないだろうと確信した。

「(ここはいつちよ機嫌でも取りますか!!)」

普段のオデンキングならば空気を読んで黙ったまま到着するのを待っていただろう。

だが今オデンキングは酔っていた。

酒が入ると涙もろくなる者、笑い上戸になる者など色々というがオデンキングは気が大きくなるタイプであった。

「いやー、あれも恋バナって言うんですかね？ どうみてもアルベドさんを好きなのに恥ずかしがって中々認めないんですよ。アインズさん。ここはいつちよ俺がへアインズ×アルベド 相思相愛!! 目指せプロポーズまでの道!!」なんて計画でも立ててやろうかと…」

この御方は、アインズ様の御友人に相応しき偉大なるお人だ。間違いない。

「(なんかめっちゃ機嫌良くなった…)」

鼻唄でも歌いそうに軽快な足取りになったアルベドを見てほっとしたオデンキング。

さっきまで歩いてきた方向とは逆に歩いているが本当に此処は入り組んでいるな、とお気楽な思考をしている。

「オーデイン様とお連れの女性は御結婚されているのですか？」

機嫌良く、言葉も丁寧になったアルベドがオデンキングに問い掛ける。

「(やっぱ種族は関係なく女の子は恋バナ好きだな) いえ、そういう訳ではないんですよ。というか会ってまだ数日ですし」

「あら、そうなんですか？ その割には随分仲が良さそうですね。部屋も同じですし」

部屋を同じにしてくれ、と申しでてきたのだ。当然そういう関係だと誰だっと思うだろう。

「あー、まあそうですね。成り行きといふかなんというか」

色仕掛けされたとは言えない。

「オーデイン様は手が早い御方ですね。アインズ様もそのくらい手が早ければ今頃…くふ、くふふふ」

くふーっ！と興奮するアルベドを見てオデンキングは少し引いていた。愛が重いつてのは成る程、こういうことかと。

「到着致しました。こちらでアインズ様がお待ちです。どうぞ、ご

ゆっくりとお楽しみ下さいませ」

「アインズが近くにいるせいか、少しかしこまりながらアルベドが到着を告げる。」

「ああ、ありがとうございます」

「計画の件、くれぐれも宜しくお願いしますわ」

「ギリリと眼を光らすアルベド。まるで獲物を狙う肉食獣のようだ。」

「え、ええ。ばっちり成功させますからご安心を」

「安請け合いですオデンキング。その計画に自分の命が懸かっているのは気付いていない。」

「(あれ? もしかしてアインズさんとアルベドさんがくつつくまでナザリツクを出られない?)」

——クレマンティーヌの胃に穴が空くまであと何日か——

日常

オデンキングとクレマンティヌがナザリックに来て数日、二人はナザリックの住人達にそこそこ受け入れられていた。

何度も出立しようと思ったオデンキングだがその度にアインズに惜しまれ、アルベドの凄まじい形相にびびり出立を延ばし延ばしにしていた。ちなみに主な理由は後者である。

滞在している間、色々面白い出来事があつた。

アルベドの場合：case 1.

「ほ、本当にこれでアインズ様を落とせるのでしょうか？ オーディン様」

「ああ、間違いない」

オデンキングはアルベドがアインズを落とすにあたって何が必要か真剣に考えた。

何しろ一番手っ取り早い、性欲に訴える方法が使えないのだ。

しかし見る限り、その精神に全く揺らぎが無いわけではない。

いくら無効化してしまうとしてもタイムラグはあるし、次々と湧き上がる感情は制御出来ないようなのだ。

となるとつまり湧き上がり、制御出来ない感情を利用すればいいのである。

すなわち「萌え」だ。

これならきつとアインズにも通じる。

斜め上の思考をしながらアルベドに策を授けたオデンキングであつた。

「アインズ様」

「ん？ 何だアルベツ…!?!」

「ニヤ、ニヤアルベドですにゃん」

そこに居たのは扇状さよりも可愛さを全面におしだしたアルベド、
もとい猫コスをしたニヤルベドだった。

「……」

「……」

「……」

「……にや、にやー」

「か、可愛いぞ……？ アルベド」

「ア、アインズ様あー！！」

「うおお!? 落ちつくのだアルベドよ!!」

一応成功。

アウラ&マーレの場合

「あ、あの一」

アウラとマーレがオデンキングにおそるおそる近付いて問い掛ける。

「ん？ アウラちゃんとマーレちゃんだっけ？」

「は、はい」

「こ、こんにちわ」

お辞儀をするアウラとマーレ。

「何か用かな？」

オデンキングは先日この二人の性別を知ったとき驚いたが、同時に
思った。ありだ、と。

見た目が幼いため、つい子供に話しかけるように接するオデンキン
グ。

「あの、シャルティアに聞いたんですけどオーデイン様ってペロロン
チーノ様の御友人だったとか？」

二人は自慢するシャルティアに耐えかねて、もとい自分の創造主の

話を聞きたくてオデンキングに会いにきたのだ。

「ああ、そうだけど。あ、もしかして二人もペロロンチーノさんに作られたのかな？」

シャルティア同様、ペロロンチーノの話を聞きに来たのかと勘違いするオデンキング。

「いえ、あたし達の創造主はぶくぶく茶釜様です。ただ、ペロロンチーノ様と姉弟だと聞いたのでもしかしてオーデイン様ともお知り合いだったのかなって」

もし知り合いならお話を聞きたいな、とおねだりする二人。

「(か、可愛ええー!!) あー、悪いけどぶくぶく茶釜さんとはペロロンチーノさんと一緒に居た時、一回会ったことがあるだけだからなー」
残念そうにしよぼんとする二人。

「リアルではかなりお世話になったんだけどな」

苦笑気味に言うオデンキング。

「リアル…。そういえばシャルティアがぶくぶく茶釜様はリアルでは「セイユウ」という職業だったと言っていました」

「そうそう。主にお世話になったのはエロゲの…」

そこまで言っただけだと気付くオデンキング。

可愛い女の子と可愛い男の娘にエロゲの話をする中身おっさん。

ダウトである。

「あ、いやその、なんと叫びたいか…」

「セイユウは声で命を創造することが出来る職業と聞きました!!」

眼をキラキラさせながら話を催促してくるアウラ。

「(どんな認識やねん) そ、そうだな。命を作り、そして男から命の素を絞り出す素晴らしい職業だ、うん」

声優について誤魔化しながら二人とお喋りに興じるオデンキングであった。

アルベドの場合：case 2.

「本当に、本当に大丈夫なの？」

もはや同志である二人の間に敬語はなかった。

「ああ、間違いない」

最初の作戦がそこそこ成功したオデンキングは次なる作戦を実行に移していた。

「でも、わざとアイنز様にぶつかるとはだなんて……」

不敬が過ぎる行為に及び腰になるアルベド。

「これは必要なことなんだアルベド。大丈夫、その程度のことです。アイنزさんは怒らない」

次にオデンキングが考えた作戦は「シチュエーション」だ。

今はオーバードロードになってしまっているとはいえ、人間だったころに憧れたシチュエーションに何も感じないわけがない。全人類の半分が夢に見る、曲がり角で美女とのごっつんこ。

そして始まるラブストーリー。

いける。

根拠の無い確信を持つオデンキングであった。

「よし、そろそろだ。ソリュシャンちゃん？」

「はい、オーデイン様。あと10m、9、8」

確実にタイミングを外さぬよう、マスターアサシンであるソリュシャンに協力を依頼したオデンキング。

「今だ!! 殺れ!!」

「ええ!!」

微妙に発音が違ったが気にせずアルベドは突撃した。

「キャッ」

「うおっ!?!」

見事に体当たりを決めたアルベド。両足を斜めに揃え、顔は俯かせ両手は体の横で地面に手をつける。〈悪の大臣に襲われる姫ポーズ〉である。

嫌がっていた割に演技もばっちりなアルベド。

「す、すまんアルベド。大丈夫か？」

心配そうにアルベドに手を差し出すアイنز。

「ア、アインズ様あー！ー!!」

「うおお!? 落ちつくのだアルベドよ!!」

成功？

デミウルゴスとコキュートスの場合

好きにBarを利用してくれとアインズに言われたオデンキング。
古今東西の素晴らしい名酒が揃うBarについつい足を伸ばして
しまう。

「これは、オーデイン様」

先客がいたBar、そこにはデミウルゴスとコキュートスの姿が
あった。

「おっと、君達も呑んでたんだ」

そして失礼をした、とばかりに退室しようと立ち上がる二人。

「あ、気にせず呑んでくれ、というか一緒に呑もう。一人酒は味気ない
し」

二人を誘うオデンキング。

「これは光栄の至り。喜んで御相手を務めさせていただきます」

「此方二才座リクダサイ」

歓迎の意を示すデミウルゴスと椅子を薦めるコキュートス。

「ああ、ありがとう」

男3人の暑苦しい飲み会が始まった。

「へえー、デミウルゴスはウルベルトさんに作られたNPCなんだ」

「ええ、我が主を御存じなのでしょうが?」

「まあ、会ったことはないけど色々と有名だしなー」

「ほう…。お聞きしても？」

珍しく少し高揚した様子で問い掛けるデミウルゴス。

「いや、そんなに知ってる訳じゃないぞ？　ただナザリツクがそもそも知名度の高いギルドだったし、特に有名なワールドチャンピオンのたち・ミーさんていただろ？」

「ええ」

ちなみにデミウルゴスの創造主である　ウルベルト・アレイン・オードルとたち・ミーは仲が悪く、デミウルゴスは至高の41人であるたち・ミーに忠誠こそ捧げているものの少し複雑に思っている。

「その人とタメをはるワールドデイズターのウルベルトさんもやっぱ有名っちゃ有名だったわけだよ」

「成る程、確かに我が主は最強の魔法職で御座いました」

自分の主がへユグドラシルでも高名だったと知り頬を弛ませるデミウルゴス。

「フム、ヤハリアインズ様ト同格ノマジックキャスターダケアリ、オーデイン様ハ物事ヲヨク知ツテオラレル」

少し人間には聞き取りづらい声質でコキユートスがオデンキングを褒める。

「いやいや、常識だつてこんくらい。それよりアインズさんの方がめちゃくちゃ物知りだよホント」

ナザリツクに来てかなりアインズと話したオデンキングだが、アインズのへユグドラシルについての知識には舌を巻いたものだ。

かなり古株のプレイヤーである自分も知らない情報などを随分と聞かされた。

「流石はアインズ様。オーデイン様をして物知りと言わせしめるその智謀と知識量には、我々も嗟歎を禁じ得ません」

「我が主ノ偉大サヲ思イ知ラサレルバカリヨ」

忠誠心もやばいけど過大評価も尋常じゃねえなこいつら、と酔った頭でアインズに憐憫の情を送りながらオデンキングは二人と楽しく

飲み続けるのであった。

アルベドの場合：case3.

「本当に、本当に、ホンツトーに大丈夫なのね？　これでアインズ様に嫌われたら殺すわよ」

もはや客人扱いはしていないアルベド。気安くなったのか扱いが悪くなったのか難しいところである。

「ああ、間違いない」

作戦1、2とも効果が薄かった今、ここはアインズに聞いたアルベドの設定でもあるギャップ萌えに期待すべきではないかとオデングは思っていた。

「まず、アルベドは好き、愛してるとか言い過ぎなんだ。そういうのは普段から言葉に出さず、ここぞというところで口に出すからこそ感動するものなんだ」

「そ、そんな!?　じゃあ今まで私がしていたことは無意味だと…!?」

「いや、それがあつたからこそ今からやる作戦が映えるわけだ。大丈夫、俺を信じろ」

誰が見ても信じられそうにないが切羽詰まったアルベドは別である。

「わ、わかったわ」

作戦を開始するアルベド。

「アルベドよ、今日は随分と静かだな？」

アインズはいつもならもつとぐいぐいくるアルベドに少し物足りなさを感じていた。意外と今までの作戦も効いているようだ。

「そう？ 別に何も無いわ」

少し冷たさを含んだ声で無礼な口をきくアルベド。

「え…？」

「(やばい。何かしちやったのか俺は…？)」

普段ならあり得ないアルベドの態度に何かしてしまったのかと頭をフル回転させるアインズ。

「(このままじゃ裏切りBadエンドコースか!? な、何か、何か考えねば!!)」

アルベドの機嫌をとるためいくつもの考えを脳内で展開するアインズ。出した答えは。

「ア、アルベドよ。今度二人で、どこかデートにでも行かないか？」

「ア、アインズ様ぁー！！」

「うおお!! 落ちつくのだアルベドよ!!」

大成功。

クレマンティーンとプレアデスの場合。

ナザリック6階層の闘技場でクレマンティーンとプレアデスの一人、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータが模擬戦をしていた。

「オラアッ!!」

「くっ、うっ」

この世界に於いては至上の決戦とも言うべき、常人には何が起きているかもわからない凄まじき闘いであった。

ちなみにナザリックでは普通である。

「このクレマンティーン様が負けるはずがねえんだよお!!」

気合いと共にエントマを吹き飛ばし、首にステイレットを突きつけるクレマンティーン。

「そこまでつす」

人狼の少女、プレアデスの一人であるルプスレギナ・ペータが声をかけ模擬戦が終了する。

「うう…悔しいですう…」

「か、勝った…!!」

悔しがるエントマと、勝ったことに感動を覚えるクレマンティーン又。

最近では勝負とかそういうレベルではない化物に囲まれていたため感動もひとしおであった。

「いやー、意外と強いんですね、クレちゃんは。正直オーティン様の金魚のフンかと思ってたっす」

さらりと毒を吐くルプスレギナ。

「誰が金魚のフンよ、誰が」

そんなセリフも勝利の余韻で気にしないクレマンティーン。

「ふん、エントマは我々の中で最弱。これでプレアデスに勝ったとは思わないように」

色々であったクレマンティーンにまだ少しだけしこりがあるナーベラルが悔し紛れに口を出す。

「どこの四天王っすか」

突っ込まずにはいられないルプスレギナ。

闘技場の客席から拍手が上がる。

「二人とも、素晴らしい闘いだっただぞ。エントマもご苦労であった」
《フライ／飛行》でプレアデス達の近まで飛んでくるアインズとオデケンキング。

「クレマンティーン…そんな強かったっけ？」

自分と闘った時にはあそこまで強そうには見えなかったと首を捻るオデケンキング。

整列し畏まるプレアデス達と、一応姿勢を正すクレマンティーン。
「んー、なんだろ。ティンちゃんと闘った後、なんか強くなったんだよ

ねー」

本当はその後のしょーもないやり取りでレベルアップしたのだが
気付いていない。

「彼女は厨二病なんですか？ まさか戦闘中に、このクレマンティ
ヌ様がーとか言い出すとは思いませんでした」

ひそひそとオデンキングに耳打ちするアインズ。

「ええ、アインズさんのお仲間です。よかったですね、同志が現れま
したよ」

ナチュラルにアインズの心を抉る。

「だから私は違いますって!! あれは部下のために仕方なくって
言ったじゃないですか!!」

「冗談、冗談。ほら、メイド達が見てますよ」

「(はあ…)」

墓穴を掘ったかと溜め息をつくアインズ。

骸骨が墓を掘るとはこれ如何に。

「フム、クレマンティヌさんは元漆黒聖典だと聞いたがどのくらい
の強さだったのかお聞きしても?」

オーデインの連れ合いということでも丁寧な口調で喋る。

「うーん…今の実力なら上位にもひけをとらないとは思うけど。た
だ、最上位の奴等と番外席次だけは別です。あれは真の化物。実力が
離れすぎて良くわからないけど、もしかしたらデインちゃんにも匹敵
するかも」

自身のレベルが上がったこと、ここに来て強者を沢山見たこと。

それによって今までは漠然としか解っていなかった者達の実力が
想像出来るようになったクレマンティヌ。

「成る程、やはりこの世界にも強者は居るものなのだ。プレアデス
よ、今見た通りこの世界の人間にも侮れぬ者が居ることは理解出来た
な?」

アインズはクレマンティヌに感謝していた。

この状況は自分が押し進めていた意識改善にうってつけの状況で

ある。

「ならばこれからは油断や慢心を捨てることだ。常に自分よりも強者が居ることを念頭において行動を心掛けよ」

「はっ!!」

全員が声を上げたことに満足気に頷くアインズ。

そんなナザリックの日常の1コマであった。

夜、アインズの元に1つの報告が上がった。

「フム、カルネ村に相当な高レベルとおぼしき集団が情報収集に現れた、か」

今は姿を消したようだが、アインズがスレイン法国の特殊部隊と闘った場所でも何やら探っていたらしい。

十中八九スレイン法国の部隊だろうとアインズは確信した。

「フン、面白い。敵対するというのなら宣言通り、死を告げに行ってくれる…!!」

「あの、今は部下の人達居ませんか?」

「あつ」

やはり厨二病は治っていないようである。

カリスマEX

「全員揃ったようだな」

アインズの声が部屋に響く。

「では、これより会議を始める」

昨晩にスレイン法国の影ありと報告を受けたアインズは一夜明けた今ナザリックの、シャルティア以外の主要な面子を集め会議を行っていた。

「尚、今回の会議にはオーディンさんとクレマンティーンヌさんにも出席いただいている。理由は会議の内容で解るだろうから省略させてもらおう」

アインズは守護者達を見渡し、異論は無いようだと判断する。

「ではまず1つ目だ。一昨日から昨日の昼にかけてカルネ村、そしてその周辺を探る高レベルと思わしき集団が現れた」

アインズの言葉に真剣に耳を傾ける守護者達。

「2つ目、これは皆が既知の通りこのナザリック周辺を探る愚か者達が居る、ということだ」

2つ目の事実が判明した時はナザリックが最大の警戒態勢に入っただがオーディンの報告により、今は監視と一階層にシャルティアを置くだけにとどまっている。

「後者については申し訳ないが、俺達に対する追っ手の線で間違いないと思う」

オデンキングがアインズの言葉に続き説明する。

そう、今ナザリック周辺を伺っているのはクレマンティーンヌを追って此処に辿り着いた風花聖典の手の者達であった。

そもそも追われていたクレマンティーンヌが態々人の目に付く豪華な馬車に乗って街を出たのだ。ばれない訳がない。

それでも今の今まで襲撃が無かったのは、クレマンティーヌが街に詰めていた者の大半を殺害したことで増援が遅れたことと、それまではこの草原に影も形も無かった筈の巨大な大墳墓を追っ手が警戒していたためだ。

「うむ、だがどちらにせよ全て同じスレイン法国の関係者と判断して間違いないようだ。お前達もオーデインさんを責めることはしないでほしい」

こんな程度のことですし新しき友を失うのは御免被るアインズ。

「重々承知しております、アインズ様。既にオーデイン様は我等が身内も同然。このような事で責める愚か者はこの場には存在致しません」

アインズの言葉に即座に返答するアルベド。

その言葉に私情と自分の都合がたつぷり詰まっていることは想像に難くない。

「アインズ様ノ友トアラバ御守リスルノハ当然。御命令ヲイタダケレバスグニデモ全滅サセテ御覧ニイレマス」

勇ましく武威を知らしめたがるコキュートス。

「うむ、お前達がオーデインさん達と仲良くなっているのは私としても嬉しい限りだ」

オデンキングをナザリックに招くにあたって懸念していたことは、もはや気にせずともいいようだ。

「話を戻すが、カルネ村に現れた一団はクレマンティーヌさんの話を聞く限りスレイン法国の特殊部隊、漆黒聖典で間違いないようだ」

随分と解りやすい特徴を持っていた漆黒聖典である。

「そいつらの目的だが以前カルネ村を助けた際に滅ぼした者達、陽光聖典という集団だったということが判明しているのだがな、おそらくそいつらが全滅した事を調べに来たと思われる」

アインズが推論を述べる。

「それぞれの集団は普段は違う使命を帯びているらしく基本的に連携はとらぬそうだが、早晩に漆黒聖典のほうもこちらを嗅ぎ付けるだろうからその時どう行動するのかは不明だ」

昨晚、報告の内容を吟味し話すことを纏めていたアイズはすらすらと話を進める。

「オーデインさん達の追っ手、風花聖典の者達については問題ない。有象無象の弱者だ。レベル50程度のモンスターを数体出すだけで終わるだろう」

だが、とアイズは続ける。

「漆黒聖典、こちらの方は定かではないが私やオーデインさん、守護者に匹敵するものが混じっている可能性がある」

守護者達の目に剣呑な光が宿る。

「…だが、だ守護者達よ。心して聞け。高レベルの人物よりも警戒すべきものがあるのだ」

いったいそれは、という目がアイズに向けられる。

「未確定の情報ではあるが、漆黒聖典の中にワールドアイテムを持つ者が居るかもしれん」

守護者達に衝撃が走った。

「そ、それは信憑性のある情報なのでしょうか？」

アルベドがアイズに問い掛ける。

「50%…と言ったところか。クレマンティーヌさんの情報にある漆黒聖典が誇る秘中の秘と呼ばれるアイテムの存在。そして報告にあった漆黒聖典の者達の中で、一番地位が高そうな人物が着ていた龍が描かれたチャイナ服のような装備」

アイズにはそのアイテムに心当たりがあった。

「もしそれがワールドアイテムであったならばおそらく〈傾城傾国〉と云われる物であると思われる。精神操作系統のワールドアイテムだ」
ざわり、と場が揺れる。

それはそうだろう。例えばレベル差があろうともワールドアイテムを使われれば、ましてや精神操作ともなれば望まずとも敵の駒になる可能性があるのだ。

ワールドアイテムはワールドアイテムでしか防げない。〈ユグドラシル〉の常識だ。

「それで、だ。その情報を踏まえたお前達の意見を聞いてみたい。各

自、忌憚の無い意見を交わしてほしい。プレアデスやセバスにも発言を許す」

そうアインズが言ったものの自然と場の視線はアルベドとデミウルゴスに向けられる。

このナザリックの頭脳はアインズを除けば彼等なのだ。

「では、僭越ながら私から発言させていただきましょう」

その視線の意味をしかと理解したデミウルゴスは一番速く意見を上げる。

「短絡的な意見と思われるかも知れませんがやはりここはナザリック総力を挙げて殲滅すべきかと」

デミウルゴスの出した結論は敵対だった。

「ほう。理由を聞かせてくれるか、デミウルゴスよ」

鷹揚にアインズが静聴の構えをとる。

「は、まずはやはりワールドアイテムの存在です。特に精神操作系統ともなれば一級に警戒すべきもの。考えたくはありませんがアインズ様が万が一にでも操作された場合、我等には手が出せなくなり奴等にとつての鬼札となる可能性があります」

至高の御方が敵の手に落ちる。考えただけで悪夢であるその可能性に守護者達は背中に寒気を覚える。

「更に今の現状です。陽光聖典を壊滅させ、風花聖典に敵対しているこの状況は友好的に話を進めるのには遅すぎるかと思われます。それにスレイン法国そのものがそもそも我等にとって相容れぬ存在かと愚考致します」

意見を終えるデミウルゴス。

「フム、成る程な。アルベドはどうだ。デミウルゴスとは違った意見はあるか？」

どうやらデミウルゴスとアルベドの意見が配下の総意になるようだ。アインズは場の雰囲気から理解し、問い掛ける。

「いいえ、御座いません。デミウルゴスの言う通りかと。強いて言うならばアインズ様はナザリックより絶対に動くべきではありません。全ては我等にお任せを。必ずや御期待に添える結果をお見せ致します」

す」

「アインズはアルベドの生きる意味の全てなのだ。操られる可能性など1ミリたりとも残したくはない。」

「両名とも敵対か…。ウウム、どうしたものか」

「守護者達はアインズが何を悩んでいるかを解らずにその身の不知を恥じる。」

「…オーデインさんはどう思われますか？」

「ここまで殆んど沈黙を保ってきたオデンキングに問い掛ける。」

「うーん、原因の半分は俺達だからあまり意見を言える立場じゃ無いんだが…」

「悩む素振りを見せるオデンキング。」

「いえ、今はどんな意見でも聞きたいんです。もし考えがあるなら言ってみてくれませんか？」

「考えが纏まらないアインズはさすがの気持ちでオデンキングに視線を向ける。」

「とりあえず今アインズさんが悩んでるのって法国というよりプレイヤールの事ですよね？」

「確信を持ってアインズに尋ねる。」

「…悟られていますか。はい、その通りです」

「そりゃ解りますよ、確かに高レベルの存在とワールドアイテム。脅威といえば脅威です」

「どういう事かとセバスとプレアデス、守護者のアウラ、マール、コキユートスはオデンキングに物問いたげな視線を送る。」

「対してアルベドとデミウルゴスはその一言で全て理解したようだ。ナザリック最高の頭脳は伊達ではない。」

「でもナザリックの戦力と比べれば所詮は大人と赤ん坊か、それ以上の戦力差でしょう？ それにギルド「アインズ・ウール・ゴウン」はワールドアイテム保持数トップだった筈です。これでどうにかならない訳がない」

「ナザリックを褒め称えるような意見にアインズと参謀の二人を除く全員が確かにそうだと肯定の意を示す。」

「もしどうにかなるとしたらそれは、プレイヤーの存在でしょう。ナザリックのようにギルドごと転移してくる者がいないとも限らない。沢山の高レベルプレイヤーが転移してくるかも知れない」

少し言葉を切って唇を湿らすオデンキング。

「法国はその内実はともかく、表面上は六色聖典を人類の守り手だと認識して大部分はそれを疑っていません。というかクレマンティーンに聞く限り事実として行き過ぎな点はあるものの人類の守護者足り得ているようですし」

クレマンティーンがオデンキングの視線を受け、うんと頷きを返す。

「となればその事実を受け止めたプレイヤーが法国とそれに敵対しているナザリックを見て何を思うか、とアインズさんは考えているんじゃないですか？」

「ええ、その通りです。それに我々はそもそもヘグドラシルでは人間種に対して敵対的なギルドでした。法国の件がなくとも隔意を持って接してくるプレイヤーは少なからずいる筈です」

アルベドもデミウルゴスもやはり、といった風に納得の表情を見せる。

他の守護者とプレアデス、セバスも頷いている。

「臆病、と捉えられるかも知れませんが私は仲間達が残したこのナザリックと、彼等が作ったアルベドや他の者達を失いたくないのです。もし彼等がいつか帰ってきた時に何一つ変わらないナザリックで迎え入れるためにも」

その言葉にオデンキングとクレマンティーンを除く全員が感動で声が詰まった。

この御方は、どこまでも、どこまでも我等の事を考えて下さっている。これほどの幸福があるだろうか。これほどの慈悲を受け我等に何が出来るだろうか、と。

もはや狂信を越えた忠誠を誓う彼等にオデンキングとクレマンティーンはちよつと引いていた。

ちなみにアルベドは自分の名前だけ呼んでもらったせいか嬉しす

ぎて精神が何処かにトリップしていた。

「え、えー、気をとり直してですね、それに対する意見を言ってみていいですか？」

場の雰囲気物が物凄いいことになっているがオデンキングはそれに圧されず口を開いた。

「はい、お願いします」

えっ、えっ、何この雰囲気、と困惑するアインズも乗るしかないとばかりに相槌を打つ。

「たぶん、今から言う意見は頭の差とかじゃ無くてですね、視点の違いがあるからこそその意見だと思えます。間違ってもアインズさんやその二人には頭の良さでは敵いません」

アインズとデミウルゴスが不思議そうにオデンキングを見返す。

アルベドはまだ帰ってきていない。

「アインズさん達のそれは強者故の考え、というところですかね。カレストしてる俺だってどんだけ戦力があるうがナザリックと敵対するくらいなら、単身で法国に戦争仕掛ける方がまだマシに感じるんですよ」

じっと全員が耳を傾ける。

「つまりナザリックの武力を知った時点で法国は敵対する意志はまず無くなるんじゃないかってことです。たとえば人類以外を嫌悪しているようにも国が滅ぶよりはマシだ、と」

その考えは無かった、と驚くアインズとデミウルゴス。

体をビクンツと揺らし帰還したアルベド。

なにやら下着の様子を気にしている。

「今のところはプレイヤーの影は全く見当たりません。となると今やるべき事は敵対ではなくどういう風にナザリックの武力を見せつけるか、どういう風に相手の心を折るか、です」

それに、とオデンキングは言葉を続ける。

「問題の傾城傾国についてはそこまで事が進んだ後なら、心の折れた相手からそれを徴収する交渉なんてデミウルゴスなら朝飯前でしよう?」

「だろ? と挑戦的とも取れるその視線に、デミウルゴスはニヒルな笑みを返した。」

「…成る程。やはり会議に出席していただいて良かった」

方針は決まったとばかりに立ち上がるアインズ。

「守護者達よ、方針は理解したな? アルベド、デミウルゴス。作戦を練るぞ。もはや敵対の意志を考える事すら烏滸がましいと知らしめ、法国という国から誇りという誇りを奪い!! 恭順以外を示すことの無いようナザリツクの威光を見せつけよ!!」

「はっ!!」

全員が片膝をつき、頭を垂れる。

死の王に相応しき完璧な支配者の姿がそこにあった。

「あの、なんでオーティンさん達まで片膝ついてるんですか?」

「はっ!?! つ、つい…!」

珍しく弄られ役が逆転した瞬間であった。

さすデミ×さすアイ×さすオデ

漆黒聖典と風花聖典。普段は顔を合わす事すら無いこの2つの部隊だが今その例外がナザリツク地下大墳墓の前に展開されていた。

前者はカタストロフ・ドラゴンロードの情報を求め、陽光聖典を滅ぼしたのが何者か知っている、もしくは何か関係している可能性がこの大墳墓にあると思ひ足を運んだ。

後者は漆黒聖典の裏切り者であり叡者の額冠を盗み出した大罪人、クレマンティーヌの足跡をたどりこの地にたどり着いた。

各々、目的は違うものの大墳墓に潜入するという事は一致している。

信仰している神こそ違いが協力することとなったのだ。

そして今、彼等は混乱の極致にいた。

「や、山と、河…?」

誰ともなく呟いたその言葉は状況を的確に捉えていた。

「俺達、大墳墓の前に…あれ?」

彼等はまさに大墳墓に突入する直前だった。

それが今は山と河に囲まれている。

声を発した男でなくとも混乱して当然だった。

そして彼等の中でも一際、素晴らしい力を感じる装備に身を包んだ男が驚愕の声を上げた。

「っ!! カイレ様は何処だっ!!」

そう、彼等の上役でもあり護衛対象でもあるカイレが消えたのである。いや、この場合消えたのは彼等の方だ。

その声に反応した訳ではないだろうが周りから次々とモンスター

が姿を現す。

集団から悲鳴と驚きの声上がる。

「な、何故こんなところにアンデッドが湧き出す!？」

「いや、それよりなんだこの数は!!」

実際はそこまでの数ではないのだがその巨体とおぞましさに威圧され恐怖に駆られる集団。

アンデッドの名前はスケリトルドラゴンとデスナイト。この世界でならば非常に強敵となるアンデッドだ。それが数十と襲い掛かってきたのだからたまったものではない。

だが混乱する集団に雷鳴の様な声が轟く。

「乱れるなっ! この程度我々にとっては窮地でもなんでもない。下がれっ」

先程上役が消えたことに驚き声を上げた男だ。漆黑聖典の隊長であるその男にとってはこの程度は問題にならないようである。

そしてそれは事実であった。瞬く間に漆黑聖典の仲間達と共にアンデッドを駆逐していく。最後のアンデッドを倒した瞬間、景色が歪み彼等は元の場所に立っていた。

「カイレ様は、居られぬか…」

周囲を見渡すが誰も居ない。策に掛かったかと悔しがる。そんな彼等の前に一人の少女が現れる。

「おやおや、誰かお探しでありんすか?」

その少女は一目で最上級と解る装備に身を包み、こちらを挑発するような視線で眺めている。

男は警戒しながら声をかけようとしたが後ろから悲鳴が上がったため何事かと思ひ振り向く。

「ぐぶうっ!! ひ、ひいっ!？」

そんな少女を見た漆黑聖典の一人が情けない声を発した。

「た、隊長…」

「どうした」

「あ、あの女、あいつは、あいつは…隊長よりも、つよ、強い」

彼は漆黑聖典第11席次であり、実力的にはたいしたことはないが

相手の強さを計れるという貴重なタレントを持つていたため在籍を許されていた。

そしてその男が断言したのだ、人類どころか全生物という枠組みの中でも最上位に入る漆黒聖典の隊長が目の前の少女に劣る、と。

「おや、もしかしてタレントというやつでありんすか？」

少女は男がいきなり実力を見抜いた事に関心をよせる。

「ひいつ、こつちに来るな!!」

少女は一歩たりとも動いていないが興味を向けられただけで恐怖を感じた男は悲鳴を上げながら後ずさる。

そしてその態度から事実なのだろうと隊長と呼ばれた男は認識した。

「お前が、カイレ様を拐かしたのか？」

間違いないだろうと思ったが一応確認する。

「ふむ、あの老婆のことを聞きんしたならその通りでありんすよ」

素直に認める少女。

威圧感に圧されながら、男はこの大墳墓の主であろう少女を睨み付ける。

「…要求はなんだ？」

最重要項目はカイレの奪還だ。話を通じるのならそれに越したことはない。

「おや、存外に素直でありんすのね。手間が省けんした」

少女は微笑んでいるが此方を見つめる眼には一切の油断がない。

「あの御方は我等にとって欠かせない方だ。解放してくれるのなら出来る限りの条件を飲もう」

そう言っただけで要求を待つ男。

「そんなに緊張しないでおくんなまし、条件は一つだけでありんす。今居る全員がこのナザリック地下大墳墓の6階層まで足を踏み入れる事、これだけでありんすの」

くつくつと笑いながらなんてことないだろう？ と要求を突き付ける少女。

男は思う、十中八九罠だろうと。だがどちらにしても救出するには

入るしかないのだ。少女に肯定の頷きを返す。

「結構。ではついて来なんし」

振り返り背を見せる少女。一瞬槍を突きだそうと思ったが悪寒を感じて取り止める。恐らく止められる、と。

「行くぞ」

怯えている風花聖典の隊員達に指示を出す。

漆黒聖典の隊員達は11席次を除き、修羅場を潜り抜けているだけはあつて物怖じせず歩を進める。

墳墓の中とは思えないほど、階層を降るごとにその様相を変える有り様に漆黒聖典の隊長である男は驚いていた。

この広大な空間だというのに虫一匹の気配も感じないこの状況に異様を感じる。

だが驚いてばかりはいられない。

少しでも情報を引き出そうと前を歩く少女に話し掛ける。

「この大墳墓の主から直々に案内されるとは光栄だな。随分と広大な建築物のようだが何階まであるのか聞いてもいいかい？」

自分よりも強い少女。それがこの大墳墓の主でないわけがないと、それを前提に問い掛ける。

対して少女はその言葉を聞いて肩を震わせた。

「く、くひゅっ。そ、それは自分の眼で確かめなんし。出来るなら、の話でありんすが」

何かを抑えつけるかのような雰囲気疑問を覚えるが、やはりそう易々と情報を出しはしないかと残念がる男。

そしてそうこうしている内に目的の場所へ辿り着く。

森林を抜けた先にある闘技場のような場所だ。

そして彼等は悪夢に出会う。

闘技場の奥、その場には似つかわしくない立派な玉座の周りにそれは揃っていた。

美しいという言葉が霞むほどのメイド達。

強者の雰囲気を漂わせる執事。

蟲の体を思わせる白銀の異形。

闇妖精とおぼしき、まだ幼さが垣間見える双子。

悪魔のような特徴を持った男と女。

そして何よりも、何よりも目を引く玉座に座る存在がそこにいた。集団から誰ともなくポツリと言葉が上がった。

「死の…神…？」

まさしく、此所にいる全ての隊員が脳裏によぎらせた言葉である。

漆黒聖典。

スレイン法国神官長直轄特殊工作部隊群「六色聖典」の内、死の神スルシャーナに仕える一部隊、それがこの部隊の名称である。

仕え、崇めるとは言うものの別段彼等は神を信仰しているわけではない。

いや、第5席次のクアイエッセ・ハゼイア・クインティアのように崇め奉るものもいるにはいるが、少数派だ。

それは何故かと問われれば彼等は言うだろう。

神に祈れば戦いに勝利出来るのかと。

普通の宗教に限らず、宗教家というものは地位が上がれば上がるほどリアリストにならざるを得ないものだ。

勿論地位が上でも敬虔な信者はいるし、リアリストといっても信仰がない訳ではない。

ただ、組織というものは信仰があれば成り立つというわけではないのだ。そしてそれは、漆黒聖典という特殊な環境に身を置く彼等にも言えることだった。

戦闘が必然的に多くなるこの部隊では神の祈りなどより自分の実力を上げるほうがよほど有益なのだ。

スレイン法国でも最高位に近い地位を持った集団が一番信仰が少ないのは随分と皮肉的である。

だからこそ、そんな漆黒聖典の隊長であるからこそ死の神かも知れない存在に出逢っても平静を保っていられたと言えるだろう。

だが、そのせいで気付いた。

まだ周りに目を向ける余裕があったからこそ気付いてしまったのだ。

玉座の周りに立つ者達が持つ巻物やガントレット、あるいは杯や短杖のようなアイテムは自身がここ数日で散々見てきた秘中の秘ともいべきアイテムと同じ気配を放ってはいないかと。

「隊長……。あれは、あれは……」

震える声で何かを伝えようとした11席次だが恐怖によりもはや最後まで言葉を発することは出来なかった。

だが言われずとも解る。

自身より強い少女が玉座の横、異形が並ぶ列の端に歩いていきその身を置いたのだ。

その意味が示すのは他に並ぶ者達と同格という事実。そして何より玉座に座る者の配下である、ということなのだろう。

この男が少女を前にして平静を保っていたのは、漆黒聖典には自分よりも更に格上の番外席次がいるからに他ならなかった。

彼女と自分が共闘すれば倒せるだろうと、だから先ずはここから生きて帰るのだと、先程まではある意味で心に抛り所があったのだ。

だがこの状況は、こんなことは想像の埒外である。

間違いなく此所にいる戦力だけで法国は滅ぶ。そう確信しながら

男は生まれて初めて、いや番外席次に味合わされた過去を含めると人生2回目の絶望を感じていた。

「ふむ、アインズ様の御前でその態度は非常に不敬と言わざるを得ませんね。『ひれ伏したまえ』」

デミウルゴスが支配の呪言を紡ぎレベルが40以下の隊長以外をひれ伏させる。

「っ……」

もはや絶体絶命か、と生を諦めかけている男に声が掛けられる。

「ようこそ、我がナザリック地下大墳墓へ。精々歓迎させてもらおうでしょう」

死の支配者の声が、静まりかえる闘技場に響いた。

この状況で生きて帰るには何をすべきか。

男は体の内から染み出してくる絶望に耐えながら必死に考える。

今殺されていないということは話をする余地が多少なりともあるということだ。

あちらがただ遊んでいるだけだ、という可能性を考えなければだ。が。ならば今すべき事は――

「まずは謝罪を。この大墳墓に立ち入ろうとしたことを心より御詫び申し上げます」

支配の呪言に掛からなかったその身を自身の意思でひれ伏し謝罪をする。

「え?」

「この様な偉大なる御方がおわすとは夢にも思いませんでした。我等が無知をどうか御許し戴きたいのです」

頭を垂れ完全に服従の意思を見せる。今窮地に立っているのは自分達だけでなく法国そのものだ。

受け答え如何によっては逆鱗に触れる可能性があるのだと、絶対に刺激せぬよう慎重に言葉を選ぶ。

「う、ウム。殊勝な心掛けだな人間よ。その謝罪、受け取ってやろう」
男はその言葉に光明を見出だす。

「貴様等の事情は理解しているとも。そしてそれに対する答えも決まっている」

その言葉に、やはりカタストロフ・ドラゴンロードと何かしらの繋がりがあつたのかと身を構える。

「私は陽光聖典について何も言うことはない。勿論貴様らが追っているオーデインとクレマンティーンを引き渡すことも有り得ない。貴様らに残された道は肯定と恭順以外は無いものと知れ」

文句は無いな、とばかりに絶望のオーラが叩き付けられる。

「え?」

「え?」

予想外の答えに男はつい疑問の声を漏らした。

だが次の瞬間、恥をかかせれば殺されると思ひ直し言葉を紡ぐ。

「さ、流星は偉大なる死の王。我等の目的など既に見通されておられたのですね」

ヨイシヨする。命をかけた全力のヨイシヨだ。

「当然だ。矮小なる存在だということとその身にしかと刻み込むのだな。人間にしてはそこそこやるようだが我等の前では所詮、塵芥に過ぎぬ」

よ、よしセーフ。行けるぞ、頑張れ私!ファイトだ私!

「仰る通りで御座います、偉大なる御方。もし叶うのならばその尊名をお聞かせいただけませんか?」

ゴマどころか魂をすりおろしながらへりくだる。かつて俺様人間だった彼からは信じられない成長っぷりだ。

「ほう、ならば知るがよい。このナザリック地下大墳墓の主にして、死の支配者。そして敵対する者に絶望と死を告げる、我が名はアイズ・ウール・ゴウン」

凄まじいプレッシャーを感じながら、死の神スルシャーナでは無かったのかと男は複雑な心境になる。

「ご尊名、しかと心に刻み込みました。私の名は…」

手順が逆になってしまったが名乗り返そうとする男にアインズは片手を上げる。

「よい、私が覚えるのは価値ある者の名だけだ。名乗りたければそれ相応の輝きを見せるのだな、人間」

「はっ。大変失礼致しました」

いける、そうだ。帰ったら休みを取って故郷のピッツアでも食べに帰ろう。随分と休暇を取っていない。なに少しくらいなら上も認めるぞ。

「さて、では答えを聞こうか。貴様等がこれから起こすべき行動はなんだ？ 心して答えよ」

この質問、これさえ間違わなければきつと大丈夫。そうだ、帰れるのだ。帰ったら自分でも認めていなかった番外席次の少女への淡い思いにも素直になろう。プロポーズするのもいいかもしれない。彼女は強い男にしか興味がないが、いいさ当たって砕けるだ。この死地を潜り抜けた私に恐れるものなどない。そうだ、私は、帰ったら結婚するんだ。

「我等は…」

「お疲れ様ー」

部屋に集まった者達に一連の計画の発案者として乾杯の音頭をとるオデンキング。

「いやー、アインズさんの支配者っぷり凄かったですよホント」

場にいる者達がまさにその通りだとアインズを称賛する。

「流石はアインズ様。何もせずともその御威光だけで屈服させた手

腕、お見事で御座いました」

「凄かったです！」

「か、かつこよかった〜」

「くふうっ…。あ、また替えなきや…。もう」

今、彼等は計画の終了を祝いささやかな宴を開いていた。まだまだやる事はあるので本当に小さなものだ。

「何、大したことではないとも」

照れた様子で謙遜するアインズ。

「いやいや、計画の大筋は決まっていたけどセリフはアインズさん次第でしたからね。もうカリスマが溢れ返ってましたよ。あれなら闘技場じゃなくて玉座の間で迎えたほうが良かったですねー」

結果論ですが、とアインズを褒める。

「いえいえ、そんな…」

いやいや、そんなそんなと言い合うアインズとオデンキングを嬉しそうに見る守護者達とセバスとプレアデス。

和やかに時間は流れていくのだった。

宴が終わりデミウルゴスとコキュートスは二人で飲みなおしていた。

話題は当然だがアインズについてだ。

「今日ハアインズ様ノ偉大サヲ再認識サセラレタナ、デミウルゴス」

「ええ…そうですね」

少し考え込むデミウルゴス。

「ム、何カ腑ニ落ちナイイコトデモアルノカ？」

不思議そうに問い掛けるコキュートス。いつも不適な笑みを絶やさないこの同僚が考え込むのは随分と珍しいのだ。

「おそらく…いや、間違いないですね。コキュートス、アインズ様はおそらく最初からこの結果を予想されていました」

合点がいったと結論を出したデミウルゴス。

「コノ結果トハ、戦闘モナク恭順ヲ示シタコトニツイテカ？」

意外そうに尋ねるコキュートス。

「ええ、アインズ様はご自分の威光と相手の弱さを見切り、最初から戦闘など起きないと知っておられたのです」

「ダガソレナラバ何故計画ヲ立テワザワザ用意周到ニアレホドノ準備ヲシタノダ？」

当然の疑問だろう。

「おそらく3つ：アインズ様のこと、もしかするとまだまだ理由はあったのかもしれませんが今、目に見える結果はそれだけです」

底知れぬ自分の主に嬉しそうな様子で語り始める。

「まずは1つ目、ワールドアイテムの確認ですね。結果的に使用したのはナザリック前での山河社稷図のみでしたが、世界が変わった以上その性能が変化していないか確認したかったのでしょうか」

デミウルゴスは話を続ける。

「2つ目。これはオーデイン様と我々で共同作業をすることでまだしこりのある者達との連帯感を高めるため」

最後に、とグラスを傾けながら言い切る。

「3つ目。オーデイン様に明確にこちら側に立っていただき、ナザリックへの帰属意識を持たせたかったのではないかと思います」

「ム…ドウイウコトダ？」

「アインズ様は新しき友としてオーデイン様を認めておられるが、やはり人間と異形種に壁があるのも事実。ギルドに入っていたかどうかという形を取らないのもその壁があるからです」

アインズ・ウール・ゴウンに所属するには異形種でなければならぬ。それは守護者達も知っていた。

「だからこそ、目に見える繋がりがなければこそアインズ様はせめてオーデイン様にナザリックに対して、ここは貴方が帰るところであると思っほしかったのではないのでしょうか」

デミウルゴスにはもうオデンキングに対しての負の感情は殆ど薄れていた。

「成ル程…」

主の心情に思いをはせ少しの間、沈黙が流れる。

「そしてオーデイン様もその感情に気付いたからこそ、計画を発案しアインズ様の想いにお答えになられたのです」

「裏デソノヨウナコトガアツタトハナ、御二方ノ考エノ深サニハ驚カサレルバカリダ」

「ええ、オーデイン様は謙遜なされていましたが、きっとアインズ様にもひけを取らぬ智謀をお持ちなのでしょう」

御二人の絆に乾杯、とコキユートスとデミウルゴスはグラスを合わせた。

当然のことながら、全て勘違いである。

カリスマ（偽）

時間は少し戻り、アインズによるお願いとデミウルゴスによる交渉が終った少し後。

どちらも脅迫であるというのは気にしてはいけない。

漆黒聖典と風花聖典が精神を磨り減らしナザリックを後にしようと出口まで向かっている。

「んじや、仕上げといこう。クレマンティーン」

「はい」

その集団を待ち伏せているオデンキングとクレマンティーンの姿があった。

「隊長…。なんて説明するんですか？」

その声を漏らしたのは漆黒聖典の第11席次。

「カタストロフ・ドラゴンロードも発見出来ず、挙げ句の果てにそのために持ち出すことを許された傾城傾国まで奪われたなんてどう説明すれば…」

出口に近付きやっこの悪夢の墳墓から帰れると気を緩めた男は今度は帰ってからの事を考えて憂鬱になる。

「ありのままを説明するしかないだろう。あれは下手をしなくとも世界を滅ぼせる戦力だ」

逆に問い掛けられた隊長の方はなんてこと無さそうに言う。色々と吹っ切れたようだ。

「そ、そりやそうですけど…」

「帰って私達がすることは謝罪でも責任を取ることでもない。このナザリック地下大墳墓がどれだけ脅威の存在かということ余すことなく伝えることだ。もし本国が情報を軽視した場合、犠牲となるのは町や都市といったものではなく国や周辺国家だ」

男は断言する。強いからこそ解ることがあるのだ。

自分一人だつて都市を落とすことくらい時間を掛ければ出来るのだ。ならばあの化物達ならば言うまでもないだろう。

「しかし、問題は……む、」

隊長の歩みが止まる。

「隊長？」

何事かと隊員達が訝しがる。

「何か違和感が……避けろっ！」

突然叫び声を上げ部下に指示をする。そしてその声を受けた第8席次と第9席次もさるものである。急な指示にも焦ることなく、いきなり真横に現れた気配に構えを取る。

誤算があつたとすれば相手の強さだろう。視認すら難しい疾さでそれぞれ右肩と左の太股に、行動に支障が出るほどの傷を負わされた。自分達に傷をつけ、通り過ぎ去った疾風の正体を見た彼等は驚愕した。

「おひさー。元気にしてたあー？」

口の端を歪めた元同僚の姿がそこにはあつた。

「クレマンティーヌっ…!？」

第9席次が思わずと言つた風に名前を呼ぶ。

「あれー？ 何驚いてるんだか。私が此処に居るつてのは把握出来てたんじゃないのー？」

ニヤニヤと挑発気味に応えるクレマンティーヌ。非常に楽しそうだ。もともと弱者をいたぶるのが好きな彼女はこの久々の蹂躪を満喫していた、しかも隊長は別にして他の隊員達は今まで同格だった者達なのだ。優越感と嗜虐心で心がいっぱいになっていく。

いくら人生観が変わつたと言つても、幼少期から築かれた人格はそうそう変わらないということだろう。クレマンティーヌ自身は随分と温厚になったものだと言自画自賛しているが。

「貴様……よくもおめおめと我等の前に顔を出せたものだな……！」

隊員達は悔しげにクレマンティーヌを睨み付ける。そう、睨み付けることしかできなかつたのだ。何故ならば今の一台で実力差が理解

出来てしまったから。

「久しいな、クレマンティーヌ。この短期間で何があった？ こいつらとこれほどの実力差は無かったと思うんだが」

だから気にしていないのは隊長だけだった。強くなって尚自分には届いていないと理解していたからだ。もともと隊を抜け出したこと自体も気にしていなかった。

追っているのも風花聖典であり、自分には関係ないと。だから気になつたのは飛躍的に上がった実力の方だけだ。

「内・緒。まあテメエには届いてねえのは自覚してんよ。そのうち首洗って待つてな」

一転、笑いが消え瞳孔が開き、口調まで変わったクレマンティーヌが威嚇するように隊長に言葉を掛ける。

自分を前にして余裕の顔を見せる男に、いつか殺してやると息巻いている。そんなクレマンティーヌに場の雰囲気こそぐわなない呑気な声が掛けられる。

「あんま調子のると殺されるよ、クレマンティーヌ。今はまだ我慢、我慢」

《パーフェクト・アンノウアブル／完全不可知化》を解いたオデンキングがクレマンティーヌの傍によっていく。

隊長は11席次に目をやる。自分の感知能力でも気配が解らなかったこの男の実力を知るためだ。

その意味を理解し、11席次は震えながら隊長に頷きをもって伝える。こいつも格上だと。

「貴方もナザリック地下大墳墓の御方でしょうか？」

それを見た隊長はやつと拾った命を捨ててなるものかと慙懃な態度で尋ねる。

「ああ、クレマンティーヌと共にナザリックに居るもんだ」

所属する、とは言わないのはなるべく勘違いさせするためだ。別に嘘を言っている訳ではない、へ消防署の方から来たものです。ばりの暴論ではあるが。

「はい、どうぞぞ」

隊長の方に向かってあるものを投げつける。それを見た風花聖典の隊員が声をあげた。

「そ、それは、叡者の額冠!？」

そう、オデンキングはある意図があって持っけていても意味の無いこのアイテムを返却した。

「手ぶらで帰らせるのも可哀想だし、お土産にね。じゃあ俺達はこれで」

手をひらひらさせながら、やりたりないと不満そうにしているクレマンティヌを宥めて去っていく。

残された者達はいったい何だったのかと疑問に思いながらも、叡者の額冠が返ってきたことに喜びを顕にする。

「これで、多少の面目は立ちますね」

「ああ…そうだな」

齒切れの悪い隊長に11席次は問い掛ける。

「どういう意図があるか解りますか？」

まさか、態々こちらのために叡者の額冠を返してくれた訳ではないだろうと誰もが思っていることを口に出す。

「おそらく…不安の払拭と、法国に対する飴の意味もあるのだろうか」

「飴？ 叡者の額冠がですか？」

「違う。まず出てきた理由の方だが、これは此処の勢力が人間をきちんと受け入れているのを見せて法国が恐怖で暴発しないようにすること」

まず間違いないだろうと推論を続ける。

「飴の方は、クレマンティヌの実力だ。この短期間であれだけ実力を上げた理由にこの場所が関わっていないというのは考えづらい。ならばそれを此方に見せ、戦力を飛躍的に増強させる手段がありますよと見せ付けたのだろうさ」

オデンキングが伝えたいことを完璧に看破した隊長。

「何にしても有難いことだ、本国への説明の材料が増えた。まあそれを見越しての事だろうがな。そしてついでに知略の方も侮るなよ、ということだろう」

力だけではなく、深い知性も併せ持った存在にますます畏怖を覚えた聖典の者達であった。

宴が終わった明るる日のこと。ナザリックでは今、転移してきて一番重要な会議が開かれていた。

「全員揃ったようだな」

オデンキングの声が部屋に響く。

「では、これより会議を始める」

昨夜にアルベドの下着に異常ありと報告を受けたオデンキングは一夜明けた今ナザリックの、冗談が通じそうな面子を集め会議を行っていた。

「尚、今回の会議にはソリュシャンちゃんとルプーちゃんに出席いただいている。理由は会議の内容で解るだろうから省略させてもらう」

オデンキングは全員を見渡し、異論は無いようだと判断する。

「ではまず1つ目だ。昨夜から今日の昼にかけてアルベド、そしてその下着周辺を探るエイトエッジ・アサシンの集団から報告が入った」
オデンキングの言葉に全員が真剣に耳を傾ける。

「2つ目、これは皆が既に知っていたの通り今日アインズさんとアルベドがデートに出掛ける件だ」

2つ目の事実が判明した時はシャルティアが最大の警戒態勢に

入ったがオデンキングの懇願により今は監視するだけにとどまっている。

「後者については申し訳ないが、俺の作戦のせいで間違いないと思う」
オデンキングがアルベド大作戦 Part 3 であつたことを説明する。

そう、今は色々やることが多いのにこんなアホな会議をしているのはアルベドが今日アインズとデートをするからだ。

そもそも人目につくアルベドが態々自分でこつそり洗濯をしていたのだ。つまり乾く暇も無いほど常に興奮していたということだ。

ばれない訳がない。

それでも今の今までシャルティアの襲撃が無かつたのは、オデンキングが懐に詰めていたアインズの写真をばらまいたことで意識を逸らしたことで、それまではその平たい草原に影も形も無かつた筈の巨大な胸についてオデンキングがPADは駄目だと説得していたためだ。

「どちらにせよ寝耳に水だつたシャルティアが錯乱した時エイトエツジ・アサシンが早々に取り押さえたことは英断だつたが、君達もシャルティアを責めることはしないほしい」

こんな程度のことですら友の最高傑作を失うのは御免被るオデンキング。

「重々承知してつす、オーデイン様。シャルティア様はナザリツクが誇る階層守護者。こんな事で失望する者はこの場には存在しないつすよ」

オデンキングの言葉に即座に返答するルプスレギナ。

その言葉には90%の笑いと嗤いが入っている。実は腹黒ルプスレギナ。

「アインズ様ノ世継ギノタメトアラバアルベドヲ守ルノハ当然。御命令ライタダケレバスグニデモシャルティアヲ取り押サエテ御覧ニイレマス」

全くシャルティアを信用していないコキユートス。

「うむ、君達がアインズさんの子供を欲しているのは私としても嬉しい限りだ（どうやって作るんだろ?）」

アインズをアルベドとくつつけるにあたって懸念していたことは、もはや気にしないことにしたオデンキング。

「話を戻すが、アルベドの下着の数はエイトエッジ・アサシンの話を聞く限り、総数117枚で間違いないようだ」

随分な数を持っていたアルベドである。

「そしてそのアルベドだが、以前エイトエッジ・アサシンの確認した時は——精々1日10回程度の下着交換だったということが判明しているのだがな、おそらく今は30分に一回は替えていると思われる」

「アインズさんとのデートの時は更に消費が増えるだろうから、その時どう行動するのかわからない」

昨夜、報告の内容を吟味し話すことを纏めていたオデンキングはすらすらと話を進める。

「アルベドを付け狙う、シャルティアについては問題だらけだ。有象無象の弱者では速攻返り討ち。レベル80以上のモンスターを数体出しても数分の足止めで終わるだろう」

だが、とオデンキングは続ける。

「アウラちゃん、こちらの方は定かではないが妨害してくる可能性は低いだろう、安心してくれ」

マーレの目に安堵の光が宿る。

「…だが、だ皆のものよ。心して聞け。シャルティアよりも警戒すべきことがあるのだ」

いったいそれは、という目がオデンキングに向けられる。

「未確定の情報ではあるが、この中にアインズさんが思慕の情を持つ者が居るかもしれん」

全員に衝撃が走った。

「そ、それは信憑性のある情報なのでしょうか?」

デミウルゴスがオデンキングに問い掛ける。

「1%…と言ったところか。ペロロンチーノさんの知識にある、紳士達が誇る秘中の秘と呼ばれる性癖の存在。そしてここに居る一人が、日常的に着ていた女物の服のような装備」

オデンキングにはその性癖に心当たりがあった。

「もしそれがアインズさんの性癖であったならばおそろくへ男の娘萌え」と云われる物であると思われる。精神錯乱系統の性癖だ」
ざわり、と場が揺れる。

それはそうだろう。例えどれだけ可愛くても男では世継ぎが生まれない。ましてや精神錯乱ともなればアンデッドの状態異常無効を打ち破っている可能性があるのだ。

男では孕むことなど出来ない。へユグドラシルどころか世界の常識だ。

「それで、だ。その情報を踏まえた君達の意見を聞いてみたい。各自、忌憚の無い意見を交わしてほしい。ソリュシャンちゃんやルプーちゃんにも発言してもらいたいな」

そうオデンキングが言ったものの自然と場の視線はマールレに向けられる。このナザリックで男の娘は彼だけなのだ。

「えっ、えっと、あの…」

その視線の意味をしかと理解したマールレは顔を真っ赤にして意見を述べる。

「あ、あの、アインズ様がそういう性癖だって本当なのかな…ボク、あの…」

マールレの様子は致命的に可愛かった。

「ほう。理由を聞かせてくれるか、マールレちゃん」

しきりにオデンキングが自分の股間の様子を窺う。まだ大丈夫のようだ。目覚めていない。

「だ、だってそうだとしたら…アインズ様は、へ、変態だってことに…」
至高の御方が変態だった。考えただけで不敬であるその可能性に部屋に居る全員が背中に寒気を覚える。

「そ、それにアインズ様がボクなんかを…」

俯くマールレ。

「フム、成る程な。だがマーレちゃん、あまり自分を卑下するものじゃない。マーレちゃんはぶくぶく茶釜さんが作った最高のNPCの人だと俺は思う。充分魅力的だよ」

「どうやらオデンキングも錯乱してきたようだ。」

「え、あの…あ、ありがとうございます」

頬を染めながらお礼をいうマーレ

ハツと我にかえるオデンキング。自分はノーマルなのだと言いつかせる。同性愛者になる可能性など一ミリたりとも残したくはない。

「解決案が見つからんな…。ウウム、どうしたものか」

全員が意見を出せずうろんな目をしている。何か言いたそうだ。

「…ソリュシヤンちゃんはどう思う?」

「ここまで殆んど沈黙を保ってきたソリュシヤンに問い掛ける。」

「私程度の者が意見など…」

悩む素振りを見せるソリュシヤン。

「いや、今はどんな意見でも聞きたいんだ。もし考えがあるなら言ってみてくれないか?」

考えが纏まらないオデンキングはさすがの気持ちでソリュシヤンに視線を向ける。

「とりあえず今は1%の可能性を議論するより、デートとシャルティア様の件について議論すべきではないでしょうか」

誰もが思っていた事をはっきり言う。

「ですよ。はい、その通りです」

とりあえず冗談はここまでだと仕切り直す。

「さて、シャルティアの件については実は心配いららないんだ」

どういう事かと皆はオデンキングに物問いたげな視線を送る。

対してデミウルゴスはその一言で全て理解したようだ。ナザリック最高の頭脳はこんな無駄な議論でも発揮されるのだ。

「ぶっちゃけアインズさんになんか命令しといてもらえればいい。ナザリックの外で行う任務とか」

思い人からデートの邪魔だからと任務に出される。

シャルティアにとどめをさすような外道な意見に全員が確かにそ

うだと肯定の意を示す。

「あとは、デートの件か。これについてはやはりこっさり着いていつて適宜フオローしていく形にするしかないんじゃないかな」

少し言葉を切つて唇を湿らすオデンキング。

「下着はその中身はともかく、表面上は特に異常は見とれないような服装を心掛ける。クレマンティーヌに聞く限り、中身がヤバイことになっていてもある程度まではセイキの守護者足り得ているようだし」

クレマンティーヌがオデンキングの視線を受け、うんと頷きを返す。

「となれば後は考えうる限りの非常事態に備え準備することにしよう」

デミウルゴスもさっさと終わらせてほしいといった風に納得の表情を見せる。他の守護者とプレアデス、セバスも同様だ。

「考えなし、と捉えられるかも知れないが俺はもはや同志であるアルベドと友であるアインズさんに幸せになつてほしいんだ。彼等が帰ってきたときに仲睦まじくナザリツクで過ごせるように」

その言葉にクレマンティーヌを除く全員が感動で声が詰まった。

この御方は、ふざけているように見えて、どこまでも、どこまでも我等の事を考えて下さっている。

我等が間違っていたのだ。ただ面白がつて引つ掻き回しているだけだと思つていたなんてなんと愚かだったのだろう。やはりこの御方はアインズ様の友に相応しい。

感動している彼等にクレマンティーヌはドン引いていた。

「さて、じゃあとりあえずアインズさんのところに行つてシャルティアの件について話すか」

あー楽しかったと、感動している皆をおいて部屋のドアを開けるオデンキング。

「……」

「……」

そこには好みにドがつくストライクな美少女が立っていた。

「……キイテタ？」

蚊が鳴くような細かい声でオデンキングが問い掛ける。良く見れば足も震えている。

シャルティアが頷く。

「少し、お部屋でお話したいしんしょう。 オーデイン様」

ナザリックに来て初の、女の子のお部屋に誘われる機会は一番好みの美少女によるものだった。

アレコレ

「では、そういうことでよろしいでありますか？ オーデイン様」

私室にて花の咲いた様な笑顔でオデンキングに確認するシャルティア。

「お、おう。任せてくれ。第2夫人の座は間違いなくシャルティアを推しておくよ」

シャルティアに計画を聴かれ、色々と絞られたオデンキングは彼女の私室で一つあることを約束させられた。

「はあ…。アインズ様。あんな大口を愛してしまわれるとはなんてお可哀想でありますでしょうか。きつと何か卑怯な手を使ったに違いありません」

よよよ、と泣き崩れるシャルティア。彼女はオデンキングの必死の説得によってついに第1夫人の座を諦めたのだ。そのかわり第2夫人については全面的に協力することを約束させた。

「まあまあ、シャルティアだってアルベドに負けないくらい魅力的だって。こういう事は巡り合わせもあるもんだ、愛する人が1人なんて決め事はないんだからチャンスは幾らでもあるさ」

慰めつつシャルティアの機嫌を良くしていくオデンキング。最近少し調子に乗りすぎたと、先程の折檻を思いだしもっと自重しようと決心する。

「オーデイン様…。ああ、オーデイン様が死体でありんしたら…」

シャルティアが恐ろしいことを妄想する。いくら愛されようが流石にそれは嫌だ。

「そうでありんす！ 血を吸わせておくんなまし、オーデイン様！ 同族になるんなら問題ありません！」

良いことを思い付いたとばかりに提案するシャルティア。

「アホか！ 下級吸血鬼になるだけだろーが！」

ああ、ペロロンチーノよ。何故彼女をこんなアンポンタン吸血鬼にしたのだ、とオデンキングがかつての友に脳内で文句を言う。

「まったく。そういやそろそろ二人が出発する時間じゃないか、ちや

んと監視…じやなかった見守らないと」

先程の自重する決心は何処にいったのだろうか。

「妾も付いていくでありんす」

アルベドを認めたとはいえ、それはそれ。当然のように着いていくことを決めたシャルティア。

「…ちゃんと抑えてくれよ？」

暴走してもオデンキング一人では止められないのだ。

「心配ありません。フフ…フフフ…」

全く安心出来ないオデンキングであった。

「あ、ユリさん。ソリュシャンちゃん何処にいったか解る？」

廊下を歩いていたユリ・アルファに声をかける。

追跡や監視をするにはソリュシャンの能力がうってつけなため協力を依頼しようとしているのだ。

「オーディン様。ソリュシャンとセバス様は王都にて任務でございませぬ」

「ありや、そっかー」

なんとも間の悪いことだと残念がるオデンキング。

「アインズ様もアルベドも感知能力は大したことありません。私達だけで大丈夫でありんすよ」

「お前が言うか…」

シャルティアの感知、索敵能力はナザリック最低クラスだ。

「それより早くしないと二人が行ってしまいんす」

「それもそうだな。ユリさん、アインズさん達は今何処に？」

出発予定時刻まで後10分ほどだ。そろそろ不味いとオデンキング達はユリに二人の所在を確かめた。

「アインズ様とアルベド様は既に出発されました。30分ほど前でございます」

ユリは二人に無情な事実をつきつけた。

「え？」

馬鹿な、早すぎる、とオデンキングはその理由を考える。

「ま、まさか…」

そして真実に辿りついた。

「アルベド様から厳命をいただいております。オーデイン様とシャルティア様には行き先は伝えるなど」

そう、全てはアルベドの掌の上で遊ばされていただけだったのだ。会議の存在をシャルティアにそれとなくリークしたのも、時間を勘違いさせることも。

「やられた…」

「あ、あんのクソビッチイーター！」

そこにいたのは哀れな敗残者の二人だけだった。

アルベドは今、人生で一番の幸せの絶頂にいた。

なんといつでもアインズと二人きりのデートだ。

外見の都合上人目につくところではデートにならないため人気のない森の中——トブの大森林の少し開けた部分でアインズと逢い引きしていた。

地元の人も足を踏み入れないこの森に、何故かファンシーでメルヘンチックな二人で座るのに丁度いい切り株。

職人が計算して出来たような木々の隙間から溢れる幻想的な木漏れ日。恋人の逢瀬に理想的なこの場所は当然アルベドプロデュースの造られた空間だ。

そう、アルベドはあわよくばここで一発決めるつもりだった。

「静かでございますね、アインズ様…」

「ウム、そうだなアルベドよ」

男女が寄り添っている。柔らかな日差しが優しく辺りを差し、鳥の

鳴き声だけが遠くから聴こえてくるような暖かい光景。まさに恋人の逢瀬だ。

それが骸骨と悪魔でなければだが。

そしてついに女の方が我慢出来ないといった様子で――

――ここから先は有料アダルトコンテンツです――

ナザリックでオデンキングとクレマンティーヌに割り当てられている客室。今二人はベッドの上で今後のことについて話し合っていた。

「流石にそろそろ帝国に行きたいなー。えらい先伸ばしになっちゃったし」

当初の予定では帝国で稼ぎまくっている筈だったが随分とナザリックで世話になってしまった。此処の住人達とも仲良くなれて楽しいことがいっぱいあったのは確かだが――

「まあ今のデインちゃんと私ってただのヒモだしねー」

「だよなー」

そうなのだ。客人と言えども聞こえはいいがぶつちやけ特に何もしていないこの状況は一般的にはヒモと呼ばれる状態だろう。規模は桁違いだが。

「それにナザリックにや人間社会に紛れ込んで情報収集出来る子は少ないからな。セバス達が王都に行つてんなら俺達が帝国で情報収集と金稼ぎするのもありだろ」

スレイン法国との件もありオデンキングは既にナザリックが自分の本拠地に近い意識でいたし、ナザリックの者達もそれを受け入れて

いた。

「いいんじゃない？ 私は Deinちゃんに付いていくだけだし」
クレマンティーンは色々と目的は変わったが結局オデンキングと共に生きていくと決めていた。生存本能が刺激された結果なのかどうかは不明である。

「んじやーアインズさんが帰ってきたら伝えるか。アルベドもここま
でいったら充分だろうし」

「はーい。んっ…」

夜は更けていく。アインズとアルベドはまだ帰らない。

深夜、アインズの私室にて。

「えらく帰り遅かったですねー。デート上手くいききました？」

「ええ、まあ…」

心なしかゲツソリとしているアインズ。

「俺達、明日此処を出て帝国を探りがてらある程度の地位までは昇ろ
うと思ってます。法国だって一枚岩じゃないだろうし周辺諸国の情
報と金がいる場合もあるでしょうし」

定期的には帰ってきます、と続ける。

「ええ、解りました。ただ高レベルの存在もそこそこ確認してますし、
危なくなったらすぐ帰ってきて下さいね」

アインズも友と別れるのではなく仲間が情報収集に行く、といった
意識なので特に引き留めはしない。

「ん？ 今日何か見つけたんですか？」

少し言葉に違和感があったアインズに気が付き問い掛ける。

「ええ、トブの大森林の奥でレイドボスみたいな樹と戦いました。結
構強かったんでレベル80前後はあったんじゃないかと」

デートを邪魔されたアルベドが防御主体のジヨブ構成にも関わら
ず叩きのめしました、とアインズが苦笑いする。

「うーん、何だかんだで結構高レベルの存在が居るもんだ。やっぱり庶

民の情報だけじゃあまり当てになりませんね」

「ですから、くれぐれもお気をつけて」

「はい。アインズさんも頑張って下さいね、アルベドのこととかハハ、と渴いた笑いで返すアインズ。

「あと、一つだけ言っておきたいことがあります」

急に真剣味を帯びたオデンキングにアインズも姿勢を正す。

「あの時は慌ただしかったので突っ込まなかったんですが…」

「あの時、ですか？」

首を捻るアインズ。慌ただしかったといえればあのスレイン王国の部隊が来たときだろうかと思いが当たった。

「宝物殿の領域守護者って」

「あーあーあー！ 聞こえませんか！ 聞こえませんかとも！」

小学生の様に、無い耳を塞ごうとするアインズ。あれは黒歴史なのだ、触れられるだけで聖属性ダメージ全開だ。

「Wenn es meines Gottes Wille!!」

「ヤメロオ！ というか何でそんな流暢に喋れるんですか!？」

結局明け方まで語り合っていた二人であった。

おまけ

「そ、それでどうなったでありますか！」

「それはもう、アインズ様のウールがゴウンゴウンして…くふー！」

「くう…。妾もゴウンゴウンしたいであります…」

淑女の会話も明け方まで続いたそう。

そうして彼は墜ちていった

——王都リ・エステイーゼ——

雨がしとしと降っている。

誰も見向きもしない薄汚れた路地に、虚無感と絶望に彩られた瞳をした男が座り込んでいる。

そこに通りがかかる一人の王国戦士長。その眼が驚きで見開かれる。

「お前は——」

「犯罪者が減っている?」

王国の宮殿、とある一室で女性二人が会話していた。

「ええ、貴族達は疑問に思っても特に気にしてはいないようだけど、明らかにここ数週間で犯罪の数が激減しているわ」

問いに答えた女性は名を「ラナー・テイエル・シャルドレン・ライル・ヴァイセルフ」という。

リ・エステイーゼ王国の王女であり、黄金とも称される美貌と智謀を併せ持つ女性だ。問い掛けた方の女性は「ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ」。

王国の冒険者の中でも最高の実力をもつアダマタイトクラスのチーム「蒼の薔薇」のリーダーを勤める女性である。

彼女らはここ最近で犯罪者が急に姿を消す現象について議論していた。

「それは別にいいことなんじゃないの?」

当然の疑問だろう。犯罪が減り、治安が良くなる。ラナーが愛しているクライムも喜びそうな状況だ。

「ええ、でも少し気になることがあるの。お願い出来ないかしら」
ラキユースは考える。目の前の親友は常人とは一線を隔す智謀を持った存在だ。彼女が言う方からは何か理由があるのだろう、パツと考えつくところでは諸国の陰謀かもしれない。犯罪者達が組織だって徒党を組みはじめているとかだろうか。

「了解。今のところ依頼も特にないしね。軽く調べてみるわ」

能力的にも人格的にも彼女を信頼しているラキユースは了承する。

「ええ、ありがとう」

話は終わりラキユースは部屋を後にする。

それを見送った王女は呟く。

「少しまずいわね…」

王国戦士長の報告、犯罪者の減少、最近のスレイン王国の不可解な動き。ラナーから見れば帝国の策謀により既に秒読み段階の王国の崩壊。

さらに異常ともいえる自身の頭脳だけが導きだせる、崩壊に拍車をかけるような情報。

「クライム…」

だが彼女が気にしているのは王国でも民でもなく、彼女が愛する一人の男のことだけだ。

自分と彼が無事なら何も問題は無い。自分を親友と慕うラキユースのこともどうでもいいと、ただ自分とクライムが生き残るためだけの策を脳内で巡らしていくのであった。

そろそろ息抜きが必要だ――

政務に追われ疲労した心身を心配し、そう頭の中で一人ごちるこの男は「ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクス」

バハルス帝国が誇る皇帝であり、鮮血帝とも呼ばれる残酷な部分も持った暴君であり名君である。

この皇帝はお茶目な部分も多々あり、部下を困らせることもよくある。

今回息抜きで考えているのは御忍びでの闘技場の見学だ。楽しみとしても好きな闘技場だが、有望な人間を発掘出来る意味合いもあるため趣味と実益を兼ねた息抜きとして皇帝は気に入っていた。

ここのところ少々不可解な報告がよく上がってきていたため中々休みが取れていなかったこともあり、ようやく空いた時間で闘技場に行くことを決めていたのだ。

休みも仕事の一部だ。疲労しきった頭で良策など思い付くはずもない。正論だが言い訳にも聞こえる言葉を自分に言い聞かせ準備を始める。

「さて、今回は有望株が見つければいいが」

ナザリックを出て数週間。数日を掛けて辿り着いた帝都アーウィンタールでオデンキングとクレマンティーンは観光を満喫していた。「クレマンティーン、このエイノック羊の焼き串ヤバうま。ちよつと食べてみ」

そういつて手に持っていた串をクレマンティーンの口元に持っていく。

「うーん。まあまあかなー。ちよつと臭みが苦手」

少し癖のある味わいのため口に会わなかったようだ。

「マジか。ちよつとこれ俺の口にベストマッチだわ。もう一本買って

くる」

そういつて広場にある、先程串焼きを購入した露店に足を運ぶ。

「あ、じゃあついでにこの果物も買ってきてー」

「はいはい。ちよつと待っててな」

異国情緒が溢れるこの都市にオデンキングは本来の目的を忘れて思いつきり楽しんでいた。まさに駄目男である。

「ほれ、買ってきたぞ」

「ん、ありがと」

二人で広場の木の下に座りながら食事をする。

「にしてもずつと遊んでるけど情報収拾っていつ始めるの？」

クレマンティーヌがふと疑問に思い問い掛ける。

「え？ あ、そう、だな。市場の調査と食物の流通も確認出来たし、そろそろ本格的に調査するか」

体の良いことを言っているがつまりは食べ歩きをしていただけである。

「しかしどうするかね、なんの伝も無いしなー。クレマンティーヌは特殊部隊にいたんだろ？ 何か良いやり方知らないか？」

少し期待を込めて聞いてみるオデンキング。

「私は殺し専門だからねー。わかんない」

「納得」

やだ、この娘マジ脳筋。しかもイケイケの肉食系女子も真つ青な、キレキレの殺害系女子である。

「うーん。じゃあ取り敢えず闘技場で金を稼ぐか」

闘技場で実力を示し出世した者はそれなりにいると聞いていたため足掛かりにしようかと提案する。

「お金も少なくなってきたしねー。取り敢えず全財産ティンちゃんに賭け続けねばすぐ貯まるかな」

八百長ではないがもはや賭けではない。

「うし、じゃあ行きますかー！」

食べ終わり、お腹も膨れたため元気に歩きだし広場を後にする二人であった。

「では、これで選手登録が完了致しました。これからのご健闘を期待しております」

闘技場に向かい登録を終えた二人。もちろんチーム名は「ビリオネア」である。

登録時には詳細な説明があり、チームではなく一対一で闘う場合の説明やイカサマ防止のためのギアスの署名——わざと負けた場合は署名したギアススクロールが燃える簡易なもの——をしたりと少し時間が掛かったが問題なく登録することが出来た。

「1時間半後の試合に一対一の対戦枠がございしますが如何いたしますか？」

「あ、じゃあお願い出来ますか」

早速の対戦にワクワクしてきたオデンキング。

勿論バトルジャンキーであるとかまだ見ぬ強者に期待しているとかいうわけではない。

お約束である展開の「馬鹿な…第5位階だと…」とか「ツ…強すぎる…！」とか「計画を修正する。奴の情報を集めるのだ」とかに期待しているだけだ。

「私はー？」

クレマンティーヌが不満そうに訴えてくる。

「まあまあ。取り敢えず1戦目は譲ってくれよ。後で埋め合わせはするからさ」

これだけは譲れない、異世界に來た最強魔法使いといえはやはりこれが醍醐味なのだ。

たとえやり尽くされたお約束だとしてもこれだけは外せない。お約束だって良いものと悪いものがある。

140年以上前から続く「この印籠が目に入らぬか」系のお約束だって、たまにはそれ無しでやってみるかと放送した結果クレームの

嵐になったのだ。

これはやらなければならぬお約束だ。

ニヤニヤと妄想しているオデンキングを見てちよつと引いているクレマンティーヌと受付であった。

「どうしたものでしょうか…」

そう嘆息をつくこの男はナザリツクが誇る頭脳、第7階層守護者デミウルゴス。

「現状は問題ないにしても、量産体制が整わないのは問題…」

ぶつぶつと独り言を言っているが、デミウルゴスがいったい何に悩んでいるかというそれはナザリツクのスクロールの備蓄に関してだ。

〈ユグドラシル〉屈指のギルドだけあり、まだまだ量的に問題無いとはいえやはり消費していくだけなのは問題だ。

この世界の羊皮紙では何故か作成に不備が出るため、デミウルゴスは新たな素材を求め実験を繰り返していた。

そしてようやく上手くいったスクロールの素材は、自分が忠誠を捧げる御方が眉を顰めるであろうものであった。

「犯罪者を使うのはやはり安定性に欠ける。何か良い案はないものか…」

取り敢えずは人間種の中でも消えて問題がなく、むしろ救われる者が多いだろうという理由で犯罪者を使っているが供給源が安定しないのは問題だろう。

「それに取りこぼしが出た以上、これまでの様に犯罪者を刈るのもまずい」

スクロールの件、法国の件、主の意向によりもう少し穏便に世界征服を目指す件とかなり多忙なデミウルゴス。

何故彼がここまで仕事を抱えているかというと――

「アルベドにも困ったものです」

率直に言うのならば色ボケたアルベドのせいである。

もともと内政面の方はアルベドが得意であり、戦略などの軍事方面がデミウルゴスの担当である。

だというのに彼女はあのデートの日からアインズの傍から中々離れることをせず、アインズに苦言を呈された時だけ渋々仕事に戻るのだ。

「やはりオーデイン様にナザリックを離れられたのは痛い。彼女の手綱を握りコントロールしていたことがあれほど重要だったとは……」

これについてはデミウルゴスの勘違いである。もはやアインズと想いを遂げたアルベドには計画など必要なく、それを餌に手綱を握るのも既に不可能だ。

「そういえばセバスが犯罪組織らしきものから人間を助けたのでしたね……」

現在ナザリックは会議でのアインズの発言により人間軽視の感情が多少薄れてきている。だからセバスも憚ることなく、創造主の気質が赴くまま人助けをしたのだろう。

結果的に少々厄介な事になったものの、アインズはそれを笑って許し、デミウルゴスに丸投げした。

それは無いんじゃないでしょうか、我が主よ。

「はっ!!」

なんとも不敬なことを考えそうになったデミウルゴスが頭を振って気を取り直す。

「もういつそのことへ犯罪組織丸ごとスクロール計画をたてましょうか。うん、それがいいでしょう。一石二鳥です」

膨大な仕事量、主と同僚のいちやつき、シャルティアの阿呆行動による獲物の取り逃がし。

彼は少し壊れかけていた。

おまけ

「セバス様…」

ベッドに伏せる女性がセバスに潤んだ瞳で呼び掛ける。

「まだ安静にしていなさい、ツアレ。心配することはありませんよ。我が慈悲深き主は貴女が救われることを認めています」

安心させるため、ギュツと手を握りながら優しく微笑みかけるセバス。

「はい、セバス様…」

女性の視線にはどんどんと熱いものが籠っていく。

「主は懐に入った者には寛大です。私は貴女を護る義務ができた以上、全力を尽くします。だから今は安心してお眠りなさい」

安心したように目を閉じる女性。だが手は握ったままだ。

「はい…」

ずっと手を握りあっている二人。まるで年の離れた仲睦まじい夫婦のようだ。

ソリユシヤンは思った。やってらんねーよと。

おまけ2

「やってらんねーつつーのよ。畜生」

「ソウカ」

「仕方ないでしょうが、血の狂乱は制御きかねーんだつつーの」
「ウム」

「あんの大口、アインズ様が優しすぎて拒否しないからって、いつちや

「いっちや、べったべった」

「ソウカ」

「聴いてんの!? コキユートスウー!」

「ウム」

ウガーツと奇声を上げ嫉妬の炎に包まれ飲んだくれていたシャルティアと何故か付き合わされているコキユートスだった。

予想される未来図

帝都アーウィンタールの闘技場前。

ある一人の男が激昂し自分の奴隷であるエルフに当たり散らしていた。

道を行く人々が眉を顰めるものの、巻き込まれてはかなわないといった風に足早に通り過ぎていく。

これが人間種やドワーフなどの奴隷だったならばきつと衛兵などに話を通すものもいたかもしれない。だが帝国の法律ではエルフに人権はなく、主人がどうしようとも本人の勝手であった——人の眼を気にしなければ、ではあるが。

少なくともこの男の虐待ぶりは異常であり、ともすれば義憤に駆られた者ならば止めに入りかねないものだ。何故この男がここまで荒れているかというと、それは今日の闘技場での戦績のせいである。

自他共に強者と認めるこの男は名を「エルヤー・ウズルス」と言い凄腕のワーカーとしても知られた男である。

ただし、知られている部分の半分程は選民主義——人間種以外を徹底的に見下すという悪評でもあったが。

この男はワーカーの仕事以外にも、度々闘技場に出ては名声を得て自分の実力を観客に見せびらかしていた。

まあ闘技場の戦士は多かれ少なかれそういったところはあるが、この男の虚栄心は人一倍であり勝負に負けた時には手持ちの奴隷をいたぶることで鬱憤を晴らしているのだ。

しかし今日は普段にも増して虐待が苛烈である。

その訳は今日闘技場で負けた相手が自分より劣るはずの亜人だったからであり、闘技場で最強などと言われる亜人の鼻を折ってやろうと挑んだ結果敗けを喫した事実が許せなかったからだ。

「くそがつ！ 亜人如きが私に勝つだど!？」

エルフ達はひたすらに怒りが収まるのを待ち、耐えている。彼女達はエルフの誇りである耳を半ばから切断されており、完全に心を折られていた。

「ふう…ふう。ちっ、何を寝転がっているのです。さっさと行きますよ」

一頻り鬱憤を晴らした後は自分のせいであるにも拘わらず、一瞥もせずにさっさと着いてこいとばかりに歩きだす。

着いていくのが遅れたせいで折檻が増えるのは堪らないと、傷んだ体を押して立ち上がるエルフ達。その瞳は悲しみと絶望以外を映していなかった。

この男は強い――

闘技場にて記念すべき初の相手と闘っているオデンキングは、予想以上に苦戦しているこの状況に素直に驚いていた。

確かに自分は今マジックキャスターとしてではなく《クリエイト・グレーター・アイテム／上位道具創造》の魔法によつて創造した装備で戦士として闘っている。

だがそれでもレベル換算で言うならば30強はあると見ていた。この世界の難度で表すと100前後だろうか。

間違いなく目の前の亜人の男よりパワーもスピードも一回りずつは上回っている。だが当たらない、どれだけ武器を振り回しても紙一重で避けられ反撃されるのだ。

「くっ…おわっ、危なっ！」

今までも一撃を入れられそうになったオデンキング。今は身体能力によるごり押しでなんとかなっているが、遠からず敗北に追い込まれることは目に見えていた。

「くっそっ…」

強引に大剣を振り抜き、仕切り直しとばかりに相手と距離をとる。今オデンキングの心にあるのは、こんな筈じゃなかったという思いだ。

オデンキングの予定では、まず剣で圧倒した後「いつから私が剣

士だと錯覚していた？」などと云ってから4、5位階の魔法を使って会場を驚愕させるつもりだった。

それがこの始末。今オデンキングはレベル以外の見えない部分の強さが存在することを痛感していた。

「うおっ!?!」

またもや相手の戦士の猛攻にさらされる。少しばかり格好がつかないがマジックキャスターに戻らざるを得ない。

なに、ちよつと低い声で「ここからが本番だ…」とでも言えばそれなりに良い感じになるだろうとオデンキングは魔法を解いて装備を換装した。

闘技場の観客達は驚愕に包まれていた。いま行われているのは新人とベテランによる一方的な試合の筈だった。

闘技場の目的は純粹に素晴らしい闘いを見たいというものから帝都の民のガス抜き、賭博行為による収益などがある。

そして月に一度くらいの頻度でこういった新人とベテランによる結果が解りきった試合が組まれることがあるのだ。

見せ物としての面白さに加えて、倍率は極端に低くなるものの結果が鉄板である試合による客への利益還元のためだ。

そう、そんな一方的な試合になる筈だったのだが今闘っている新人は闘技場最強の男と渡り合っている。技術的には少し劣っているものの、亜人のお株を奪う身体能力によって拮抗している。

番狂わせが起きるのかと熱気が会場を包む。特に、超が付くほどの大穴を狙っていたギャンブラー達は大声援を送り声を枯らしている。

「やっちまえ新人!」

「勝ったら1400倍だぜ…! おらあつ! 勝ったら奢ってやるからぶつとばしちまえ!」

声援で会場が震える。しかしそんな声よりも切実な感情を含む罵声も聴こえてくる。

「鉄板の試合じゃねーのかよお！」

「財布の中身全部だぞ……！ 勝ったら殺すぞー！」

暗黙の了解としてこの利益還元鉄板試合がある。

結果が解りきっていて倍率が低くても、賭ける元金が多ければ儲けはそこそこ出る。制限はあるものの上限いっぱいまで賭けているものもいた。むしろそういう事をする者ほど必死だったりするのは世の常だ。

罵声、声援、野次、賞賛、感心。欲望が渦巻く闘技場で誰もが手に汗を握り勝負の結果を見届けようと目を食い入らせている。

そして挑戦者が猛攻を防ぎきり間合いをとった後、黒い靄に包まれたかと思つた瞬間、装備が一瞬で換わつていた。

見るからにその装備は特級品。輝く宝石の杖も、濡れた様な漆黒のローブも、マジックアイテムらしき腕輪も。どうみてもそれはマジックキャストの装備であつた。

会場が静寂に包まれる。

「さあ、ここからが本番だ」

重厚で低い声が静まり返る会場によく響いていた。

トブの大森林の奥深く。周辺諸国にも殆ど知られていない広大な湖。そしてその周辺にいくつかの部族がそれぞれ寄り集まり各々集落を作っている。

その種族の名は〈蜥蜴人〉といい屈強な体格と強靱な外皮を持ち、その名の通り蜥蜴に似た外見は人間から見れば恐ろしく狂暴に見える。反してその食性は雑食であり主に湖の魚を食糧にして生活している。

しかしそんな彼等も最盛期の繁栄と比べると非常に数を減らしていた。それは主食となる魚の減少、そして減つた食糧を奪い合うための部族同士の戦争だ。

結局その戦いのせいで数を少なくした蜥蜴人に食糧が行き渡るようになったというのは皮肉的ではあるが自然の厳しきであり、必然のことだったのだろう。

そんな過ちを繰り返したくないと思う男が一人、この湖の一角に蜥蜴人にとつては革新的な「養殖」という行為を試行錯誤しながらも完成させていた。

とはいっても野生のモンスター対策に餌の選別、病気に対する備えや交配による稚魚の育成などまだまだやることは沢山ある。

しかし今は自分が育てた魚が成長し、通常の2倍近い大きさとよく乗った脂により最高の味となったことに達成感でいっぱいになっていた。

そんな彼の前にかんりの速度で移動してきた魔獣が急停止した。

「やつほー。調子はどう？ いい感じに育ってるみたいだけど」

「5日ぶりでごさる。なんとも旨そうに育っているでござるなあ」

涎を垂らしながら生け簀を覗きこんでいる魔獣を叱りながら此方に降りてくる少年のような少女。彼女達の名前はハムスケとアウラ。少し前にこの森林を搜索している彼女達と遭遇しひよんなことから知己を得ることとなった。

蜥蜴人は本来ならば排他的で閉鎖的な気質をもち余所者を受け入れることなどまず無いが、この蜥蜴人ザリユース・シャシャのように外の世界に興味を持ち〈旅人〉として外界を巡った者は別である。

話をしていくうちに養殖のことが話題にあがり、ビーストテイマーであるという彼女が興味を持ったためこの生け簀を見せたところ色々と助言をもたらしてくれた。

以来ちよくちよくと様子を見に来ることもあり友人の様な関係を築いていた。

「ああ、上々だよ。助言してくれた部分も目に見えて良くなっている。この出会いには感謝しなければならぬな」

そうやってザリユースは小さな友人に感謝の言葉を贈る。

「いいよ別に。私もなんで知ってるのかよく解らなかつたけど…」

謙遜するアウラに苦笑するザリユース、口をモグモグさせているハ

ムスケ。異種族であつても友人にはなれるのだと思える優しい光景だった。

「それと前に言つてた件はどうなったの？　ちよつとは進んでくれたら嬉しいんだけど…」

つまみ食いをしたハムスケにお仕置きをしながらアウラはザリユースに問い掛けた。

「それなんだがな、族長の弟とはいえ旅人であつた俺はあまり発言権が無くてな。この養殖がもつと成果を上げてアウラ達のおかげであつたと判ればもう少しなんとかなると思う」

アウラが言うあの件、それはナザリックとの交流と同盟だ。穩便に世界征服を企む彼等は手始めにナザリックの近くにある蜥蜴人の集落に目をつけた。

いずれは全てを取り込んで統率するつもりだが、まずは穩便に話し合いをするためにアウラが偶然を装い接触したのだ。

蜥蜴人の集落を観察しその生活や気質などをデミウルゴスに報告した結果、何度か交流すれば強き者を尊ぶ彼等は隔絶した力の違いに気付き自然と取り込めるだろうという話になった。

「ん、まあそこまで急いでるわけじゃないからいいよ」
「すまんな」

ザリユースは友人とはいうものの、この凄まじい力を感じる魔獣を従える彼女が属している組織の力には漠然とだが気付いていた。

焦っているわけではないが、穩便に話を持ってきている内に兄と他の集落を説得したほうが良いだろうと考える。

「家には寄つていくか？　ロロロもアウラに会えたときは嬉しそうだからな。出来れば顔を見せてやってほしい」

ロロロとはザリユースの飼っているヒュドラであり、生まれつき頭の数少なく親に捨てられていたところをザリユースに拾われたのだ。

ビーストテイマーという職業故か、はたまたザリユースと仲が良かったためかロロロはアウラに良く懐いていた。

「うん。じゃあ少し会つてこうかな」

アウラも満更ではないのか笑顔でザリユースと一緒に歩き出す。ハムスケは2匹目のつまみ食いに挑戦し、遂に鞭でしばかれた。

ラナーに調査を託された冒険者パーティー「蒼の薔薇」

消えた犯罪者達の行方を追い調査を進める彼女達だが現時点では正直にいつて芳しい結果とは言い難かった。

既に消えた犯罪者の行方はさっぱりと掴めず、今から消えるかも知れない犯罪者を見張っていても全く姿を消す気配がない。

はつきり言って現状は新たに犯罪者が消えるのを待つしかないといったところだ。

それでも優秀な彼女達はある一つの事実を掴んでいた。それは王国だけではなく周辺諸国でも犯罪者が消える現象が起きているということだ。顕著なのは王国ではあるがそれは多分に治安の悪さが際立っているということだろう。

そしてこの辺りで一番の勢力を誇る盗賊団「死を撒く剣団」すらも最近姿を全く見せなくなったことから考えて同様に行方不明で間違いない。

目撃情報の時期的に考えて行方不明者の最後辺りが「死を撒く剣団」らしいということも現在も双子の忍者ティアとティナが情報を探しているがあまり期待は出来ないだろう。

何らかの意図が絡んでいるのは間違いないというのが蒼の薔薇全員の総意だが、ここまで痕跡を消しつつも広範囲にわたっているのは相当な規模の組織ということがほぼ確信できる。ラナーの不安も領けるというものだ。

何にしても取り敢えずは双子の帰還を待つて一旦調査を終了し、ラナーへと報告しようということになった。

そして報告をまとめラナーに渡した日の夜。ラキユースは目の前の親友の智謀をいまだに見くびっていたのだと思い知らされる。

「ここね」

地図の一点を指差して簡潔に言うラナー。

「えーと…何が?」

確かにこの一言で理解しろというのは少し酷だろう。そしてラナーは続ける。

「きつと此処に何かある」

目撃情報、姿を消した時期、時系列に並べた失踪位置情報。彼女の脳内で弾きだされた答えは常人には全く理解できないものではあったが正確にナザリツクの位置を捉えていた。

「何でこれだけで答えが出せるのよ…」

呆れながらもきつと間違いないんだろうなと溜め息をつく。

「ここに何かがあつて、何者かが居たのならば丁重に王国へ招待してくれないかしら? 勿論敵対はしないで、たとえ何者であろうとも」

この言葉にラキユースは更に混乱する。ここに居るのはどちらにしても犯罪者ではないのだろうか?

「どういう意図があるのか全く理解できない。」

「もう全くわかんないわね。危険そうなの?」

ラナーの頭の中身への理解を放棄し任務の難易度だけを簡潔に問う。

「ええ、私の予想が正しければ国の存亡レベルかもしれないわ」

予想以上の答えが返ってきた。だがラキユースも国を憂う一人の民であり、貴族にも拘わらず冒険者になった身ではあるが王国の危機と聞いてしまったては断れようはずもなかった。

「りょーかい。準備が整い次第出発するわ」

仲間達の了解も得ずして返事をしてしまったが、きつと了承してくれるだろうとラキユースは確信していた。

童心と道心と同心

静まり返る闘技場。

その中心で対峙している二人の内の一人、オデンキングは非常に感動していた。

少し予定とは違ったものの対戦相手と観客を驚愕に陥れることが出来たからだ。

かつての人生でここまで人の注目を集め、驚愕や感心をされたことがあつただろうか、いやない。

だから気付かなかつた、全能感と優越感に酔いしれ観客の反応を見たいがために眼だけでチラリと周囲を確認をした隙に相手の攻撃が迫っていることに。

闘技場最強の名は伊達ではない。賞賛も驚愕も一瞬で呑み込んで、彼は何故か棒立ちしている対戦相手に一撃を叩き込んだ。

だがそれでも、渾身の一撃が決まっても、対戦相手は小揺るぎもしなかつた。

「おっと失礼。今何かしたかな？」

異世界で最強になったら言ってみたいセリフTOP10に入る言葉を口にして更に感動するオデンキング。

ただ、いたぶる趣味などは全く無いので重症にはならないように気を付けながら魔法を発動する。

「終わりにしようか。受け取れ、光の龍の抱擁を。《ドラゴン・ライトニング／龍雷》」

ナザリツクの闘技場で練習をさせてもらい、ゲームの時には出来なかつた魔力の調整により威力を抑えた魔法を放ち勝負を決める。

それは音速を越える速度で相手を呑み込み、放った者の想像に違ふことなく勝負を決する一撃となつた。

オデンキングは《ライフ・エッセンス／生命の精髓》を使用し、命に別状は無いことを確認した後片腕を挙げた。

その瞬間、会場が爆発したような歓声に呑まれた。

闘技場の通路、闘う場所に通じるこの廊下でオデンキングは蹲っていた。

突然だが、人の意志とは本人の制御出来るものであるだろうか？

答えは否だ。人は内から溢れでる自分の感情を止めることなど出来ないし、出来ることは精々が表に出ないように抑え込む程度のもだろう。

周囲の人間に罵声を浴びせられれば表面上は平気なふりを出来ても傷付くのは当たり前で、親しい人に褒められれば嬉しくなるのも当然だ。

外的要因、生命の危機を乗り越えた男女がその興奮に勘違いして恋に落ちることもあれば、麻薬などによる偽りの幸福感を得ることもある。

人の意思とは、周囲の環境によっていくらでも揺らぐ。

ならば先程の試合で戦闘による精神の高揚、闘技場の熱気、観客の賞賛と驚愕の目をさらったオデンキングは冷静でいられたのだろうか？ 当然否だ。

ぐるぐると身の内を回る興奮にかられ、アインズのことを全くもって笑うことの出来ないセリフをのたまったオデンキングを誰が責めることが出来ようか。

彼の精神は一般人なのだ、周りの熱気に当てられるのはある意味当然だ。

「ひっ、ひかりのりゅっ、りゅうっ！ ほっ抱擁！ うおおーっ!!

考えるな！ 考えるんじゃない！」

だから闘いが終わり興奮が冷めて、通路で正気に戻ったオデンキングが恥ずかしさのあまり、悶えるのは仕方のないことだった。

その様は日常生活に於いて子供の頃の黒歴史がフラツシユバックした時のようである。

そんな彼に相方の声が掛けられる。

「控え室に帰ってこないと思っただら…。こんなところで何してるの？」

勝負は終わったというのに中々戻ってこないオデンキングを探し、クレマンティーヌがやってきた。

「おーい。どしたの？」

動かないオデンキングの背中をゆさゆさと揺らしながらどうしたのかと問い掛ける。

「うう…。もう駄目だあ…」

心臓の辺りを握りしめながら苦悶の表情で唸っているオデンキングを見て心配になってきたクレマンティーヌ。もしかして相手の武器が当たった時にでも呪いをかけられたのだろうか？

そんな考えが頭によぎり医者か神官に見せるべきかと悩み始める。

「うう。も、もう大丈夫。心配しないでくれ」

ゆつくりと立ち上がり気丈にふるまうオデンキング。

この男の戦闘に関しては全く心配することなど無いと思っていた。

ダメージをなんてことのないようにふるまい無理をしているのがバレバレな彼の姿を見て、その意外すぎる光景にクレマンティーヌは胸がキュンとなった。

これぞまさしくギャップ萌えである。

「ほら、肩貸してあげるから。そっちは逆よ？」

ヨロヨロと歩き出し控え室とは逆の方に向かうオデンキングを引き止める。肩を貸しながら寄り添って歩くクレマンティーヌの顔には優しさの溢れる母性とても言うべきものが宿っていた。

まさにクレマママティーヌである。

此処は闘技場に於けるVIP席とも言えるような場所。見晴らしのいいその場所は闘っている所がよく見え、戦闘の様子が手に取るようにわかる最高の場所だった。

そこに居るのはこの国の皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクス。息抜きと人材の発掘のため闘技場にやってきたジルクニフは先程の闘いを見て観客達と同様に驚愕していた。

もつともその驚愕は顔には全く出していない。いちいち相手に悟られるような顔をしていては魑魅魍魎が蔓延り、生き馬の眼を抜くような政治の世界ではやっていくことなど出来ないからだ。

「ふむ、なんとも驚きじゃないか。前評判を覆す強い剣士であった挑戦者がよもやマジックキャスターとはな」

本来ならばマジックキャスターと戦士は相反するものだ。

戦士は闘う者、マジックキャスターは学ぶ者。

それぞれの道に手を出したところで中途半端にしなければならないものだ。

膨大な学問とも言えるマジックキャスターの道は終わりなき探究の道でもあり、戦闘経験の有無が勝敗を覆すことはあるがやはり使える位階の差が実力の差というのも間違いではない。

戦士としての修行をするくらいならばマジックキャスターとして学んだ方が効率的なのは当たり前だ。しかし先程のマジックキャスターはその常識には当てはまらなかった。

闘技場最強の男ともなれば帝国が誇る皇帝の最強戦力、帝国四騎士にも勝るとも劣らない。その男と接近戦で拮抗し、強大な魔法を扱うマジックキャスター。

魔法に力を入れている国の皇帝だけはあり、ジルクニフは先程のマジックキャスターが使用した魔法の位階も把握していた。

「あれが底という訳でもなさそうだな。…じいを連れてくるべきだっ

たか」

皇帝に親しげに呼ばれる男、それは帝国最高のマジックキャスターであり長き時を生きた伝説でもあり、歴代の皇帝の相談役でもあった。名をフルーダ・パラダイン。

彼は強大な魔法を行使出来ることに加えてタレントとよばれる能力の中でも稀少な、相手の使える魔法の位階を把握出来るという能力を有していた。

「なんにせよ一度会ってみるべきだな。おい、奴の都合を聞いて皇室に招待する旨を伝えてきてくれ。くれぐれも失礼の無いようにだ」

配下の者に命じ男を招待し、次に会う際はフルーダを呼びつけておこうと画策するジルクニフ。

「さて、どのような餌を用意しておくべきか……。案外美女になびくただの俗物だったりしてな」

あれほどの強者がそんな訳は無いか、と自分の思考に呆れながらもんとしても帝国に引き入れるために策謀を巡らしていくジルクニフであった。

ナザリック地下大墳墓の玉座の間。そこに座す死の支配者は今どうしたものかと悩んでいた。

それは最近赤ん坊の如く甘えてくるアルベドに——ではなく、今ナザリックに近付いてくる冒険者達をどうするかについてだ。

「どう思う？ アルベド、デミウルゴス。奴等の目的に想像はつくか？」

ナザリックにアンノウンが近付いてくると報告があつた時点で

シャルティアとコキュートスをそれぞれの階層に配置し、デミウルゴスを召喚しどうすべきかを話し合っているアインズ。

ちなみにアルベドはもともと傍にいた。

「今のところ目的の方は推測しか出来ませんが、正体については見当がついておりません」

心無しか疲れたような声で主の疑問に答えるデミウルゴス。

「ほう？ 流石はデミウルゴスだな。いったい奴等は何者なのだ」

配下の優秀さに満足そうに頷きながらその正体を問う。

「は、風貌から見ておそらくはセバスの報告にあつた王国のアダマンマイト級冒険者パーティ、蒼の薔薇かと思われれます」

「なんだと？」

随分な大物がやってきたことに驚くアインズ。

「目的の方は推測でしか言えません……。カルネ村の件についてが1つ目。そして犯罪者の拉致が次いで高い可能性かと」

ただ冒険者が来ただけならばともかく最高クラスのパティが此処を一直線に目指しているのだ、他には考えづらい。

1つ目は王国の戦士長から、2つ目は少し苦しいが逃がした野盗から何かしら掴まれたのかもしれない。

「フム……。前者ならばともかく後者だとすると敵対の可能性が高いか」

おそらくは、とデミウルゴスが同意する。

「実力の方はどうなんだ？ あの漆黑聖典の男並ならば守護者を複数あてたいところだが」

「そこまでではないかと思われれます。ただセバスによればあの中に居る、紅のローブを纏い仮面を着けたイビルアイという者はそこその強者の可能性がある」と

戦闘メイド程度ならば倒せるかも知れませんがと報告する。

「ふむ、ならば一応は守護者に対応させるべきか……」

そして誰に当たらせるかと思案したアインズだが、選択肢がほぼ無いことに気付く。

アウラは蜥蜴人の所へ出向いている、マールは性格的に向いていな

い。コキュートス、アルベド、デミウルゴスは見るからに異形種、シャルティアは阿呆。

「困ったな。ウウム……不安は残るがシャルティアに任せるしかない、か」

結局そこに行き着いたアインズ。様子を窺いつつ、まずそうならば《メツセージ／伝言》でフォローしようと考えた。

「うお、本当にありやがった」

蒼の薔薇の中でも漢女の中の漢女である、いかつい風貌をした女性ガガーランがナザリックの入り口を見て驚いていた。

「あの子の言うことだもの、間違いはないでしょう」

「そうだね鬼ボス」「ほんとだね鬼リーダー」

「…お前たち、もう少し気を引き締めろ」

王国存亡の危機とやらの原因と思われる建造物を目の前にしているとも変わらない仲間たちに呆れるイビルアイ。

「そうは言ってもイビルアイ、貴女と私達が揃って危険なことなんてそうそう無いでしょ?」

小さな仲間を見下ろしながらラキユースが告げる。

このイビルアイという少女は蒼の薔薇でも別格であり、かつては「国墜とし」と呼ばれた伝説の吸血鬼だ。

紆余曲折あつて今は自分達のパーティに所属しているが、彼女の力は世界的に見ても比肩する者は極々少数である。

それこそ竜王や魔神が出てきたって皆でかかればなんとかなるというくらいには。

「取り敢えずどうするよ。丁重にもてなせってんならいきなりズカズ

カ入るのも不味いだろ?」

ラナーからは王国に招待してほしいと言われているのだ。反感を
買うような態度はまずい。

「うーん。どうしようかしら、ノッカーなんか在るわけないし…」

悩む一同。

「取り敢えずへすいませーん」でも声掛けりやいいんじゃねえか?」

お気楽に言うガガーラン。

「あなたねえ…」

何言ってるのよとジロリと視線をやるラクユース。

「すいませーん」「すいませーん」

「つてちよつと!!」

入り口に向かって呼び掛ける双子に突っ込みを入れる。そんな
で出てくる訳ないでしょうがと言おうとした瞬間。

「はーい。でありんす」

「嘘おっ!?!」

絶世の美少女が出てきた。

「王国へ招待、でありんすか?」

「ええ。王女が貴女方を丁重にもてなしたいと」

驚愕していたラクユースだが、話を出来る人が出てきたのをこれ幸
いと用件を伝えた。

「ふーむ、少々待ちなんし」

少女が《メツセージ／伝言》により誰かに連絡している。

おそらくこの建造物の主だろうか。その仲間たちを見てみれば、
イビルアイが少々警戒した目付きで少女を見ていた。

「イビルアイ、どうしたの?」

その問いには答えず、前に出て《メツセージ／伝言》を終わらせた

少女に向かってイビルアイが問う。

「お前……吸血鬼か？」

問い掛けではあるものの確信をもって言い切った。アインズがア宁德ッドの気配を解るように、同族ならばこの距離にいれば一目瞭然だ。

「む……」

少し驚いた、というふうには少女がイビルアイを見つめる。そしてしばらく凝視した後、ようやく合点がいったという風に問いを返す。

「ぬしも吸血鬼でありんすね？ 随分解りにくいようにしていんすが」

イビルアイの方も驚愕した。マジックアイテムで偽装しているため例え魔法で調べられてもそうそう気付かれることは無いためだ。

「同族故か……」

肯定の代わりに紅の外套と仮面を外す。

「此処は吸血鬼の拠点なのか？」

イビルアイはおそらく間違いないだろうと思った。

犯罪者の消失は血の確保、そしてどこまで広がっているか解らないこの建造物に吸血鬼が溢れているならば確かに王国の危機だと。

だが犯罪者をメインにして、痕跡を残していないということは交渉の余地は確かにある。

だから招待しろということか、と想像を巡らせたところで少女が問いに答えた。

「確かに吸血鬼はそれなりにいんすが拠点ではありんせん。ここはア宁德ッドの王、死の支配者である至高の御方が住むナザリック地下大墳墓でありんすよ」

自慢気に鼻を鳴らしながら無い胸を張る少女。そして次の瞬間、何か《メツセージ／伝言》でも入ったのか涙目になって頭を下げている。「うう……」

「だ、大丈夫か？」

すっかり萎んでしまった少女に、先程の衝撃発言を流して慰めるイビルアイ。ハンカチを貸してやり顔を拭っているのを見ると仲の良い

い姉妹のようだ。

「も、もう大丈夫でありんすよ」

ようやく立ち直った少女は気を取り直して失敗を取り戻そうとする。

「ぬ、ぬしが仲間になつているといふことは蒼の薔薇はアンデッドに忌避感はないということでありんしょうか？」

そうであつてくれ、という顔で問い掛けてくる少女。一同は顔を見合せ頷き合う。

「あー、まあ敵対する気がねえ奴に対してはこつちも何もしねえよ」
カガーランがすっぱりと答える。

彼女は見た目の通り正義感が強く、理不尽にさらされる亜人種の村が襲われていたりすれば義憤にかられ単身助けに行くほどのお人好しだ。

襲う気がなく、話を通じるのならばアンデッドだろうと受け入れる度量がある。他の仲間達もその発言に同意しているのを見て少女はホッとした様子では一息ついた。

「このナザリック地下大墳墓の主、アインズ様は特に人間に対して思うことはありません。話の詳細を聞きたいと仰つていんすので案内させておくんなまし」

そう言つて少女は彼女達の返答を待つ。

「いいな？ お前たち」

どうみても演技ではなさそうなので仲間たちに了解を得るイビルアイ。全員が頷くと少女は魔法を行使して黒い空間を作り出した。

「歩いていくと時間がかかりんす。玉座の間までは転移出来んせんがその前まではこれで転移させてくんなまし」

「て、転移の魔法か…？」

蒼の薔薇の全員が驚いていた。ここまで自由のきく転移魔法は見ることがないのだ。ティナとティア、イビルアイが限定的に転移は出来るものの、片手間にこのような魔法を行使出来ることは驚嘆に値する。

「ええ、心配ならば私から入りんす」

そうやって彼女は黒い空間を潜り姿を消した。
王国の危機。その言葉を思い出しながら彼女達は一人一人足を進めていった。

アウラとザリユースの冒険 with ハムスケ 1

「そろそろ縄張りに入るぞ」

「うん」

「了解でござるよ」

アウラとザリユース、そしてハムスケが森の中を歩いている。何故そうなっているかというところはザリユースが所属しているヘグリーン・クローゝ族の集落以外の部族へも話を通すためだ。

まずは一番話を通しやすいヘドラゴン・タスクゝ族から口説き落とすため二人と一匹は足を運んだのだ。

話を通しやすいとは言うものの、それは強者に限ったの話である。ヘドラゴン・タスクゝ族は蜥蜴人の中でも随一の武力を誇り、それ故に強者の意見には従うべしという風潮が強い。

ならばハムスケを従えるアウラの姿を見せればそれなりの効果はあるだろうとザリユースは考えたのだ。

例えそれに意味はなくとも最終的には自分が闘って説得してもいい。そう思うくらいにはこの小さな友人に友情を感じ、自分の強さに自信も持っていた。

そして縄張りに踏み込み敵意が集中する。いまだ手を出してこな

いのは見るからに強大な魔獣であるハムスケのおかげだろう。そしてこれ以上は手を出される、といったところでザリユースが名乗りをあげる。

「――俺はグリーン・クロー部族のザリユース・シャシャ。この部族を纏め上げる者と話がしたい！」

名乗りをあげた瞬間、敵意の視線に殺意が混じる。

このドラゴン・タスク族の中には食糧難による戦争でザリユース達グリーン・クロー族が滅ぼした部族の生き残りが混じっているのだ。その視線に全く気圧されず、ザリユースは族長が顔を出すのを待った。

そして名乗りから少しして、族長らしき者が姿を見せる。

その右腕は異様に太く、その尻尾は通常よりも随分と平べったい。ところどころに傷痕があり特に目を引くのは左手の指の間から半ばまで裂けた部分だ。

しかしなによりもザリユースが驚いたのは胸の焼き印である。〈旅人は元来部族の権力から外れた特殊な立ち位置となるものだ。

それが族長になるということは、つまり不満を黙らせるほどの実力者ということだ。

「よくぞ来たな。フロスト・ペインの持ち主」

「お初にお目にかかる。俺はグリーン・クロー部族のザリユース・シャシャ。用件は――」

用件と目的をザリユースがゼンベルと名乗った男に話している。その間、アウラは非常に不快な思いをしていた。

周囲から刺さる視線、ザリユースへの敵意もあるが自分への視線は声に出されるまでもなく意味が解った。〈何故余所者がここにいる？ 即刻に立ち去れ〉そういう視線だ。

アウラはもともと我慢強いほうではない。それにカルマ値がデミ

ウルゴスやアルベドほどには低くないとはいえマイナスに片寄ってはいるのだ。ザリユースのように礼儀と親愛を感じるならばともかく、圧倒的格下の存在からこのような視線を受け続けるのは苛立ちを感じる。

そして話が進みゼンベルという男がここは強さが全て、強さで語れなどと言った瞬間アウラは自重することを止めた。

「ねえ」

ザリユースとゼンベルがその声に反応してこちらを向く。

「なんだ、ガ——」

「強さが全てなんでしょ？ さっさとぶっ飛ばしてあげるからかかってきてよ」

周囲から恐ろしいほどの殺意が溢れかえる。だがアウラは気にもとめずにズンズンとゼンベルの方へ向かっていく。

「それとも……怖いのか？」

その言葉を引き金に決闘が決まったもののその結果は当然の如くアウラの勝利である。

たった一発で沈められたゼンベルを見た部族の者達は、尊敬と畏怖を込め闇の妖精王と呼んだとかなんとか。

ちなみにその強さに惚れ込んだゼンベルはアウラの事をそれ以降、姐さんと呼んで憚らなかつた。

繋ぎのお話

所持金がかなり増えたため、しばらく豪遊しようかとオデンキングは悩む。

しかしよくよく考えるとあそこまで実力を見せてしまったら次回から賭けにならないんじゃないだろうか。

わざと負けることは出来ないようになっていいるし、となると先程闘った男の様に強さを見せつけ純粹に観客を楽しませるタイプの闘士にしかねないかもしれない。

それはそれで稼げるのだが、やはり確実に一財産を築けたであろう手段が考えが足りなかったせいでおじゃんになったのは完全にミスだった。

「いや、まだクレマンティーンがいるか。まず負けんだろうし」

「何の話ー?」

もう大丈夫だと言っているのに腕にくっついてくるクレマンティーンにこつちの話、と言いながらまたも皮算用を始めるオデンキング。そんな二人の前にそこそこ立派な装備の兵士が行く手を遮った。

「ベリオネアのお二人でよろしいでしょうか。私は帝国の騎士のフリングスと申します。少々お時間いただけますか?」

帝国の騎士。

ということとは帝国上層部の目に止まったということだろうか。

随分と予定が早まったが悪くない。遊び呆けていた分を取り戻すことが出来そうだとオデンキングは内心でほくそ笑む。

「ええ、大丈夫です。立ち話もなんですから控え室の方で話しましょう」

「おお、ありがとうございます」

クレマンティーンがちよつと不満そうにしているが、これは仕方ない視線で謝りながら3人で控え室に向かった。

その日の夜、泊まっている宿屋の一室でオデンキングとクレマンティーン又は話をしていた。

「まさかいきなり皇帝とはなー。運がいいのか悪いのか」

「いいんじゃないの？ 上に近い方が情報収集も楽じゃない」

「まあそれはそうだけど、なんせ独裁政治の上に鮮血帝とか言われているからなー。あまりに無理を言われたら突っぱねるけど難癖つけられたらいきなりお尋ね者かもしれん」

噂で聞く限り、自分の一族の殆どを粛清している残忍な皇帝らしい。ただし名君だという評判もかなり聞こえてくるのでなんとも言えないのだ。

「その時はその時でいいんじゃないの？ 狙ってきたら皆殺しちやえばいいし」

いつも通りのクレマンティーンにオデンキングは苦笑する。

「ま、仮にも一国の皇帝なんだからそこまで浅慮なわけないか。明日の夜は豪勢なご飯が食べられそうだ」

ナザリツクの食事には劣るかな、と少し楽しそうにするオデンキングとその顔を息が触れ合う距離で嬉しそうに見ているクレマンティーン。そうして夜は更けていった。

「よくぞ参られた、蒼の薔薇の諸君。私がこのナザリツク地下大墳墓の主、アインズ・ウール・ゴウンだ。急な来訪故あまり盛大な歓待は出来ないが、ゆつくりと体を休めていってくれ」

玉座の間。

豪華でありながら下品さを微塵も感じさせない、荘厳な雰囲気この場で蒼の薔薇のパーティーは死の支配者に謁見していた。

メイドや異形を侍らし圧倒的な存在感を持ってこちらを歓迎する

様は歴戦の戦士である彼女達にとっても極度の緊張を強いられるものだった。

「こ、こちらこそ事前に断りもなかったにもかかわらず歓迎していただいて感謝しております」

「場所が場所なのでな、その非礼に関しての謝罪は必要無いとも。今、メイドと料理長に歓迎の準備をさせているところだ。その間に王国への招待とやらの話を伺おうか」

場の雰囲気にもれかけていた彼女達だが、予想以上に温厚で深い知性を感じさせる言動に幾分か落ち着きを取り戻す。

「はい。まずは此方をお渡しさせていただきます。ご確認下さい」

ラキユースはラナーから預かっていた招待状をアインズに渡す。

「ふむ、招待状か。少々マナー違反になるが確認させて貰っても？」

「はい」

蠟で綴じられた手紙の封を開け、アインズは文面に目を通す。そしてその失態に内心で頭を抱えた。

「(読めないの忘れてた…)」

こちらの世界の字を読めないことをすっかり忘れていたアインズ。部下と来訪者の手前、読んでいる振りはするが当然内容は全く解らない。

「(わ、態々最高クラスの冒険者をよこしてまで招待状を渡したんだ。普通に招待してるだけだよな?)」

「ふ、ふむ。成る程理解した。一切の問題は無いとも、そちらの日時に合わせて招待にあずかろう」

どう考えても招待だけの文章の量ではないのだが、焦っているアインズには気づけない。一方その言葉に感動している者が居た。傍らに立つデミウルゴスだ。

この叡智溢れる御方は我々の知らぬ間に異世界の字まで修めていたのだと。

特に「最近ちよつといちやつきすぎじゃね?」とほんの少しだけ不満に思っていたため、これ以上ないというほど自身を恥じた。

仕事をしていない振りをして主はこちらの世界の字を調べていた

のだ。

確かにマジックアイテムで文章を読むことは可能だが数が少なく、普通に読めた方がいいのは当たり前だ。

率先してそれを修めることで我々にも続くよう促す。まさに最高の指導者だとデミウルゴスはアインズに尊敬の目を向ける。

そう、彼は疲れていた。

「ありがとうございます。王女もお喜びになるかと」

「なに、此方としても諸国との関係については悩んでいたところだ。良い機会を設けてもらった」

話は終わり、少しの沈黙が訪れる。

「うむ……。すまないがもう少し準備に時間がかかるようだ」

《メッセージ／伝言》で確認を取ったアインズが伝える。

とんでもない、と謝罪を押し留めるラクユースは更にアインズに対して好感を持った。

なまじ最初の印象が恐れと不安であっただけに、話していてごく普通の人間のように接し、こちらを尊重するような言動まであるのだ。吸血鬼にイビルアイのような者がいるのと同様に、異形種にも話せるものはいるのでと再認識していた。

しかし、話すことが無くなりまたもや場に沈黙が訪れる。

「ふむ、時間もあることだし……。蒼の薔薇の皆さんは王国でも有数の冒険者だと聞いたのだが、間違いないだろうか」

脈絡もなく問い掛けるアインズ。

「はい、パーティとしてなら最優であると自負しています」

これは過信でも自惚れでもない。イビルアイが所属するこの蒼の薔薇は間違いなく王国で一番のパーティだ。

「ほう……。いやなに、この辺りに来てまだ幾ばくも経っていないのだが冒険者の実力というのが今一つ把握出来ていないんだ」

「は、はあ……」

「よかったら6階層にある闘技場で少し手合わせを願えないかな？

勿論命を掛けるなどといったことはない。軽い手合わせだ」

アインズは王国最優のパーティと聞いて、試金石には充分だと思い

提案した。

けして沈黙が気まずかったから思い付きで提案したわけではない。
ないのだ。

「はい、手合わせ程度なら…」

後ろを振り返り皆の了承を得る。

「すまん。こちらの都合を聞いてもらったのだ、手合わせの後は礼をさせてもらおう」

そう言つて全員で闘技場に向かった。

アウラとザリユースの冒険 with ハムスケ 2

アウラは今、ハムスケの上に寝転がりながら族長の家に入ったザリユースを待ち惚けていた。

このヘレッド・アイ族の集落に入つて少し経つがヘドラゴン・タスク族の時ほど敵意は感じられず、どちらかというところハムスケを見て少し怯えた視線の方が強い。

「随分と時間がかかっているでござるなあ」

野性の獣だったにも拘わらず、習性として小動物に似かよっているハムスケはじつとしてるのは苦手なのだ。そわそわとしながら上に乗るアウラを落とさないように体を揺らす。

「ホントねー。というかハムスケ、もうちよつと毛皮柔らかくしなさいよ。ゴワゴワして全然気持ち良くないんだけど」

「無茶を言わないでほしいでござるー」

ザリユースが家に入つてもう1時間近い。説得にしても長引きすぎではないだろうか。

「ちよつと様子見に……あ、出てきた」

ザリユースが全身真っ白な蜥蜴人を連れて族長の家から出てくる。察するにあれが族長だろうか。蜥蜴人なので少し解りにくいだが、ザリユースは随分と喜んでいようだ。きっと交渉が上手くいったのだらうとアウラも笑顔で二人に近付いていく。

「上手くいった？」

「ああ。俺達、結婚するんだ」

「なにが!？」

ザリユースは蜥蜴人とナザリツクの交流のために、族長の家に交渉しに入っていた。

そして結婚するんだ。

「何が何だか解らない……？」

「おお、ザリユース殿。番が出来たのでござるな、羨ましいでござるよ……」

交渉は問題なく終わったようで、ことなかれ主義なヘレッド・アイ族は他の部族も了承すれば参加する、ということになった。

「はあ、私も誰か好きな人出来ないかなー」

最近のアルベドや目の前のザリユースを見て、少し人肌恋しくなるアウラ。

アウラ・ベラ・ファイオーラ76歳。まだまだぴちぴちの恋に恋する乙女である。

命永やか恋せよ乙女

フルーダ・パラダイン。

帝国が誇る最高のマジックキャスターであり、主席宮廷魔法使い。そして帝国魔法省最高責任者であり、英雄の壁を越えた大陸に4人しかいない「逸脱者」の魔法使いの1人だ。

彼は自身が人類でも最高のマジックキャスターであるということを理解している。

それ故に果てしなき魔法の深淵を覗くためには先達者が必要でありながらも自分以上の先達者は居ないというジレンマを持っていた。

後進の若輩者達を育てるのも悪くはないが、やはり自身を高めたい、魔導の探求と探究、未知の領域に足を踏み込みたいという思いは常に持っている。

だからだろう。優秀な教え子でありそれ以上に親愛を感じるジルクニフから第5位階、もしかするとそれ以上の位階を使う可能性のある人物を宮廷に招待したという話を聞いて一も二もなく同伴を申し出たのは。

そして今、彼は神と出会った。

「ほう、珍しい容姿をしていると思ったら全く違う世界から来訪したと?」

「はい、自分でもあまり良く解らない状況だったんですが取り敢えず魔法や種族など共通点が多いので世界を見て回ってます」

オデンキングは特に上手い言い訳も考え付かず、性分として嘘を付くのも好きではないので話せる限りでは真実を語っていた。信じられずとも真実なのだから仕方ない。

自分ほどの実力者が全くの無名だった理由も、世界の常識に疎いのも、情報を集めている理由も全てこれで解決出来るというのもある。

話していて解ったがこの皇帝は自分よりもずっと聡明で思慮深そうだ。貴族でもない自分に対して少しひょうきんな部分も端々ににじませている。

ということはそれなり以上に帝国に引き入れたいと思われているのだろう。ならば荒唐無稽な話を語ってもその嘘をついた事に何か理由があると判断するか、真実と信じるか。

どちらにしても表面上はその話を事実として扱う可能性は高い。

事実、こうして話してみても頭ごなしには否定せず、多少の疑念を見せながらも話を続けている。

むしろ気になるのは皇帝と一緒に居る老人だ。挨拶をした後にこちらを凝視したままずっと固まっている。というか何かプルプル震えている。

フルーダと自己紹介されたがもしかしてフルーダだったのだろうか。そんなアホらしいことを考えながら話しているとその老人が急に皇帝の話を遮ってこちらに突進してきた上に足元に這いつくばった。

「うおわっ!?!」

「神よー!」

「はい!?!」

いきなり神と言われた。パラダインさんは頭がパラダイスのようだ。

「貴方こそ……貴方こそ私が探してやまぬ魔導の神であった……! どうか! どうか私めを弟子にしていただきたい!」

「え、ええー……」

「貴方様にこの身すべてを捧げます! 何卒その叡智と魔法の真髓を欠片でも伝授していただきたいのです!」

この身すべて捧げる。言われてみたい言葉TOP5に入る素敵な言葉だ。ただし可愛い女の子にだが。

「えーと、あの……。皇帝陛下?」

なんとも言い難いこの状況に皇帝の方を窺う。もしかしてこの状況も自分を引き入れる作戦の一環なのだろうか。いや、どう考えても

それはない。

「フルーダ、客人が引いているぞ。お前が魔法に全てを捧げているのは知っている。だが今は弁えろ、それにそのままではどう考えても断られるように見える」

皇帝の頭の中では今の状況をどう整理するか、脳をフル回転させていた。フルーダの反応を見て、目の前の客人が帝国最高のマジックキャスターをして神と呼ばれる実力を持っているのは理解出来た。

この反応、下手をしなくともおそらく最高の位階を使えるのではないだろうか。

しかし、だ。ジルクニフには不可解な点が1つあった。目の前の男は普通すぎるのだ。

自身の人物眼だけならば王国の化物王女にだってひけを取るつもりはない。

その人物眼をもつてしても男は唐突な展開に驚き、困った様子をしているのは演技とは思えない。更に言うところフルーダが教えを請うような人物には全くもつて見えないのだ。

強者には強者の、賢者には賢者の独特の雰囲気というものがある。傲慢であろうが謙虚であろうがその道の極みに達するものには凄みというものが出るものだ。

そんな凄みを全く見せない彼は、どういう存在であるか。完全なる境地に達したが故に自然体でいられるのか、もしくはその境地が自然だと思っているのか。

なんにしてもジルクニフは目の前の男を侮りこそしないが、交渉に關しては優位にたてる自信があった。

どの道この男がフルーダよりも圧倒的というならば、1000位階だろうが1000位階だろうが交渉するぶんには関係ない。ならば全てを飲み込んで帝国に利益をもたらす。それがジルクニフにとつての皇帝としての在り方だ。

「配下の者が申し訳ない、どうか許してもらえないだろうか」
頭を下げる。

そして男の反応は予想通り、恐縮して謝罪を拒むというものだった

た。話は通じる、肩書きは通用する。ならばいくらでもやりようはある。

「フルーダ、いい加減にしろ。これ以上は皇帝として許容出来る範囲をこえるぞ」

今にも靴に口付けをしようとしているフルーダに少し怒気を込めて声を掛ける。

「…失礼しました陛下。少々我を失っております」

少々？ と心の中でジルクニフは突っ込みをいれフルーダを下げさせる。

「少し私室で頭を冷やしている。後の事は心配するな」

言外にこの男は必ず帝国に引き入れてやる、とフルーダに視線で語る。フルーダも馬鹿ではない。冷静になった頭で客人を見れば、先程の行動は間違いなくマイナスだったと理解した。

「申し訳ありません。…どうか、頼みます」

親愛なる教え子の眼を見てフルーダは悟った。帝国のためであるのは間違いないが、自分のためにも交渉に臨んでくれている。そう理解したフルーダは、謝罪と期待を言葉にしながらか深くお辞儀をして部屋を後にした。

「すまないな、フルーダは魔法馬鹿なところがあつてな。自分よりも位階が上のマジックキャスターなど見たのは相当久し振りだったんだろう」

「あー、いえ。そこまで気にしていませんのでお気になさらず」

「オーデイン殿は謙虚だな。第10位階を使えるにしては謙虚すぎると言つてもいい。…それとも別の世界とやらではそれが普通なのか？」

ジルクニフはまず一つ目の手札を切った。フルーダのタレントは正確に位階を測れるようなものではないが、当然のように言い切る事で多少のカマを掛けてみたのだ。

それに別の世界とやらが真実で、そこでの基準としてならばこの謙虚さごく普通のものであった、ということもあるかも知れない。

「うえっ?! あ…もしかしてタレントか何かで…?」

やだ、簡単すぎるこの男。一癖も二癖もある貴族連中に比べてなんて素直に反応してくれるのだろうか。ジルクニフは少し感動した。

「ああ、帝国には有用なタレントを持つものがそれなりにいるんだ」

誰がいつ使ったなどと言うことは明言しない。少しでも帝国の株が上がりれば儲けものだ。

「おおう…。やっぱ国レベルともなると凄い人も沢山居るんですね」

チョロい。チョロすぎて少し心配になってきたジルクニフ。もしかして何かの罠だろうか。

「世界の方については…そうですね。個人の實力に関しては最盛期の時でも上位7000〜8000人以内ぐらいの實力はあったと思います。まあ相性の問題があるので一概に言えるものじゃありませんが。少なくとも純然たる魔法職で10位階を使えないのは初心者くらいでしょう」

そこじゃねえよ。普通かどうか聞いたのは性格の方だよ。どこの誰が10位階を使用できる人物が普通だと思うんだ。どこの終末世界だそれは。帝国が滅ぶというか世界が100回滅んでも足りなさそうだ。

「そ、そうか。オーデイン殿の世界は凄まじいところだな。…：：：しかし突然に違う世界に放り出されるとは災難なこともあるものだ。良ければその世界の情報について帝国の情報網を使って探らせようじゃないか。先程のフルーダの件についての侘びでもある、遠慮はいらないとも」

この男の性格を考えると先程のフルーダの醜態も意外と交渉の助けになったのかも知れない。

個人の性分か国民性かは不明だが、無条件で相手に働かせるのを嫌う雰囲気がある。失態の侘びということならば違和感なく帝国に滞在させることが出来るだろう。

「あー、それはありがたいんですが、いいんでしょうか？ さつきも言いましたけど別に気にしていませんよ」

なんとというか、ちよつと心が苦しくなってきた。謙遜が美德であるような振るまいにどんな環境で育ったのか好奇心が湧いてくる。だ

がそういうことならば存分に潰け込ませてもらうとしよう。

「ふーむ。…ならば情報収集待ちで宮廷に滞在する間、フルードに魔法の指導でもお願い出来ないだろうか？ 先程見た通り魔法に全てをかけているような男なのでな、それに私にとっても良き相談役なんだ」

ここで肯定するならば演技の可能性もほぼゼロになる。どうするかと顔には出さず緊張していると、たいした間もなく頷きが返ってきた。張り詰めていた身体が少し緩み、取り敢えずは交渉が成功したことに安堵する。

後は滞在している間に帝国に愛着を湧かせ、どんな手を使ってでも他国へ所属される事だけは回避しなければならぬ。一番いいのは女を使って根をおろさせることなのだが、妻もいるようだしそこは保留にしておこう。

「そういえば他に違う世界から来た仲間とかはいるのか？ オーディン殿の仲間ならば是非、歓迎したい」

彼のような存在一人で国の勢力図が簡単に引っくり返る。存在するのならば確保しておきたいところだ。

「あ、と。そうですね。えー……少し自分でも情報を集めたんですが、六大神とか八欲王とか十三英雄とかは多分俺の世界から来たんじゃないかと思ってます」

少し言い淀んだところに違和感があったが、それ以上の爆弾発言に流石に驚きを少し出してしまった。

「…！ いや、言われてみれば納得だな。どの伝説についても、その存在の出現は唐突だ。……ふっ、くっ、ハハハハ！」

「ど、どうしたんですか？」

「いや、悪いな。もしかしていま言った存在達もオーディン殿のような普通の人間だったのか、と思うと法国の崇拜も滑稽だと思ってな」
「ひどっ！ というか最初と比べてどんどん口調が砕けていってませんか？」

「これが素だ、あまり堅苦しくなるのは好かん。オーディン殿も砕けた口調でいいぞ、そちらも最初と比べて随分と適当になっているじゃ

ないか」

「ええー…。なんか乙女ゲーに出てくるイケメン皇子みたいになったよ。そんなフラグは要らないんだが」

「良く解らん単語だが…まあ良いじゃないか。もし良ければ友になつてくれないか？ 周りに居るのは部下と政敵と女だけなんぞでな。気兼ねなく話せる友人が居ないんだ。オーデイン殿なら無礼討ちできる者も暗殺できる者もないだろう？」

打算と少しの本心で提案する。おおよその性格は把握した、この言い方ならば了承するだろう。

彼の性格なら自分の友情で繋ぎ止めるというのもありかもしれない。それに気兼ねなく話せる友人というのも貴重だ。誠実な人間に対応する時、打算と悪意だけで接すればいずれは破綻する。きつこの方法が一番、利に叶っているだろうとジルクニフは確信した。

「うーん、じゃあそういうことで。皇帝陛下も殿はいらないですよ」

「ジルでいい。…ふふ、単なる友人というのは初めてかもしれないな」「俺にそつち系の趣味はないのであしからず」

「奇遇だな、私にもそんな趣味はないとも。気が合うようになにより」「ジルって絶対性格悪いだろ…」

「そんな事よりも情報は情報収集だな。十三英雄が違う世界からの来訪者というならば、現存する者を辿ってみようじゃないか」

「はぐらかした！」

意外と気の合いそうな二人であった。

「ほらほら、もう少し頑張りなんし。傷をつけることが出来たら妾から報酬のアップを口添えいたしんすよ？」

「くっ、簡単に言ってくれる！」

第6階層の闘技場でシャルティアと蒼の薔薇が戦っている。誰が見てもその実力差は歴然だったが、シャルティアの手加減と蒼の薔薇の戦闘の巧みさによっていまだ決着はついていなかった。

「ほら、隙だらけでありんす！ 清浄投擲槍！（弱）」

「不動金剛盾の術！」

《クリスタル・シールド／水晶盾》

イビルアイは流石にここまで差があるとは思っていなかったと悔しげに顔を歪ませる。

明らかに全力を出していないのにまったく相手になっていない。この墳墓に入る前の自分の慢心を蹴り飛ばしたいぐらいだ。

既に自分とティナ以外はリタイアして回復されている。ガガーラは声援を送ってくれている、ラキュースはこの主となにやら話している、ティアは全快してない振りをしてメイドの胸に抱きついている。吸うぞこら。

「合わせろ！ 《クリスタルランス／水晶騎士槍》」

「不動金縛りの術！」

同じアダマンタイト級の冒険者にとっても凶悪な合わせ技だが、シャルティアからは余裕のよの字すら削れない。そもそも動きが全く止まっていないのだ。

「残念。そろそろ決めるでありんすよ」

自分の攻撃を意にも介さず無造作に拳を振るうシャルティアを見て、イビルアイは少し不可解な点があることに気付いた。イビルアイは齡250にもなる戦闘経験も豊富な吸血鬼だ。その自分から見てもシャルティアは超が付くほどの一流の戦士なのは間違いない。

力、速度、反応、それにおそらく本来の武器を使っていないであろうにも拘わらず体さばきと両の拳だけでこちらを圧倒している。だがその凄まじい実力があっても尚、イビルアイ達が善戦出来ている理由。

「（実戦経験が少ないのか…？）」

超一流の戦士である、しかし実戦経験が少ない。

そんなことは有り得ないのにイビルアイはそうとしか感じられなかった。いま考えることではないが、付け入るとしたらそこだろうと考えるイビルアイ。ティナにアイコンタクトで指示を送る。

このまま何も出来ず終わるのは避けたい、自分にも世界有数の強者だという自負があるのだ。

蒼の薔薇として一矢むくいたいというのもある。個人の実力で負けていようが、冒険者として勝利を掴むために思考を切り替える。冒険者は敵が強大であろうとも周りのあらゆる状況を使い勝利への一手を導きだすのだ。

イビルアイはこの闘技場に来るまでの時間で見抜いた情報をこの戦闘に活かすため、まずは作戦の一手目を繰り出す。

「少々卑怯かも知れんがこちらにも意地があつてな…《サンドファイールド・ワン／砂の領域・対個》」

バッドステータスに陥ることはないと解っているため、視界を悪くさせるためだけに魔力で上手く調整をかける。

「大瀑布の術！」

水と砂により視界を極限まで悪くする二人。

「ふむ、流水は弱点ではありんせんよ？ 視界は悪いでありんすがどこに居るかなど一目瞭然。これが最後の策とはがっかりしてしまひんした」

シャルティアは完全無欠に、やられるフラグを建てながら挑発する。

「ならばその評価を覆そうじゃないか！」

イビルアイは《ペネトレートマキシマイズマジック／魔法抵抗突破最強化》を最大まで高め、エレメンタリストである自分の最強の魔法を極限まで強化する。

ユグドラシルのレベル換算でいうならば50前後にもなるイビルアイ。さらにエレメンタリストという、属性を偏らせ極端に攻撃力を上げる特殊性を用いて、〈ペネトレートマキシマイズマジック／魔法抵抗突破最強化〉を掛ける。相乗効果で数倍にまで高めた魔法の威力。それは確かにシャルティアに届きうる牙となった。

そしていよいよ決着の時。ティナがシャルティアへと無謀な突進を仕掛ける。砂と水の向こうから迫り来る黒い人影に構えるシャルティア。その瞬間、足下の影から黒い刃が迫る。ティナのスキル、影渡りによる奇襲だ。

「…っ！」

しかしこの程度でシャルティアは揺るがない、喉元を狙う刃を悠然と掴みとり手刀でティナの意識を落とす。

「これで詰みでありんす！」

後は突っ込んで来たイビルアイを倒して終わり、拍子抜けしながらもレベル差から考えると良くやったほうかと思ひ直す。そして突っ込んで来た少女の姿を見て一瞬硬直する。今さつき気絶させたティナと同じ姿が目の前にあったのだ。

「…っ！ 分身か！」

すぐにその事実思い当たり迎撃として先程と同じ手順を辿り気絶させる。だが一手遅れたのは事実。

そして背後から迫り来る今までとは段違いの魔法の威力に驚愕してもう一手遅れる。

しかしそれでもシャルティアには余裕があった。

「確かに、良くやったでありんす。あとで撫で撫でしてあげんしょう」
不浄衝撃盾。1日に2回しか使えないこのスキルを使わされるとは思わなかったシャルティアは心の内で称賛を送る。

そしてその瞬間。詰みに近いこの瞬間をイビルアイもまた予想していた。

この程度でどうにかなる相手ではないのは充分に理解していた。だからこそ、この瞬間にもっとも効果的な最後の一手を繰り出した。

「キヤーツ！ アインズ様、なんて格好を！」

「何ですって!?!」

「隙ありいっ！」

「ぐわあー！ー！ーっ!!」

結局、傷を付けられたシャルティアの負けということで戦闘は終了した。

「イビルアイ……キャラがおかしいわよ」

「言わないでくれ」

心情的には痛み分けだったようだ。

「素晴らしい闘いだった。まさかシャルティアに傷を付けるとはな。礼の方は期待しておいてくれ」

闘いも終わり、歓待の用意も整ったためアインズは蒼の薔薇と共に食事の席についていた。もつとも飲食は出来ないため本当に席についているだけだが。

「いえ、私は早々にリタイアしてしまいましたから……」

開始早々に一撃をもらい倒れてしまったラキユース。自分がい一番に倒れたことによって全体の支援が出来なくなりガガーラン、ティアと立て続けにやられたことに少し責任を感じていた。

「気にするな、あの強さは流石に予想出来なかった」

慰めの言葉を掛けるイビルアイ。あそこまでの実力差があるとは夢にも思っていなかったのだ、圧倒的格上だと解ったときには残り二人になっていた。倒された順番はただの偶然だろう。

「なに、結果が全てだ。あれだけの実力差があつて一矢むくいたというのは並大抵の事ではないと私も理解しているとも。こちらの課題も見えた、実に有意義な闘いであつた」

単純なステータス差だけが実力の全てでは無いことを知れただけでも十分な収穫だったとアインズは喜んだ。

「そう言っていただけだと、こちらとしても戦闘した甲斐がありますわ」

それから終始和やかに食事は進み、夜も遅くなったため蒼の薔薇の者達は客室へと案内されていた。

「ねえイビルアイ…」

「なんだ？」

「ネグリジエがマジックアイテムだわ…」

「今更だ」

「ねえイビルアイ…」

「今度はなんだ？」

「良く見たら周りの調度品とか全部マジックアイテムだわ…」

「今更だ」

「ねえイビルアイ…」

「だから全部今更だって！」

戦闘の実力だけではなく生活のレベルにすら、差を思い知らされる蒼の薔薇だった。

食事が終わってアインズの私室。なんとか問題なく過ごせたと一息ついたアインズ。彼は今非常に悩んでいた。

後で読もうと思っていた招待状をデミウルゴスが持っていったしまったためだ。

頂点にあつて尚、向上心を忘れぬ姿勢に感服致しましたとか言っていたが何のことだったのだろうか。結局いつもの様に全てを理解したように見せ、期待しているぞと声を掛け言われるまま招待状を渡してしまった。

「まあ、大丈夫だよな…。それよりオーティンさん達中々帰ってこないなあ。何かあったのかな？」

それ以上は気にも止めず、暫く顔を合わせていない友を思うアインズであった。

同時刻、デミウルゴスの私室では招待状の内容を確認する彼の姿が

あった。主から期待していると声を掛けられ、招待状に書かれた文を読み終わったときデミウルゴスはその言葉の意味を理解した。

「たったこれだけの情報でここまで見通しているとは……。王国の第三王女か、やはり侮れぬ人間もいるものです」

そしてその顔に歪んだ笑みを張り付かせる。

「アインズ様のご期待に添えるよう、王国には精々踊ってもらおうとしましょうか」

その手紙には王国への招待の他に、犯罪者の件については何も問題ないことや更に入り用ならばこちらで用立ててもいい旨、そして大量の犯罪者を一度に拿捕できる、常人にはおぞましさしか感じられない計略の草案が記されていた。

そう、全てはアインズが期待をよせるデミウルゴスに任されたのだ。

アウラとザリユースの冒険 with ハムスケ 3

ヘレッド・アイ族の集落を出たあともアウラとザリユース、そしてハムスケは各部族を訪問していった。時には戦い、時には戦い、そして時には戦って説得を続け見事に全部族の了承を得た。

「疲れたー。でもこれでアインズ様に良い報告が出来る！ ザリユースもありがとうね」

「なに、私はなにもしていないさ。……本当になにもしていないな」

「み、道の案内はすごく助かったでござるよ！ ザリユース殿！」

「そ、そうか。まあ役に立ったのならそれでいいさ。それより交流とというのは何をするんだ？ こちらから何人か出せばいいのか？」

「ううん。先にお願ひしたのはこつちだからまずこつちから出向

くってアインズ様が言った」

「そうか…。ならば日時が決まり次第伝えてくれるか？ 盛大にはいかないかもしれないが、出来る限りもてなしをさせてもらおう」

「うん。アインズ様はお優しい方だからそこまで気にしなくても大丈夫だよ」

アウラの意識は随分と変化していた。この世界に来たばかりのアウラならば確実に、全てをかけて歓迎の用意をしろと命令していたらろう。

アインズの説得、オーデインとの触れ合い、蜥蜴人との交流によって随分とナザリック以外の者にも優しくなっていた。

「に、してもー。部族を訪問していきなり結婚でどうなのさ？ いままで話したこともない相手でしょ？」

乙女心に気になっていたことを問いかけるアウラ。何でもないことのように尋ねたが実は興味津々である。

「ああ、そうだな…。俺も番のことについてはどうでもいいというか、さして気にしたこともなかったんだがな。クルシユを見た瞬間、雷に打たれた様な衝撃を感じたんだ。恋と言うものがあるならば間違いないこれだと感じた。運命とやらを信じてもいい気分になったよ」

ここぞとばかりに惚気まくるザリユース。恋に落ちたときにのぼせ上がるのはどの種族も変わらないらしい。

「ふ、ふーん。そうなんだ、恋ってそういうものなんだ」
ザリユースの言葉に自分はどうかと考えるアウラ。

主にはアルベドがいる、デミウルゴスやコキュートスは良き同僚ではあるがそういったことは感じた事はない。配下に男はいるが自分よりも弱い男はなんとなく嫌だ。

自分と同格かそれ以上で、一緒にいて楽しくお喋りできる存在。そんな者はいるわけないと、自分には恋愛など分不相応だったのだと氣落ちした瞬間アウラの脳裏に一人の人間が思い浮かんだ。

「あ……オーデイン様…？」

それは違うだろうと否定するものの、一度思い浮かんだ想像は中々消えず逆に広がっていく。

アウラ・ベラ・フィオーラ76歳。
恋愛初心者の彼女は勘違いを原料に、恋に恋する恋愛少女へと変貌
を遂げていく。

愛しき名 それ故に

帝国にて客人として扱われ、フルードへの魔法の指導料としてかなりの大金を貰ったオデンキングは今、ナザリック地下大墳墓に帰ってきていた。

定期的に帰ると言いながら既に一月近く経っているため流石にまじいだらうと思ったためだ。

本当は一週間ごとには帰ろうと思っていたオデンキングだが、観光に夢中になり情報を収集出来なかったためにずると引き延ばした結果がこれである。

明日やろう、やっぱり次の日、次の週明けにはなんとかなってるさと《明日から頑張る詐欺》で自分を誤魔化しつつ、結局は柵からぼた餅のような形で上手くいっただけだったので少々顔を合わしづらいオデンキング。

そのためナザリックの入り口前を熊の様にうろろしている様は完全に不審者であった。

ちなみにクレマンティヌは、オデンキングが一旦ナザリックへ帰ると言った瞬間に凄くいい笑顔でいってらっしゃいと同行を拒否していた。

《ゲート／異界門》で直接ナザリックの入り口前に現れたためまだ警戒網に引つ掛かってはいないがこのままではすぐに気付かれるだろう。だが、その前に丁度トブの大森林から帰還したアウラと鉢合わせた。

「うえっ!?! オ、オーデイン様!?!」

驚愕の声を漏らしアウラは頬を真っ赤に染める。

ハムスケの上に乗りながらオーデインの事を考えて悶々としていたアウラ。そのタイミングでまさかのナザリック前での偶然の再会である。

既にゆだった乙女脳になっている彼女はこれが運命というやつだろうかとか、まさか私を迎えに出てきてくれたのだろうか等と明後日の方へ向けて順調に迷走していた。

「へ？ おお、アウラちゃんとハムスケが久しぶり。元気にしてたか？ 今日も可愛いなー」

そう言いながら一人と一匹に近付いていきハムスケの頭を撫で付ける。あくまでもハムスケに向けて可愛いと言ったオデンキングだが、この状態のアウラにそんな言葉を掛けたらどうなるかは火を見るより明らかである。

「か、かわっ!? ほ、本当ですか？ オーデイン様！」

なんだか勘違いされていると思ったオデンキングだが流石にそれを否定するほど野暮ではない、アウラが可愛いのも事実には違いないため肯定の言葉を返す。

「ああ、前に見た時より可愛くなってるんじゃないか？ 成長期つてやつだな」

オデンキング的にはダークエルフで寿命も長く、成長速度も段違いに遅いアウラに突っ込み待ちの冗談を言ったつもりであったが、その言葉にアウラは更にテンパる。

褐色の肌であるというのに見て解るほどに顔を真っ赤に染め、ああと言葉に詰まるアウラ。

それを見てオデンキングも流石に何かおかしい事に気付く。

ラノベの鈍感系主人公でもあるまいし、ここまであからさまだと自分が可愛いと言ったことに照れているのだとオデンキングは悟る。

勘違いじゃないよな？ 自意識過剰なロミオ男子になってないよな？ と自問自答しながら、いつフラグを建てたんだとオデンキングは悩む。まさかこれが誰の人生にも三度はあるというモテ期なのだろうかと考えたところで、警備の者から連絡を受けたアインズが態々と転移をして二人の前に現れた。

「お帰りなさい、オーデインさん。結構、期間が空きましたけど大丈夫でしたか？」

良いタイミングなのか悪いタイミングなのかは誰にも解らないが、アインズのおかげで空気が変わる。

「ただいまです、アインズさん。いやー中々に手間取ったというか、観光に夢中になりすぎたというか……はははは。」

「すみません、つい遊びすぎちゃいましたと正直に謝るオデンキング。」

「まあまあ、別に仕事と言うわけではないんですから気になさらないでください。そういうことならまだ情報収集については手付かずですか？」

部下ではなく友人なのだからそんなことは気にしないと、謝るオデンキングを宥めるアインズ。

「いえ、そこはなんとかになりました。話すと結構長いので取り敢えずお邪魔してもいいですか？」

「当然ですよ、お邪魔なんかと言わずに自分の家のつもりでいつでも帰ってきてください」

「あはは、そう言っていたけると有り難いです。ほら、アウラとハムスケも行こう」

アインズが現れてからはずっと畏まっている彼女達に声を掛ける。

「おお、アウラとハムスケもご苦労だったな。任務は上手くいったか？」

「はい！ 蜥蜴人の全部族と交渉が完了しました。いつでも来てくれることですよ！」

「某も頑張ったでござるよ、殿！」

「うむ、そうか良くやったぞ二人共。間違いなくナザリックが此処に転移してから一番の功績だ。褒美を考えておくがよい」

「はい、ありがとうございます！」

「某、まだまだ殿の役に立つことを証明するでござるよ！」

望外とも言えるほどのねぎらいの言葉に有頂天になるアウラとハムスケ。それを見たオデンキングがアウラに社交辞令の言葉をかける。

「おお、アウラちゃんもなんか手柄挙げたんだ？ またその話も聞かせてよ」

日本人の文化ともいえる「また誘ってください」「また何処かで」「また違う日にでも」という果たされることの方が少ない約束の常套句「また」の言葉を何気なく使用したオデンキング。

しかし、それは今の恋愛脳なアウラには完全にお誘いの言葉に聞こえていた。

「は、はい……あの、じゃあ今夜オーデイン様のお部屋で、お、お話ししますね」

「え？」

「え？」

「じゃ、じゃあ、お先に失礼します！」

何気に不敬な行為であるが羞恥で頭がいつぱいのアウラはそれに気付かず、逃げるように去っていった。残された二人に微妙な雰囲気

が漂い、一匹はその空気に首を傾げている。
「……オーデインさん、いつの間に……？　そういえばアルベドがオーデインさんは随分女の子に対して手が早いと言っていました。がこれ程とは……」

「いやいやいや俺もまったく心当たり無いですから！　ナザリツクが出る前は全然普通だったんですよ!?　いったい何がどうなってるのか……。ハムスケ、何か知らないか？」

「うーん、某にも思い当たることはござらんなあ。申し訳ないでござる」

人間的な恋愛の機微に疎いハムスケはどうしてアウラがこうなったのかは気付いていなかった。しかしアウラがオーデインに対して発情しているのは解っている様でなんてこと無いように言葉が続ける。

「アウラ殿はオーデイン殿と番になりたいのでござろう？　特に問題は無いように見えるでござるが……。子孫を作るのは生物としての責務でござるよ」

「ぐふうっ！」

「ア、アインズさん？　どうしたんですか？」

最近生産性の無い行為に耽っているアインズはかつて聞いたその言葉に余計にダメージを受けた。

「な、なんでもありませんよ、オーデインさん。そう、私はアンデッド……何も問題は無い。死の支配者にそんなものは……」

ぶつぶつと良く解らないことを呟き始めるアインズにちよつと引いているオデンキング。

「ま、まあ取り敢えず中に入りましょう。此処で話していても仕方がないですし」

空気を変えるために無理やりテンションを上げて話しかけるオデンキング。その言葉にアインズも気を取り直し、全員で入り口に向かう。

「オーデインさん」

「何ですか？」

「避妊はちゃんとしてくださいね」

「はいっ!? いやいや、俺があんな小さい子に手を出すような人間に見えますか？」

「でもペロロンチーノさんの同志なんですよね？」

「……」

顔をそらして聞こえない振りをするオデンキング。正直に言っ
て美少女に迫られて断る自信など全く無いのだ。

現実世界ならともかく此処は異世界で、外見はともかく実年齢は相
手の方が上というならば尚更だ。

「ま、前向きに検討する所存です」

結局は一世紀以上変わらない政治家のおためごかしの言葉にて言
葉を濁すオデンキングであった。

一夜明け、朝食をご馳走になっている蒼の薔薇の一同。昨日の晩も
そうだが、いったいどうすればここまで美味しい食事が出来るの
か疑問に思いながらも贅を凝らした料理に舌鼓をうっていた。

「アインズさん、急に出ていっちゃったけどどうしたんでしようね」

蒼の薔薇との食事兼談話中にオーディン帰還の報を受けたアインズ。少し心配していたため、マナー違反も気にせずにおデンキングの元へ向かったのだ。

「すぐ戻ると言っていたんだ、そろそろ帰ってくるんじゃないか？」

イビルアイの言葉通り、程なくしてオデンキングを連れ戻したアインズが戻ってきた。

「お待たせした、食事中に申し訳ない」

無事オデンキングの安否を確認出来たアインズは今更に割りともマナー違反だったことに気付き謝罪した。

「いえ、ぶ馳走になっているのでとんでもありません。そちらの方を迎えに行かれたんですか？」

態々とナザリツクの主が出迎えたのが、見る限り普通の人間だったことを意外に感じるラキュース。

「ああ、紹介しよう。私の友人で人間のオーディンさんだ。彼もかなり優秀なマジックキャスターでな、親しくしてもらっている」

「あ、どうも。オーディンと申します、よろしく」

道すがら蒼の薔薇について聞いていたオデンキングは無難に挨拶をする。それぞれが挨拶を返し、オデンキングに視線を向ける。自分達を余裕でくださったシャルティアの主が優秀だと言う人間だ、それも当然だろう。

その視線に、まさかこれもモテ期の効果かと盛大に勘違いするオデンキング。浮かれすぎて普段ならまず言わない歯の浮くようなセリフを口に出していた。

「いやー、しかしアインズさんに聞いていましたが最高の冒険者パーティの方々がこれほど美しさも兼ね備えておられるとは。同席出来て光栄です」

その言葉を聞いたアインズは「うわあ…」的な視線でオデンキングを見つめ、後で冷静になった時にこの時の話を振ってやろうと決意した。

「あら、ありがとうございます。私達も優秀なマジックキャスターに

会えて光栄ですわ」

貴族として世辞に慣れているラクユースはさらりと受け流した。ティアは男の評価等はどうでも良く、ティナはもう少し小さければなと残念がる。カガーランは童貞では無さそうだなと鋭く見抜き、イビルアイは魔法を使う者としてその実力に興味を示した。

和気藹々と話は続き、食事も終わる頃合いにアインズがラクユースに問い掛ける。

「皆さんはお帰りは徒歩なのかな？ 足が無いのならばこちらで馬車を出させていただくが」

そこまでお世話になるわけには、と断るラクユースだったが客人を徒歩で帰すわけにはいかないというアインズに最終的には感謝しながら意見を折ることになった。

「では日時が決まり次第、先程伝えた者に連絡をいただけるだろうか」「はい、確かに承りましたわ。態々見送りに来ていただいて感謝致します。今度は王都でお会いしましょう」

アインズはラクユース達にセバスとソリユシヤンの事を伝えていた。

何かあつてあちらで顔見知りになり、後でアインズの配下の者だということ解った時に何か企んでいるのかと邪推されるのを嫌ったためだ。

それにセバスが少々厄介な事になっていると報告を受けていたため、王国の裏事情にも詳しい彼女達と伝を作るのも悪くないだろうと考えたのだ。

割りと重要そうな事態なのに、アルベドの攻勢に疲れデミウルゴスに丸投げしたのを忘れていたためでは決してない。そう、決してないのだ。

馬車を見送り、見えなくなったところでオデンキングが気になつていたことを問い掛ける。

「そういえば馬車に色々積み込んでましたけど何だったんですか？」
見る限りそこそこの装備品や消耗品のアイテムを積み込んでいたのを不思議に思っていたオデンキング。

「ああ、あれはシャルティアと模擬戦をもらったお礼です。かなりのレベル差があったんですが割りと善戦していたので、少し奮発しました」

「へえー！ やっぱり侮れない人も沢山いるもんですね。俺も帝国の闘技場で戦ったんですけど経験の差つてやつを思い知らされましたよ」

「私もです。単純なスペック差だけで戦っているとまずいと知りましたよ」

話ながらナザリックへ戻っていく二人。オデンキングは気付かなかったし、アイنزは自覚が薄かった。この世界は装備品やアイテムのレベルがユグドラシルに比べて相当に低いということ。

馬車の中でユリ・アルファにアイテムの説明を受けた蒼の薔薇が、最後の最後まで格差を思い知らされたのはまた別のお話である。

夕刻、ナザリックのBarにてアウラとシャルティアが珍しく酒を酌み交わしていた。アウラがシャルティアに相談したい事があると持ちかけたためだ。

珍しいこともあるものだどシャルティアは驚いたが、いつになく真剣な様子に茶化すこともなく了承した。

「いい加減に話して欲しいであります。話すのをためらってばかりでは相談も何もありませんよ」

なんとも様子がおかしすぎるアウラに、常のようにからかいを含んだものではなく優しげな声色で諭すシャルティア。なんだかんだで

仲は悪くないのである。

「その、さー。……あ、あんたって、あっちの経験あるんでしょ？ その、どうすればいいのかと……」

もじもじとしながら、か細い声で問い掛けるアウラ。

「はあ？ あっちって……！！ ま、まさか……そんな!? 第2夫人は妾の物、いきなりしやしやり出てきて奪おうとは片腹痛いでありんすよー!」

アウラの言葉に、遂に参戦するのかと戦慄するシャルティア。そしてその言葉を受けてアウラも思い出す。オデンキングには妻ではないようだが、近い関係のような女性がいたことに。

「そ、そんなの関係ないじゃん。それに夫人なんてことは言っていなかったし、まだ決まってない!」

「な、なんですすって!?! もしかして私は騙されていたでありんすか!?! く、くうー、ならば今夜にも夜這いに向かわねば……!」

「夜はもうあたしが誘ってもらってるし!」

「な、なんですすってー! こ、このオチビ! いつのまに……」

「ふふん、あんたに魅力が無いからでしょ? それに態々あたしが帰ってきた時に出迎えてくれたんだから。き、きつと相思相愛よ!」

「あ、あの時……! 確かに……いやでもあれはオー!」

「どっちにしても! 今日の夜は邪魔しないでよね!」

名詞が抜けているせいで大変なことになっている二人。どんとんとヒートアップしていくが、聞く限りかなり不利になっていることに気付くシャルティア。

もはやここは第2夫人などとは言っておられず、アウラを懐柔し、一緒に可愛がってもらおうことを決意した。

「オ、オチビ、良く聞くでありんす……」

「な、なによ……」

ぜいぜいと息を荒げ舌戦を一旦終了する二人。

「カップルが別れる一番の理由を知っていんすか?」

「え? そ、そんなの知らないわよ!」

急に話を変えるシャルティアにいったいなんなのかと訝しがるア

ウラ。

「それは！ズバリ初夜での失敗で不仲になるケースであります！おそらくこのままでは失敗して捨てられること間違いなし！」

「う、嘘……！ そんな……どうすれば……」

なんだかんだで不安に思っていたアウラ。シャルティアの阿呆な言葉にも不安を掻き立てられる。

「安心するでありますよ。私が一緒に居て上手くいかせてあげんしよ。勿論、一番手は譲りんす。あれほどの御方がたった一人の女に縛られるのは良くないとは解っていんしよ？ それにペロロンチーノ様とぶくぶく茶釜様は姉弟。つまり私達も姉妹同然であります。一緒に幸せになるべきではないかと思んせんか？」

一氣に言い切ったシャルティア。無茶苦茶である。

しかしもはや恋愛と不安と対抗心でぐちゃぐちゃになっているアウラの頭には、天啓のような言葉に聞こえてしまった。

「い、いいの？」

「勿論でありますよ。さあ、一緒に幸福を掴むでありますよ。殿方が興奮する衣服も見繕ってあげんしよ」

「う、うん」

勘違いはここに極まる。そして事態は更けゆく夜に移っていく。

ようやく登場、その名は…

ナザリツク地下大墳墓。

その中のオデンキングに割り当てられた一室で今、3人の男女が一つの巨大なベッドの上で話に花を咲かせていた。

アウラとシャルティア、そしてオデンキング。それぞれが微妙に勘違いをしつつ、お喋りを始めておおよそ1時間弱。

「それで、ザリユースが出てきたと思ったらいきなり結婚するなんて言い出して…」

「はは、情熱的じゃないか。蜥蜴人っていつでもその辺は変わんないんだなー」

アウラは扇情さと可愛さを感じられる、少し生地の透けたベビードールを着用しその上にガウンを羽織ってここまで来ていた。

取り敢えずは話をする体で来たために蜥蜴人の集落で合ったことをオデンキングに話していた。

お喋りをしているうちに緊張もほぐれ、シャルティアが上手くアレをする方向へ雰囲気をもっていつてくれるのを待っていた。

部屋に入った瞬間何故か動揺していたのは気にかかっていたアウラだが、なんだかんだでシャルティアも緊張しているのかと仲間意識が芽生えただけにとどまった。

「それでゼンベルって奴がもうしつこくて…」

「まあ慕われてるってんならそう邪険にしなくてもいいんじゃないか？」

対してオデンキングは今、非常に精神的にもやもやさせられていた。

今夜に部屋を訪ねてくるとアウラに言われ、少し煩悶としながらも楽しみにしていたオデンキング。そしていざ迎えてみれば訪問してきたのはアウラだけではなく、シャルティアもだった。

すわ3Pかと期待を寄せたオデンキングであったがいつまで経ってもそういつた雰囲気にはならず、もしや本当に話をしたかっただけかと悩み始め自分の心の汚らわしさに弱冠ダメージを食らっていた。

「で、その爺さんが6位階まで使えるって話でさ、3位階までが限界に近いとかって言う割には意外と上の位階使う奴もポンポンいるし、結構集めた情報も当てにはできないかなって…」

「確かに前に来た人間も、接近戦のみで1対1だと私でも少し苦戦しそうでした。アインズ様の言う通りやっぱり侮りは厳禁ですよね」

そしてシャルティア。今彼女の脳内では怒りが渦巻いていた。

「ふふ、いい度胸してるじゃないオチビ。そっちがその気ならもう遠慮はしないわ！」

アインズの夜伽に参加出切ると思っていたら何故かオデンキングの寝所に来ていた。この状況に到ってシャルティアは気付いた、アウラに嵌められたのだと。自分をオデンキングに押し付け、アウラはアインズの元へ向かうのだと。

盛大な勘違いである。

どう考えればそうなるのか、ラナーやデミウルゴスとは逆の意味で思考が常人には理解できないアホっぷりである。

「(残念だけど、アインズ様の元へ向かうのは妾。オチビの作戦、逆手にとつて見せましょう!)」

ここまで殆んど喋っていないシャルティア。驚愕が抜け、怒りを噛み殺し、作戦を練り、そして今行動に移す。

「そ、そそそそれにしてもアウラとオーティン様は仲がよろしいでありんすねえ。傍目には仲睦まじいカップルに見えんすよ。あ、あー。わ、私は邪魔のようでありんす。ここらでおいとまさせて、いた、頂きんしょう」

これがシャルティアの限界である。彼女は阿呆なのだ。

楽しく喋っていたところにいきなりの良く解らない発言を受け、アウラとオデンキングは困惑した。

やっぱりそういう意味合いでここに来たのかと、モテ期万歳とばかりにテンションが上がるオデンキング。

そしてアウラは困惑した後は、シャルティアの気遣いに感動していた。自身の恋心を押し止めアウラの恋心を優先するその姿に、実は単に言いくるめられただけじゃないかと思っていた先程の自分を恥じ

ていた。

そしてだからこそ、だからこそアウラはそんな優しい親友を行かせるわけには行かなかった。

シャルティアは自分達を姉妹同然だと言ってくれた、ならば彼女だけが貧乏クジを引いていいわけがない。

「…馬鹿、何言ってるのよ。思う気持ちは同じじゃん。一緒に…ね？」

優しい顔でシャルティアの腕を掴み引き寄せるアウラ。覚悟を決めてシャルティアの片腕を抱き締めながらオデンキングに自らの想いを伝える。

「くっ…離すであり」

「わ、私達、オーデイン様のことが好きです！　だ、抱いてくださいー！」

伝言ゲームというものがある。一つの言葉を多数の人間を介して伝えていくというゲームだ。

そしてこのゲームは不思議なことに、最初に伝え始めた言葉と最後に伝わった言葉が全く違うということがままある。

言葉を伝えるというのは簡単なようで難しい。特に一つの場面を伝えるともなれば主観が入り交じり、聞く人によって千差万別の想いを受けるといっても過言ではないだろう。

そう、場面だ。

態々Barで恋バナをしていたアウラとシャルティア。騒いでいた彼女達を見ていた人が皆無だったというのは有り得ない。

そして情報とは伝わるにつれてねじまがるものだが、発信源からして心のねじまがった者が拡散した場合どうなるか。

それはオデンキングの部屋の前の修羅場が答である。

「何故邪魔をするの？ デミウルゴス。私はただ裏切り者を排除するだけよ？」

「…それは寧ろ私のセリフでは？ アルベド。貴女は一途な女性だと思っていたのですが」

「あ、あの、お姉ちゃんも、悪気は…：…ひやつ!？」

アルベドが修羅のごとき表情で嫉妬のオーラを振り撒く。

「落ち着ケ。我々守護者ガ仲間割レヲスルナドソレコソアインズ様ヘノ裏切りニ等シイ」

「悪気がないですつて？ 態々こんな客室でこそこそと…！ もはや一刻の猶予もないわ！ そこをどきなさいデミウルゴス！」

守護者達がオデンキングの部屋の前で対立している。

ちなみにアレな展開を期待していたオデンキングによって部屋の外からの音も中からの音も聴こえないようになってるのが、修羅場の要因の一つである。

そして、彼等の中でも既に認識が違っているのは何故か。

「あー、ドウシテコンナコトニなっちゃったんスカねえ…」

それは誰にも解らない不思議である。

「アルベド、確かにあの方とは一番仲良くなったとは思っていましたが…。これは喜ぶべきなのかもしれませんが今は全力で止めさせていただきますよ」

勘違い100%のデミウルゴスの言葉に、もはや地獄の閻魔でもこれほどではないだろうという形相になる勘違い100%のアルベド。その顔にマールレは姉を諦めた。

「あ、あのボク、しなくちやいけなことを思い出した…：…」

何気に酷い男の娘である。

「邪魔するならっ…！ 少し痛い思いをするわよ」

マールレは逃げ腰、コキュートスは中立、実質ドアを開ける障害はデミウルゴスだけだ。そして、デミウルゴスは1体1の戦闘ともなればアウラの次に弱い。

そもそも直接的な戦闘をするタイプではないのだ。防御に重きをおいているアルベドといえども簡単にドアを突破されるのは目に見

えている。

だが彼には勝算があった。三千世界を見渡しても比肩しうる者が少ない、悪魔の頭脳。それを十全に発揮して策を弄する。

「ふっ、アルげふうっ！」

突進してくるアルベドにまずは言葉にて翻弄するための、策謀の一手目を発動する前に彼は落とされた。どう考えても言葉を掛けるタイミングなど無かったというのに彼はそれを選択した。

そう、彼は疲れていたのだ。

「デ、デミウルゴス!？」

何か策があるのだろうと静観していたコキュートスはそれをみて駆け寄る。だがその瞬間ドアが開け放たれ、四人の視界と聴覚にその光景が目に入った。

「わ、私達、オーデイン様のことが好きです！　だ、抱いてください！」

「フム、それで？」

玉座の間。

顔を俯かせ泣きあとの見えるアウラと、やっと事態を把握したシャルティアを横につかせアインズが片膝をつき頭を垂れるアルベド達に続きを促す。

「うう…その、申し訳ありません。全ては私の勘違いで御座いました」

ドアを開け放った後に飛び込んで来た光景に、自分が勘違いしていたことに気付いたアルベド。羞恥により暴走したアウラにより一騒

動あつたため事態はアインズの知るところとなった。

原因と思われる関係者を集め話を聞いているアインズは中々愉快なことになっていいるな、とかつての仲間達の間にもあつた騒動や馬鹿騒ぎを思いだし悪いとは思いつつも機嫌をよくする。

「他の者はどうだ。何か言うことはあるか？」

同じく頭を垂れているデミウルゴス、マール、コキユートスに尋ねるアインズ。

「ごいません、アインズ様。不確かな情報に踊らされ軽拳妄動としか言えぬ我等の行い、如何様にも罰して下さい」

コキユートス、マールも同じように謝罪する。

「フム、そうか。だがお前達、謝る相手を間違っていないか？ 今回の騒ぎで一番被害を受けたのは誰だ？」

ハツとアインズの横に佇むアウラとシャルティアを見る守護者達。特に泣きあとのあるアウラを見て罪悪感をちくちくと刺激された彼等は口々に謝っていく。

暴れたアウラも、正直バツが悪くなつていたためその謝罪も受け入れていく。そしてシャルティア。彼女はというとー

「あー、本当にキズついたでありんす。これは並大抵のことでは到底癒せないでありますよ」

調子に乗っていた。しかもシャルティアはこれをきつかけにデミウルゴスにアインズからの寵愛を受けられるよう知恵を借り、アルベドから正妻の座を掠め取ろうと画策していた。

しかし、これは完全に悪手である。聡明と言う言葉が霞むほどの頭脳を持つデミウルゴスとアルベドは既に気付いていたのだ。

後でお仕置き予定の犬っころがわざと勘違いさせるように話した場面の真実、すなわちシャルティアもまた勘違いしてオデンキングの部屋に行ったのだと。

ならば調子に乗ったシャルティアに対して彼等がすること
はー

「申し訳ありませんね、シャルティア。しかし貴女もオーティン様をあれほどに愛していたとは気付きませんでした。侘びと言つてはな

んですが貴女の恋愛、このデミウルゴスが全力で応援させていただきますよ」

「え?」

「成る程、それはよい考えだともデミウルゴス。オーデインさんの縁を強化するには最良の一手だな」

「長らく会えなかったことで、もう少しナザリックに愛着を持ってもらえないかと考えていたアインズ。なんともタイミングのいいことだとシャルティアとアウラの恋を応援することに決めたようだ。」

「え、いや私はアイ……」

「アインズ様」

「なんだ? アルベドよ」

「アインズ様は恋愛に不誠実な女をどう思われますか?」

「なんだ急に? そういったことは個人の好きずきだ、私に言えることではないな。…まあ個人的に言うならばあまりそういった人物は好みではないがな」

「うあ……」

「だからこの結果は頭脳の差を考えれば自明の理であるといえるだろう。シャルティアの強欲のせいで第2夫人の座すら怪しくなった一幕である。」

帝都アーウィンタール。

「皇宮のとある一室にてスレイン法国の暗部が赤裸々に語られていた。」

「そうそう、だから漆黑聖典の一席と番外だけには手を出さない方がいいよー」

「成る程、重々気を付けます。ご協力ありがとうございます。また」

聞きたいことがある時はお願い致します」

「ま、気が向いたらね」

帝国の情報局はかなりの部分魔法に依存しており、特にフルーダでさえ解らないスレイン法国の深い部分については詳細は全くといっていいほどに解明していなかった。

だから雑談をしている最中にオデンキングの連れ添いであったクレマンティーヌが元漆黒聖典の一人だったと判明した時、皇帝がかなりの報酬を提示して情報を求めたのは当然の帰結であった。

「ふう、デインちゃん帰ってこないな。また闘技場で弱いもの虐めして遊ぼつかな」

強くなったクレマンティーヌにとって合法的に殺し合いの出来る闘技場は打ってつけだった。なにせ殺してしまってもよっぽどでなければ事故ですむのだ。

「クレマンティーヌ殿は血気盛んだな。よければ中々難度の高そうな依頼でも紹介しようか。冒険者の登録もしているのだろうか？」

そういつてクレマンティーヌの後ろから声を掛けたのはこの国の皇帝ジルクニフ。

「あら、ジルちゃん。政務はいいの？ さつき事務官が探していたけど」

「休憩だ休憩。通常の政務に加えて戦も近い、法国はキナ臭い、それに関わっていきそうな謎の建造物の調査も慎重を期して調査せねばならん。正直やってられんな」

以外と仲良くなっている二人である。

「ふーん。依頼ってそれに関するの？」

「ああ、王国との国境付近でうちの軍隊に扮した法国の部隊が村を襲撃して回っていたと情報があつてな。そしてその部隊が壊滅、国境付近に謎の建造物。流石に怪しすぎて調べんわけにもいかん」

面倒なことだと嘆息するジルクニフ。そしてその情報を聞いたクレマンティーヌは顔を引きつらせる。

「…そこは調べない方がいいと思うよ？ 国を滅ぼしたくなければ、だけど」

下手にナザリックを怒らして巻き込まれたらかなわないと助言するクレマンティーヌ。

「なに？ あそこについてなにか知っているのか？」

「まあ、知っていると言えば知ってるけど私から情報流したって知れるのもやだし、デインちゃんが帰ってきたら聞いてみればー？ 私が言えるのは一つだけ。あそこに手を出したら火傷じゃすまないってことだけよ」

ジルクニフは考える。目の前の女性もオーディン曰く、王国の戦士長ですら相手にならないレベルだそうだ。その女性をしてこの言い回しだ、聡明なジルクニフは早々に正解を導きだした。おそらくその建造物も異世界からの来訪者なのだろうと。

そしてクレマンティーヌがそれを知っていてまだ生きている事実。ならばおそらくオデンキングの知り合いであるのは間違いない。加えて初めて出会ったときに質問した、他の仲間は居ないのかという問いに少し言い淀んだオデンキングの返答。

それをもってジルクニフは看破する。あそこに居るのは理知的ではあるが人類に敵対的な存在であり、オデンキングにも比肩しうる者達なのだと。

「成る程。……ワーカーにでも調べさせるつもりだったがやめだな。オーディンが帰ってくるまでは一切干渉しないでおくでしょう」

「賢明ね。じゃ、私は闘技場に行くからー」

手をヒラヒラとさせクレマンティーヌが皇宮を後にする。それを見送ったジルクニフは割りと間一髪だったんじゃないかと思ひ至り冷や汗をかいていた。

闘技場。

そこでクレマンティーヌはとても言葉には言い表せられない充足感を味わっていた。

「くそっ、くそっ、くそっ。この私が……！」

それは目の前の男、対戦相手のエルヤーが原因である。クレマン
ティーヌから見てこの男は最高の獲物だった。

まずはそこそこに高い実力であること。

次に自尊心が人一倍、いや十倍は高いこと。

最後に感情表現が豊かであることだ。

これらが相まって、その悔しかりかたが芸術の域に達している。

最初は手を緩め相手の優勢を演出し、中盤からは圧倒する。それだ
けなのにこの男の表情の落差はまるで国王から奴隷に落ちたような
悔しがりっぷりなのだ。

クレマンティーヌは確信した。この男は自分に虐められるために
生まれてきたのだと。

「あっはははは！ ほらほら、もう少し速くするよー？ もしかして
着いてこれないかなー？」

「くっ…！ 調子に…乗るなあーっ！」

武技により強化された一撃でクレマンティーヌの武器を狙うエル
ヤー。

「嘘っ…!？」

そして狙いは寸分違わずステイレットの根本に当たり、クレマン
ティーヌは武器を弾き飛ばされた。

「はっ…はははっ！ 見ろ！ 調子に乗るからだ！」

その表情に嘲笑を取り戻したエルヤーは殺すつもりでクレマン
ティーヌの首筋に神刀を振るう。

「あはは、なんちゃってー。ねえ、今どんな気持ち？ お姉さん知りた
いなー」

2本の指でピタリと刀身を掴みとるクレマンティーヌ。それを見
たエルヤーは自分が遊ばれていたのだと気付き更に悔しがる。それ
を見たクレマンティーヌは更にエクスタシーを感じる。永久機関の
完成である。

だがあまりの悔しさにエルヤーは言っではならない禁句を口に出
してしまう。

「くっ…なにがお姉さんだ、ババアの分際で！ さっさと私の神刀か

ら手を放しなさい！ 加齢臭が移ってしまっっては困ります！」

遊ばれ続けたことによってフラストレーションが溜まっていたのだろう。普段は奴隷と亜人以外に使うことのないような口汚い罵りの言葉を叫ぶエルヤー。そして、その罵倒が彼の生涯における最後の発言となった。

「……死ね」

表情から感情が抜け落ちたクレマンティヌ。20代後半に差し掛かった彼女だってまだまだ乙女なのだ。これもむべなるかなといったところである。

だが彼女もオデンキングに会って変わったのだ、すんでのところで思い直しステイレットの軌道を変更し舌と下顎を消し飛ばし、手首と足首にそれぞれ風穴を開け、おまけとして両目を潰しておいた。完全に再起不能である。勝敗の決まったあと彼女は心に暖かいものを感じそれに思い当たる。

「そっか……。これが、これが〈優しき〉なんだ」

そう、彼女は真つ当な人の心を手に入れたのだ。

エ・ランテルの某所。

自分のアジトであるこの場所で、カジットは期が熟したと高笑いしている。死の宝珠に負のエネルギが溜まり、いよいよこのエ・ランテルを死の螺旋に巻き込み絶望の都市へと変える準備が整ったのだ。「もっと早くに始めることも出来たが、やはりあのモモンという冒険者と伝説の魔獣は厄介だ。……だがここ一週間は姿を表していない。凄腕のマジックキャスターとやっても情報通り帝国に向かったと見て

間違いない」

不安要素は消えた。今こそ計画発動の時、母を蘇えさせる第一歩が始まるのだと狂気のみでカジツトは高笑いを続ける。

「明日だ……。明日にはこのエ・ランテルは死の都市へと姿を変える」
母を想う気持ちが狂気となり、凶器となってエ・ランテルへ降りかかるうとしていた。

ナザリック地下大墳墓 アインズの私室

「オーデインさん、明日あたりエ・ランテルで何か依頼を受けませんか？　少し気分転換も兼ねて」

「お、いいですね。：アウラちゃんも誘っていいですかね？　少し沈んでいるみたいですし」

「ええ。ありがとうございます」

今、運命と言う名の予定調和が始まる……！

どうしてこうなった

どうしてこうなった。

エ・ランテルの墓地にて相対する冒険者達を見ながら、カジットはこの世の理不尽さに嘆いていた。カジットの長きに渡る計画が破綻した理由。

それは言うなれば「運と間が悪かった」の一言に尽きるだろう。

あと1日計画を早めていけば、少なくともそれなりの負のエネルギーが死の宝珠に溜まっていた筈だ。

自身をエルダー・リッチと化し、永遠の命をもって母を蘇らせる研究を続ける。計画の完遂はせずともそれなりの成果は出ていた筈なのだ。

しかしその計画の第一歩、それはカジットの目の前の冒険者達によって歩きだすことすら不可能になった。

「なぜだ！ この儂が5年間かけて作り上げた、血と汗と涙と努力の結晶が、30分足らずで崩壊するというのか！」

目の前の冒険者達——アインズとその仲間達にその怒りを向け、叫ぶカジット。

「いや、そんなこと言われても……。というか自分で血と汗とか言うか？ そういうセリフは爺さんが言うもんじゃないぞ」

悲劇の様相を呈しているカジットに対してはあまりにも軽すぎるアインズ達だが、実力差を考えるとこんなものだろう。

「儂はまだ30代だ！」

「嘘おっ!？」

どうみても初老は過ぎているその容姿に驚愕の声を上げるオデンキング。

「じゃあ、もしかしてこの騒ぎを起こして儀式をする理由って……」

アウラがカジットのある部分を見て、推測を口に出そうとする。

「ふん、知れたことよ。儂は集めたエネルギーを持って……」

もはや計画は頓挫しているというのに仰々しく腕をひろげ、邪悪な笑みをその顔に張り付かせるカジット。これも悪の様式美というも

のだ。

「成る程、若ハゲを治すんですね」

ナーベラルがアウラの言いたい事を察して言葉を続ける。

「違うわっ！」

必死に否定するカジットだが、その様子に一同は生暖かい目を向ける。

「負のエネルギーにより毛髪を復活させる……。その気持ちは痛いほどに解るが、エ・ランテルを滅ぼされても困るのでな。投降すると言うならば殺しはしないがどうする？」

この世界に来たときにそれを失ったアインズには少しばかり同情できる理由だったため、少々甘めの措置を提案する。

それに被害としては墓地に大量のアンデッドがわきだしたものの、十数分で消滅したため人的な被害は出ていない。王国の法律には詳しくないアインズはこの状況でカジットを殺した時に、世間がどう見るかも考慮に入れていた。

まず間違いなく問題は無いと思うが、物事に絶対は無い。軽はずみに殺してしまつて後悔するよりも、実力差があるのだから捕縛で良いだろうとアインズは考える。

「ぐっ……！」

カジットも馬鹿ではない。召喚した多数のアンデッドを容易く蹴散らした相手に勝てるとは思っていない。特に切り札であるスケリトルドラゴンが全くと言っていいほど役に立たなかったのだ。

無効化出来るのは6位階までだの、どっちにしても一撃で終わるだの、カジットからすれば悪夢のようなものだ。なんにしても、今の状況が非常にまずいのはカジットも理解している。というか完全に詰んでいるのは間違いない。

いま敵対すれば死ぬ、捕まっても死罪は免れない、となればどうするか。引き渡された後のチャンスに掛けるにしても部下達は既に全滅、死んではいけないようだが状況は変わりない。完全に捕縛された状態で外部の助けなしに逃走出来るとはカジットも思つてはいなかった。

前門の虎、後門の狼。どちらにしても破滅しかない二択にカジットは何か手段はないかと必死に頭を回転させるが、時間は待つてはくれない。

「返答が無いということとは…敵対ということでもいいのか？」

死の宣告にも等しい問い掛けが迫り、カジットは腹を括る。ここは人生の正念場であり、一世一代をかけた勝負どころなのだ。

生涯最高の危機であり、そして生涯最高のチャンスなのだ。カジットは歯を噛み締める。

「…取引がしたい」

身体中に冷や汗をかきながら薄氷の上を歩くように慎重に言葉を選び、蜘蛛の糸のように細い可能性を手繰り寄せようとするカジットであった。

「皆さん大丈夫でしょうか…」

エ・ランテルの墓地に程近い、ギルドが遅まきながらもその場に入った冒険者達を招集してつくった防衛線で待機しているニニヤがぼつりと呟く。

「だーいじょうぶだつて。お前もナーベちゃん達の強さは知ってるだろ？ それに今この場にアンデッドが来てないのが無事な証拠だらうさ」

ルクルットが気楽な声を出して雰囲気のを和らげる。実際に彼自身も墓地へ向かったアインズ達をどうこう出来る存在がいるとは思っていないかった。

「うむ、モモン殿達に加えてオーディン殿まで一緒であるからな。戦力としてはきつとアダマンタイト級にも劣ることはないのである」

ダインも同様に考えており、ルクルットの言葉に同意を示す。

「ああ、彼等ならきつと無事に帰ってくるさ」

いつもの如く爽やかに締めるペテル。そして彼の言葉通りに墓地の方から立派な魔獣に乗った男とその仲間達が帰還する。

「皆さん！ 〇〇無事でしたか？」

他の冒険者達からの視線が集中する中、気にせずにアインズ達に駆け寄る漆黒の剣。

「ええ、アンデッド達は全て殲滅しました。…ただ首謀者は既に逃走していたようで、捕らえることは出来ませんでした」

申し訳なさそうに、そして周囲に聞こえるようにアインズが結果を報告する。

「いやいや、それだけで充分だろ。あとは国にまかせりゃいいさ」

ルクルットがこれだけでも十分な偉業であるとナーベラルを褒めちぎり、いつも通りに辛辣な言葉を返されていた。

「そうですよ、街の危機を救ったんです。きつとランクも上がるんじゃないでしょうか！」

興奮したようにニニヤが英雄の誕生を祝う。墓地から溢れかけるほどのアンデッドの群を殲滅したのだ。下手をすれば街が壊滅したかもしれないことを考えると英雄扱いも当然といえるだろう。

アインズ達のやり取りを見て、ようやく危機が去った事を認識した他の冒険者達も口々に彼等を褒め称える。

この日、エ・ランテルに「漆黒」と「ビリオネア」の二つのパーティーが新たなミスリル級冒険者として登録された。

その日の晩。エ・ランテルの宿屋に泊まったアインズ達一行。

宿屋の客達も寝静まった頃、男女に別れた部屋でそれぞれ恋愛トークが開催されていた。

「そういえばオーティンさん、アウラに告白されたらしいじゃないで

すか。どうするんですか？」

アインズはそろそろいいかと二人をくつつける計画の初めの1手を繰り出す。

「あ、やっぱり知られちゃってますー？ ふふふ、もう俺は確信してますよ。モテ期です。モテ期がきてるんですよ俺には」

このところの女性運の良さに非常に調子に乗っているオデンキング。モテない男が急にこんな状況になればこんなものである。

「モテ期…… あの誰にでも3度は訪れるというあれですか！」

モテ期。定説では存在するとされているがきつと実感出来る男は少ないだろう。

ただし、イケメンはその限りではない。

かくいうアインズもこの世界に来るまでは1度も実感したことのない空想の産物である。

「きてます、間違いない。前の蒼の薔薇の子達も……」

「あの、アウラ様。オーデイン様のことなのですが……」

ナーベラルが恐縮しながらもアウラに話し掛ける。

「へ？ え、えと、何？」

普段はメイドに話し掛けられた程度で動揺するアウラではないが、恋愛脳真っ只中の現在は別である。

「いえその……オーデイン様のどこを好きになられたのかと前から疑問に思っていたのです」

ナーベラルは初めて出会ったときの悪印象こそ薄れてきたものの、正直に言って階層守護者ほどの人物が好意を寄せるのは少し違和感があったためこれを機に問い掛ける。

「や、やだなー。そんなの決まってるじゃん！」

「は、はい」

「例えば……………」

「はい」

「た、例えば」

「はい」

「……………」

「……………」

「あれ？」

アインズ達は非常に盛り上がっていた。まさに修学旅行の恋話トークそのものの、青春の１ページである。

荒廃したと言ってもいいほどの現代に於いては体験した者の方がきつと少ないだろう。

「いや、モテ期きてますよオーデインさん！ もうこれはさっさと決めてしまうべきです！」

かつてないほどに調子に乗っているオデンキングを見てアインズは内心でほくそ笑む。なんてチョロいんだと。

「やっぱりですか！ 即断即決、流石はナザリツクの支配者！ いやっ！ オーバーロード！」

お酒飲んでましたっけ？ と聞きたくなるほど熱に浮かされているオデンキングを見てアインズはだめ押し of 言葉を告げる。

「やめてくださいよオーデインさん。ほらほらここはもういいですからアウラを口説きにも……………」

「え、えーと」

何故オデンキングに惚れているのか解らなくなってきたアウラ。よくよく考えてみればちゃんと言ったこと自体、至高の御方の話を聞いた時ぐらいなことを思い出す。

「…あの、やはりもう少しお考えになられた方がよろしいかと」

そんなアウラを見てやはり唯の勘違いなのではないだろうかと心配するナーベラル。

「で、でも…」

「気の迷いということもあります。こう申し上げるのもなんですがアウラ様はいつオーディン様に好意を持たれたのですか？　そこまで親密になる時間があつたとは思えません」

「う、うーん。…あれ？　そういえば何でオーディン様なんだろう…いや、でも…」

客観的な意見を聞いて頭が冷めていくアウラ。

「好き…？　いや、うん。嫌いじゃないのは間違いない」

あー、解らん！　と頭を振り乱すアウラにナーベラルが助言する。

「今、明確に答えが出せないのであれば保留するというのも間違いとは言えないのではないのでしょうか。それを待てない男などはきつとアウラ様を大切には思っておりません」

然り気無くオデンキングを最低な男にする可能性を高めるあたり、何気に好感度の低いナーベラルである。

「そう、かな。…うん。もう少し、もう少し考えてみる。ありがとうね、ナーベラル」

最近周りに春風が吹きまくっていたため、自分も恋をしたいという感情に振り回されていたアウラ。

今は本当に好きかどうかは解らないが、取り敢えず告白の言葉は撤回しようとしてベッドから立ち上がり隣の部屋へ向かう。

「じゃ、じゃあちよつと夜のデートにでも誘ってきませんかねえ」
少し気味が悪いといえるほどに顔を緩ませたオデンキング。アイ
ンズの計略のままに誘導され、隣の部屋へアウラを誘いにベッドから
立ち上がる。

頑張つて下さいと声を掛けるアインズを後にしてドアを開けた。

そして二人は邂逅する。前回とはまるで違う温度差には気付かず
に。

「あ、オーデイン様」

「うおつと、アウラちゃん。どうしたんだいこんな時間に」

丁度よく同時に廊下に出た二人。テンションが振り切ったオデン
キングはもしや自分に会いに来たのではなからうかと妄想を膨らま
せる。

「あ、あの少しお話が…」

その言葉にオデンキングは確信する、あの夜の続きだと。

モテ期万歳、モテ期万歳と心の中で喝采を挙げながらキリツとした
顔付きで格好をつけたセリフを吐く。

「みなまで言わずとも解ってるさ。感情つてのは自分じゃ制御出来な
いもんだ。ただ素直になればそれでいいんだ」

クサイ、クサすぎるセリフである。

だが誰しも思い出の中にはある筈だ、女の子の前で訳の解らない見
栄を張つて後に黒い歴史と化すこういったセリフ回しは。

オデンキングにとってはそれが今であるだけで、特に問題があるわ
けではない。

問題があるとすれば廊下で話をしていることに気付いたアインズ

とナーベラルが頭に兎耳をびよこんと生やしていることだけだろう。「え…。じゃ、じゃあオーディン様は私の気持ちに既に気付いて…?」「はは、流石にあれで気付かないわけではないって。大丈夫、俺は全てを受け入れる」

流石は至高の御方の友であるとアウラは感動した。

きっとこの方は最初から全てを解った上で色々と付き合ってくれていたのだと。

「…ありがとうございます。やっぱり、アインズ様のご友人は素晴らしい御方でした。」

「え? ああ、うん。ありがとう。じゃあそろそろ…」

変な評価をもらったが悪い感じではなさそうだとオデンキングは判断する。そしてここで決める! とばかりにアウラに近付いていく。

「はい。…オーディン様!」

「ああ!」

「勘違いに付き合っていたいてありがとうございます!」

「ああ!」

「じゃあおやすみなさい!」

「ああ!」

パタン。

「あ…え?」

肩を掴もうとしていた腕が寂しく宙に空回る。

「…え?」

乾いた男の声が静かな宿屋の廊下に吸い込まれていった。

アンデッド騒動があった次の日、アインズ達はギルドに足を運んでいた。

昨日は適当な依頼をこなすといった当初の目的は果たせなかったものの、騒動の発端の場所に偶然居合わせたおかげで売名に関しては充分なものとなった。

更に周辺諸国に網を拡げる秘密結社にもナザリックの手の者が入ったとなれば上々の結果と言えるだろう。

そんなアインズ達がめぼしい依頼はないかと探していると、同じくギルドに入ってきた漆黒の剣と目が合う。

「あ、おはようございます皆さん。依頼を探しに来られたんですか？」
ペテルが皆を代表して挨拶をする。

「おはようございます。ええ、クラスも上がったことですし難度の高い依頼は無いかと探しているのですが…。意外とないものですね」

受付にも聞いてみたアインズだが、今のところは採集や雑用の依頼しか無かったようだ。

「あはは、いつでも難度の高い依頼があったら街がもたないですよ。それにこのところ護衛の依頼もなんだか少なくなってるんですよ」

ニニヤが苦笑しながらアインズに最近のエ・ランテルの近郊の情報を話し始める。

「そうなんですか？ 街を出る人が少なくなっているということでしょうか」

至極当然の考えを口にするアインズ。だがその言葉はルクルットにより否定される。

「いやー、別にそういう訳じゃないんだわ。人の出入り自体は特に変わってねえんだけどさ、盗賊の襲撃とかがパタッと止んじまったらしくてなあ」

「うむ、モンスターが出なくなっただけではないから護衛がいらないということはないのであるが…」

「護衛の数を減らす人は結構多いんだよなあ」

盗賊が減るのはいいことだがパーティーの財政に直結するだけに、複雑な気持ちになるのだろう。

「まあまあ、盗賊が減ることはいいことじゃないか。それに俺達は冒険者、モンスターを狩るのが本職さ」

ペテルがなんとも偽善的な発言をするが、彼の場合はこれが本心である。

「ま、そうだけだよ…ん？　どうかしたかい大将」

少し動揺したようなアインズにルクルットが問いかける。

「い、いえ、何でもありません。そうですか、犯罪者が減っているのですか…」

盗賊が減ったとしか言っていないのに墓穴を掘りかけているあたり、割と動揺しているようだ。

「ということとは皆さん、前の様にモンスターを狩る毎日ですか？」

そういえば出会った時もそうだったな、とオデンキングが話に加わる。

「ええ、そうなのですが…」

ペテルが少し言葉を濁す。アインズとオデンキングがどうしたのかと問いかけようとした瞬間、ニニヤが口を開く。

「僕たち、王都の方へ拠点を移そうかと思ってるんです。あつちなら依頼の量も多いだろうし、経験も積めるでしょうから」

ニニヤがリーダーに変わって宣言する。

「あはは、という訳なんです。俺達には少し早いかとも思うんですが、ペテルが恥ずかしそうに頭を掻き回す。

エ・ランテルから王都へ拠点を変えるということは、生活が一変するということだ。ある意味安定しているこの状況を捨てるというのはそれなりに覚悟のいることだろう。

だが彼等には夢があり、覚悟もある。冒険者とは未知への挑戦に心躍らせてこそだ。

アインズとオデンキングはその気概を眩しく思い、ふとユグドラシルのことを思いだし微笑む。

「ただ、僕達はあっちの方にはあまり詳しくないので少し不安もあるんです」

護衛の依頼で王都に行ったことはあるものの、長期滞在したことはない。ましてや拠点を移すとなれば不安も当然だろう。

不安そうなニニヤを見てオデンキングは重要な事を思い出した。

この世界に来て一番最初にした「この恩は必ず返す」という約束をまだ果たしていないのだ。この機会を逃せばまたいつ会うかも解らない。

王都に行ったことはないとはいえ、セバス達がそれなりに情報を集めているだろうし蒼の薔薇とは面識もある。多少の手助けは出来るだろうと考えたオデンキングはアインズに事情を説明し、王都への同行とセバスとの情報の共有をお願いする。

それを快諾したアインズに礼を言い、オデンキングはニニヤに話し掛ける。

「王都へ行く日程は決まってるんですか？」

「ええ、実は今日には出発している予定だったんですが昨日の騒動で延びてしまって…」

明日には出発するという言葉を聞いてオデンキングは同行を申し出る。

「俺も王都へ行つたことはないんですがそれなりの伝はあるんです。よかったら旅に同行させてもらえませんか？ こちらに来た時の恩をまだ返していませんし」

「いや、恩なんてそんな大したことは…」

予想通り漆黒の剣全員が遠慮するが、ここで引いてはいつまで経っても恩は返せそうにないと判断したオデンキングは無理矢理に約束を取り付けた。

「情けは人のためならずとも言います。この状況が幸運であると思うならそれは皆さんの人徳が掴みとった幸運で、享受すべき事柄だと思いますよ」

本当にいい人達だなと思いつながらオデンキングは明日の出発時刻を確認して、アインズ達に了解をとったのであった。

クレマンティーンの帝都散策記 1

クレマンティーンの朝は意外と早い。

二人に割り当てられた豪華な部屋で目が覚め、猫のようにのびをした後に横のベッドを確認しオデンキングが帰ってきていないことに少し落胆する。

顔を洗い朝食を取った後は軽く城内を見て回る。稽古をしている騎士達に修練という名の虐待を試みたり、帝国最強とかぬかしている四騎士で遊んでみたり、忙しそうな皇帝をからかってみたりと中々に客人の身分を満喫している。

昼食の前にはもはや日課となったフルーダとのやり取りが繰り返される。

師よ、師よおー！ と、いまだ帰らぬオデンキングを探し求めクレマンティーンの元へやってくるフルーダ。

だからまだ帰ってきてねえつつつてんだろ！ と言っているにもかかわらず夢遊病患者のようにフラフラと近付いてくるフルーダにさしものクレマンティーンも気味悪さを感じ、城を後にする。

闘技場まで足を伸ばし、最強の男とやらをボコボコにした後は中央の広場で屋台の食べ歩きだ。お気に入りの果実を2つ手に持ってぶらぶらとアイテムなどを見て回る。

歩いていく内に少し暗い雰囲気のある場所にまで来てしまったクレマ

ンティーヌ。見てみると、禁制の品や奴隷などを売っているようだ。やはりこういう雰囲気は自分には合っているなど、既に懐かしさすら感じる様になってしまったアンダーグラウンドな空気に目を細める。適当に歩いているとふと視線を感じたクレマンティーヌ。気になってその方向に目を向ける。

見てみればそれはエルフの奴隷達だった。鎖に繋がれ悲惨な状況だというのに、クレマンティーヌを目にした彼女達は救世主にでも逢ったかの様に感謝の念を向けている。少し気になったクレマンティーヌは近付いて話し掛けてみた。

要領を得ない話し方ではあったが、要約すると前に闘ったエルヤーと言う男の奴隷であり酷い扱いを受けていたが、クレマンティーヌによつて救われたという話だ。

クレマンティーヌはそれを聞いて笑いが込み上げてきた。今もなお奴隷でありながら、救われたとのたまっているエルフ達。これを滑稽と言わずして何と言えようか。

口元を歪めながらクレマンティーヌは彼女達を嘲笑する。それはただの偶然だと、お前達を取り巻く状況は何も変わっていないのだと。

それを聞いて瞳の輝きが消え失せるのを期待したクレマンティーヌだがそれでも感謝している、とこちらを見つめている彼女達を見て少し苛立ちを感じる。

こいつらは、諦めている。

生きることを、喜ぶことを、楽しむことを諦めている。

哀しみに浸り、怒ることを忘れ、ただ状況に流されて暗い感情に閉じ籠っている。

クレマンティーヌはそれを見て、今はどうでもよくなってしまった兄の事を思い出しかつての自分に思いを馳せる。

神童と呼ばれた兄に必死に追い付こうとして努力した自分。敵わないと知りつつもがむしやらに進んだ。

同じ漆黒聖典に所属することとなつても「クインティアの片割れ」などと、自分にとっては屈辱的な通称で呼ばれまだまだ届かない状況

にも心を折ることなく復讐に身を委ねた。

そんなクレマンティーンから見た彼女達はなんと無様だろうか。

それなりの美貌に、エルフである以上は魔法も使える筈なのに下卑た奴隷商に言いようにされている。

もちろん魔法への対策は何かしらしているだろうが、それでもクレマンティーンからしてみればこんな屈辱的な状況に到っても行動を起こさない彼女達は理解出来ない。

だから話終わった後はもはやどうでもいいと一瞥することもなく立ち去ろうとした。その奴隷商の言葉が無ければ、だが。

常人の聴覚を遥かに凌ぐクレマンティーンには少し離れた後もしつかりと聞こえていたのだ。

冷やかしかよ、ババア。という声が。

それからの事は語るまでも無いだろう。

エルヤーと同じ道を辿った奴隷商。何も悪いことはしていないというのに悲惨な事になった彼は国からの厚い看護の後、それなりの額の口止め料を貰い商人に復帰した。以降は人の悪口は絶対に言わない誠実な人物として大成したとかどうか。

そしてクレマンティーンはというとこの一件により皇帝から小言をくらった後、部屋に戻り一人ごちる。どうしてこうなったんだろうと。

傍には自分をかいがいしく世話する3人のエルフが居たそうなの。

老人と猫

エ・ランテル出発日の早朝アインズはデミウルゴスに《メッセージ／伝言》を使い、成り行きで王国に行くことになったと報告していた。ちなみに統括であるアルベドへの報告ではないのはお察しである。

「…ではそういう事で頼んだぞデミウルゴス。私の居ない間はお前が全権をもってナザリックを運営してくれ。期待しているぞ」

久しぶりの冒険者稼業とあってそれなりに楽しみにしているアインズ。特にオデンキングと一緒の冒険は初めてであり、ユグドラシル以来のプレイヤーとのパーティ編成となればテンションが上がるのも当然のことだろう。

それ故に自分が王国に数日掛けて行くこと、デミウルゴスにナザリックの運営を任せ「期待している」と声を掛ける事で何が起こるかは全く考えていなかった。とはいえ考えていたとしても答えに行き着くことは無かったのは想像に難くない。

「かしこまりました。アインズ様が到着するまでに全てを終える事を御約束致します」

主から直々に期待の言葉を賜ったデミウルゴス。感動に胸の内を震わせながらもその期待を裏切らぬよう計画の予定を早める。

「ウム…？ まあ数日掛かるだろうからその間に骨休めをすることだ。最近はず分と働かせてしまっているからな」

アインズは王都に行くついでにセバスが拾った女と犯罪組織の件などをどうにかしようと思観的に考えていた。

そしてそのまま王女に会うのもありかななどとお気楽思考をしており、生来の慎重な気質はオデンキングのアホさとアルベドの色ボケによりかなり薄められているのが伺える。

「勿体無い御言葉。このデミウルゴス、必ずや御期待に添う事を誓います」

デミウルゴスにとっての骨休め…つまり計画の一環で拉致する犯罪者で遊ぶことを黙認する。

言葉の裏でそれを仄めかすアインズにデミウルゴスは感激した。

態々と時間を掛けて歩いて王都に向かい自分のストレス発散の事まで考慮して頂けるとは、と。勿論全て勘違いではあるが。

「ああ、では任せたまぞ」

そう言つて《メッセージ／伝言》を切りそろそろ出発の時間かなと少し離れた位置にいるナーベラル達へ合流すべく近付いていく。アインズが王都に到着した時どうなっているか――それはまだ誰にも解らない。

アインズがデミウルゴスに《メッセージ／伝言》を入れる数十分前。オデンキングも帝国へ一旦帰還していた。流石にこれから更に数日以上帰らないとなれば心配させてしまふだろうと思つたためだ。

昨晩負つた心の傷をクレマンティーヌに癒してもらおうとかそんな考えを持っているわけではない。

そんなこんなで自分達に宛がわれた部屋に直接転移したオデンキング。寝ているところを驚かせようという悪戯心もある。

薄暗い部屋の大きいベッドの上に盛りあがつた布団を確認してそろつと近付く。しかし特に気配を隠す魔法を使用していたわけでもない。数瞬の後にクレマンティーヌが跳ね起きる。そしてオデンキングを確認すると雰囲気や和らげお帰りと声を掛ける。

「お帰りなさい、大丈夫だった？ ……どしたの？」

起きたクレマンティーヌを見たオデンキングはじつと固まっていた。それはあられもない姿のクレマンティーヌに――ではない。

彼女が寝るときは脱いでいるのは当然知っている。ならば何故固まっているのか、それはずばりクレマンティーヌに猫耳と猫尻尾が生えていたからだ。

「あ……これ？ ……なんかマジックアイテムらしくて俊敏性が上がって気配にも敏感になる優れものなんだってー。闘技場の賞品で貰つたの」

オデンキングの視線が自分の頭に注がれているのに気が付きクレマンティヌが説明する。

「……そこまで見られると恥ずかしいんだけど」

いまだに反応の無いオデンキングだが視線はずっと自分に釘付けなのだ。今更裸を見られたからどうということもないが、ここまでじっくり観察されると羞恥心が沸き上がるのもやむなしだ。

「に、似合っていないとか？ もしかしてこれ意外と恥ずかしい…？」

少し恥ずかしそうに毛布を体に巻くクレマンティヌ。そこまでがオデンキングの我満の限界だった。

かつてアルベドにネコのコスプレをさせたように、オデンキングは猫耳娘が大好きだったのだ。結局集合時間に30分遅れたオデンキング。ナニがあつたのかは言うまでもないだろう。

王都リ・エステイゼ。王国で最も栄えるこの都にアインズ達一行は数日を掛けて辿り着いていた。

「やっと着きましたねー。モンスターの襲撃も無かったし、つまらなかつたというかなんというか」

あわよくば格好良いところを見せようかと逐一周囲を確認していたオデンキングであったが特に意味はなかつたようだ。

「はは、まあ無事に着けて何よりです。しかし情報通り盗賊とかは影も形も見えませんでしたね…。いなくなったのは良いことですが一体どこに消えたんでしょう」

特にトラブルもなく到着したことに安心したペテル。何とはなしに出発前に話題にしていたことを口に出す。

「そ、それより早く中に入りましょう。皆さん疲れも溜まっているでしょうし」

アインズが皆を急かす。微妙に強引な話題転換であったが事実でもあるため漆黒の剣のパーティは疑問に思うこともなく手続きを終えて都に入り、アインズ達もそれに続く。

「にしても……なんか変な雰囲気じゃねえか？」

取り敢えず宿屋を探そうかと歩く一行。歩いている内に少し街の雰囲気は浮き足だっていることに気付くルクルツトが疑問の声を出す。

「そうですね……何かあったのでしょうか。ギルドに行つて情報収集したほうが良さそうですね」

なんとなく悪い感じでは無さそうだが気になるアインズ。宿屋を取る班と情報を集める班にわけける事を提案する。

「じゃあ俺はセバス……知り合いの所へ、モモンさん達はギルドに、ペテルさん達は宿屋を探しに行くつてことでもいいですか？」

「解りました」

「ええ、問題ありません」

人数に偏りは出るがまさか街中で危険なことも無いだろうと全員が頷きを返す。

「では集合場所はギルドで……ん？」

解散直前に自分達に近付く者達に気が付いたオデンキング。人数も多くハムスケも居るため道の端に寄っていたアインズ達だが、立派な魔獣を連れて目立っている以上広い王都とも言えどもこの邂逅は必然だったのだろう。

「お久しぶりです、オーデインさん……とナーベラルさん？　もうこちらに來られていたんですのね。そちらの方々は……」

通りがかつたのは蒼の薔薇のメンバーのラキユースとガガーラン、それにイビルアイ。たまたま所用あつてこの通りに来ていた彼女達は巨体を持つ魔獣に目を惹かれて近付いたのだが、それが先日知り合つたオデンキングだとわかり声を掛けたのだ。

「ナーベ……ラル？」

ペテルが自分が知っている名前より長くなつた響きに疑問の声をあげる。

「え？ あ、ええと」

焦るナーベラル。おろおろとアインズへと視線を移す。

「おう、良い美少年連れて…ん？ なんだ女か」

そして自分好みの美少年を見て童貞鑑定眼を発動させようとするガガーランだがニニヤが女の子だと言うことにすぐに気が付き落胆する。

「え、あ…ぼ、僕は…」

性別を暴露されたニニヤ、本名を暴露されたナーベラル。二人ともに挙動不審になる。これはまずいとオデンキングがすぐにフオローを入れる。

「あ、ナーベラルというのはその…というかナーベというのが愛称で本名はナーベラルなんですよ。ねえ？ アインズさん」

色々と問題発言が出たが、取り敢えず本名を出されてしどろもどろになっているナーベラルに助け船を出すオデンキング。内心でフアインプレー！ と自分に親指を立てる。

「え？ ア、アインズ…様？」

あの見るからにマジックキャスターでアンデッドなアインズがこの全身鎧の戦士なのかとラキユースが驚いて声に出した。

「あ…」

最悪のプレーである。

「い、いやそのっ！ ……………駄目だ何も思い付かん」

とつさに上手い言い訳を思い付く事もなく、早々に事態の收拾を付けるのを諦めてアインズにぶん投げる。

「ちよっ、おま…」

耐性により無理矢理に精神を落ち着けられるアインズだが冷静になったところで上手い言い訳を思い付くこともなく、繰返し小刻みに焦りの感情が振り返っていた。

「招待の日程は先程セバスさんにお伝え致しましたのでそれでよろしければまたご連絡をお願いします」

その間に漆黒の鎧は姿を隠すためかと納得するラキユース。王都に変装して姿を表しているということはここ数日の騒動はやはりア

インズが関わっているのだろうと推測していた。

一方ニニヤの方はバツが悪そうに仲間達の様子を窺うが3人共苦笑しているだけで騙っていたのかと怒っている様子もない。

「あ、あの皆…」

違和感を感じながらも性別を偽っていたことを謝罪しようとするニニヤ。しかし機先を制してルクルットが謝罪を押し留める。

「あー、何だ、その…俺達全員そのことは知ってるからさ、気にすんなニニヤ」

「え…う、嘘…?」

予想外のセリフに固まるニニヤ。

「つーかこんだけ長いこと一緒に居て気付かんわけなからうよ」

このプレイボーイのルクルットさんだぜ? とウインクしながら元気付けるようにおどけるルクルット。

「打ち明けてくれるまでは黙っておこうとは思ってたんだけど…」

まさかこんな状況になるとは、と笑いながら気にしてないよと優しく告げるペテル。

「うむ、仲間ならば性別など関係ないのである」

些末な事だと一笑にふすダイン。

「みんな…」

うつすらと涙を浮かべながら声を詰まらせるニニヤ。自分には勿体無い仲間だと申し訳なきと嬉しいさで肩を震わせている。

そして漆黒の剣が感動の1シーンを送っている間にひそひそとアインズ達は相談していた。

「(どうしましょう…。何か良案はありませんかオーデインさん?!)」

お前のせいなんだから何とかしろやという視線でオデンキングに振るアインズ。

「(ないです)」

それをバツサリと切り落とすオデンキング。

「(もうちよい考えましようよ!?)」

どうしようと頭を抱えるアインズ。焦るアインズの様子にあてら

れてナーベラルもおろおろとするばかりだが、そこでアウラが会話に加わる。

「あのー、普通に偽名使ってたって言うだけでいいんじゃないでしょうか…?」

訳ありの人間もそれなりに居る冒険者。偽名を使うことが普通というわけではないが、使っていたとしても何か事情があるのだろうと思われて終わりである。少なくとも漆黒の剣のメンバーがそれで何かしらの疑念を覚えるということはずないだろう。

「…」

その言葉を聞いてオデンキングとアインズは見つめ合ったあと目を逸らした。

「流石はアインズ様です!」

「何が!？」

ナーベラルは平常運転である。

アインズ達と漆黒の剣の双方の話が終わり事情を説明しあう。アインズは訳あって偽名を使っていた事を謝罪し、ニニヤは性別を偽っていたことを謝罪した。お互いにその程度で蟠りを持つわけもなく特に問題なく暴露大会は終了した。

では、と全員が気を取り直してそれぞれの目的の場所へ向かっていった。

「…私達、完全に忘れられてたわね」

後には原因である蒼の薔薇がポツンと残されていた。

クレマンティーンの帝都散策記 2

オデンキングが帰ってきていた事を聞いて興奮しながら迫り来るフルーダを撒き、お供しますと着いてくるエルフ達を置き去りにしてクレマンティーンは今日も今日とて闘技場へ来ていた。

「今日も歯ごたえなさそうな雑魚しかいないな」

弱者をいたぶるにしてもある程度の強さはないとつまらないと、精神的に成長したクレマンティヌ。このまま順調に成長すれば立派なバトルジャンキーになるだろう。

ちなみにナザリツクの存在がある時点で順調に行くことは絶対に無い。強いやつは居ないのかと探し求めればダース単位で自分を片手間に殺せる強者が出てくるのを知っていればバトルジャンキーになる余地は隙間ほどもないだろう。

とにもかくにも今日の闘技場はつまらなさそうだと踵を返し、どうしたものかと広場で屋台の軽食を摘まみながら思案するクレマンティヌ。

デザートのお菓子を咀嚼しながら、そういえばこのアーウィンターに来てから大体の所は回って見たが貴族の住宅が建ち並ぶ高級住宅街の方へは足を運んでいないなとふと思う。

特に面白い物も無さそうだがとにかく暇をもて余しているのだ、何かあればいいなとクレマンティヌは歩きだした。

高級住宅街。それは主に帝国の貴族が住んでいる、アーウィンターでも屈指の治安のいい区画である。しかしかつては貴族達を家主としていた豪華な家屋達も、今は住むものが居ない無人の家となっているものも少なくはない。

それは鮮血帝と呼ばれるシルクニフにより大量の貴族達が粛清や没落の憂き目にあつたためだ。貴族の力を削ぎ、皇帝に権力を集めるために残虐なことも躊躇なく実行したシルクニフ。

だがそれにより貴族の悲劇は増えたものの、平民の笑顔はもっと増えたことがシルクニフが今でも強く支持されている理由の1つなのは間違いない。

そしてそんな清閑な住宅街を歩き回りやっぱり時間の無駄遣い

だったかとおまらなさをこの区画を後にしようとしているクレマンティーヌ。

そんな彼女の前に待望の騒動がやって来た。

目の前の邸宅から飛び出てきたのは5才程の幼い双子の少女、そしてその二人の手を引く魔法使い然とした美少女だ。

そしてそれを追いかける激昂した男——恐らく父親だろう。顔を真っ赤にしながらあらんかぎりの声を上げて少女達を罵倒している。

やれ今までの恩を忘れたか、やれ親を捨てるのかと中々の小物っぷりがクレマンティーヌの嗜虐心を刺激している。

そんな男に対して少女の方は努めて冷静に言葉を返している。恩はもう充分に返したと、貴方達が生活を改めない限りは帰るつもりはないと言い捨てて双子の手を取り歩きだそうとした。

そして振り返った瞬間こちらを見ているクレマンティーヌに気が付き足を止める。その表情にはまずい人物と鉢合わせたという感情がありありと見てとれる。

既にクレマンティーヌは冒険者やワーカーの間では危険人物として有名なのだ。

少女は刺激しないようにゆっくりと動きながら逃亡を図る。しかし無情にもその怯えた表情と仕草がクレマンティーヌの琴線に触れてしまったようだ。

「何か困り事かなー。お姉さん：何か手伝ってあげようかー？」

底意地の悪そうな笑みで少女に近づくクレマンティーヌ。頼つても絶対に良いことにはならないと確信できる嗤いだ。

それを見た少女——アルシエはやつとこの身に降りかかる不幸から逃れることが出来るタイミングで、更なる不幸がやって来たことに怒りと悲しみが交ぜになる。

何故今なのか。運命がこの両親から逃げ出す事を許さないとでも言っているのか。アルシエはそんなことは絶対に認めないと、両手に感じる妹達の体温を勇氣に変えて気丈に立ち振る舞う。

「何も困ってはいない。私達は急いでいるからこれで——」

「その冒険者、娘を止めてくれ！ 報酬は支払う！」

その言葉を聞いたクレマンティーンは更に口を歪ませる。

「そうなんだー。そう言われたら協力するしかないなあー。家族は一緒に居るべき…だよなー」

微塵もそう思っていないなさそうな態度でクレマンティーン又はアルシエの目の前に立ち、逃げ道を塞ぐ。それを見たアルシエは意識が遠退きそうになるのを必死に耐える。

ここにきて、ここまできて、こんなことになるなんて酷いじゃないかと信じてもない神を呪う。

ついさつきまではクレマンティーンを恐れながらも感謝していたアルシエ。しかしここにきての障害がクレマンティーンだったことに運命という皮肉を感じざるを得ない。そんな現実逃避の思考をしながらアルシエはこうなった経緯が走馬灯のごとく脳裏を掠めるのを感じていた。

アルシエ・イーブ・リイル・フルト。

この歳にして第3位階を使いこなす若き天才魔術師。生まれは貴族だが、ジルクニフによる貴族の選別により没落した過去を持つ。それ以来、人によつては蔑みの視線で見られる「ワーカー」の仕事を請け負いながら家族と使用人の財政を支える事になったアルシエ。

彼女ほどの魔術師であればそこまでのことをせずとも一家族を養う程度のこととは簡単だっただろう。しかし現実には借金に次ぐ借金により装備を新調することすら覚束ない有り様だった。

それは何故か。一言で言うならば「親の愚行」の結果である。

アルシエの父親は没落の事実を受け入れず、ジルクニフさえ失脚すればまた過去の栄光に返り咲く事が出来ると本気で信じていた。

実用性もない高価な品物を金もないのに買い漁り、今だフルト家の力は衰えておらぬと皇帝に見せ付けるのだと空回りを続ける。

その結果が膨大な借金だ。普通ならば元貴族とはいえ金貸しもこ

ここまで貸し付けることはありえない。

だがアルシエがなまじ優秀だったが故に回収の目があると踏んだ金貸しは利息のためにどんどんと貸し付けていた。アルシエが稼いできても更に借金が増えている。数えるのも馬鹿らしくなったその繰返しにアルシエは遂に親を見限る事を決意した。

しかしそれでも親は親、せめて今ある借金は何とかしたいと頭を悩ませていたアルシエはふらりと立ち寄った闘技場で信じられないものを目にする。

遠目に見ても解る程の凄まじい魔力量を持った男が闘技場に登録しているのだ。近付けばその魔力にあてられただけで吐き気を覚える程の量。そんな男が闘技場に新人として登録し、あまつさえ超大穴として出場する。

魔力を看破するという自分のタレントにはこれまでも助けられてはいたが、これほどまでに感謝したのは記憶にないアルシエ。限界まで張り込み、見事大金を手にする事が出来た。

その男は結局一回しか出場することはなかったがもう片方――相方のクレマンティヌという女は頻繁に出場していた。

すぐに賭けにはならない程の強さであると認識され、観賞用の試合が主にはなったものの最初の数回を同じように最大金額まで張り込んだアルシエは遂に借金を返せる程の金額に手が届いた。

あの化け物のような魔術師の相方が普通な訳もないと判断した自分を褒め、借金を返しても多少は残る金で暫くは妹達と穏やかに暮らすことが出来ることにアルシエは喜んだ。

金貸しに金を叩きつけ、これからは親の借金は一切関知しないと啖呵を切った。そのあと父親に最後のチャンスとばかりに生活の改善を要求したが予想通り受け入れられる事もなく怒りを顔にするばかりであった。どこか浮世離れた母も説得には失敗し、もはや完全に愛想を尽かしたアルシエ。

そして早々に荷物をまとめ妹達を連れて家を出ようとした矢先にクレマンティヌと邂逅してしまったのだ。借金を返すのに間接的に助けてもらった人物が今度は自由を妨害する。これ以上の皮肉は

ないだろう。

やはり賭け事などを利用したからこんなことになったのだろうか
と考え出したところでクレマンティーヌの甘ったるい声により現実
に引き戻されるアルシエ。

「じゃー……行くよー？」

「っ！ 下がって！」

問答無用とばかりに剣を向けてくるクレマンティーヌに妹達だけ
は守らなければと無理やり背後に下がらせる。

自分の身長とかわからない杖を構え対峙するアルシエだが、脳裏によ
ぎるのは同じワーカーだったエルヤーの悲惨な末路。あんなことに
はなりたくない。だが自分の背には守るべき妹達が居るのだ。それ
だけで恐怖を飲み込み、沸々と勇気がその身に滾る。

「絶対に、守る」

そして両者の間にある空気が最高潮に高まった瞬間、それは起き
た。

「ミツケタア……」

如何なる魔法を用いたのか、ソレはマジックアイテムにより感知の
感覚が鋭敏になっている筈のクレマンティーヌの背後をいとも容易
く取っていた。

「っっっ!!」

最近は何朝のように感じている怖気に、クレマンティーヌの体中に
鳥肌がたつ。

「師は……師はどこに居られるのだクレマンティーヌ殿お……」

「ご存じ、我等がフルーダ・パラダインその人である。」

普段はオデンキングが帝都に居ないことは理解しているため朝に
撒けばそれで終わりだったのだが、今日はクレマンティーヌがジルク
ニフにオデンキングが帰って来ていたと話していたところの部分だ
け偶然聞いてしまったためにずっと探していたのだろう。

ねっちよりという擬音が相応しいような近付きかたでクレマン
ティーヌに迫りオデンキングの場所を問うフルーダ。

「キモいっ！ 近寄るな！」

げしげしと蹴られながらも這い寄ってくるフルーダにさしものクレマンティーンも恐怖心を抱きそのまま後退する。そしてその先には先程まで対峙していたアルシエ。

普段なら絶対にしない行動だが、あまりの気持ち悪さについてアルシエの後ろに回り込み両肩に手を掛けフルーダに対する盾にするクレマンティーン。そして何という偶然かその盾はフルーダに対してかなり有効な盾であった。

「せ、先生……？」

「お前は……アルシエか。急に姿を消したかと思えばこんなところに居たとはな。魔法の研鑽は積んでいるのか？　いくら天稟の才があるうとも放置すれば錆び付くものだ。独力だけでは自分の才能の限界を勘違いすることも多い。もし伸び悩んでいるのなら尚のこと……」

「誰だお前は」

殆んど気持ち悪いフルーダしか見たことが無かったクレマンティーンは、一瞬でボケ老人から帝国の重鎮に戻った彼を見て自分の目がおかしくなったのかフルーダがおかしくなったのか、それとも世界がおかしくなったのか判断がつかなくなってしまった。

フルーダに事情を話すアルシエ。もう戦うような雰囲気ではなくなったのは残念なクレマンティーンだが、そんな事よりもどんなマジックアイテムにも勝るものを見つけたことに感激していた。

「……そうか。そういうった事情ならば仕方ない、か。だが魔法省はいつでも門戸を開いている。もし何かあれば頼るがいい」

「……ありがとうございます」

ペコリと頭を下げるアルシエ。ちらりとクレマンティーンの方へ視線を向け、もう大丈夫そうだと安堵した。

「じゃあ私達はもう行き……」

その瞬間クレマンティーンがガバツとアルシエを抱き締める……もとい羽交い締めにする。

「逃がさないよー？」

甘かったかとアルシエは苦しげに顔を歪める。こうなればフルーダに頼み込むしかないと助けを求めようとしたところでクレマ

ンティイーヌが耳元で告げる。

「アルちゃんは今日から爺の盾役に就職することになりましたー。お金はいっぱいあるから弾むよー」

「…え？」

「な、何を…！ 娘は渡さぐふうっ」

「おっさんは黙っててねー」

クレマンティイーヌが皇帝に厚遇され城で暮らしているのは有名な話だ。そこで働くとなればおそらく親の干渉を避けることができ、妹を守るために四六時中見張る必要もないだろうとアルシエは考える。更には給金も弾むらしいとなればありがたい仕事なのは間違いない。

クレマンティイーヌは恐ろしいが、聞いた話によればエルヤーの奴隷だったエルフ達は彼女に保護されて幸せそうに暮らしているらしい。懐に入れば案外優しいのではないだろうかとアルシエはメリットとデメリットを天秤にかけ、決断した。

「…よろしくお願いする」

その日から帝都の城で働く少女が3人追加されたそうなの。

おまけ

エ・ランテル出発の前夜 オデンキングのその後

パタン。

無情な音を響かせオデンキングの前で扉が閉まった。そのまま十数秒ほど固まっていたオデンキングだが落ち込みながらも再起動する。虚しさを覚えながらアインズが居る部屋の扉を開けたオデンキ

ング。

「…」

「…」

目が合う二人。しかしアイNZは耐えきれずにサツと顔を背けた。

「…モテ期」

「え？」

「勘違いでした、モテ期」

「あっはい」

「…」

「…」

再び室内に静寂が訪れる。これはまずいと思ったアイNZはなんとか立ち直つてもらおうと、ついでにパンドラズ・アクターの件について意趣返しをしようと思ひ立った。

「…ただ素直になればそれでいいんだ」キリツ

先程オデンキングが新たに創りだした黒歴史を掘り起こすアイNZ。

「ぐうっ！ こ、このタイミングで死体蹴り…だと…？」

「死体は私ですよ」

「笑えないんですけど!？」

慰めているのか貶めているのか解らない発言だが取り敢えずツツコミをする余裕は戻ったオデンキング。結局グダグダと話し込んでしまひ二日続けて徹夜と相成ったのであった。

再会

皆と別れてセバスが滞在している館へ向かっているオデンキング。事前に教えてもらっていたため迷うこともなくスムーズに到着した。「呼び鈴は…あるわけないか。この輪つかを叩くのかな」

日本人の大半は使ったことがないだろうノツカーを恐る恐る使用する。意外と大きい音に少しびびりつつ、足音がこちらに向かっているのに気が付く。扉が開くのを待ち、ほどなくしてセバスが姿を現す。

「お待ちしておりましたオーディン様。どうぞ中へお入り下さい」

深々と頭を下げオーディンを出迎えたセバス。その言葉に応じてオデンキングは客間の方へ案内された。

「久しぶりセバス、これ帝国のお土産。ソリュシャンちゃんとどうぞ」帝国で皇帝に見繕ってもらった焼き菓子なので何気に贅沢な一品である。

「お気遣いありがとうございます。ソリュシャンも喜ぶでしょう」

畏れ多いとばかりに慇懃な態度で受けとるセバス。

「なんか犯罪組織とかの件で面倒なことになってるらしいね。今のところは大丈夫っぽい？」

道中アインズに聞いたことについて問うオデンキング。

「はい、デミウルゴスが完璧に仕事を致しました。アインズ様の期待に見事応えたようです」

セバスが少し羨ましそうに反りの合わない同僚を褒める。

「ん？ もう解決したんだ、流石デミウルゴス。…そういうえば拾った女の子と結構いい感じなんだって？ セバスもやるねー」

ヒューヒューと持て囁すオデンキング。オッサン丸出しである。

「お戯れを。彼女は救ってもらった恩を愛情と勘違いしているようです。暫く経てば落ち着くでしょう」

冷静に返すセバス。何事にも動じない完璧な執事の姿がそこにあった。

「あ、そうなんだ…」

微塵も動揺しないセバスを見てオデンキングは何故ナザリツクの女性と男性でここまで差が出たのだろうと、シャルティアとアルベドの醜態を思いだし苦笑した。

「まあそれは置いといて…あ、ソリュシヤンちゃん久しぶり」

「お久しぶりでございます、オーデイン様」

客間で待ち構えていたソリュシヤンがセバス同様に深々と頭を下げる。

「と、そっちは例の子かな…ん？」

ソリュシヤンの横で畏まっているメイド服を着た女性の顔を見てオデンキングは驚いた。先程まで一緒に居たニヤとそっくりなのだ。

「ツ、ツアレと申します、よろしくお願い致します」

お辞儀をするツアレの顔をまじまじと見つめるオデンキング。その視線にツアレは困惑する。

「どうかされましたか、オーデイン様」

それを見かねたセバスが声を掛ける。

「え？ ああ、ごめんごめん。知り合いに凄く似てたからつい」

女性に無遠慮な視線を向けていたことに気付いたオデンキングは焦りながら謝罪する。

「…！ あ、あの、その知り合いというのは…！」

過去の経験から少し怯えぎみにしていたツアレだが、オデンキングの言葉を聞いてかつて生き別れになった妹の事を思い出し焦ったように問う。

「ツアレ」

しかし冷たさを少しばかり含んだセバスの一言でツアレは冷や水を浴びせられたように動きを止めた。今日この館に来るのはセバスの主の友人であり、けして粗相の無いようにと言い含まれていたというのにこの失態だ。

「あ…も、申し訳ありません！」

怯えたように頭を何度も下げるツアレ。今の彼女が一番怖れているのはセバスに見捨てられることだ。何をしているんだと自分を心

の中で叱責してオデンキングに謝罪をする。

「ああ、別に気にしてないから大丈夫、大丈夫。セバスもあんまり怒らないであげて」

必死に謝罪するツアレを見て本当は許してあげてと言いたかったオデンキングだが、実際に失態の出来ない人物を接待する時に同じ失敗をすれば困るのはこの子だろうと、メイドの練習中だというツアレをせめて叱責が軽くなるようにセバスにお願いした。

「ありがとうございますオーディン様。ツアレも気を付けなさい」

少しほつとしたような雰囲気を見せるセバス。結局はこの中で一番ツアレを心配しているのも彼なのだ。そんな様子のセバスにオデンキングは目敏く気が付き、ちらつとソリュシヤンに視線を向ける。

ソリュシヤンが頷く。

オデンキングも頷く。

オデンキングが今までさぞ居心地が悪かっただろうと眼で慰める。ソリュシヤンが解ってくださいますかと眼で感謝を送る。

今度はソリュシヤンと見つめ合うオデンキングに、ツアレとセバスは訝しがる。

「まま、取り敢えずいいや。それよりセバス、頼んでた情報は収集出来てる?」

エ・ランテルを出る前に頼んでいた漆黒の剣の役に立ちそうな情報――ギルドでの人間関係や逆らうとまづい集団、宿屋ではなく安めに借りられる借家や王都で効率よく稼ぐ方々など多岐に渡るお役立ち情報をオデンキングはセバスに頼んでいたのだ。

「はい、こちらの羊皮紙にまとめております。ですがもう少し時間を頂ければ更に詳しく調べる事が可能です」

オデンキングがパラパラと羊皮紙をめくりマジックアイテムを使い書かれている情報に目を通していく。

「いやいや、問題無いってセバス。数日でここまで詳細に調べてくれるとは思わなかった。ありがとう」

充分に役立つだろうとセバスに感謝の言葉を告げるオデンキング。んも喜ぶだろうとセバスに感謝の言葉を告げるオデンキング。

「アインズ様のご友人の頼みとあらば当然のことでございます」

「はは、ぶれないな。でも今回は個人的な頼み事だからさ、セバスもなにかあったら言ってくれる？ 借りっぱなしは性に合わないんだ」

アインズへの忠誠心が高すぎてそのうち羽根でも生えて飛び始めるんじゃないかと想像しながら今度はアインズとセバスに借りができたなと思うオデンキング。

そして予想通りその言葉を固辞するセバスだが、自分のためでもあるからとオデンキングは借りができたとの言葉を崩さない。

「…ならば一つお願いが御座います。先程のツアレの問いに答えて頂く、というのはどうでしょうか」

「かっー」

格好良いー！！

と心の中で叫ぶオデンキング。これが真のイケメンかと戦々恐々とおののく。

どちらにせよ気になっていた事柄だったので後で聞こうと思っていたことだ。そんな事では借りを返したことはないと思おうと思ったオデンキングだが、それではせつかくのセバスの心意気無し駄にすると考え了承する。

「ありがとうございます」

頭を下げるセバス。自分が女なら惚れてるはこれ、とオデンキングは横目でツアレをチラ見した。視線が熱い、物理的な温度を持ってセバスを焼死させるんじゃないだろうかと思うほどだ。

そしてソリュシャンに視線を移す。

ソリュシャンが頷く。

オデンキングも頷く。

「ー大変だねー」

「ー解つて下さいますかー」

今日1日で随分と心の距離が縮まったソリュシャンとオデンキングであった。

「ゴホンッ。えーとじゃあさっきの質問の続きだけ」

見つめ合っているセバスとツアレをどうにかするためわざとらし

く咳をする。

「は、はい！ あの、私には生き別れの妹が……」

一方こちらはギルドに向かうアインズ一行。

ハムスケのせいで衆目の目をさらいなながらギルドまでの道を歩いていく。

「ここだな、ハムスケは外で待機だ。人に迷惑を掛けるなよ？」

「了解でござるよ殿」

ナーベラルを連れてギルドの扉をくぐるアインズ。そしてその瞬間、いつものように冒険者達の視線が二人に突き刺さる。それはアインズの立派な立ち姿のせいでもあり、ナーベラルの美しい容姿のせいでもある。そして首から下げるミスリルの証明のプレートを見て納得したように視線を外していく冒険者達。

「フム……。やはり何となく雰囲気がおかしいな。よっぽどの事があればセバスからナザリックに連絡がいく筈だが……」

特に連絡がきていない以上然したることはないのだろうかとかアインズは首を捻る。

「まあいい、聞けば解ることだ。オーティンさんもセバスのところで何かしら情報を仕入れてくるだろうしな」

話を聞くのに手頃な者を探すアインズだがその時丁度2階から人が降りてくる。強者の雰囲気を漂わせ、一目で上級と解る装備に身を包んだ戦士……周辺諸国で最強と目される王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフである。

王城に居る筈の彼が何故ギルドに居るのか、それは先日の騒動に起因するものであるがここでは割愛する。

思わぬ再会に一瞬固まるアインズ。しかし今は冒険者モモンとし

て活動しているのだ。声を掛ける訳にもいかず視線を外し立ち竦んでいたが、少し遅かったようだ。ただでさえ目を引く出で立ちをしているアインズが数秒の間、凝視していたのだ。ガゼフに気付くなどいうほうが無茶だろう。

位置的に通り道だったこともありガゼフが何となく声を掛ける。見るからに強者だったのも理由の一つである。

「俺に何かあるのか？ 随分と熱い視線をくれていたようだが」

快活に笑いながら話し掛けるガゼフ。人材不足の王国だ、少しでも強者を引き入れるためには普段からこういった勧誘の取っ掛かりを作っておくのも有効な手段である。

「あ、ああ、いやそのだな…」

まさかこんなことになるとは思わなかったアインズ。言葉を濁しながらどうするかと思案する。

「…っ！ その声は…！」

しかしそれも無駄に終わる。義に厚く、受けた恩を忘れない王国戦士長は一月以上前に聞いた命の恩人の声をしっかりと覚えていた。

「ゴウン殿か！ まさか王都まで来てもらえるとは。よければ私の屋敷へ招待させてもらえないだろうか」

もはや目の前の全身鎧がアインズだと疑っていないガゼフ。恐るべしは王国戦士長の直感である。何故マジックキャスターが鎧を着ているのかを聞いてこないのも、何か事情があるのだろうと察して言及しないあたり懐の広さを感じさせられる。

対してアインズの方はというと、王都に来てからやたらと運が悪いなーと軽い現実逃避をしていた。というかもう偽名を名乗る必要性も薄いしアインズで通そうかなと考えていた。

冒険者として活動する必要性もアインズの楽しみという点以外はあまりなくなってきたところだ。金に関しては固辞したものの、オデキングが帝国から貰ったものをそのままナザリックに入れてくれたため当面は問題無いだろう。

情報に関しては法国、カジット、それに帝国とそろそろ充分なものがある。となれば後は売名だけなのだがこれはもはやアインズ・ウー

ル・ゴウンの名前を良い方に広めるのであればそのままアインズと名乗った方が良いだろう。

「ええ、お久しぶりですストロノーフ殿。ここには友人の付き添いで来ましてね。招待の方は…今は到着したばかりでござたござたしていますので落ち着いてから伺いましょう」

少し興奮気味のガゼフを手で制して、努めて冷静に対応するアインズ。そのおかげかガゼフも逸りすぎたと恥ずかしそうに頭を掻く。

「申し訳ない。興奮して少し急いでしまったようだ。落ち着いたらその友人の方も是非ともご一緒に招待させて頂きたい」

伝えておきますとアインズが応え、ガゼフが屋敷の場所を教える。少しの談笑の後、それでは仕事があるのでこれにてと別れようとするガゼフをアインズが引き留める。

「あ、最後に一つだけよろしいでしょうか。街全体から少々おかしな雰囲気を感じるのですが何かあったのですか?」

王国の戦士長ならば大抵のことは把握しているだろうとアインズは問いかけた。

「ああ、ゴウン殿はさつき到着したのだったな。…実は数日前に犯罪組織によるクーデターが発生してな、あわや国家転覆の大騒ぎだ。もう収まってはいるものの色々と不可解な点が多かったために調査しているんだ」

ここにいるのもその一環だと告げるガゼフ。
「クーデター…ですか」

予想以上に大事だったと驚くアインズ。もしやナザリックと自分の間にある情報網がしつかり機能していないのではと不安になる。

では、と外に出ていくガゼフを見送り考えを巡らせた。

「デミウルゴスへ連絡…いや、そろそろ皆集まってくるか」

疑問を一旦は保留して、今まさにギルドに入ってきた漆黒の剣を迎えるアインズ。

「お待たせしましたア…モモンさん。宿屋の方は問題無く取れました」

「もうアインズで結構ですよ。こちらも少しだけ情報を集める事が出

来ました。後はオーディンさんが…と言ってる間に来たみたいですね」

後ろにメイドを付き添わせてオーディンがギルドへ入ってくる。「と、一番最後か。待たせちゃったみたいですね」

自分以外の全員が集まっているのを見て謝罪するオデンキング。

「いえ、俺達も今来たところでー」
ガタンツ。

床に杖を落とした音が響く。

「ニニヤ？ おい、どうし…」

オデンキングの横に居るメイドを見て信じられないようなものを見た様子で杖を取り落とすニニヤ。あまりの様子に何がおこったのかとルクルツトが声を掛けようとしたが、それを遮るように我を取り戻したニニヤがメイドの傍に駆け寄る。

「う…そ…？ ね、姉さん…だよな？」

その端正な顔を間近で確認したニニヤは確信をもって問いかける。問われたメイドーツアレはもう二度と会うことは出来ないだろうと諦めていた妹を目の前にして、声が詰まる。

聞きたいことも、言いたいことも沢山あった筈なのにいざ目の前にすると言葉にできない。涙を流しながら出来たことと言えば、その問いかけに無言で頷く事だけであった。

「う…ああ…」

ニニヤの方も感動で言葉を紡げない。それでもこの再会が現実だと必死に確かめるように生き別れの姉を抱き締める。奇跡の再会をしたツアレとニニヤ。

詳細は解らないが、冷徹な人物であろうとも心を絆されるようなその場面にギルドに居た冒険者達も暖かい眼でその光景を見守るのだった。

ちなみにオデンキングの心情は感動9割、美女と美少女が抱き合っていることへのドキドキが1割だった。

アインズは疑問10割である。

ここ数日のクレマンティーヌの目覚めは快適だ。何といつてもフルーダの襲撃がピタリと止んだのだ。止んだというよりはドアの前でアルシエが押し留めているだけだが。

彼もかつての教え子にきちんと理性的に諭されると正気に返り、もと来た道を引き返すのだった。ドアの前の気配が一つだけになったところでクレマンティーヌが顔を覗かせる。

「…行つた？」

その言葉にコクリと頷くアルシエ。猫耳を付けた頭だけ覗かせるその様は本当の猫のようで可愛いなど笑いが込み上げてくるが、本当に笑ってしまったら怒りそうなので我慢する。

「ふう。毎朝毎朝懲りないんだから…」

アルシエの言葉にようやく全身を部屋から出すクレマンティーヌ。取り敢えず朝食に向かった後はどうするかと思案し、目の前で佇むアルシエを見る。そういえば今日はワーカーの仕事があると昨日言っていた事を思い出す。

「アルちゃんは今日ワーカーの仕事だったっけ？」

「そう」

簡潔に答えを返すアルシエにそれじゃあ、と思いつきの提案という名の命令を口にする。

「じゃあ私も着いていこつと。暇だし」

「！」

固まるアルシエ。この雇い主が言い出したら聞かないのはもう解っている。こうなった以上はもう決定事項なのだろうと諦めつつ、仲間の安全だけは確保しようと懇願する。

「大丈夫だつてー。私が理由もなく人を傷付けるように見える？」

むしろそれ以外にどう見えるのだろうかと猜疑心に満ち溢れた目で、前を進むクレマンティーンを見つめるアルシエであった。そして妹達をエルフの3人に預けてクレマンティーンとアルシエはフォーサイトが待つ宿屋へ向う。

道すがら何度もメンバーに危害を加えないように約束させるアルシエ。それに屋台で買った果実にかじりつきながら大丈夫だと安請け合いするクレマンティーン。アルシエはまだまだ不安は晴れていないが、宿屋に着いてしまったため後は祈るしかないと扉を開けた。

ワーカー。請負人とも呼ばれるその職業の内容は、基本的には冒険者ギルドで受注する仕事とさして変わらない。ただ冒険者がモンスタアの討伐などをメインにしているのに比べ、ワーカーは仕事を選ばないというだけだ。

勿論パーティや個人によっては仕事の詳細を調べ、安全性や違法性がないか入念に調査する場合もある。単純にギルドを介さないことによつて仲介料を節約して、依頼主との金銭的な交渉をしたいがためにギルドに登録しないケースだ。

しかしワーカーには脛に傷をもつ後ろ暗い者や血を見ることに愉悦を感じる狂人などがそれなりに居るのもまた事実である。理由は様々なものがあれどいずれも冒険者としての活動を嫌うドロップアウト組みであり、蔑みの視線で見られても当然の集団。それが世間一

般の共通認識だ。

そんなワーカーとしてそれなりに長く活動し、実力のあるパーティとしてそこそこに有名であるのがアルシエの所属するヘフォーサイトだ。

彼等が宿屋の一階で顔を突き合わせ何をしているかというところ、簡潔に言うならばアルシエの心配である。プライベートの詮索はしないというのがワーカーの暗黙の了解ではあるが、先日ひよんな一件から自らの生い立ちや現状の窮状を仲間達に打ち明けたアルシエ。

心配はいらないと口にして無理をしているのがバレバレな笑顔で別れたのが数日前であり、妹達を家から連れ出すと告げた彼女がそれから何の音沙汰も無かったためにパーティの面々は妹のように可愛がっているアルシエを心配していた。

「やっぱり迎えに行くべきじゃないか？ 妹を人質に監禁されてるつても考えられる」

パーティのリーダーを務めるこの男の名はヘッケランといい、金髪碧眼の中背の男であり帝国では珍しくもない容姿である。しかしベテランのワーカーだけはあり、凄味とも言うべき雰囲気を漂わせている。

「あの子はそんなヘマはしないわよ。ましてや荒事も経験したことのない父親よ？ きつと上手くやつてるわ。まだ時間にもなっていないだからもう少しとんと構えなさい」

優秀なマジックキャスターとしてアルシエを信頼している気の強そうなこの女性はイミナといい、この帝国では少し珍しいハーフェルフである。ヘッケランとは男女の仲であり、ワーカーでもまずいないかップルを含んだパーティというのもこのヘフォーサイトの特徴の一つであった。

「そうですね、彼女ならば心配は無用でしょう。きつともうすぐ姿を見せてくれますよ」

パーティ最年長のこの神官の名はロバーデイク。冒険者ギルドでは自由に回復魔法を使用して無償で人助けが出来ないという規則を嫌い、ワーカーになった底抜けのお人好しだ。彼もまたアルシエがこ

の場に無事に現れることを疑っていない。

「まあ俺も大丈夫だとは思ってるが万が一ってことも：お、来たみたいだ」

なんだか自分だけアルシエを信頼していないみたいじゃないかと思いい、万が一を考えて心配しているだけだと口に出そうとしたところで扉から姿を見せるアルシエに気が付きホツとするヘツケラン。

しかし続いて入ってきた女性を見て一同は硬直する。アルシエに付き添っているのは最近帝都で悪名高い、クレマンティーヌだと理解したためだ。

「待たせた、申し訳ない」

アルシエが仲間達に声を掛ける。固まっている彼等を見てまあ当然だろうと、仲間を巻き込んだことに申し訳なさでいっばいになる。

「あ、ああ。時間はいいんだが、その：」

言いたいことは痛いほどよく解ると、みなまで言葉を聞かずとも説明を始めるアルシエ。

偶然の出会いから、現状の雇い主であり職場としては最高のものを提供してもらっていることを少し盛りながら話す。拒否されても無理矢理着いてこられる事を見越して、なるべく受け入れてもらえるようにする涙ぐましい努力である。

「そ、そうか：。しかし急にパーティーに入ってもらうにしてもー」
当然のごとく渋るヘツケラン。相手がクレマンティーヌということもあるが、慣れ親しんだ仲間と違い急にパーティーに入れたとしても連携が取れず逆に戦力が下がってしまうのを嫌ったためだ。

「あ、別にパーティーに入れてくれてくれて訳じゃないから。報酬もいらないしねー。ただの暇潰しだと思っついて」

命懸けの仕事といっても差し支えないワーカーの活動を暇潰しと言われ少しむつとするアルシエ以外の面々。それに気付いたクレマンティーヌが気を使って先程の自分の発言にフォローを入れる。

「ああ、別にワーカーの仕事を軽んじてる訳じゃないから。ただー」

軽く殺気を滲ませて口を歪めるクレマンティーヌ。

「この場にいる全員：殺すのに30秒も掛からないから、さ」

お前たち程度がこなせる依頼なら問題無いのだと言外に見下す。そしてそれは圧倒的なまでに正論であり、それ故に真実味を持った迫力のある言葉にヘツケラン達は気圧されながら背中に冷や汗を流す。格の違いを対峙しただけで見せ付けられ、身をすくませるへフオーサイトの面々。

対してクレマンティーンは何か間違ったかなと、自分の有用性を示しただけなのに震えている彼等を見て首をかしげる。最近彼女も天然度が増しているのはオデンキングのおかげと言うべきか、オデンキングのせいと言うべきか。まあ成長という見方もあるだろう。

「ま、不測の事態に対する備えってことでよろしくー」

まあいいかと気を取り直し、自分が着いていくのは決定事項だからとニコニコと殺気を消すクレマンティーン。それを見てようやく緊張を解くヘツケラン達。まるで人食いの猛獣から子猫に戻ったような変貌ぶりに強者には変人が多いというのは本当だなと、着いてこられることについてはもはや諦める。

「わかった。では依頼の説明だが…」

詳細を話しながら、なんだかんだで自分達よりも圧倒的な強者が無償で後ろに着いてくることには有り難みを感じるヘツケラン。ワーカーの仕事というのは冒険者が請ける依頼よりも不測の事態が多いのだ。クレマンティーンが言った通り何かあった時の備えとしてはこれ以上のものはないだろう。

「よし。じゃあ出発ー」

依頼の説明が終わり、待ちきれないとばかりに出発の音頭をとるクレマンティーン。猫耳を付けた美女のその仕草に、ギャップを感じた面々は顔を見合わせ苦笑する。その様子に意外となんとかかなりそうだと、アルシエは同様に苦笑いしながら仲間達とクレマンティーンの後を追うのだった。

とある貴族から「フオーサイト」への依頼：

さる墓地にて邪神への信仰と称し定期的に邪悪な儀式を行っているとの情報が入った。生け贄に人間を使っているとの報告もある。上級貴族が顔を見せる可能性も否定できないため慎重を期して事にあたってくれ！

不死鳥の如く

「——では、そういうことで」

リ・エステイーゼ王国の王宮の一室、ラナーの部屋で秘密の会合をしていたデミウルゴスは満足気な顔で交渉を終えた。

「こちらとしても大変有意義な交渉となりました。今後何かあれば出来る限りの助力を約束致します」

丁寧な言葉でデミウルゴスに礼を言う黄金の姫、ラナーは少々予定は早まったものの問題なく計画が進みそうな状況に内心で喜びを隠しきれないでいた。クライムと結ばれるために必要な障害、その殆どがこの計画によって破壊されるためだ。

もともとはそれなりに長いスパンで建てていたクライムとの秘め事の予定だが、ここにきて一気に段階を踏み飛ばせる可能性が出てきたため喜びもやむなしというものだろう。それどころか表だった関係になれる目も出てきたのだ、ラナーのこの計画に掛ける情熱はともすればデミウルゴス以上といえるかもしれない。

「では、失礼致します」

音もなく部屋から消え去るデミウルゴス。100レベルのNPCとはいえ隠密行動にはいささか向いていない彼は、マジックアイテムとエイトエッジ・アサシンの助けにより嚴重な王宮の警備をいとも容易く突破しナザリックへの帰路についた。

そして翌日より始まるのだ。ナザリックの物資補給を解決し王国の膿を一掃する事ができ、ついでにラナーの恋のお悩みもマルッと解決する一石三鳥の作戦が。

「ふふ、どう？ 似合うでありますか？」

くるりと一回転して周囲の仲間達に問うシャルティア。かつては
フランスの秘蔵のアイテムであり今ではナザリツクの新しいワールドア
イテムである〈傾城傾国〉を身に纏ったシャルティアは、前回の任務
での失態に対する汚名返上の機会がやってきたとやる気をみなぎら
せていた。

「ええ、とても似合っていますよシャルティア。その格好ならばオー
デイン様も褒めてくださるに違いありません」

自らの主が期待を寄せるこの計画を前にして、やる気を出しすぎて
空回りしそうな同僚にわざと水を差すデミウルゴス。

「うぐっ…！　だ、だからそれは…うう」

勘違いであるのにそれを指摘出来ないジレンマにシャルティアは
一気に消沈する。もちろんデミウルゴスは全て解った上での発言だ
が。

「この計画が成功すればアインズ様にもきつと喜んで頂けるでしょ
う。シャルティア、成功の可否は貴方の働きに掛かっていると
も過言ではありません。上手くいった暁にはしっかりとアインズ様
に報告致しますよ」

少々気落ちさせ過ぎたかと、今度は上げすぎないように気を付けな
がら発奮材料を投入してみる。

「ほ、本当でありんすか!?　絶対に、絶対に成功させんしょうデミウル
ゴス！」

調度いい案配に落ち着いたシャルティア。馬鹿と鉄は使いようと
はよくいったものだ。

「ええ。では今からの任務をおさらいしてみましようか」

「えーっと、まずボウロロープ侯爵とやらに――」

「はい」

「そのあと反国王派の貴族を――」

「はい」

「最後に反逆者の身柄を――」

「オーケー、完璧です。やれば出来ると思っていましたよシャルティ
ア。本番でも手はず通りに頼みます」

信頼のおける同僚には違いないが、おつむの方はあまり宜しくないことも事実なため心配していたデミウルゴス。その心配も杞憂だったかと一安心した。

「当然でありんす。——くふ、さあ殺戮の始まりでありんすよ……」
「ダウト」
「!？」

貴女の任務の何処に殺戮の要素があるのですかと冷ややかな視線を浴びせるデミウルゴス。それに対して焦りながら言葉の綾だと弁明するシャルティア。一抹どころか百抹くらいの不安を抱えながら作戦が始まるのであった。

青天の霹靂だった——その日の事件の始まりを目にしたものは口を揃えてこういうだろう。何故ならば王国史上かつてない異常事態、王宮の占拠などという事変が荒事もなく穏やかに遂行されていたのだから。ことの始まりは夜が明けてすぐ、王国に散らばる娼館や非合法の商売を糧としている犯罪組織の拠点で暴動が起きていると王城に報告が入ったところからだ。

非合法と謳いながらもバックにつく貴族達の支援を受け堂々と商いをしている犯罪組織、通称八本指。奴隷売買、暗殺、密輸、窃盗、麻薬取引、警備、金融、賭博の八部門から構成されており、特に警備部門の上位陣「六腕」にいたっては冒険者というアダマンタイトクラスの実力者すら在籍している。

そんな組織が王都のあちこちで暴動をおこしているともなればもはや常駐している衛兵のみならず、城で待機している戦士や兵士が駆り出されるのも当然のことであった。無論、城にいる兵すべてが向か

うわけもなくある程度の戦力を残しているのは当然だが、残っている兵の大多数が反国王派の貴族の息がかかっている者ばかりであったのは偶然ではない。

そして王国戦士長をはじめ国王派の実力者を急かすように派遣した貴族達に嫌な予感を抱えながらも現場に急行した兵士達が見たものは暴動などではなく、もぬけの殻となった犯罪者達のアジトであった。

「…！ 戻るぞ！」

同様のものを目にした王国戦士長ガゼフもやはり何かおかしいと城へととんぼ返りした。そして目にしたものは固く閉ざされた王城とその前で右往左往する仲間達だった。

「おい！ 何があった！」

その中の一人に声を掛け状況を把握しようとするガゼフ。国が誇る王国戦士長から問いただされた若い兵士は緊張しながらも状況を簡潔に説明する。

「わ、私も完全には把握していませんが——」

どもりながらも起こったことを話す隊員の言葉を聴いてガゼフは耳を疑った。要約すれば兵士達が出払ったあとに何処から湧いてきたのか、裏の雰囲気を漂わせる者達が王城に雪崩れ込みその門を閉ざし、挙げ句の果てに王族に連なる者達を人質に取って立て籠ったというのだ。

「そんな馬鹿な話があるものか！ 中にいた兵士達は何をしていた！？」

信じられない事態にガゼフの横にいた副長が声を荒げて目の前の隊員を問い詰める。

「そ、それが中に居たもの達は抵抗らしい抵抗もしなかったと…」

「…ふむ」

なんとも理解し難い事態にガゼフは考えこんだ。

「どう思う？」

既に落ち着いた様子の聡明な副長に問いかけるガゼフ。混迷極まる非常事態にガゼフの頭の中ではあらゆる可能性が浮かんでは消え

堂々巡りを繰り返していたため、部下随一の切れ者である副長に意見を求めたのだ。

「あるとすれば…帝国か法国の陰謀の線が高いかと」

この意味不明の状況に敢えて答えを求めるならばそれしかない。副長は言う。国王派の大部分を追い出し籠城するなど、一見すれば遂に貴族派の暴挙が起きたのかと思えるがいくらなんでもそれはありえないだろう。国王の首をすげ替えるにしてももつとやりようがある上、こんなことをすれば国民の支持など一切受けられないのは明白である。

王国屈指の大貴族——通称六大貴族の中には王国を裏切つて帝国へ情報を流したり、私腹を肥やすことにしか興味がない愚かな輩が複数居るのは事実だ。しかしそれはやっていることが愚かというだけであり、その頭脳は狡猾なのだ。本当の無能が王国最高クラスの貴族になどなれるわけもなく、そしてそんな老獪な者達がこんな短絡的な判断をくだすことは有り得ない。

ならば犯罪組織の暴走かといえばそれもまた可能性としては限り無く低いだろう。ここ最近の犯罪組織の衰退を見れば、貴族との繋がりが消えて何かしらの異常があったのかとは窺えるがそれでもあからさまに王国に逆らい自ら破滅を招くような真似はする筈もない。ましてやこんな成功する訳もないクーデターなど愚の骨頂だ。

本気で国家転覆を狙っているのであれば、せめて王城の立て籠りと同時に貴族達の私兵が一齐に蜂起して王都に雪崩れ込むくらいのことはあつてしかるべきだろう。それもなく外部からの助力がない以上、いくら王族を人質に取ろうとも既に状況は詰んでいる。これでは態々鎮圧されるために事を起こしたようなものである。

「…奴等から何か要求はあつたのか？」

「いえ、今のところは沈黙を保っています」

じつと考え込むガゼフ。周辺諸国の陰謀だとしても目的が一切見えてこないこの状況。このクーデターに加担している貴族も犯罪組織もその後の破滅は目に見えている筈だ。

ならばここからどう巻き返すのか、奴等の成功条件はいったい何な

のか。そもそもどんな理由があれば組織の末端にいたるまでこれほどに統率して動かせるのか。

ここまで無謀な作戦に離脱者や造反者が出ないのは何故なのか。次々と浮かび上がる疑問に答えの出ないまま時は進んでいく。

全てを掌握された城内の中でも一際広い場所、玉座の間にはこの城で現状生きているもの全員が集められ拘束されていた。王族、国王派の貴族、それらを護る私兵や近衛兵、侍従や城で奉公している者達などだ。

彼等は一様に不安そうな顔で自分達の処遇がどうなるのかと考えていた。拘束している以上は生存の目もある筈だと希望を捨てていない者、既に諦めている者、眼を瞑ってひたすらに耐えている者など様々ではあるが、拘束されているにも拘わらずいまだ威厳を失わず状況を打破する術を模索している者もいた。

その名はランポツサ三世、この国の国王である。彼はこの衰退の一途を辿る王国においてそれを憂い何とか改善し民を導こうとする優しき君主であった。

その手腕はお世辞にも有能とは言えないものではあるが、民を思う気持ちは本物であり王国を繁栄させたいと願う気持ちもまた同様である。しかし彼がそれを為すにはあまりにも多くの障害があった。

永い時間をかけ腐り澱んでいった王国の膿とも言うべき闇の部分は、およそ彼一代で浄化出来るものではなかったのだ。

貴族達の快樂を満たすために犠牲になる無辜の民、帝国の長期に渡る侵略計画、王国を脅かしかねない程に力を持った六大貴族達など挙げればきりが無いほどに問題を抱えたこの国を、それでも何とか舵を取って彼は運営してきた。

幸いにして一部の部下には恵まれ、少しづつ、本当に少しづつではあったが情勢に光明も見えてきていた矢先にこの騒ぎである。国王

として貴族達の動きや反乱の兆しなどは一番警戒していた筈がこの状況だ、いったい何の冗談だと彼は心の内で悪態をつく。これほどの騒ぎの予兆を嗅ぎ付けることが出来なかったというのはいくら力の無い王とはいえないだろうと。

そしてそんな益体もないことを考えながらもこの状況を打開するため目の前で無防備に寛ぐ元臣下を睨み付ける。

「どういうつもりだ？　ボウロロープ侯爵。貴公はこれほど短絡的に行動を起こすほど愚かでは無かったと思うのだが」

無礼にも王の目の前で玉座に座る貴族に声を掛けるランポツサIII世。その声に反応して男は王の方へ顔を向けた。

彼の名はボウロロープ。侯爵の位を授けられ王国貴族の中で最も力を持つものの一角、六大貴族に名を連ねている。

王国で最大の領土を持つほか王を上回る軍事力を持つと言われ、自身も若い頃は武勇を誇った武人でもある。反王派閥たる貴族派閥の盟主として君臨し、周囲に王を軽視する態度を隠そうともしない傲慢さから国王にも最大級やな警戒されていた彼は今、悠々とした態度を崩さず話し掛けてくるかつての主を見下ろしている。

「城の外はどうなっているのだ。何故犯罪組織などを使ってこのような事をした？　何が目的だ」

ランポツサIII世も正直な答えが返ってくるとは露ほども思っていなかったが、なにかしらの反応を期待して問いかける。真っ先に身柄を奪われ兵士に戦うという選択肢すら与えられなかった自身を恥じ、せめて何かしらの情報を掴もうとしているのだ。

「ふむ、よもや問えば答えが返ってくるなどとは思っていないな？　無能ならば無能らしく大人しくしておればよいのだ、王よ」

見下した感情を隠しもせずなげやりに返答するボウロロープ侯爵。「…しかしいささか暇をもて余しているのも事実だ。その愚かさを理解させてやるのも一興ではあるか」

厳めしい顔を歪ませ尊大な態度で王と眼を合わせる。

「城の外では今頃羽虫どもがこの城の奪還を企てているだろうさ。犯罪組織を使ったのは…消えても問題が無かったからだ」

光を感じない暗い瞳で淡々と喋る様は、しんとした玉座の間にあつて酷く不気味な印象を醸し出している。

「消えてもだと…?」

外の兵士により制圧され処刑される、というニュアンスではなく既に消えているかのような物言いに疑問の声を出す。

「気付いていないとは傑作だな。いま城の中で生きている者はここに居る者だけだ。それ以外は糧となった」

「…何を言っている。糧とはなんだ。お前の目的は——」

相当数の賊が入り込んでいたのはランポッサ三世も知っている。此処に居るものこそ幹部だけのようだがそれ以外は外を見張っているものだとばかり思っていたが、はたと気付く。城内が静かすぎるのだ。あれだけの数の人間が城壁の内に入り込んでいればもう少し気配を感じてしかるべきだろう。

「糧…。貴様、悪魔にでも魂を売ったか」

その言葉の意味を想像し、まさかと思いつながらも吐き捨てるように問う。

「悪魔…：悪魔か。くく、まさにその通りよ。これこそ悪魔の所業と
言うべきものなのだろうな」

何がおかしいのか体を震わせて笑うボウロロップ侯爵。そして懐
からいかにも禍々しいデザインをした杯を取り出す。

「人の命を糧として人を操ることが出来る最高クラスのアイテム——

—〈支配の賜杯〉—

「なっ…!」

「少々面倒な手順が必要ゆえ、このようなことになってしまったがな
…。なに、間も無くだ。陽が沈めば王都の民を生け贄として、王国全
土を私が支配することとなる。全てが死をも恐れぬ従順な傀儡とな
るのだ。そうなれば帝国も恐るるに足らん。国民全員の想いが一致
するのだ、まさに理想的とは思わんか?」

そのおぞましい思想に耳を疑うランポッサ三世。

「———最近の犯罪者の減少は…!」

「そうだ、この王都に巢食う犯罪者共を操るための贄とした。そして

その犯罪者達も城の周りの羽虫を操るために糧とする。効率的だろう?」

「——狂人め!」

よくよくボウロロープ侯爵の周りにいる幹部とおぼしき者達を見てみれば、その目には一切の感情を感じない人形のようなのだ。虚ろな眼光は先の話が事実だとその身で語っている。

「馬鹿なことを! 自分以外の全てが従順になったところで何がある! その外道の果てに何を見るのだ!」

「月並みとしか言えん問いだ。そんなことは考えるまでもないことだろう? 真に優秀な者がその種族を支配する…当然の理だ」

「——っ」

もはや同じ生物とは感じられないような思考の違いに絶句するランポツサ三世。確かに傲慢であり、王の座を虎視眈々と狙っていることは知っていたがこれほどの狂気を秘めていたとは想像の埒外であった。武人であり、戦略眼や軍の指揮者としては有能極まりないこの男がどんな経緯をもってすればここまで変貌するのか。あるいはこの男も操られているのではないかとすら思える。

「くく、いい顔だ王よ。しかしその顔も見納めかと思うと案外寂しいものだな?」

玉座から立ち上がり王に近づくボウロロープ侯爵。

「なに、貴様には優秀な部下がいるではないか。あるいは操られる前にここへ助けに現れるかも知れんぞ?」

「…心にもないことを」

「いや、いや、いや、これは私にとつても賭けなのだよ。なんのリスクもなく人を操ることなどできん。この状況こそが儀式であり代価であり博打なのだ。勝ちの目も敗けの目も等分だ」

さりと重大な情報が暴露された。そしてランポツサ三世はその言葉に光明を見いだす。戦闘要員を殆ど糧にしたというのが本当ならば、つまり外の兵士達が踏み込めばこちらの勝ちということだ。

言っていることの全てがデタラメならばどうしようもないが、どちらにしてもこの状況が不味いのは間違いない。何か連絡の手段は無

いかと周囲を見渡すランポツサ三世。

しかし当然ながらそんな手段が都合よくあるはずもなく焦燥だけがただ募るのみだ。

後は自身が誇る最強の部下、ガゼフが上手くやってくれることを期待するしかないと神に祈る。そんな王の様子を見たボウロロップ侯爵は退屈そうな声を挙げる。

「ああ、それにしても時間が過ぎるのが遅いものだ。まさに恋人を待つ乙女の気分：何か余興を考えねば時間が停止したかと勘違いしてしまいかねんな」

その無骨で強面の風貌とは正反対の、詩的な表現で良いことを思い付いたとばかりに提案をするボウロロップ侯爵。

「ふむ…そうだな。王よ、ここに残している連中は犯罪組織の中でも指折りの実力者でな。アダマンタイト級の冒険者にもひけをとらぬ腕利きよ」

そう言って、かつては六腕と恐れられた者達を自慢気に紹介している。

「伏兵を警戒してこやつらだけは残していたのだがな…どうだ。この者達を倒せば後は非力な貴族が残るのみだぞ？ 我こそはと思うものは一対一の尋常な勝負を設けようじゃないか！」

この場にいる貴族の私兵や近衛兵に声を張り上げ問いかける。場がざわりと揺らぎ非戦闘者達の視線が兵士に突き刺さる。しかしその声に答えるものはいない。戦闘に身をおくもの、しかも貴族を護衛する者となればそれなりの実力者揃いなのは間違いない。そしてだからこそ、実力者であるからこそアダマンタイト級冒険者というものがどれほどの化物か理解しているからだ。人間という枠を越えた英雄の領域に届きかねない強者。それがアダマンタイト級であり、常人とは一線を隔した怪物。

座して待てば破滅が訪れようとも、だからといって今死ぬかと言われれば御免こうむりたいのが人情である。これは当然の帰結だろう。しかしそんな雰囲気の中で毅然とした声で名乗りを挙げる一人の男がいた。王の近衛でありこの場で一番の実力者でもある男だ。実質

彼が勝てなければ希望はない。

「くくつ、歓迎するぞ勇者よ。ゼロ、拘束を解いてやれ」

ボウロロープ侯爵がまさに筋肉の塊といった容貌をもつ男に命令する。その声に反応して拘束を外そうと男に近付くゼロと呼ばれた男。彼こそ六腕最強の男であり、その力はガゼフにも近いと言われる修験者だ。

「ああ、一つ忠告しておくが逃走しようとする素振りがあればその瞬間、王の首が胴体から別れを告げることになる」

忠誠を裏切ったと思われるようともまずは外部への連絡だと逃走を考えていた男は、この発言によって出鼻を挫かれる。

「…もちろんそんなことは考えていない」

目論見が見抜かれているならば闘うしかないかと己を奮い立たせる近衛。

「それは失礼したな。ではゼロよ、手加減抜きで相手をして差し上げろ」

二人が一定の距離をとり構えをとる。男の方はたとえ勝てずとも、なんとか手傷を負わして次の挑戦者が有利になるよう相討ち覚悟の捨て身の構えだ。

実力はガゼフに及ばずとも王にかける忠誠は本物であり、今こそ王国の礎となるべき瞬間だと渾身の思いを込めた大上段からの一撃を振るう。

その一閃は至誠の忠義と精神の高揚がもたらした、彼の生涯最高の一振りとなつてゼロを襲った。

そしてそれは生涯最後の一振りとなつて、かすることもなく空を切り次の瞬間には彼の首から上は硬い大理石の床とゼロの神刀すら叩き折る拳に挟み込まれ原型すら留めることなく紅い花を咲かせた。

「おお、天晴れよな。彼の生きざまは真の忠義と共に我等の魂に刻み込まれたであろう」

白々しく黙祷を捧げるボウロロープ侯爵。言葉とは裏腹に男の死に何も感じていないのは誰の目にも明らかだ。

「さあ、さあ、次は誰だ！ 王国への忠誠を示す最高の機会であるぞ

！」

場がしんと静まり返る。今の攻防を見て名乗りを挙げるのは狂人くらいのものだろう。

「…つまらんな、もう終わりか」

本心か演技か、どちらとも取れぬ落胆の様子を見せるボウロロープ侯爵。

「ふーむ、闘いも見れぬ、腹も空いていない、眠くもない…となれば。次はどうするべきかな王よ」

その目に卑しい色を混じらせ、下卑た顔で王に問い掛ける。

「貴様…！」

言わんとしていることを理解したランポツサⅢ世は殺気を込めて睨み付ける。

「まあそう殺気だつな。所詮は余興、数時間後には何の意味もなくなるだろう？」

視線を無視してつかつかと人質の中へと歩いていき、目当ての人物の前で足を止める。

「ご機嫌麗しゆう、ラナー王女。この度は退屈を紛らわせる素晴らしい遊びに誘いに参った次第です」

口調こそ丁寧だが、敬意が欠片も含まれていないその言葉にラナーは怯えることもなく毅然と男の顔を見据える。

「流石は黄金と称される姫。なにが起こるか理解しているでしょうに、まことに堂々とされておられる」

称賛しながらも腕を掴みラナーを無理矢理立たせる　ボウロロープ侯爵。後ろ手に縛られたラナーは抵抗することも出来ず引き摺られるように連れていかれる。

そしてそれでも彼女の顔には人を安心させるような笑顔が貼り付けられていた。その笑顔の届け先は当然、最愛の人クライムである。

——心配しないで——

そんな感情を伝えるかのような笑顔にクライムは胸が搔きむしられるような激情が体を巡るのを感じていた。クライムにとって自分を救ってくれた恩人であり、赦されないと解つていながらも抱くほの

かな恋心を向ける人であり、常に民を思う心優しき聖女のような女性であるラナー。

「そんな大切な女性が最悪の人非人に花を散らされようとしている。クライムにとつてそれは絶対にあり得てはならないことだ。たとえ自分の恋心が叶うことはなくともラナーは幸せにならねばならない、こんなところで純潔を喪うなどということは絶対に認められない。」

そう、たとえ自分の命を失おうともだ。

「待て！」

その眼に強い輝きを灯らせ静寂が包む場に精一杯の声を響かせる。

「——闘うとも！ 私が相手だ！」

勝てないことも理解している、死ぬことが明らかなのも解っている、それでもラナーのためにクライムは立ち上がった。一分一秒でもラナーに魔の手が及ぶことを阻止するため、そのただけにありつたけの勇気を振り絞る。

後ろ手に縛られていようとも、脚が震えていようとも、それがどれだけ情けなくとも、その勇姿は見るものの心を感嘆させた。

薄汚れた捨て子の生まれと蔑んでいたメイドも、分不相応だと王女の護衛の地位を妬んでいた兵士も、娘の気紛れだとクライムの名前すら覚えていなかった王も、みな一様にこの小さな勇者に偉大な敬意を感じていた。たとえ数分後に死ぬことが解っていてもだ。

「——つくく。そうか、そうか。なんとも麗しい主従愛だ。それともそれ以上の感情でも持つておるのかな？」

からかうように嗤うボウロロープ侯爵。

「その御方は私にとって何よりも大切な御方だ。それ以上の狼藉は許さない」

そんな嘲笑を射にも止めず啖呵をきるクライム。既に脚の震えは止まっていた。

「よかろう。ペシュリアン、次はお前だ」

その声に反応して前に出たのは、全てが黒で統一された全身鎧の男であった。不気味な雰囲気でクライムの前に立つペシュリアン。

「——っ！っ！……！」

せめて気概だけは負けまいと気炎を上げるクライム。しかしそんな覚悟も虚しく、反応すら出来ない斬撃が彼の右半身を襲った。

「ぐ、っあああ!!」

開始早々に右腕を失うクライム。目にも止まらぬ斬撃を食らい、氣付いた時には落下していたのだ。

「ぐう、っまだだっ！」

それでも果敢に足を踏ん張り戦闘を継続するクライム。失血死まで後何分かといやに冷静な頭で思考する。

「——はあっ！」

片腕で果敢に攻めるものの、元より離れている実力差は怪我のため余計にそれを感じさせる。

鎧に傷すら付けられず、刻一刻と死が近づく。目がぼやけ、かすみ、血が頭に巡らず思考すら億劫になる中でクライムは片足が切り飛ばされたのを感じた。

もはや痛みすら感じぬ絶望の中で、それでも剣を支えにして立ち上がる。彼を動かすのは心で輝く黄金の煌めき故か。

血塗れになりながら尚も立ち向かうその姿は、まさに不屈の英雄であり見るものの魂を震わせた。

だがそれも時間にすれば数分のこと、生物の物理的な限界が当然の如くやってきて片方しか無い膝を地に打ちつかせる。

「くく、まさかここまで食い下がるとは予想もしていなかったぞ小僧」
もはや虫の息と成り果てたクライムの前にボウロロープ侯爵が近づく。血溜まりに臥すその姿を見て愉悦の表情を隠しもせずクライムを嘲笑う。

「まさに勇者。貴様の活躍はなんと王女の純潔を数分も護ることが出来たのだ。……くくっ、誇るべきことよ」

一頻り嗤った後はクライムの頭の前にしやがみこみ、髪の毛を乱暴に掴み正面を向かせる。

「褒美をやろう。骸となった後もその眼に王女が凌辱される様を焼き付ける榮譽に与らせてやろうではないか！」

悪逆非道という言葉すら生温い外道の極みを前に、クライムは瀕死でありながらもいまだ意識の糸を繋ぎ止めていた。蜘蛛の糸より細いそれは耳に入る言葉を理解することは出来ずとも、今が最大の好機であることは理解していた。

「——う」

体は既に大半の血液を失い、体温は死人のそれへ近付いている。目も見えず、意識は落ちる寸前で四肢の半分は千切れている。満身創痍という言葉が優しく感じられるほどのその凄惨なありさまで、かろうじて生きているそのありさまで、残る腕が動いたのはきつと奇跡というものだったのだろう。

神が力を貸したのか、悪魔が力を寄越したのか、最後の力を振り絞った斬撃はボウロロープ侯爵の懐の杯すら貫通しその心の臓を確かに貫いていた。

「？」

自身の胸から生える剣を不思議そうに見詰める侯爵。それがいったいどういうことなのかを理解する前に彼はその生涯に幕を閉じ、事切れた。そしてその命を奪った若き勇者もその後を追うように命の灯火が小さくなっていく。

「——クライムっ！」

心配そうな声が遠くに聞こえる。クライムは最愛の女性を護れたことに安堵の笑みを漏らし瞼を閉じた。ああ、なんて幸せな人生だったのだろうかと神の導きに感謝しながら、今度こそ意識は闇に沈んでいったのだった。

「…ということがあったそうです」

「か、かつこいいですねえ」

宿屋の一室で今日の情報収集の結果をオデンキングに話すアインズ。ツアレとニニヤの再会の後、その日は姉妹水入らずで過ごさせようと意見が一致したため自由行動と相成ったのだ。

ニニヤを除く漆黒の剣のパーティはオデンキングから渡された情報を元に足場固めを、アインズ達一行はギルド以外での情報収集を、オデンキングは情報収集という名の食べ歩きをそれぞれ行っていた。「その子はどうなったんですか？」

「治療が間に合ったとか蘇生されたとか情報が錯綜してましたけど、生きてるらしいですよ。なんでも王女との婚約が認められたとかどうとか」

「おお、王道といふかなんというか…羨ましい」

「オーデインさんの方は何か目新しい情報を掴めましたか？」

「うーん、そうですねえ…。その話みたいの詳細ではなかったですけど似たり寄ったりでした。後は情報といふかなんというかですけど、帝都の方が明らかに活気づいてました。店の数や値段、街の整備から見ても相当に国力に差がありそうですよ」

食べ歩きしつつも店を回って気付いたことを指摘する。

「まあ、もちろん騒動のせいで状況が違うってのもあるでしょうけど。何にしても帝国が王国を取り込むってのも信憑性がありますね」

帝国で収集していた情報の中にそういった話があったのは知っていたオデンキングだが、実際に現地に来ると充分にありえる事だと実感した。

「なるほど…。しかし法国の人間が言う通り、人類同士での不毛な争いは絶えないみたいですね」

この世界は純粋な人間種の生存圏は全体から見れば非常に狭いだ。亜人や人外は人間種とは根本的に基本性能の差が違い、数の差ですら劣っているとすれば今の時点で諸国が国として体裁を保っているのは奇跡のようなものだ。とはいえその奇跡とは神でも悪魔でも

クレマンティーヌとアルシエの帝都散策記 4
くフォーサイトとの冒険く

帝国の某所、とある墓地で日が暮れる前から潜んでいるフォーサイトの面々。趣味の悪い会合が開かれるのは深夜と聞き及んでいた彼等は巧妙に隠された入口が見える場所に潜み、出入する人物の顔や数を確認していた。

「まあわかつちやいたが、どいつもこいつも顔は隠してんな」

趣味の悪い仮面をつけている者やフードを目深に被っている者など、違いはあるが誰一人として素顔を見せている者はいないためヘツケランがつまらなさそうにぼやく。

「まあ不味いことをしてる自覚くらいはあるんでしょ。やってることは全く理解できないけど」

邪神信仰など欠片すら理解したくもないイミーナはそう吐き捨てる。

「どうかねー。お貴族様の考えることなんざこれっぽっちもわかんねえぜ」

恋人の言葉に適当な返事をしつつ、ふと横に目をやったヘツケランは居心地悪そうにしているアルシエに気付く。

「あつ、いや、すまんアルシエ。別にお前の事をどうこう言ってるわけ

じや…」

目の前の妹分も元貴族だったことを今更ながらに思いだし、失言を詫びるヘツケラン。

「いい。それよりも少し静かに」

リーダーの性格はよく知っているアルシエは、先の言葉が嫌味などではなく単に思ったことを口にしたただだと理解しているため謝罪よりも声量の方を気にして、焦るヘツケランを諫める。

「すまん」

ヘツケランもそれを自覚して簡潔に一言だけで返す。

「そろそろ頃合いではないですか？　最後に人が入ってからかなり経ちますが…」

無言で出入口に集中していたロバーデイクがそう発言する。その言葉通り、暫く前までは忙しく出入りがあつた場所も今は何の気配もなく静寂に包まれている。

「そーそー。ヒュツと入ってズバツと皆殺しにしちやおー」

暇潰しに来たというのにずっと待ち伏せの態勢を維持していたため痺れを切らすクレマンティヌ。むしろここまで待ったあたり成長の程が窺えるというものだ。

「だからそんな任務じゃ無えつつつてん——」

「あ？」

「ですからそのような任務ではないことをご理解頂きたい——」

リーダーとしてこの意志の弱さは大丈夫なのだろうか。ヘツケランはへりくだりながら宥め、すかし、どうにかこうにかクレマンティヌを落ち着かせることに成功する。

「護衛は私がもろうからねー」

落ち着いたものの、戦闘無しにはこの任務を終わらせてくれそうにないクレマンティヌ。出来る限り貴族の正体を暴き、確認すること。確たる証拠があれば尚よし、そういった条件で雇われているフオーサイト。

内部の構造も護衛の数も把握出来ていない現状では、無謀に突入するよりかはある程度人数に絞りをつけて帰りを尾行した方が安全性

は高い。

しかし正体を看破した人数が多ければ多いほど報酬は高くなる条件だ。そもそもフォーサイトはこの依頼が回ってきたのは貴族崩れであるアルシエが居るからこそだった。

貴族として生きてきたからには一定数の貴族の名前と顔を覚えているのは当然。だからこそ出入口を見張り、穩便に高報酬をゲットしようと思論んでいた彼等であった。

しかし予想していたとはいえ一番楽な方法のあてが外れた以上次の一手を打たねばならない。ヘツケランが一番安全な方法を取ろうと思っていたが、その矢先にこのクレマンティーヌの発言だ。どうしたものかと他のメンバーの顔を見る。

「イミー——」

サツ

「ロ——」

サツ

「お、お前らあ……」

現実は無情なのである。まあリーダーが方針を決定するというのは間違いではないだろう。

「提案がある」

しかしそんな非情な仲間の中でアルシエだけがヘツケランから顔を逸らさず発言する。

「おおアルシエ、頼れるのはお前だけだ……」

主にクレマンティーヌのせいでもん弱気になっていくヘツケラン。逆にクレマンティーヌのおかげでもん凶太くなっていくアルシエ。リーダーを交代する日も近いのかもしれない。

「クレねえを入口に突っ込んで中に居る全員が行動不能になった後、私達が突入して顔を確認していけばいい」

凶太すぎである。

「いやいやいやいや」

それ作戦じゃねえから！ とツツコミを入れるヘツケラン。しかしもう遅かった、アルシエがこの発言をした時点で賽は投げられたの

である。

「行つてきまーす」

「いってらっしゃい」

「ちよつまっ——」

そう、アルシエもまたクレマンティーヌ色に染められつつあったのだ。

裏社会に生きる邪神の信者は従順で強い護衛を求めていた。邪神を信仰する彼等は情報の拡散を防ぐために護衛ですら最低限にしていた。

しかしおよそ一月ほど前に、あのガゼフにすら勝てると嘯いていた護衛が姿をくらましたために夜会を行うことが難しくなったのだ。

ガゼフ云々は誇張であるにしても、墓地に現れたアンデッドを瞬殺した手腕を見れば相当な強者だとは解っていた。しかし口止め料を含んだそれなりに高額な料金を払っていたにもかかわらず突然の失踪だ。

法国の動きに変化があつた時期と重なつたためになんとなく察した者は夜会にも居たが、今更に夜会を抜けるとあつては裏切りの制裁は免れぬと暫くは互いが互いを監視する疑心暗鬼の悪循環に陥つた。少々集まりを自粛すべきという意見が多数を占め、どちらにしても優秀で口の固い護衛が居なくなつたために集まることは出来ない。一月近く夜会は開かれる事がなかつた。

そんな折に、熱心な信者の耳に再起不能にされた実力者の噂が入ってきた。

曰く、性格は最悪であるが実力は剣技だけならばアダマンタイト級の冒険者にもひけを取らぬという腕前らしい。これ幸いとばかりに瀕死の彼に逆らえぬ契約を持ち掛け、金にあかせて治療をした信者。

それが想像を越えた拾い物であつたことに喜び、ようやく儀式を続

けることが出来ると嬉々として他の信者への通達を行った。

そして今日は新しい護衛が出来てから2回目の夜会、邪神への供物もすっかりと用意した彼は今か今かと信者が揃うのを待ちわびていた。彼が儀式の間にきておおよそ2時間、やっと揃った信者達を前にして儀式の開始を厳かに宣言する。

「――では、これより儀式を開始する」

人間とは成長する生き物である。環境に適応し、逆境に堪え忍び、知恵を絞り、進化をしていく生き物である。

そしてその中でもほんの一握りの突然変異が、種族としての人類を次のステージへと引き上げ繁栄へと導くのだ。

それは畏怖や尊敬を込めて「神人」「逸脱者」「英雄」などと呼称されることもある。人間の領域を越えた人間。言い得て妙であるがそういうものなのだ。そしてこの夜会の護衛にもその領域へほんの指先ではあるが到達しかけている者が居た。

彼はたった数日前に人生の全てを失い、絶望のどん底に這いつくばっていた。四肢は動かせず、視界は永遠に閉ざされ、喋ることすら出来ない地獄を味わった。

人徳というものを全く持ち合わせていなかった彼を助ける者はおらず、そのまま惨めに死んでいくしかなかった。だがそんな彼にも救いの手が現れる。邪神信仰の信者だ。

それは悪魔の契約ではあったものの契約通り治療を受けることが出来た。しかし不幸にもその両目だけは輝きを取り戻すことは出来なかつたのである。

眼球はしっかりと復活したのだが視界は暗闇に閉ざされたままなのだ。神官によればそれは心因性のものであり、脳が見ることを拒ん

でいるという。

シヨックによつて怪我の原因を忘れ、それどころか人格すら変わつてしまった彼だが、このままでは結局棄てられてしまふと考えなんとか戦う術を模索した。

普通なら失明した人間が戦うなどと言えは失笑ものだろう。だが生憎と彼は普通ではなかつたのだ。

たつた、一日。

かつて天才と言われた彼の剣技だがそんなものは歯牙にもかけぬ才能、周囲の知覚という技能において彼は人類の中でも突出していたのだ。

目が見えぬことによつて開花したその才能は砂が水を吸うようにどんどんと洗練されていった。

5 m、10 m、15 mとその知覚領域を瞬く間に伸ばし、地に生える雑草の数まで瞬時に把握出来るほどの感覚の鋭敏化。治療が終わつて二日目には既にかつての彼を越えていたというのはなんとという皮肉だろうか。とにもかくにも、彼は英雄の領域への一步を踏み出したのだ。

——そして彼は悪夢と再会する。

「ここは通さ——ゲフウツ！」

「弱っ。強いのはもつと奥かなー？」

開始3秒。かつての戦いよりも短い攻防は彼にとっては幸運だつ

たのかもしれない。

その後は語るまでも無いだろう。ただ皇帝の権力が増し、クレマン
ティーヌが欲求を満たせず憤慨し、フォーサイトの懐が非常に暖まっ
たというだけのことだ。

死が二人を別つまで

情報収集も一段落し漆黒の剣とも一旦別れを告げたアインズ達。一度ナザリックへ帰ろうとアインズが提案したため《ゲート／転移門》の魔法で帰還した。

ちなみにツアレは感動の再会の後、改めてナザリックへの所属を希望したためそのままセバスの預かりとなって館に残っている。

《ゲート／転移門》で転移出来る限界まで移動し、残りは徒歩で進んでいくオデンキング。アインズは律儀にもそれに付き合っていた。

ちなみにナーベラルはアインズの帰還を伝えるために先を行っており、アウラは蜥蜴人のザリユースと会う約束をしていたためそのままトブの大森林へ向かった。

「それにしても一回冒険に行くだけの予定がえらい長くなっちゃいましたねー」

長い息抜きだったと笑うオデンキング。しかしフルーダに魔法を教導するという名目でかなりの金額を貰っている彼はその仕事を殆んどしていないので笑っている場合ではない。

「ですね。少しアルベドに会うのが怖いんですが……」

顔を合わせた瞬間にどこかへ連れ込まれそうだと戦々恐々としているアインズ。死の支配者の威厳は一体どこに行つたのだろうか。

「はは……まあ頑張ってください。支配者ロールしていると苦労しますねーホント」

他人事のように言うオデンキング。まあまさしく他人事ではあるのだがアルベドをけしかけた事についてはどこ吹く風である。

「いや本当に後悔してるんですよ。情けない部分は見せられないというか……。この前も王国からの招待状を受け取った時について読める振りなんかしちやつて、そのせいで色々あつてまだ読んでないんですね」

ハハハと空笑いするアインズ。そんなことでお亡くなりになった王国の犯罪者達にはまったくもって笑えない話だろう。

「それはまた……っていうか流石にそれはまずいんじゃないですか？

かりにも王族からの招待状ですよ」

権力に弱いオデンキングである。

「…やっぱりそうでしょうか？ 参ったな…デミウルゴスになんて言ったものか」

頭を掻くアインズ。その毛髪の無い頭に汗など出ようはずもないが人間だった頃の名残だろう。

「ロールはロールとして、流石に字が読めないってのはすぐバレそうですね。素直に実は読めなかったんだって言えばいいんじゃないですか？」

「うむむ…大丈夫ですかね？ 威厳とか」

「(笑)」

「おい」

「冗談ですって。まああれだけ忠誠心が高いんだから大丈夫だと思いますけど」

普段の言動を見ればアインズが何をしようとも問題なさそうなのは間違いないだろう。逆にどこまで許容してくれるのか試してみたいと考えるオデンキング。友人として最悪である。

「でももうちょっと皆のこと信用してあげてもいいんじゃないですか？ あれだけアインズさんのこと慕ってるんですから」

流石に用心深すぎるのではなからうかと、ナザリツクの忠臣達を思い浮かべ助言するオデンキング。

「いや、流石にもう忠誠を疑ったりしてるわけじゃないですよ。ただ、なんというか…今更はちよつと言いくいというか…ありませんか？ そういうこと」

言った方が良いことは明らかなのに中々言えない、そんなことは誰しも経験があるだろう。アインズとて元は人間なのだ、そんな心境も仕方無いのかもしれない。

「あー……。ホモをカミングアウトするのを躊躇うような感じですか？」

「おい」

「冗談ですって。じゃあ俺も手伝いますから話の流れで自然な感じに

持っていったらいいんじゃないですか？」

「おふざけは無いですよっ。」

「……………当然ですとも」

アインズに目を合わさずに怪しき100%で答えるオデンキング。これを信用出来るなら詐欺師でも信用出来るというものだ。

「じゃあ帰還の顔合わせが終わったら言ってみます。…くれぐれも頼みましたよ?」

何度も念押しするアインズ。そこまで言うなら自分だけでやればいいのだがそれは嫌らしい。そうこうしている内に玉座の間に到着する二人。いざ入れば任務でナザリックから出ている者達以外の守護者とプレアデス、それに加えてアルベドが待ち構えていた。

全員が跪きながら帰還を喜び、それに対しアインズは鷹揚に構え威厳を見せつける。オデンキングは思った。絶対さつき言ったこと忘れてるだろこいつ、と。

「何事もなかったようだなによりだ。まあ、お前達がいて不測の事態などというものがあるとは思っていないがな」

忠誠MAXの配下にはこんな感じで言えば喜ぶとアインズもそろそろ学習済みだ。本心ではもっと色々褒めたいとは思っているのだがそれをすると涙を溢しかねないのでわざと控え目になっているのだ。

「勿体ない御言葉。そう言っていただけで我等には至上の喜びでございます」

アルベドが統括として言葉を述べる。久しぶりのまともな姿にアインズも一安心だ。

「うむ。まあこちらもたいしたことがあったわけではないのでな、お前達はそれぞれの持ち場に戻るがいい。…ああ、デミウルゴスはこの場に残ってくれ」

少し緊張しながらそう告げるアインズ。その言葉を聞いて各々が部屋を後にする。アルベドだけは名残惜しそうにちらちらと振り返りながら扉を閉めた。

「ゴホンッ。…デミウルゴスよ、私が居ない間はしっかりとやってくれたようだな。流石だと言っておこう」

わざわざ自分だけを残して誉め言葉を掛けるアインズにデミウルゴスは謙遜しながらも内心は感動の嵐が吹き荒れている。

「で、だな。少し言いにくいのだが…お前に伝えなければならぬところがあるのだ」

「はっ」

叡知溢れる偉大な主が伝えにくいこととは一体なんだろうかと、デミウルゴスは一言一句聞き漏らさぬようアインズ言葉に集中する。

「王国からの招待状の件なのだが…覚えているか？」

「はっ。文面全て暗記しております」

ここで全て諳じることすら可能という言葉聞いてアインズの顔がひきつる。まあ顔はないが。

「そ、そうか。それほどか、うん」

余計に言いにくくなったためアインズは横で立っているオデンキングに視線で助けを求め。

(まだ何も言っていないですか!?)

(もう無理。マジ無理。)

視線で会話しながら威厳もへったくれもないやりとりを交わす二人。結局はオデンキングの方が折れてデミウルゴスに話し掛けることになった。

「あー、デミウルゴスも解つてるとは思うんだけどさ、やっぱりナザリックに所属するものとして外部の人間に侮られたりしないようにするのは当然のことだよな？」

主の代わりに話し始めたオデンキングを見て不可解な顔をしつつもその問いに当然ですと答えるデミウルゴス。

「で、俺達はまだこの世界にきて日が浅い訳だから常識とか文化とかに疎い部分もあるわけだ」

至極当たり前のことを話すオデンキングの言葉に頷きながらそのまま耳を傾ける。

「となると現地の住人と話す時は知識が不足していることを悟られないようにすることも場合によっては必要になってくる。軽々に質問を繰り返して無知と思われるなんて愚の骨頂だよな？」

その通りだと言葉を返すデミウルゴス。全知全能に限りなく近い主を、ただ世界の違いによる知識不足というだけで侮るなど百度の拷問にかけようとも許せるものではない。

「そう。文化、常識……それに文字もだ。確かにアインズさんは知識に於いて他の追隨を許さない程だけど、異言語の文字を修得するともなれば相応に時間がかかるのも当然だ。ここにきて色々やることだらけの中じゃそんな時間もそうそう取れるわけもない」

そんなオデンキングの言葉を聞いて、更にアインズの優秀な知能に敬服するデミウルゴス。そこまでの状態にあつてなおこの世界の文字を修得しているのは素晴らしいとしか言いようがない、と。オデンキングは友として主の偉大さを誉め称えているのかとデミウルゴスは推測する。

「要するに何が言いたいかというとアインズさんはまだこつちの世界の文字読めないんだ。前に招待状貰ったときは蒼の薔薇の手前、読む振りをしたただけなんだって。まあデミウルゴスなら解つてるとは思うけど、一応アインズさんも招待状に目を通したらしいから返して欲しいなーって……ちよっ！ どうしたのデミウルゴス!？」

真つ青どころか灰にでもなったように白く固まるデミウルゴス。アインズが文字を読めないということはこの数日の全てが自分の先走りであり深読みのし過ぎであると、その聡明な頭脳で瞬時に思い至ったためだ。頭のいいデミウルゴスなら全部わかってたよね、というていで責任を感じさせるように誘導したオデンキングのせいでもある。

「も……もう……しわけ……」

日々の疲れがたまり仕事に次ぐ仕事、同僚の暴走に尻拭い。そんな中でも主から期待された仕事を完遂し、その功績を誉められるのかと思えばまさかのこの結末。失態への対応に疲労した頭を巡らせ、主からの失望の目を向けられる恐怖に耐え、今までの反動が一気にきたデミウルゴス。

どうなるかは明白というものだ。彼は気絶してしまった。

「す、すいませんアインズさん。まさかここまでショックを受けるな

んて……！」

「い、いえ、私も流石に予想外でした……。とにかく治療をしなければ！」

この場合ポーシヨンで効くんでしょうか」

耐性により冷静になったアインズは焦らずに検証する。

「うーん、ダメージではないでしょうし状態異常つてわけでもないですから起きるのを待つしかないんじゃないでしょうか」

至極真つ当な意見をだすオデンキング。自分の発言で倒れたともなれば流石に罪悪感があるようだ。

「あまり騒ぎにするのもまずいですね……私の部屋で寝かせましょう」

守護者が倒れたなどという情報がナザリック中に回ればパニツクになる可能性がある。なによりデミウルゴスが倒れた理由を考えれば素直に話すわけにもいかない。アインズは考えた。

「了解です。じゃあ俺はコキユートスにちよつと会ってきますね。いくらなんでもさっきの発言だけで倒れたとは思えないですし、デミウルゴスと仲の良いコキユートスならなんか知ってるかもしれないですから」

「ええ、すみませんがお願いします」

そういつてデミウルゴスを抱き抱えるアインズ。アルベドやシャルティアがいれば泣いて羨ましがる光景だ。そうしてアインズと別れたオデンキングはコキユートスの元へ向かおうと階層を上がっていく。が、その途中でそわそわと挙動不審な様子のシャルティアに出会った。

「あれ、こんなところでどしたのシャルティア。一階層の守護は大丈夫なのか？」

アインズのそれぞれの持ち場という指示でみな所定の位置に戻っていると思っていたオデンキングはこんな中途半端な場所でシャルティアに出くわすとは思っていなかった。

「オーデイン様。その……アインズ様とデミウルゴスのお話はどうでありましたか？ わ、妾の話などは出たりしたでありませんか？」

アインズが態々デミウルゴスを残したのは作戦の成功を誉めるためだと推測したシャルティア。となれば約束通り、見事に作戦を成功

に導いた自分のことを前面に押し出してくれた筈だと期待してオデンキングに聞いてみたのだ。

「え？ あー、いや、そうだな…」

アインズがあまり情報を拡散したくないと言っていたためにシャルティアに言うべきかどうか悩むオデンキング。立場だけ見れば言ってもいいものかと思うがシャルティアのおつむが弱いのは周知の事実だ。

うっかり口を滑らした日にはすっかり情報が広まっていたなんてこともあるかもしれない。オデンキングは考えた末に取り敢えずは伝えないようにしようと決断した。

それは賢明な判断ではあったが、今この時だけは悪手だったと言わざるを得ないだろう。

「うん、別にそんな話は出なかったよ。アインズさんがデミウルゴスを誉めておしまい。とくに何かあったわけじゃないから気にせず…」

オデンキングとしては数日間ナザリックを任されたデミウルゴスをアインズが誉めたという認識であるが、シャルティアにとつてその言葉はデミウルゴスの裏切りを耳にしたと同義である。

「そ、そ…んな…。デ、デミウルゴスウ…!」

その場に崩れ落ちながら怨嗟の声を吐き出すシャルティア。まさかまさかの裏切りである。予想だにしていなかった事態に、悔恨と憤怒と疑念が心で渦を巻いていく。

何故、どうして、いったい何があったのか、こんなことは認められるものかこの状況を挽回するために頭をフル回転させるシャルティア。しかし彼女に良い案が浮かぶわけもなく、結局選んだのはアインズに自分の活躍を報告するというなんの捻りもない案だった。

「失礼するでありんす！ アインズ様ああ！ 今参ります！」

急に立ち上がり爆走するシャルティアを見てオデンキングは目を皿のようにしながら当初の目的であるコキュートスの元へ向かうのだった。

「やっぱシャルティアって変な子だなあ…」

自分のことは棚上げである。

「アインズ様！」

玉座の間に通ずる扉を開け放ちシャルティアは自らの主へと勢いよく声を掛ける。デミウルゴスを私室へと寝かせたあとオデンキングを待っていたアインズは思いもよらない人物の登場に驚いた。

「はあ、はあ、はあ、アインズ様！ 話したいことがあります！」

「そ、そうか。言ってみるがいい」

あまりの勢いについて反射的に肯定してしまったアインズ。その言葉に喜色を満面にして自分の功績を鼻息を荒くしながらシャルティアは伝え始める。

「数日前の王都のクーデターの一件でありんですが、何を隠そう、その立役者は妾でありんす！」

「な、なんだと!?!」

「貴族や犯罪者共を洗脳して反乱を扇動したのもこのシャルティアが!?!」

「ば、馬鹿な!?!」

「その犯罪者共をこのナザリックに運び皮を剥ぎ取り物資の調達の一助ともなったでありんす！」

「な、なんとという…!」

手で顔を覆うアインズ。そして興奮したシャルティアはその様子に気が付かなかった。

「さ、さらに——」

更に話を盛ろうとしたシャルティアだがそれを遮るように行の間扉が開く。

「ア、アインズさん！」

オデンキングである。

コキユートスに王都の一件の話を聞いたオデンキング。その全てがアインズの計算の内であり多くの人間を掌で踊らせたと聞いたオデンキングは真偽を問うために急ぎ足で玉座の間に戻ってきたのだ。「オ、オーディンさん……。どうしたんですかそんなに焦って」

自分も頭がこんがらがっているアインズだが、随分と焦っている友人を見て幾分か落ち着いていた。しかし次の言葉により更にアインズを混乱が襲う。

「王都の騒ぎの全てがアインズさんの仕業だって本当ですか!? なんでも一言だけでも言ってくれなかつたんですか!?」

「ちよ、ええええ!」

シャルティアからの寝耳に水な報告を聞いたと思ったらそれが自分のせいだった。意味不明である。

「そ、その騒ぎの殆どは私の手によるものでありんす! オーディン様!」

「や、やっぱり本当だったのか!」

シャルティアが実行犯ということは指示したのはアインズであるということだ。当然の如き考えに至りオデンキングはショックを受ける。

「いやいやいや、ちょっと待ってください! いったい何がどうなつて——」

混乱するアインズだが、更に場を混沌とさせる者が乱入する。

「アインズ様!」

アインズの私室で寝ていた筈のデミウルゴスだ。彼は目覚めた後に状況を把握したあと、真つ先にアインズの元へ向かったのだ。何を置いても、まずは自分の失態を報告して裁きを受けねばと。そして玉座の間に居るアインズとシャルティア、ついでにオデンキングを見てその状況をおおよそ悟った。流石の悪魔の頭脳である。

「アインズ様、この度の一件に於いて全ては私が行った事でございませぬ。シャルティアには何も関係の無いこと。どうかご慈悲を」

訂正。彼はまだ疲れていたようだ。

「こ、この期に及んで……! デミウルゴス、覚悟は出来ているでありん

すか？ もうアインズ様は全てをぐっ存じよ」

事がここに至ってもまだ自分の功績をなきものにしようとするデミウルゴスを見てシャルティアは怒りを顕にする。デミウルゴスはその言葉を聞いて全て承知の上だと覚悟を決めた顔で頷く。早とちりして先走ったのは自分なのだ。

実行するにあたってシャルティアが多くの仕事をこなしたのは事実だが、だからといってその責を彼女に負わせるわけにはいかないのだ。

だからこそ見え透いた嘘であろうとも責任は全て自分にあると伝えるしかなかった。慈悲深き主がその意を汲んでくれると確信して。「ええ…。シャルティア、貴女は何もしていない。そういうことです。アインズ様もきつと理解してください。全ては私が招いた事実なのですから」

どんとと火に油を注いでいくデミウルゴス。もはや爆発寸前である。

「こ、か、かひゅっ…！」

物理的にブチブチと何かが切れている様な音を立ててシャルティアは怒りに耐える。ここまで侮辱されるのは生まれて始めてだろう。ギリギリのところまで戦闘に発展しないのはアインズの御前ゆえか。

「アインズ様！ 正しき判断をなさって下さい！」

「アインズ様！ 全てはこのデミウルゴスが招いた事態でございませよ！」

「アインズさん！ いったいどうしちゃったんですか!?!」

アインズ様、アインズ様、アインズさんと三者三様に返答を求める様子にアインズは一言呟くしかなかった。

「何だこれ…」

弁明の夜は長くなりそうだ。

ゴブリン。それはこの世界に生きる種族としては下から数えた方が早いほど脆弱な種族である。人間の成人男性であれば多少苦勞すればなんとか倒せるといったものだ。

無論固体差はあるし、中には永い時を生き抜いた歴戦ともいうべき強い固体もいるだろう。だが総じて評価するならばやはり大した強さを持たぬというのが冒険者やワーカーの見解である。それは冒険者ギルドが斡旋する仕事に於いても下級ランクとされている事実から見ても妥当な評価だ。

だがそんなゴブリンでも脅威となることがある。それはその旺盛な繁殖力と周囲の環境が噛み合ったときにおこるゴブリンの異常発生だ。

数とは力であり、分母が大きくなれば突然変異で現れる強力な固体やゴブリンシャーマンといった魔法を使うゴブリンすら内包するようになるのだ。

特に万の単位を超えはじめれば小国すら落としかねない恐ろしさをもつ。そんなゴブリンの王国が、人が殆ど足を踏み入れない領域であるトブの大森林で形成されつつあった。普段ならばここまでの事態になる前に人類の守護者たる法国が間引きをし、大事に至る前に叩くのが常であった。

しかしそういった任務がメインである陽光聖典の壊滅、更には国を亡ぼしかねない勢力の出現により優先順位が下に置かれた結果ゴブリンの王国はその数を増やし、着々とその勢力を増強しつつあったの

だ。

もう暫く経てばそれは強大なトロールやナーガ、集落を形成する蜥蜴人すら呑み込んで大森林そのものを勢力下に起きかねないほどだ。

そしてそんな物騒な森に足を踏み入れる5人の男女がいた。クレマンティーンとフォーサイトの面々だ。フォーサイトは数日前の依頼の褒賞金によりかなりの金貨を手に入れることが出来、その結果として装備の新調していた。

駆け出しなどが夢見る、魔法が掛けられた装備を全身に付けた彼等は誰が見ても歴戦の強者だ。特にアルシエなどは家庭の事情により装備の新調をしたことがなかったので喜びもひとしおだ。

そんな彼等が何故トブの大森林に踏み込んでいるか——端的に言えば新しい装備を試すためである。

それだけならばカツツエ平野など近場で試す場所は幾らでもあったのだが、またもやクレマンティーンが着いてくると知ったヘツケランは行き先を急遽変更することに決めたのだ。

カツツエ平野はアンデッドが溢れる地であり、全容は知れずとも結果と報酬は判りきったものとなるのはヘツケランも理解していた。対してトブの大森林はいまだに奥深くは人類未踏の地であり、新しい発見が期待出来るのだ。

当然それは装備を新調したとはいえ危険が伴うのは間違いない、間違いないのだが、クレマンティーンが居るとなれば話は別だ。ここまでの強者が報酬無しに着いてくるとなれば今まで二の足を踏んでいたことをやるのも吝かではない。

意外と強かなヘツケランであった。もしくはクレマンティーンのせいで彼も変わってきたのかもしれない。

「にしてもアルシエの装備、なんだか可愛いわねー。それで各種耐性アップなんてお買得だわ」

フードつきのローブにちよこんと猫耳が乗ったアルシエの装備は中々に可愛らしくフォーサイトの面々も口々に持て囃す。

「性能が良かっただけ」

その言葉は事実ではあったが、何度も誉められることに対する照れ隠しでもある。

「そういえば姐さんも何気にその装備すごいよね。王国の方で買ったの？」

すでにクレマンティーナに馴染みつつあるイミーナは気軽に声を掛ける。呼び方は自然とそうなったようだ。

「んー？ これは貰い物。良い装備なのは事実だけど」

かつて装備していた趣味の悪いプレート防具は既に変わっており、ナザリツクに滞在していた時にオデンキングがアインズに頼んで伝説級の防具を見繕ったものである。

そういった細かな恩があるからこそ帝国で得た情報や金貨は殆どナザリツクに流れているのだ。

「こ、こんなすげえ装備くれるやついんのかよ。どんだけ奇特なやつなんだ？」

金貨を山のように積んでも手に入りそうにない装備を見て、それを貰ったと言うクレマンティーナの言葉に驚愕するヘツケラン。ちなみに内心ではきつと奪ったものだろうなと確信していた。

「んー、奇特というかなんと…私よりも強いしこの装備よりももっと凄い装備してるしね」

ナザリツクにはこんな装備よりも更にとんでもない装備があることは間違いないだろうとクレマンティーナは思っている。それは事実ではあるが、伝説級ともなれば守護者も装備しているナザリツクでも割と高ランクのものである。

「姐さんより強いって…人間？ ドラゴンとか言われても驚かないんだけど」

「たぶんねー。マジックキャスターなのに力も堅さも異常だから最初は化物だと思ってたけど」

その言葉にアルシエ以外のフォーサイトの面々が絶句する。世界最強と言われても信じられる目の前の女性より身体能力の高いマジックキャスターとはなんの冗談だろうか。アルシエだけは闘技場で見たあの男だろうと想像がついていた。

「第6位階まで使える先生の数倍以上の魔力だった。もしかしたら10位階まで使える?」

じつとクレマンティーンを見詰めるアルシエ。

「あー、タレント持ちだったねそういえば。…まあ、使えるんじゃない?」

あまり秘匿に気を使わないクレマンティーンだが、流石に少々喋り過ぎたかなと言葉を濁す。全く濁しきれていないのはご愛嬌である。「常識が崩れていきますね…。私達が知らないだけで世界には強者がありふれているのでしょうか?」

ロバーデイクが深い溜め息をついて誰にともなく呟く。その言葉を耳にしたクレマンティーンはその通りですと内心で深く同意した。世界というか割とすぐそこに溢れているのだ。

「にしても随分と深くまで来たな…。少し気温が下がってきたし、川か湖が近いなこりゃ」

ヘッケランが辺りを見渡しながら全員に注意を促す。その言葉通り少し進むそこには大きな湖が広がっていた。

「———その、出てきたら?」

一行の足が止まり視界に広がる湖を見渡していると突然クレマンティーンがある一点に向かって話しかける。

「…こちらに害意はない。剣を収めてくれないか」

茂みから出てきたのは蜥蜴人のザリユースであった。生け簀を見に外れまでやってきた彼は集団の気配を感じたため隠れて様子を窺っていたのだ。

「蜥蜴人か…。ああ、こちらにも戦闘の意思はない。そちらが襲つて———姉御おお!」

森林の奥まで入ったら厳つい蜥蜴人がちよつと良さげな武器を携えて現れた。そこで我慢出来たらクレマンティーンではない。

「あつははは! ほらほら無抵抗じゃ死んじやうよー!」

いたぶるように薄皮1枚で刻んでいくクレマンティーン。とても楽しそうだ。

「隠れてるもう一匹も出てきたらあ? 勝算が0.1%くらいは上が

るか・も・ねえっ!」

語気を強めながらももう一人の気配の方にザリユースを吹き飛ばすクレマンティーン。

「ザリユースっ!」

恋人が吹き飛ばされたのを見てたまらず姿を見せたのは全身が雪のように白い蜥蜴人、クルシュであった。二人は生け簀を見に行くという名目のもと、逢い引きをしていたのである。

「クルシュ! 出てくるなと言っただろう!」

「どっちにしても気付かれてるわ。二人で戦いましょう、どんな結末だろうと貴方と一緒に怖くないわ」

「クルシュ…」

「ザリユース…」

抱き合う二人。空気を読んで待つているクレマンティーン。

「だがこの人間は強すぎる、一人で集落を潰しかねない程にだ。だからクルシュ…君は助けを呼んできてくれ。ここは俺が死んでも食い止めてみせる!」

「そんな、ザリユース貴方…」

「約束する。君が戻ってくるまで必ず生きています」と

「ザリユース…」

抱き合う二人。空気を読んで待つているクレマンティーン。

「本当に、本当に生きていますと約束出来る? 私、もう貴方がいないと駄目なのよ?」

「ああ、絶対だ」

抱き合う二人。空気を読んで待つているクレマンティーン。装備の手入れを始めたフォーサイト。

「待たせたな」

「ま、最後になるんだから少しくらいわねー。優しいでしょ?」

「ああ——まったくだ!」

その言葉を皮切りにクレマンティーンに斬りかかるザリユース。

「すぐに戻るわ! 絶対に死なないで!」

「あっははは! 頑張っつてねえー!」

戻ってくる頃には死体が転がってるだけだと嘲笑しながら、戦闘中だというのに手を振る余裕まで見せ付けるクレマンティーン。

「頼んだぞクルシュ！ そろそろナザリックからアウラが来る頃だ、出来れば助力をたの——」

「すみませんでしたああ!!」

それはそれは見事な土下座であった。ステイレットを放り出し、地面に額を擦り付けて謝罪するクレマンティーン。猫耳と尻尾のせいで可愛らしく見えるのがせめてもの救いだろうか。

「——んでくれ…え?」

「え?」

目を点にするザリユースとクルシュ。まさかの事態にあっけにとられる。その間もクレマンティーンずっと頭を下げ続けている。

「その、よく解らないがもう戦闘の意思は無いんだな?」

ぶんぶんと首を縦に振るクレマンティーン。

「ならいいんだが…。アウラの知り合いなのか?」

名前を出した瞬間にこうなったのだから馬鹿でも解るだろう。間違いないと思いつつもザリユースは問い掛ける。

「知り合いと言うか…：うう、とにかくこの事は内密にして…!」

まさか蜥蜴人を襲撃したらナザリックの関係者だったなどという不幸に見舞われるとは思ってもよらなかったクレマンティーン。出来ることならなんでもするからとザリユースに懇願する。

「まあ、それはいいんだが…。もういいからとにかく頭を上げてくれ」

その言葉によく立ち上がるクレマンティーン。ナザリックの恐怖はまだ彼女の魂に刻み込まれているようだ。

「…：秘密にしてくれる?」

「あ、ああ」

しないといったら逆に口封じされかねない勢いだけに頷くザリユース。

「ちよつと待って。あなた今なんでもするって言ったわね?」

そこに口を挟んだのはクルシュ。恋人を刻まれたのだからこの怒りももつともだ。なんの条件も無しだというのはありえないと一つ

条件を出す。

「ここ最近、ゴブリンの集団を異常に見かけるのよ。何だか森全体も変な雰囲気だし気味が悪いの。貴方達こんなところまで来てるってことはザリユースがよく話してくれる冒険者よね？　そういう調査とか得意なんでしょう？」

だからそれでチャラにするとクルシユは言い切った。それに困ったのはクレマンティーヌである。確かに冒険者ではあるがそんな正統派な作業はしたことがないのだ。ならばどうするか、答えは一つだ。

「ア、アルちゃん。手伝って——」

「貸しーっ」

「え？」

「みんなに、貸しーっ」

ずっと静観していたフォーサイトの面々。

まさかクレマンティーヌがここまで恐れる存在がいるとは思ってもよらず驚愕していたのだがそこは経験豊富なワーカー、弱みを見つけたとなればそこを攻めるのが常套手段なのだ。アルシエが凶太くなっただけとも言えるが。

「そ、それでいいからお願いつ！」

こんなところまで来てまさかの調査依頼だが、報酬がクレマンティーヌの貸しだというのなら破格だろう。フォーサイトの一同は領きながら目を見合わせて苦笑した。

「じゃ、いっちょ頑張りますか！」

そうしてフォーサイトとクレマンティーヌの冒険がはじまったのだった。

一欠片

真夜中のナザリックの玉座の間、そこでは4人の男女が今の今まで侃侃諤諤と意見を交わしていた。

「成る程……つまりデミウルゴスよ、お前はこの一件が自分の先走りであり責任の所在は全て己にあると言うのだな？」

「はい。アインズ様のご意志を履き違え、あまつさえナザリックの一部を独断で動かした罪は私が受けるべき罰でございます。私の命程度で購えるものでは到底ないこと、重々承知しておりますが何とぞシャルティアには慈悲をお与えください」

そう言つて跪き頭を垂れるデミウルゴス。自らの主の役に立つどころか、本意を読み違い想定外の騒ぎを起こしたのだ。もはやデミウルゴスは自分の命に価値など無く、せめて自分のせいでこの計画に荷担してしまった同僚達の助命を嘆願しなければと考えていた。

「デミウルゴス……」

一方シャルティアの方といえば先程までのデミウルゴスの言が全て己以外に罪が行かないようにしたものだたと理解して怒りは完全に消滅していた。そして裁可を待つ咎人のような雰囲気を漂わせるデミウルゴスを見て意を決したような顔をして口を開く。

「アインズ様。たとえ計画を建てたのがデミウルゴスだったとしても、実行役の中心は私が担ったものでありんしょう。責は等分どころか私が負うべきもの、何卒……」

「何を言っているのですかシャルティア。貴女は私がアインズ様の命令であると言ったからこそ動かざるをえなかったのです。そこに責任などあるはずも——」

見当違いの怒りを恥じてデミウルゴスを庇うシャルティア。そんなことはさせるものかとシャルティアの潔白を訴えるデミウルゴス。そこにはナザリック以外の者には決して向けることのない思い遣りがあった。

そんな二人を尻目に残りの男達が何をしているかというところ——
(ないわー、マジないわー)

(ま、まさかこんなことになるなんて…)

隣の男を冷たい眼で見るオデンキングとちよつと見栄を張ったせいでえらいことになった事実には愕然としているアインズだった。

(どうするんですか、この雰囲気)

(どうしましょう、この雰囲気)

ひそひそと打開策を考えろと押し付けあう二人。アインズは自分が謝罪してもデミウルゴスの自責の念は晴れることがないだろうと思ひ、上手い落としどころを模索していた。

(このままじゃデミウルゴスが死んじやいますよ!)

(くっ…! なら…で…こう…な感じで…)

(ふむふむ)

(…で…最後に…の…で終わらせるのはどうでしょう)

(なんで毎度毎度、厨二っぽい感じにするんですか?)

(どうでもいいですから早く)

しかしてアインズが考えた支配者の観劇が始まるのであった。

パン、パン、パン、と玉座の間に手を叩く音が響きわたる。いまだに責任を逆の意味で押し付けあっている二人はその音でアインズの御前で醜い言い争いをしているのに気付き押し黙った。

「いやー流石デミウルゴス。その智慧にはもう脱帽というか感服したというか、とにかくアインズさんが何も言わずともやってのけるその行動力は驚嘆としか言いようがないなー」

手を叩いた人物はオデンキング。言葉だけを見れば惜しみ無き称賛を口にしてている風だが、この状況で発するとなると酷い皮肉ととるしかないだろう。

事実シャルティアはオデンキングに対してまず向けることの無かった敵意と侮蔑の空気を放っていた。

「それにシャルティアもね。言葉にすると簡単だけど、実際にやると

なると随分な手間だったんじゃないかな。流石アインズさんの部下でペロロンチーノが手塩に掛けて創ったNPCだ」

しかし続く言葉に皮肉ではなく本当に誉めているのだと解り、罰を渴求していた二人は何事かと困惑した。

「物資の補給も、犯罪の抑制も、ついでに王国の浄化まで同時にこなすなんて中々出来ることではないですよ。ねえアインズさん」

「ええ。子は親を越えるとは言うがデミウルゴスよ、お前は既に私の思考の上をいったのだ。褒美を与えこそすれ、罰が欲しいなどとは何の冗談かと思つたぞ」

結局アインズが選んだのは罪も罰も存在させず、前提を覆し功績として誉め殺しにすることであった。

「主の口が足らずとも意を汲んで最良の結果を導きだす。配下の鑑です。いやー俺も創つとくべきだったかなー」

誰がどうみてもわざとらしいやり取り。当然デミウルゴスもその演技に気付かないわけはなかった。そしてその演技の意味も。

「…慈悲深きお二人に感謝を。ですが私は——」

「デミウルゴス。今回の騒動の発端、原因は一体誰のせいなのかな」

まだ自罰的な思考から抜け出さないデミウルゴスを見て焦つたように言葉を被せるオデンキング。

「それは勿論、私で相違ありません」

「本当に、客観的に見ても？ 俺から言わせてもらおうと一番責任を感じるべきなのは——」

「オーデイン様。それ以上はたとえアインズ様の御友人であろうとも私には看過出来ません」

オデンキングがはつきり口に出す前に答えを予想して先程とは逆に言葉を被せるデミウルゴス。

「ほら。言いたいことは解つてゐるみたいだし、じゃあもう少し踏み込んで考えてさ、デミウルゴスがこの功績をあくまでも失態と言い張るならその発端は誰の責任なのか。ああ、デミウルゴスの考えじゃなくてどこかの優しい支配者の思考で」

そう言われたデミウルゴスは考える。最後まで自分達を見捨てず

に残って下さった優しく慈悲深き主、烏澁がましくもその考え方を真似てみた時どういいう結論に行き着くのか。

自分に都合の良い推測、都合の悪い推測、冷静にそれらを排除していき考え続け、デミウルゴスは一つの結論に達する。たとえば自分が責任は己にあると言い張っても、情に篤い我が主ならば責任を感じてしまいかねないと。

そしてそれを回避するにはどうすべきかも同時に思い至り、目の前の二人の茶番に感謝を送った。

「…ありがとうございます、アインズ様、オーデイン様。これからも無上の忠誠を捧げることを誓います」

これほどまでに気を使ってもらいながらそれを無下にするデミウルゴスではない。遂にその甘い裁定を受け入れた。

「よかったよかった。デミウルゴスはホント働きすぎだよ。取り敢えず功績の一環として休みを取らせたほうがいんじゃない？ アインズさん」

「ええ。デミウルゴスよ、オーデインさんの言う通り私は…いや、私たちはお前に頼りすぎた。これより一週間休養を取りしつかりと休むがいい、これは命令だ。残りの褒美は追って報せよう」

アインズの言葉にいちいち感銘を受けながらも領きを返していくデミウルゴス。しかし一週間の休養と聞いて心配そうに問い掛ける。「その、一週間の休養と言うのは…」

「なに、心配するな。確かにデミウルゴス、お前はナザリックにおいて必要不可欠な存在だが一週間程度不在になったからといって運営に支障をきたしては組織として不完全に過ぎるからな」

それとも私が信用ならんかと少し意地悪そうにデミウルゴスに問うアインズ。デミウルゴスは慌ててとんでもございませんと返した。「かしこまりました。差し出がましいことを申し上げましたようです。では二日後の蜥蜴人の集落での協定、及び六日後の王都への招待はアルベドに任せましょう」

「え？ う、うむ。そうだな、アルベドに…アルベドに…。むうう」

「ああ、心配するなデミウルゴス。俺もその時はアルベドと一緒に…」

ぶふっ、ぜ、全力でサポートするから」

なんて面白そうないベントなんだと全力で傍観する気満々、あわよくば少し面白くしてあげようと画策するオデンキング。

「ありがとうございます。アルベドが暴走せぬようお気をつけください」

そんな様子には気付かず、対アルベドに実績があるオデンキングが手伝うならばもう憂いは無いと安心するデミウルゴス。

「では、アルベドへ引き継ぎを致しますので失礼致します」

そう言つて玉座の間を後にした。後に残ったのはアインズとオデンキング、それにシャルティアである。

「シャルティアよ。お前のデミウルゴスへの気遣い、嬉しく思うぞ。今回の功績も含め何かあれば遠慮せずに言うがよい」

「ア、アインズ様……！」

感無量といった風に感激しているシャルティア。しかし本当の願いを口にすれば尻軽な女だと思われるため言い淀み、オデンキングへ視線をチラチラと向ける。そしてその視線の意味をオデンキングはしっかりと理解した。

第2夫人としてシャルティアを推すという約束を思いだし、今がその時かと。

「そう言えばアインズさん、やはり支配者といえは側室ありきだと思うんですがその辺どう思います?」

無茶苦茶な切り出しである。

だが遠回しにするのも中々難しいと思つたオデンキングは直球で尋ねてみた。

「え、えらい唐突ですね。側室と言われましても相手が居ない……というか居てもアルベドに消されそうですし。それに複数人に手を出すのはちよつと……」

その言葉を聞いてガクツと項垂れるシャルティア。アルベドの事だけならばともかく本人が複数は嫌だと言っているのだ。望みは断たれたと思つても仕方ないだろう。

「あー、うん、そうですね。……うーん……まあ、諦めなければきつとい

つか道は開けるさ。幸い寿命は無いようなもんだし」

「? はあ…」

シャルティアに向けて言った言葉ではあるがよく解らなかつたアインズは生返事で返した。

「うう…。では責任をとってオーデイン様には下級吸血鬼になつてもらいんす」

「なんで!？」

「それが褒美というなら仕方ないか…」

「うおいつー!」

よく解らないなりにちよつと乗つてみたアインズであつた。気を取り直してシャルティアは顔を上げて意見を伝える。

「アインズ様。我等はアインズ様の手足、道具も同然でありんす。使つていただく事こそが悦び、褒美などは過分でありんすえ」

アインズは一瞬だけ、お前は誰だと問い掛けそうになつたがすんでのところで止めることが出来た。

「そ、そうか…しかし罪は裁くべきもの、功績は讃えるものだ。思い付かぬのならこちらで考えるところでしょう」

そう言つてシャルティアを下げ、玉座の間には二人だけになつた。少しだけ沈黙が流れ、すぐにそれを払拭するようにオデンキングが口を開く。

「いやー、ビックリでしたね。まさかこんなことになつてるとは」

特に意味もないセリフだがアインズが言いたいことを何となく察しているオデンキングはわざと明るめの調子で空気を良くする。

「ですね。…オーデインさんは…大丈夫なんですか? その、犯罪者とはいえ殺して物資にまでしてゐるんですけど」

今回の一件はともかくとしてスクロールについてはアインズも承知していたのだ。犯罪者とはいえ人間の命であり、オデンキングには言い憚られるものだとは思つていたためそれとなく隠していた。

「あー、まあ正直に言えばちよつと…。でも、ナザリックを離れたいかつて聴かれたらそれも嫌です」

おそろおそろ問ひ掛けたアインズはそのセリフにほつとした。自

身は既に身内以外の死について感じ入ることが殆ど無い。だが人間のオデンキングは別であると理解しているし、それについてどう思われるかについては感じ入らないどころか少し怖いくらいだと思っている。

この広い異世界で本当の意味で同郷であり、自分の方は少し変わってしまったとはいえ感性も同じくする存在だ。自分に、自分達に恐怖して去ってしまわれることはそれこそ恐怖だろう。

「…あまりに許容出来なくなったら、ちゃんと言いますから。急に居なくなったりしませんよ？」

そしてそれはオデンキングも同様だ。自分の世界に未練が全く無いわけでもない、二者択一ならばこちらの世界を選ぶと思っただけはいても郷愁というのはふいにやってくるものだ。

そんな時に故郷の残滓を感じる事が出来るのはアインズと話している時だけなのだ。たとえナザリックが人間種と決定的に対立しても、どちらに付くのかはオデンキングの中で決まっていた。

「…はい」

珍しく、本当に珍しく穏やかな空気を楽しむ二人であった。

クレマンティーンとアルシエの帝都散策記 6

「……で五つ目と……」

ヘツケランが簡易的に作った地図へ印を付ける。もはや地下の帝
国と言ってもいいほどに凄まじい数を擁しているゴブリンの群れ。
剥き出しになった地の裂け目などからそれを確認し、出入り口を数え
ているフォーサイトだが次第に事の深刻さを理解し始めた。

「これ、国が本腰いれないとヤバいんじゃないの……？」

イミーナが数えるのも馬鹿らしくなったゴブリンに戦々恐々とし
ながら呟く。ゴ布林如き5体や10体相手にしようとも問題無い
とは思っているがもはやそんなレベルではないのだ。

数とは力であり個人の力量などこのゴブリンの津波の前では些細
なものだと思わされたイミーナ。たとえクレマンティーンでも無理
ではないかと思わされるほどの数を見ればそれも仕方ないだろう。

「無理？」

アルシエがクレマンティーンに問い掛ける。彼女からすればクレ
マンティーンがゴ布林に負ける姿など、その方がありえない。

「無理じゃないけど……500も殺したら散りぢりになって追いつか
ないわね」

どれだけ強かろうが戦士であるかぎり倒せる数には限度がある。
全てがクレマンティーンに向かってくるといふのならまだしも、数百
も殺して実力を認識された時点で群れの統率は無くなり四方八方に
逃げ惑うのは明白だ。

「逃げたゴ布林が周辺の村を襲うのは間違いないでしょう。下手を
すればここから帝都までの村が無くなりかねません」

本当に四方八方に散らばれば危機は分散され被害も周辺諸国やそ
の他異種族の集落などで等分される。数の暴力が無くなれば大した
こともく終わることも充分に考えられるだろう。

しかし、もしまとまって大移動などということになれば途中の村な
どが蹂躪しつくされても不思議ではない。人のためにワーカーにま
でなったロバーデイクにとってはその可能性があるだけで見過ごせ
るものではないのだ。

「とにかく一旦蜥蜴人の集落に戻って報告だ。国の方にも早急に伝え
ないとまずいしな」

今のところ出来ることもないのでまずは依頼を優先させようと思案する。フォーサイトの面々は元よりクレマンティーヌも雑魚の草刈りなどに興が乗る筈もなく当然とばかりに頷く。

「お、おとおお……」

初めて素直に提案を聞き入れてくれたことに感動したヘツケラン、その様子を見たクレマンティーヌは首を傾げていた。

〈グリーン・クロウ〉族の集落、その外れにあるザリユースの家でフォーサイトとクレマンティーヌはもてなされていた。きちんと依頼をこなしたということとクルシユの憤懣も幾分か和らいでいるようだ。

「そうか……随分とまずい状況になっているようだな」

フォーサイトからもたらされた情報は最近の森の変容から考えても充分ありえることだとザリユースは唸り声を上げる。

「冬籠りの準備をしているようだから森の外まで被害が出てくるのはもう少し後……春先に一気に数を増やしてからが濃厚だろう。だが冬の準備が足りないとここが襲われる可能性も無いとは言えないというのが俺達の見解だ」

「そうか……。詳細な調査、恩に着る。俺達はそういった調査は——」
ザリユースの言葉半ばに何かを察知したクレマンティーヌが飛び起きて入口の方を警戒する。

「……!!」

クレマンティーヌが警戒することなど見たこともないフォーサイトはそれだけで一気に戦闘態勢に移行した。

しかしアルシエ達が武器を構え始めたのを見て必死にやめてくれと叫ぶクレマンティーヌ。近付いている脅威を考えれば当然だろう。

被我の戦力差はクレマンティーンとフォーサイトの差よりも更に絶望的なのだ。

「久しぶり。元気？ ザリユース」

そして遂にその脅威がザリユースの家の前に到着した。もちろんアウラとハムスケである。緊迫した空気など露知らず呑気に外から声を掛けるアウラ。それに応じザリユースは入ってくれと答えた。

「久しぶり。これ王都のお土産だから…ん？ お客さん？」

オデンキングがちよこちよこお土産を買っているのを見て自分も色々買い込んだアウラ。あげる人のためというよりはお土産を買うことそのものに興味があつたのはご愛嬌だ。そして家に入つてようやくフォーサイトとクレマンティーンに気付く。

「ひ、久しぶりー、です」

ほとんど話したこともないのでどう接すればいいのかと戸惑うクレマンティーン。取り敢えずは無難に挨拶を試してみた。

「あ、えつとオーディン様の連れの…クレマンティーン。さん？」

しかしアウラの方も殆ど話したことがないのは同様であり、主の友人の連れでナザリックが招待した者でもあるので微妙に丁寧に接する。アインズがさん付けで呼んでいたのとプレアデスと同クラスの戦闘力を持っているというのも大きいだろう。

「う、うん…いや、はい」

見た目は華奢で中性的な少女とはいえ、ひとたび戦闘となれば自分など消し飛ぶことは理解している。

が、へりくだり過ぎるのも逆に慇懃無礼かもしれない。そんな思考がぐるぐる回り変な返答しか出来ないクレマンティーン。やはりナザリックが絡むと正常な思考とは無縁な状態になるようだ。

「…」

「…」

双方ともどう接すればいいか悩み、結局アウラは自分のナザリックでの地位と強さとクレマンティーンが主の友人の連れという微妙な立場ということを鑑みて対等に話すことを選択した。

「私も普通に話すからそっちも普通に話してくれる？ 別に敬語はい

らないから」

「う、はい、いや、うん」

びびりながら吃音を繰り返すクレマンティヌ。とはいえ悪感情を持たれていないことは判ったのでなんとか気を落ち着かせる。

「で、何でここにいるの？ この辺だと人間はまず現れないって聞いてたけど…」

「えーと、まあ色々とありま、あつただけけど…。今はゴブリンの調査報告にきてるの」

クルシユの依頼から調査の流れまで簡潔に話すクレマンティヌ。もちろん出合いの部分は誤魔化している。

「ふーん。そういえばハムスケが蹴散らしたゴブリンの数が少し多かつたかな？」

蹴散らしたというよりは轢いたというのが正しいのだが、いちいちそんなことには執着しないアウラ。なんにしてもナザリックとの同盟予定の蜥蜴人が壊滅の危機とあつては傍観するわけにもいかない。急ぎナザリックへ帰り報告しなければならぬとアウラは判断した。「同盟の約束をしてる以上、見過ごすことはないからそんなに慌てなくても大丈夫。何人かこっちから出せばすぐ終わると思うよ」

ザリユースに安心するよう伝えるアウラ。そして彼女の実力を知っているザリユースはその言葉を聞いて安堵した。

「ああ、すまんな。よろしく頼む」

薄々感付いてはいたものの、アウラの言葉にナザリックの底知れぬ実力の一端を垣間見たザリユースは、心の底から敵対しない選択した自分を誉めた。

「クレマンティヌも一緒に来る？ オーディン様も明日の朝には帝都に帰るって言ってたから一緒に送ってもらったら？」

「あ、帰ってきてるんだ。じゃあそうしようかな…」

アウラの扱いのお陰でナザリックへの恐怖心も薄れてきたクレマンティヌ。オデンキングもいるとなれば悪くはない提案だと一考する。

「あ、あの一、姐御？ 俺達姐御の戦力も当てにしてここに来たんだけ

ど…」

おずおずとハツケランが言葉を挟む。未開の地ということに加え、無数のゴブリンが彷徨っているとすれば危険度は跳ね上がる。最強の護衛が一番危険なところで消えるのは流石にまずいと迂遠に意見をあげた。

「あー、そっか…。どうしよ」

普段ならそんなことは気に掛けないクレマンティーヌだが、今の今まで調査をしてくれた相手とあつては見捨てるのも少々決まりが悪い。とくにアルシエは優秀な護衛なのだ。オデンキングが帰れば問題は無くなるとはいえ、ちよくちよくナザリックへ帰るとも言っていないことを考えればまだまだ必要な護衛だろう。

「アウラさ——ちゃん…？　ア、アウ…」

「アウラでいいから」

慣れたとはいえ打ち解けたと言うほどでもない関係に呼び名をどうするか迷うクレマンティーヌだが、察したアウラによって呼び捨てを許可される。

「う、うん。そういうわけだから Dein ちゃんに伝言お願い出来る？」

「いいよ。なんて？」

「フルト村で待つから迎えに来てほしいって」

クレマンティーヌはトブの森から程近い帝国領にある村で待つと伝言を頼む。オデンキングとアーウィンタールまで向かう際に寄った村だ。

自分の足で帰るとなると数日は掛かるためオデンキングを待たせてしまうから——という名目で面倒臭い道のりを省略するためのアッシーにするき満々のクレマンティーヌである。

「オツケー。じゃ、またね」

ザリユースとクレマンティーヌに別れの挨拶をしてアウラはナザリックに戻った。

「……………ふう」

アウラの気配が遠ざかり、全く感じられなくなったところでクレマンティーヌは一気に緊張を解いた。ついでにフォーサイトも自分達

だけで森を突破する破目にならなかつたことに安堵した。

「すげえ魔獣だったな…姐さんが警戒するのも解るってもんだ」

ヘツケランが呟く。白銀に輝くハムスケのその威容を見て、アウラの強さを魔獣を使役する能力に由来するものと勘違いした彼にクレマンティーンが疲れた顔で間違いを正す。

「言つとくけどあの魔獣と私が百人百体居たってあの子には勝てないからねー?」

おそらく自分の仲間と認識されたフォーサイトがまかり間違つてアウラを侮ることのないよう釘をさしたクレマンティーン。

これ以降にアウラとフォーサイトが接する可能性などほとんどないだろうが、万が一を考えてのことだ。そしてその言葉を聞いたヘツケラン達は顔をひきつらせる。流星にそこまでの化物とは思つてもみなかつたのだ。

「そ、そうなのか…」

そしてそれはザリユースとクルシユも同様である。特にザリユースは蜥蜴人の中でも有数の実力者である自分を子供扱いしたクレマンティーンが百人居ても勝てないと聞いて、アウラが圧倒的な強者とは知っていたもののまだまだ過小評価だったと気付かされた。

「ま、とにかくそういう訳だからフルト村へ向かうわ」

「あ、ああ。…しかし姐御、別に合流する必要はなかつたんじゃないか? どっちにしろそのオーティンさんとやらも帝都に向かうんだろ?」

常識的に考えれば至極当然の疑問だろう。そう思つてヘツケランもクレマンティーンに問い掛ける。

「ティンちゃんは魔法ですぐ移動出来るから。帝都でも王都でも数秒かかんないじゃないかな」

「…」

今日1日でいくつ常識を破壊されたか解らない一同。そんな様を見てちよつとドヤつとするクレマンティーン。それが彼等の驚きの顔を見たからなのか、それともオデンキングの実力をひけらかすことが出来たからなのかは定かではない。

革新

フュルト村。

王国と帝国の境界から程近いこの村はカツツエ平野とトブの大森林からもそれほどの距離は離れていないため、村としては中々の防衛設備を持っている。中継地点として商人や冒険者が滞在することもあるため宿屋があるのも村にしては珍しい点と言えるだろう。

そんなフュルト村に昨晩到着し一泊したクレマンティーヌとフォーサイトの一同。一夜明けた朝、朝食を取り終えた彼等はオデンキングを待つ間軽い運動がてら手合わせをしていた。

といってもヘツケランとイミーナの前衛組がクレマンティーヌと軽く打ち合っていただけではあるが。もちろんヘツケランはまかり間違つて殺されてはかなわないと全力で拒否していたが、色々とフラストレーションが溜まっていたクレマンティーヌに無理矢理付き合わされたのは言うまでもない。

「死ぬかと思った…」

せめてステイレットは止めてくれと泣き叫ぶ痴態に情けを掛けたのか、珍しくメイスを使っているクレマンティーヌだが何故か執拗に男の急所を狙うその姿勢はヘツケランを後悔させたようだ。そしてそうこうしているうちに宿屋の前に黒いもやが現れ、オデンキングが姿を見せた。

「あ、いたいた。おーい」

片手を上げて近づくオデンキング。そして声を上げる前からその存在を感知していたクレマンティーヌは疲労困憊の二人を尻目に早足で駆け寄る。

「ありがと。何もなかった？」

実力から考えて何かあることはないだろうが形式的に聞いてみる。

「あー…まあ、あったといえばあった…かな？　後で話すよ」

色々とありすぎて何から話せばいいかと考えるオデンキング。取り敢えず落ち着いてから話そうと提案し、クレマンティーヌの後方にいるフォーサイトの面々を見て先に紹介してくれと頼んだ。

アウラから仲間らしき者達が居たとは聞いていたが詳細は解らなかつたためだ。その言葉を聞いてヘツケラン達は慌ててオデンキングの前に出て自己紹介を始める。クレマンティーンに任せてはどんな紹介になるか解らないと判断してだ。

「ワーカーのヘツケランです。クレマンティーンの姐御にはいつも世話になってます」

同じくらいに迷惑も被ってます、とは口が裂けても言わない。

「あ、あねごふっ……！ クレマンティーン、姐御って……」

あまりにイメージとかけ離れた呼び名に吹き出したオデンキング。今時の任侠映画でもまず聞かない名詞だろう。

「わ、私が呼べって言った訳じゃないから。こいつが勝手に……」

「私はアルシエ。クレねえに雇ってもらってる」

「イミーナよ。姐さんには随分と助けてもらってるわ」

化物マジックキャスターという前情報に反してどうみても荒そうには見えない気性と、凡庸な雰囲気を漂わせるオデンキングを見て少し悪乗りをする女性陣。ヘツケランとは違つてこちらは割と打ち解けてきているようだ。

「クレマンティーン、お前……」

アルシエとイミーナからも姉呼びされているのを見て弄ろうかと考えたオデンキングだが、ハツと悟つたような顔をするとうんうんと頷いてクレマンティーンを慰め始める。

「兄貴との関係が関係だもんな……。姉願望も仕方ないさ。俺は理解してるよ」

「違うっつーの！」

初めての邂逅の時に兄貴を殺してくれと言われた事を思いだして優しい顔をするオデンキングだが、見当違いの優しさにクレマンティーンは突っ込みを返す。

「お二人とも仲がよろしいですねえ。あ、私はロバーデイクと申します。宜しくお願いします」

しれっと一人だけ普通の挨拶をするロバーデイク。意外と世渡り上手なのが人の良さに反して騙されたりはしない要因だ。

「ま、とにかく帝都に戻ろうか。ジルにも色々報告しなくちゃならんし、というかフルーダさんにもまだ何も教えてないからそろそろヤバイ気がするし」

ヤバイどころじゃねーよと更に突っ込みを入れようとしたクレマントリーヌだが、その身で一度あの気持ち悪さを味わえばいいんだと無言で流した。

そしてオデンキングが創り出した黒い空間におそろおそろ足を踏み入れるフォーサイトの面々といつも通りにパツと通り抜ける二人。かくして一行は帝国へと帰還するのであった。

「やっと帰ったか。随分と気を揉んだぞオーディン。もちろん土産話は期待していいんだろう？」

アーウインタールに戻った後、フォーサイトと別れ皇帝の元へ直行したオデンキング達。正式な謁見ではなく政務を行っている部屋で緊張感もなく駄弁っているあたりがオデンキングとジルクニフの気が合う由縁かもしれない。

「もう情報届いてるんだ？」

かなり含みのある言い方だったため王国のクーデターの事を聞いているのだと判断したオデンキング。

「ああ、情報は鮮度が命だからな。だが《メツセージ／伝言》は重要な情報を伝達するには信憑性に欠けるというのも事実だ。せつかく王都に行ってきたやつが居るんだ、聞かん理由はないだろう」

さあ、さつさと話すんだと迫るジルクニフ。王都の件しかり、謎の建造物の件しかり聞きたいことは山程あり、処理しなければならぬ案件は更にあるのだ。ジルクニフ程、一刻千金という言葉が似合う男も中々居ないだろう。

「んじやさつそく。まずは王都の件だけど…」

「うむ」

まずはあつたことをそのままに、次にアインズから聞いたお姫様と騎士の物語や酒場の酔っ払いの与太話のようなもので多岐に渡って話し尽くす。ジルクニフの情報処理能力と取捨選択の正確さを知っているからこそである。

「ふむ、成る程な。あの王女らしいことだ。上手くやったようじゃないか」

「ん？ どゆこと？」

お涙頂戴の感動話の登場人物である、才色兼備で花顔柳腰なお姫様を悪し様に言うジルクニフに疑問の声をあげるオデンキング。

「あの国の第三王女はある意味化物だ、その知能と考え方がな。おおかたクーデターもあいつが計画したか途中で主導権を奪ったかしたんじゃないか？」

「えー…。んん？ ということはデミウルゴスが言ってた王国の協力者って…あ、なるほど。となるとつまり…うわあ、えげつなあー…」

事件の詳細自体はオデンキングもよく知らず、王国に協力者がいたとしか聞いていなかったのだ。その人物が一笑千金と名高く、話に聞く優しい王女だとすれば腹の中は真っ黒なんてものではないことに気付き顔をひきつらせる。

「そのデミウルゴスとやらは、同じところ出身の仲間か？ トブの大森林に近い建造物に住んでいるようだな」

「どっからそういう情報掴んでくるんだか…。まあ、そうだよ。場所の名前はナザリック地下大墳墓。組織名は〈アインズ・ウール・ゴウン〉俺の故郷じゃ知らない奴もまず居ない凄いとこ。六大神とかと同列に考えてくれたら近いかな」

アインズから機を見て帝国にもナザリックのことを話してくれと頼まれていたオデンキング。自分の扱いから考えて侮られることはあり得ないだろうが一応大袈裟に伝えた。

「ふむ、つまりクーデターの実行はその者達がしたと」

この情報は驚くだろうと少しだけしてやったりな気分を味わおうとしていたオデンキングだが、やはり役者が違った。充分に想定範囲

囲内だったジルクニフはオデンキングの情報により更に推測を正しい方向へ導き、王国のクーデターについても看破した。

「…もしかして心を読むタレントとか持つてる？」

「持っていたら私が生きている間は政争が起ころんだらうな」

やれやれと肩をすくませるジルクニフ。ここが違うのさ、と頭をとんとんと叩いてニヤリと微笑んだ。

「うっわ嫌味ー。仕方ない、帝国の皇帝は嫌な奴だって伝えとこう」

「やめろお！」

洒落になつていない洒落にさすがのジルクニフも悲鳴を上げた。まあ仕方ないだろう。

「いや、冗談だって…。そこまで反応しなくても」

「失礼、取り乱したようだ。いや、割と死活問題だからそれは勘弁してくれ」

先程のオデンキングのセリフをこの世界の解釈に当て嵌めるなら「やーい神様にいつてやろ〜(真)」といったところだろうか。

「まあとにかく説明を続けると…」

ナザリツクの諸国への対応や好感度、現状の関係性、種族など伝えることはかなりある。出来る限り友好的な関係となれるよう本気で尽力するオデンキング。ジルクニフの質問も交え議論することもあったため、話し込む二人をよそに陽は沈んでいくのだった。

オデンキングが発ち、一人残されたアインズはある決断をしていた。自分の内面と向き合う覚悟だ。これまで極力考えないようにしていた悲しい過去。だが事がここに至ってはもはや清算するしかないのだ。過去のツケは自分が一番苦しいときにやってくる、などと何処かで聞いたようなフレーズを思い出しながらアインズは呼び出したその人物に向き合う。

「…良く来たなパンドラズ・アクター。デミウルゴスが居ない今、その穴を埋めることが出来るのはお前だけだ」

そう、自らの黒歴史と向き合う覚悟だ。

「我が神の命令とあらばこのパンドラズ・アクター、どのような難題であろうともこなしてみせましょう！」

大仰なセリフとポーズでアインズの心をちくちくと攻め立てるパンドラズ・アクター。埴輪にも似た顔に軍服を着込んだその出で立ちのままに思春期の少年が考えたのではないかと思わせる。

「う、うむ。早速だがまずは蜥蜴人の集落の件に関してだ。先程アラから報告があつてな、少々まずい事態になっているようだ」

アインズがおおまかに現状を説明していく。ナザリックの財源や宝物などを管理し、自分の領域から滅多に出ないため近況には詳しくないパンドラズ・アクター。

アインズは蜥蜴人の事だけではなく、周辺諸国との関係や今まであったことを簡潔にまとめて伝える。ナザリックで唯一自分が創った痛いNPCではあるが、その頭脳に関してはアルベドやデミウルゴスにも劣らない優秀さも持ち合わせているのだ。

「なるほど、着々と勢力を拡げておられるようで。しかしゴブリンの大群に怯える蜥蜴人とは…まさにアインズ様の威光を知らしめる御膳立てと言えましょう！ オーティン殿と相談し、これを機に帝国での地位も確固たるものにすべきかと」

いまだ帝国においては何の基盤も持っていないナザリック。印象を良い方向に認知させるにはうつつけの生け贄だとパンドラズ・アクターは判断したのだ。

タイミングが重要なため帝国に滞在するオデンキングと連絡を密にして機を伺い、ある程度事態を操縦する心積もりである。つまりナザリックを帝国の恩人に仕立てあげる策をアインズに提案したのだ。

「ふむ…自作自演にするとなるとバレた時に以降の信用が一切得られなくなりそうだな…。我々は異形種の集団だ、何かあれば真っ先に糾弾されるのは想像に難くない。その辺はどう考えている？」

「ゴブリンの大群自体は我等の関知せぬことでございます。矛先を誘

導する程度のことならば自作自演とまではいかぬかと」

悩むアインズ。しかし自信満々なパンドラズ・アクターを見てなんとかなるかな、と樂觀的な思考に戻った。

「パンドラズ・アクターよ。この件に関してはお前に任せるとしよう。ナザリックの物も好きに使うがいい。だが報告はこまめにしてくれ」
前回と同じ轍を踏まないためにもそこだけはしっかりとするアインズ。

「お任せを」

役者の名を冠する者にしてはあまりにも短い一言。だがそこに込められた思いは階層守護者と比してもなお強い忠誠が込められている。それは最後までナザリックを見捨てずに残った者であり、更に分の創造主でもあるがゆえだ。

ちなみに本当は *W e n n e s m e i n e s G o t t e s*
W i l l e ! ! と叫びたいパンドラズ・アクターだが、アインズにそれはやめろと厳命されているため短い言葉になったというのもある。

オデンキングとアインズの魔法講座 1

「おお師よ、お待ちしておりました」

ジルクニフとの話が終わった後、ようやくフルーダの元へやって来たオデンキング。何度か言っても敬語をやめてくれないフルーダに少しげんなりしながら今日こそは、と前々から考えていた案を出す。

「おひさしぶりです、フルーダさん。遅くなって申し訳ない」

「そのような気遣いは無用です。魔導の深淵そのものといえる師に教わる事が出来るというだけで…」

その称賛を慌てて遮るオデンキング。

「その件なんです、まず理解してほしいのは俺が魔法の知識に関して疎いということなんです」

その言葉を聞いて首を傾げるフルーダ。第10位階どころかその上も使えるマジックキャスターが何を言うのだろうか。

「えー、まあ疑問に思われるのも当然なんです。その、魔法の使い方とか効果とか種類とかの知識は結構あると自負してますが理論的なことになるさっぱりなんです」

フルーダは目を丸くして驚く。多かれ少なかれマジックキャスターといえば研究者に近いものがある。時たまファイリングで魔法を伝えるようなものもいるがまず大成はしない。そんな職業の極致に至る者のセリフとは思えないのも仕方ないだろう。

「こう、何て言えばいいのか…。ナチュラルボーンマジックキャスター的な？ そんな感じですよ。だから本当は誉めそやされる様な人間じゃないんですよ」

「しかし、最高位階に到達しているのは事実なのでしよう」

何が言いたいのか察せず、話の続きを待つフルーダ。

「ええ。何が言いたいかと言うとですね、私がフルーダさんに自分の感覚を伝えて、フルーダさんはそれを体系だった理論に落としこむ…つまり私からの教導ではなく、共同研究という形にしてもらえないかと言うことです」

「共同研究…」

思いもよらぬ提案に呆けるフルーダ。

「はつきり言うそうですね、人生の先達としても魔法の教鞭をとる人としてもフルーダさんは私より間違いなく上なんです。だから魔法の位階だけで信望するのはやめて、対等な立場で魔導を探究していきませんか？」

更にオデンキングは魔法が使えること以外はいたって凡人なんです、と付け加える。どのみち会話が進めば知識不足などバレること

だ。ならば事実を事実として認識してもらおうという結論である。

「……」

難しい顔をして考え込むフルーダ。そう簡単に固定観念というのは崩れないものだ。しかしそこは百年単位で生きる魔法の探究者。一度だけ深呼吸吸して領いた後、口を開く。

「わかり…いや、わかった。そういうことならば年相応に振る舞うとしようか。この老骨の身ではあるが、共同研究者として宜しく頼む」
偉大な風格を身に纏い、改めて対等な者として握手を求めるフルーダ。

「ありがとうございます。いやー、流石に自分の10倍以上生きてる方にへりくだられるのは気まずかったですよ」

「そう言われると返す言葉も無いな…。だが心の中では尊敬を禁じ得んのも確かだ」

一気に変わってしまった関係だが、中身を考えると妥当と言えるだろう。

「あ、でですね、魔法の研究と検証を始めるなら自分も誘ってほしいって人が居まして…」

当然のことながらアインズだ。この世界最高峰のマジックキャスターが自分達の魔法を検証し、解明出来るのならば喉から手が出るほどの情報となるのは間違いない。

「ふむ、もしやその人物も高位階の？」

「そうです。ただ人間じゃなくてアンデッドなんですけど…：あ、人間に対する憎しみとかそんなのは全然ないですから」

そういえば異世界云々はまだ話していなかったと思ひ、ジルクニフに話した程度のことを伝えるオデンキング。

「なんと…！ 長生きはしてみるものだ。まさか六大神と同じ様な存在とまみえることが出来ようとは！」

ふるふると身を震わせて歓喜を隠しきれないフルーダ。長きに渡り研鑽を積み重ね、それでも中腹にすら辿り着かない魔法の奥深さ。魔法で遅らせているとはいえ命の尽きる音は確実に近付いているというのに遅々として進まぬ研究。ここが自分で到達出来る限界

かという落胆と、残りは後身に譲り、人類という種族が更に上の位階に達する一助になるべきという一種の諦観。そんな停滞を一気に吹き飛ばす新しい風が、むしろ嵐といっていいべきほどの革新がやってきたのだ。人生に分水嶺というものがあるならばきつとここだろうという確信がフルーダにはあった。

「是非お願いしたい！ ああ、早く、早くアインズ殿にも会ってみたいものだ！」

アンデッドだろうがなんだろうがそんなものは魔導の前では些細なことだと気にもとめないフルーダ。

「ちよつと待つてくださいいね… 《メッセージ／伝言》で聞いてみます」

幸い眠ることがないアンデッドだから早ければ今夜行けるでしょう、と子供の様にそわそわしているフルーダを見て苦笑するオデンキング。暫しの応答が続き、帰ってきた答えは是というものだった。

「オツケーみたいです。ただナザリックは色々注意点があるのでそこだけは気を付けて下さいね。後は夕食を食べながら話しますよ」

そろそろお腹が空いてきたオデンキングは伸びをしながらフルーダを食事に誘う。

「御相伴に預かろう。ああ、これほど何かを待ち遠しいと思ったことはないな…」

そういつて立ち上がる二人。そしてそんな二人のやり取りを部屋の片隅ですつと見ていた人物がいる。

「どうしたんだクレマンティヌ。変な顔して」

どんな喜劇が待っているかと待ち構えていたクレマンティヌだ。しかし全くもって普通の状態のフルーダを睨みつけ体をぶるぶると震わせるクレマンティヌ。そして急に立ち上がり全速力でドアを開け放ち走り去る。

「誰だお前はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

そんな声を響かせながら。

「？」

「？」

顔を見合わせ一体なんだだろうと首を傾げる二人。残念ながら彼女の理解者はアルシエだけなのかもしれない。

それぞれの思い

帝国の首都アーウィンタール。

この街の中心部にある皇帝の居城にて、要職についた者達による白熱した議論が交わされていた。いずれも定期的に行われる王国との戦争と関わりが深い者達だ。

「今こそ好機ではないでしょうか？ 話によればクーデターにより慌ただしいとは言うものの、王の権力は一本化され風通しが良くなったというではありませんか。時間を置いては今までの策略が無駄になりかねません」

「王国が浮き足立っているというのは理解しているが、それでこちらが拙速となるのは本末転倒では？ 何も急に兵が増えるわけでも作物が穫るわけでもないのだから、これまでの成果がなくなるとは言えないでしょう」

「招いているマジックキャスターは動かないのですか？ フールーダ様を遥かに越えるとなれば戦況を決することも容易いでしょう」

様々な意見が取り交わされ、しかし皇帝により却下されていく。

「お前達の意見も尤もだ。だが戦に関しては取り止める可能性すら視野に入れておけ。それとオーデインは戦のために招いている訳ではない、後々取り込みたいとは思っているが時期尚早に過ぎる。下手にあれの機嫌を損ねた者は極刑に処すと通達した筈だ。くれぐれも軽はずみな行動は取るなよ？」

交わされる意見を静かに聞いていたジルクニフだが、答えが必要な意見には一気に返答していく。

「な、何故ですか？ 戦の取り止めなど、それこそ王国が態勢を立て直す助けにしかありません」

ジルクニフの前の代から、じわじわと真綿で締め付けるように削ってきた王国の戦力と国力。このタイミングで戦を止めるともなればここ数年ほどの戦が無駄になったも同然だ。臣下の疑問も当然だろう。

「カツツエ平野の近くに刺激したくない勢力が現れた。対応を誤れば

国が減びかねないほどのな。詳細は伏せるが調査が終わり次第また会議を開く」

その勢力に対する一切の諜報活動は禁止する、と厳命し会議はお開きとなった。

「…ふう」

私室に戻ったジルクニフは溜め息をつきながら椅子に深く腰掛ける。

「激動の年、だな」

確実に世界は大きな変化に飲み込まれようとしている。だがそれも仕方ないだろう。

「神の再臨となれば当然だろうな…。だが流れを御することは出来ずとも、上手く乗ってみせようじゃないか。幸いにその切っ掛けは掴むことが出来た」

六大神は世界の基盤を創った、八欲王は世界を恐怖に陥れた、ならば今回の来訪者はどちらなのか。

自分の手腕が帝国の行く末を決める。そんなことは皇帝の椅子についた時から解っていたことだが、これ程の実感を持ったことはジルクニフと言えども初めてである。

「フルーダが上手くやっていけばいいのだがな…」

先の話に出た勢力、ナザリツクへ昨晚から出向しているフルーダ。実際に足を踏み入れれば何かと判ることも多いだろう。

だがジルクニフは不安だった。フルーダの命が失われるかもしれないことに——ではなく魔法の研究に夢中になりすぎて周囲を全く気にしないことにだ。

「信じているぞ、じい」

残念ながら、無理である。

「あー、英雄のお兄ちゃんだー」

そんな一人の少女の声を聞いた道行く人々の視線が、声を掛けられた人物へ集中する。

「う、うわ…」

ここ数日でこの後に起こる展開は解りきっているため、取り囲まれる前に全速力で道を走り抜ける。ガシヤガシヤと鎧の音を響かせながら人影の薄い路地裏まで辿り着き、誰も追ってきていないことを確認して、やっと一息をついた。

「ふう…。こんなことになるなんて、いいのかなあ…」

豪華な鎧に身を包み、溜め息をつきながらもどこか夢心地な様子で一人呟く彼の名前はクライム。黄金の姫の想い人であり、今の王都の話題をさらう若き英雄である。

「そんな実力もないのに英雄なんて、どうすればいいんだろう」

確かに国を救うことが出来た。最も護りたい人を救うことが出来た。だがそれは実力あつてのことではなく、はつきり言って奇跡のようなものであるとクライムは考えている。そんな実力不相応に持て囃されるだけではなく、なんの間違いか王女との結婚の話まで出ているのだ。夢心地な気分になるのも仕方ないだろう。

「ガゼフさんは忙しすぎて話すことも出来ないし、ブレインさんは街を出てしまっただし…」

相談出来る相手が居ないのが目下の悩みである。ラナーと結婚出来るのが嬉しくないわけではない。ほのかな恋心も自分で理解していた。だが降って湧いたような幸運に戸惑い、分不相応な立場となるのに幾分かの恐怖を感じているのだ。

しかしこの話を断るなどということは更に無理だとクライムは思

う。どんな厚顔無恥さがあれば王国一の美女であり、王国一の優しさを
持つ女性の求婚を断れるというのか。

「結局は考え方の問題かなあ……」

うじうじと悩んでいても仕方ないかと、自らの主であり未来の妻で
もあるラナーの元へ戻るクライム。

彼は気付かない。黄金の姫の思惑も、執着も、異常さにも。

知ることは幸せなのか、無知は罪なのか。それは誰にも解らない。

「あー、暇でありんす。攻めてくるならさっさと殺しんすのに、面倒臭
い」

蜥蜴人の集落が危ないと聞いて、殲滅に関しては計画があるため保
留にしたアインズ。

だが実行までに蜥蜴人が滅んではなんの意味も無いのでアウラと
配下の魔獣達、シャルティアとその配下の者達を派遣していた。守護
者二人という大盤振る舞いである。

この采配には深い意味があるのだろうと、誰も口を挟まなかった訳
だが実際は「責任者は二人くらい派遣すればいいかな」という適当な
采配であった。

とはいえ全く考えなしというわけでもない。派遣するとしたら親
交のあるアウラになる以上、なにかあればすぐ戻すことが出来るシャ
ルティアをつけたのだ。

「真面目にしなさいよ。集落を護れなかったらアインズ様に失望され

るわよ?」

「解ってるでありんすよ。…はあー」

「ど、どうしたの?」

脅しも効かず意気消沈としているシャルティアに、本当は気の置けない仲であるアウラは戸惑いながらも問い掛ける。

「アインズ様はもう手の届かない存在になりんした…。この心の隙間は一体何で埋めればいいんでありんしょう」

大仰に手を振ってポエミーに振る舞うシャルティア。

「あ、あんたねえ…」

パンドラズ・アクターもかくやといった大袈裟な演技に呆れるアウラ。もうどうでもいいやと出された料理に口をつける。

「なんというか、すまん…」

拠点に家を貸し出しているザリユース。自分達は生で食べる魚も、客人のために四苦八苦して調理したりと苦労しているのだ。

「いいのいいの。ほっとけば治るでしょ」

正直なところ全く美味しいとは思っていないアウラだが、ザリユースが手間を掛けて出しているのも理解しているため無理に食べているのだ。ナザリック以外の者にこれほど気を使っていることに、他ならぬアウラ自身も少し驚いていたりする。

「…」

そして机に突っ伏しながら、そんなアウラを横目に見て意外そうにしているシャルティア。

ザリユースと歓談している様子から見ても、随分と性格が変化しているようだと考察する。

そういえば、とシャルティアはナザリックそのものもこの世界にきて変わったものだと言更に思い始めた。

至高の41人の殆どが居なくなる中、一人残ってくれた愛しの君。

自身に残る全ての忠誠を捧げ、永遠とナザリツクの中で完結すると思っていた日常。

それはこの世界に来たことで否応なしに変化し、主との関係も少し変わった。どちらが正しいかと聞かれれば間違いなく今の関係だ。

ユグドラシルに居たときよりもずっと近い距離は自身に充足感を与えてくれる。今まで不敬と思っていて口にだせなかったようなセリフもふいに出るようになった。

それはこの世界に来たことというよりも、一人の人間から始まったように思える。今は居なくなってしまった創造主の友人で、知らないことを沢山教えてもらった。

彼が来たことで主の雰囲気随分と穏やかになったのは気のせいではないだろう。ナザリツクの間人間蔑視の風潮も少し薄れ、自分に至ってはそれなりに好意も抱いている。

そう考えるとアウラから見た自分も随分と変わっていたりするのだろうか。最近はまだあまりちゃんと話していないし、今度ナザリツクに帰ったときは――

「おーい！」

「ぶっ！」

ゴツン、と自分の頭から固い音がする。

「何すんのよオチビ！」

「だってなんの反応もないから……」

「う……」

任務中に呆けていた自分も悪かったようだ。

「……はあー」

「また溜め息。幸せが逃げるわよ？」

「もう逃げられたでありんすよ……」

面白い遊び相手でも来ないかな。暇潰しに耐えられるくらいの。

鍛え上げれば、世界最強の剣士に手が届くと思っていた。

最高の武技を修め、かつて辛酸を味合わされた強敵すら越えたと思っていた。

そんな思いが、今考えると儂すぎるそんな思いがこの身にあった。間違いだと気付いたのは、気付かされたのは常軌を逸した化物との邂逅だ。技もなにもない、あるのはただただ上に広がっている途方もなく高い強さの壁だった。

種族の壁なんてものじゃない、どれだけ差があるのかも解らない、高い壁。逃げ出したのは死の恐怖と生存本能によるものだが、何よりも大きい理由は目を背けたかったからだ。

信じられないほどの実力差から。信じたくないほどの現実から。「だけどあいつは…闘ったんだよな…」

ガゼフから紹介された少年とも言えるほどの若い騎士は簡単に見て取れるほど未熟だった。

少なくとも自分やガゼフには及びもつかないだろうことは直ぐに解った。話す機会は幾度かあったが強いと思ったことなど一度も無かった。だが。

「腕が千切れても、心臓が止まりかけても、絶望的な実力差があつても、心は折れなかつたんだよな…」

強さとは何かと聞かれれば、相手を屈伏させる実力だと思っていた。だけどガゼフと街の噂から耳にしたクライムの強さは自分の思う強さとは違っていた。

「立ち上がらけりや何も変わらない。俺が欲しいのは、そうだ、心の強さなんだ」

何をすればいいか到底わからないが、とにかく歩き出したかった。持ち物も適当にガゼフの館を飛び出し、あてもなく街を出た。

「もういちど、鍛え直そう。今度は負けないように、今度は折れないように」

修行と言えば山か森あたりか。近いのはトブの大森林だろう。

「そうだ、森林へ行こう。」

いい出会いがあればいいんだがな。

オデンキングとアインズの魔法講座 2

『《サモン・アンデッド・7th／第7位階死者召喚》』

黒い霧状のもやが現れ、次の瞬間にはそこからデス・ナイトが出現する。

「ううむ、ここうも簡単にいくとは…。確かに召喚の仕方も『なんとなく』という言葉は正しいように思うな」

魔法を使用したのはフルーダ。つい先程までは6位階の魔法が上限であった彼だが、今は念願でもあった7位階の魔法を使用することが出来ていた。

「二人とも、問題なく使えましたぞ」

振り返り、別の魔法を試しているオデンキングとアインズに声を掛ける。

「のおお！ 壊れたあー！」

「え…普通に成功しましたけど…」

「嘘!」

ギヤアギヤアと喧しく魔法を試しているこの二人は、ユグドラシルには無かった生活の役に立つような0位階とも言うべき魔法をこちらの世界の理論に基づいて使用していた。

「むう《リペア／修復》を使用して壊れるとは興味深い…。耐久力が低くなることは確認しているが、はて…?」

自分の成果もよそに新しい事象について考え始めるフルーダ。

「恐らく魔力の量が問題では? 調べてみたが私の方も随分と耐久度が落ちてきているようだ。細かい調整が必要ということでしょう。魔法の攻撃力はオーデインさんが少し上ですから、その違いが出た可能性もありますね」

自らの考察を述べるアインズ。フルーダはその推論に成る程、と相槌を打つ。

「それで合ってそうですねー。お、フルーダさんもデス・ナイト召喚出来ましたか」

「ああ、しかしこうもあっさり成功すると今までの努力が虚しくなるというものだ…」

「あはは…。まあ今までがあつたから今がある、ということの一つ」

フルーダが容易く7位階を使えた理由、それは単純にレベルが上がったからである。アインズにより召喚されたモンスターをオデンキングが手伝いながら討伐する。それを何度か繰り返しレベルを上げたのだ。

「しかし上げる職業レベルを選んでいないのにこうなつたことは、やっぱりアインズさんの推察が正しいのかな?」

「二つの事例だけじゃ判断出来ませんが、その可能性もありそうですね」

アインズの推察、それはこの世界の人々の職業レベルの上がりかたについてである。

ゲームの設定が現実に則したものとなっているのは間違いないが、この世界の人間は画面を見つめて職業を選択するようなことは出来ないのだ。

ならば一体どう選択されているのか。それは恐らく、純粹に知識や技術として学んだものが反映されているのではないかというのがアインズの推察だ。

実際のレベルとは別にそういった蓄積がなされ、魔力が足りて知識と理解が完璧ならばレベルが足りなくとも発動が出来る。スキルもしかり、本人の技術やセンスなどによりスキルツリーを無視して習得出来る可能性もある。

そこに実際のレベルが追い付けば相乗効果も期待できる、ということもあるかもしれない。

「実際、蒼の薔薇の方も低レベルで忍術使っていましたし無くはないんじゃないでしょうか」

「あ、そういうや忍者は最低でもレベル60は要りますもんね」

うんうんと頷くオデンキング。ついでにあの個性的な漢女を思いだしてしまい、頭を振って掻き消す。

「しかしそれだけでは説明がつかないものもありますな。少なくともサモン・アンデッド系統に関しては知識も魔力も足りていた筈だが、7位階は使うことが出来なかった」

二人の考察に疑問を差し挟み、本人もううむと唸りを上げる。

「あ、確かに……。となるとどうなんだろう?」

「まだ始まったばかりですよ。どんどん検証していきましょう」

「ふむ、今度は《リペア／修復》の精度を上げることが出来るかやってみませんか? 実際に理論を理解して使用した感触により考察の正しさを——」

3人の議論はまだまだ続くようだ。

悪魔が笑う

「その顔を見ると随分な成果があったようだが、詳しく話してもらおうか」

ジルクニフの私室に呼び寄せられたフルーダに向かって親しさを含んだ声が掛けられる。

「それはもう、ここ百年の研究よりもなお有意義であったと言えますでしょうな。たった一日で位階が上がるとは夢にも思いませんでしたぞ」

興奮冷めやらぬといった風に語気を強めて成果の一部を報告するフルーダ。彼にとってはまさに夢のような時間であったのだ。

「それは……くっ、じいと言ったことでなければ信じることも出来んなまったく」

容易く余人に力を与えたまう。まさに神の如くと言ったところかと、若干の呆れを含んだように笑うジルクニフ。

「それで内部の規模や人数などはどうだった？ まあそこまで把握させてもらえはしないだろうが、少しは何か掴めたか？」

「……」

「……」

二人しか居ない部屋に静寂が訪れる。先程メイドが持ってきた紅茶は既に湯気を上げることもなくなり、冷めている。

「コホン、それですな、驚くことにあの地下深くに閉じ込めているデス・ナイトを召喚することが出来るように……」

「おい」

「……」

その沈黙が雄弁に語っている。そんなことは忘れていたのだと。

「まったく、魔法のことになるとそうなるのがお前の悪い癖だ。まだ何度も行くことになるのだろうか？ 次はしっかりと頼んだぞ」

何者にも替えがたい主席魔法使いだけに、だだ甘な裁定である。自分の師でもあるゆえだろう。

「申し訳ありませんな、陛下。それと進んだ研究等については門外不

出ということになりました。契約により研究の成果の漏洩、及びそれによつて帝国に利益をもたらすことは出来なくなりました」

「ふむ、まあそうだろうな…予想の範囲内ではある。これまで通りに教導する分には問題ないのだろうか？ 主席魔法使いが格段に強くなるだけでも十分な成果だ。今のところは問題ないな」

なんの対価も無しに技術を提供してもらえるなどとは露ほども思っていないジルクニフ。むしろ考えていたパターンの中では充分過ぎるほどの成果だ。

「勢力そのものの情報も多少制限されると思っていたがな。余裕か、それとも…」

材料が少ないため推測もしづらい状況に難しい顔で唸るジルクニフ。ここまで感情を顕にするのもフルーダの前だからこそといえるだろう。

「これは私見になりますが…ここまで警戒をする必要はないと思いません。少なくともトップのアインズ殿は外見がアンデッドでなければ人間としか思えない程に、感性を同じくしていました」

フルーダはアインズと初めて対面した時の紳士的な態度を思いだし自らの見解を話す。

「ほう？…ふむ、成る程。フルーダ、その実力や種族というファクターを抜いた状態で考えた時、アインズ殿はどういった人物だった？」

目の前の人物がそういったことを測るのが苦手としているのは知っているジルクニフだが、あえて問い掛ける。

「…ふむ。そういったことを測るのは不得手なのですが…あえて言うならば至つて普通の人物といったところでしようかな」

オーデインと馬鹿な掛け合いをしているところや自分から冗談を言うような場面も見ているフルーダはアインズをそう評価した。

「そうか。…オーデインの事を考えればそういうこともあるか…？いや、なんにしてももう少し時間を掛けるべきだな」

思考に沈むジルクニフを見て首を捻るフルーダ。彼は政治的なことや人間関係などのことになるとまったくのお手上げなのだ。

「次の研究会には手紙を持っていつてくれ。もう少し様子を見たかったが、意外となんとかなるかもしれない」

「了解しました陛下。先程も申し上げましたが、敵対しなければ問題は無いと思いますぞ」

「ああ、解っている」

ジルクニフの頭の中では幾つもの推測が矢継ぎ早に浮かんでいく。アインズに関して聞いた話の全てが演技の可能性もあれば――例えば神の力を持っているだけの普通の人物といったものまでだ。

「オラアッ！」

女らしからぬ威勢のいい声が上がる。そしてその声が上がる度に血飛沫が舞い、村を襲う魔物達が数体まとめて死んでいく。

「ふう……これで22匹目。やっぱ異常じゃねえか？」

王都の西側にあるとある村。トブの森からは程々に離れているこの村は、今まで魔物などの被害は村としてごく普通の範疇に収まっていた。

しかし最近西から流れてきたとおぼしき魔物が村を頻繁に襲うようになり、王都へ助けを求めたのだ。

それはこの周辺の村も同様であり、森に何か異常が発生しているのではないかと村の人々は怯えていた。

しかし今はそんな要請に答えられる状況ではない王都は、出せる兵も限られている。そうなってくると当然冒険者の出番だ。犯罪が極端に減り、街道の野盗の数も少なくなったため仕事がなかった彼等はこれ幸いとばかりに依頼を受諾した。

しかし依頼というのはお金がかかるものであり、貧しい村は冒険者

を雇うことも出来ず自分達で村を護ることを余儀無くされた。だがそんな不幸の中でも救いの糸というものはあるものだ。冒険者チーム「蒼の薔薇」の一人ガガーランはそんな村の現状を知るや否や、義憤にかられ単身王都を飛び出し、無償で助け回ろうとしていた。

それに慌てて追いかけたのがイビルアイだ。ラキユースなどは貴族としての事後処理などで王都を離れられず、ティナとティアはイビルアイがつくなら大丈夫だろうと見送った。

「確かに通常ではありえんな。森の方でなにか起こっているんだろう」

ここ最近は何かと厄介事が多いなと溜め息をつくイビルアイ。ラキユースが動けない内に休めると思いきや結局これだ。溜め息も仕方のないことだろう。

「うし、じゃあ森の方も調べてみるか」

「おいおい……」

イビルアイはろくに休憩もとらずに奔走しているガガーランに呆れながら、一旦休むぞと後方にある村で休ませてもらうことを提案する。

「じゃあねえな……ん？」

村に向かおうとしたガガーランだが、南の方から村に向かっている数人の人影を発見する。魔物ではなさそうだが商人といった風にも見えず、この貧しい村にわざわざ冒険者が来るといったこともまずないだろう。少々怪しさを感じたガガーランはその一団が村に入る前に引き留め、話を聞こうと走り始める。

「よう、この村になんのようだ？ 見ての通りなんにもない村だぜ。冒険者つて訳じゃねえんだろ？」

随分立派な装備に身を包んでいるものの、プレートを下げていないため冒険者ではないと判断したガガーラン。ならばワーカーかとも思ったがなんとなく自分の勘が違うと告げている。

「我々はこの辺りで探し物をしていました。何かこの周辺でおかしな物やおかしな事があったかなど、ご存じないでしょうか？」

集団の中でも一番年若く見えるリーダーらしき者がガガーランの

言葉に応える。

「探し物、ねえ。どんなもんだ？　それが解らないんじや教えようがねえだろ」

「少々複雑な事情がありましたね…。具体的なことは申し上げられないのです。それより貴女は――」

しかし言葉の途中で追いついてきたイビルアイに遮られる。

「私も気になるな、ガガーラン。この情勢の王国に見知らぬ強者が揃いも揃って何をする気だ？」

吸血鬼ならではの身体スペックで離れたところからでも話が聞こえていたイビルアイ。ガゼフやラキユースに何か怪しいことがあれば報告してほしいとも言われていたため、あからさまに怪しいこの集団がクーデターと何か関わりがあるのかと問い詰める。イビルアイクラスともなれば雰囲気でなんとなくは強いかどうかは解るのだ。

「ガガーラン…か。ふむ、なんとも間の悪い…」

音に聞こえたアダマンタイトの冒険者の名前が出たことで目の前の女性の素性に気が付いた男。しかし面倒だという雰囲気はあれど怯えなどは微塵も無い。まるで自分の方が強者である、という風だ。

「で、どうなんだ？　おとなしく事情を話すなら穏便に事を運ぶのも吝かじゃないが」

無言で俯いている男に強気に話しかけるイビルアイ。しかし返された言葉は挑発と受け取るのが当然といったものだった。

「今の貴女方は…イグノニックに水をかける寸前で止まっているに等しい。これ以上詮索はしないというならばこちらも穏便に済ませますが」

「なに？」

イビルアイはそのあまりにも強気な態度を訝しむ。自分達が蒼の薔薇だということは気付いた様子であるにも関わらずこの態度だ。ハツタリか、それとも本当にこちらを打倒する手立てがあるのか。

一月前の彼女ならハツタリだと切つて捨てていたが、ナザリックの存在を知り上には上がいるのだと思いき知らされたイビルアイは少し

迷う。

「…お前達はこの国の者か？」

「…話せません」

「この国に何をしにきた？」

「探し物を」

「これからどこに向かう？」

「この周辺になにも無ければ、森に沿って探っていくことになるでしょう」

「この国に害を為すか？」

「受け取り方次第、でしょうか」

短い問答。嘘をついているかどうかはわからないが、最後の質問でイビルアイの腹は決まった。

「悪いがやはり見逃せないな。拘束させてもらう」

「…人類側の戦力を削りたくはないのですが、ね」

「ほざけ」

やれやれといった様子で槍を構える男。後ろの者達は動く様子がない。

「ドラアツ！」

イビルアイが下がりガガーランが前に出る。二人では陣形もなにも無いが、戦士と詠唱者の基本的なパターンだろう。前衛が抑えている内に高速で詠唱を始めるイビルアイだったが、それは悪手だった。

いや、悪手というならば敵対を選択したことがそもそもの間違いだったのだろう。

「がつ…！」

「ぐうつ…！」

一瞬でガガーランが吹き飛ばされ、いつのまに距離を詰めたのかイビルアイの目の前に現れた男がそのまま槍で風ぎ払う。そしてその衝撃でイビルアイの仮面が外れ、外套が捲れ上がった。

「…！」

そしてその瞬間に、男の雰囲気が変わる。

「まさか最高の冒険者チームと名高い蒼の薔薇のメンバーに吸血鬼が

混じっているとは思いませんでした。殺す気はなかったのですが……人類を護るのが吸血鬼など、あつてはならぬと初めて殺気を滲ませる。

「くっ……最近では本当にどうなっているんだろうな……」

気絶したガガーランを掴んで離脱をはかるイビルアイだが、それを許される筈もなくあっけなく脚を貫かれ地面に転がる。後退り、迫り来る男を見詰めるイビルアイ。

「……ガガーランは見逃してくれないか？」

「悪いが、もう遅い」

せめて仲間だけは一縷の望みにすがすが、一言で断ち切られる。槍の穂先が眼前に迫り死を覚悟するイビルアイ。思えば長いようで短い人生だったと走馬灯が駆け巡る。望まず吸血鬼になり、たった一人で孤独を彷徨う日々。蒼の薔薇に入ってから悪くない日々。色々であったが最期はあつけないものだと言を閉じて死を待った。

「……？」

だがいつまで経っても訪れない最期に、そつと目を開いて何が起きているのか確認するイビルアイ。そして目に入ったものは――

「状況はよく解りませんが……一度ナザリックに招待した方をみすみす死なせることは出来ませんね」

三つ揃えのスーツに黒髪をオールバックにした、丸眼鏡をきらりと輝かせる悪魔だった。

アインズに休暇を言い渡されたデミウルゴス。しかしこれほど長い息抜きなどしたこともない彼はナザリックの外に出た後、行き先も

決めず気儘に空を飛んでいた。

「考え無しに行動してみるというのも中々興味深いですね。…しかし無闇に姿を見せる訳にもいかないというのは少々面倒ではあります」自分の姿を考えると人の居るところには行けば騒ぎになるのは想像出来るため、降下する場所も考える必要があるのだ。

しかし上空から俯瞰してみると魔物と戦う冒険者をちらほらと見掛ける。とるに足らない弱者がちまちまと戦っている光景を見て、中々に滑稽だと嘲笑うデミウルゴス。たまに食い殺されている人間の悲劇などはいい暇潰しだと新しい楽しみを発掘していく。

「おや、あちらは人間同士の戦いでしょうか？　なんとも愚かで、滑稽で——」

愛おしい。と口の端を歪ませながらその観劇をよく見ようと近付いていくデミウルゴス。しかし近付くにつれ両者とも知った顔だと気付く。

「あれは…？」

ナザリツクに招かれた客人と、招かれざる客人。冒険者チーム「蒼の薔薇」と法国の特殊部隊「漆黒聖典」だったかと記憶から情報を引っ張り出した。

「ふむ…どうしたものか」

思案している内に終わりが近付いている様子を見て仕方ない、と横槍を入れるべく急降下していくデミウルゴスであった。

「あ…？」

呆けたように固まるイビルアイ。しかし命を散らす間際だったことを考えればそれも当然だろう。

「ホワアッ!？」

呆けたように固まる漆黒聖典隊長。しかし命を散らす間際である

ことを考えればそれも当然だろう。

「お久しぶりですね、お二方。ところで事情をお聞きしても？」

固まる空気を気にもとめずにこやかに問い掛けるデミウルゴス。だが、実のところその内心は油断も慢心もしていなかった。

自分は中々後衛型のスキル構成でありそもそも戦闘自体を得意としているわけではない。

対してデミウルゴスの目の前で地面に根をはったように動かない男は、フル装備な上に前衛型でバリバリの戦闘職。レベル差があるとはいえ万が一を考えると警戒には値するだろう。そう考えて取り敢えず状況を把握しようと至極優しげに問い掛けたのだ。

——だが笑顔は元来攻撃的なものであるとは誰が言ったか、デミウルゴスの悪魔顔は笑うと怖い。そこに他意はなかったが漆黒聖典の者達を恐怖に陥れるには充分だった。

「ナ、ナザリック地下大墳墓の所縁の方とは知らず、も、申し訳ありません！ 何卒ご容赦を……！」

全員がひれ伏し全力で謝罪する集団。こんな辺境に近いところで数少ないアダマンタイトクラスの冒険者に出合い、あまつさえそれが絶対に敵対したくない勢力の所縁のものだった。そんな不幸すぎる事態に彼等は嘆くばかりである。

「謝罪は結構ですよ。それより事情を説明していただけますか？」

隊長は機嫌を損ねてはかなわないと、慌てて説明し始める。

「その、事情といいましても……前回こちらに出向いた理由と同じです」

要はカタストロフ・ドラゴンロードについての探索である。巫女の次なる宣託を元に出向いたのだ。そしてその途中で運悪く蒼の薔薇と出くわし、素性を詮索されたので戦闘に移行した。そう説明するのだが、吸血鬼死すべしと襲いかかったのは省いている。そんなことが知れた暁には命が危ないのは解りきっているからだ。

「成る程。……しかしこちらの方達はアインズ様の知人。私の目の前で害そうとするならば——」

「は、はっ、いえ、そのようなことは微塵も考えていません。では、我

らはこれにて」

そそくさと、もと来た方へ逃げていく漆黒聖典。まるで漆黒のゴキブリのようである。

「大丈夫でしたか？ 見たところ怪我は無いようですが」

なんとも、らしからぬ事をしたものだと思案するデミウルゴス。まあナザリックの者ではないとはいえ人間ではなく吸血鬼であり、シャルティアとも少し仲良くなっていたからだろうと納得する。

「あ…は、はい…」

脅威は去ったというのにまだ呆けているイビルアイに疑問を覚えつつも、そろそろ帰ろうかと思案するデミウルゴス。しかしその前にガガーランが目覚め、固まるイビルアイとその前に居るデミウルゴスを見て目を丸くする。

だが既に危険は無さそうだとほっとしたところで、打ち付けられた頭の傷をさすり顔を歪める。

「——っ痛う。最近負け癖ついてねえか俺達。…で、そっちの旦那が助けてくれたのかい？」

状況的にそれしか考えられないだろうが一応問い掛けるガガーラン。デミウルゴスからは是という返事が返り、深く頭を下げて感謝を示す。

そしてイビルアイに視線を移したところで、やっと彼女が一言も喋らない理由を察した。デミウルゴスに視線を向け、頬を染めるその様は完全無欠に乙女モードである。

「あ…」

どれだけ厄介な奴に惚れるんだと呆れるガガーラン。だが強さ的にも寿命的にもありと言えればありなのかと納得する。そうとなれば自分は応援するだけだと、話しかけられずにいるイビルアイに代わって一緒に話でも出来る口実を探り始めた。

「なにか礼でもさせてもらえねえか？ それとも何か仕事の途中だったりするか？」

「感謝ならアインズ様になさればよろしい。私は貴女方が主の知り合いだからこそお助けしたまで」

ついでに今は長めの休暇中です、と続けるデミウルゴス。ガガーランは異形種だらけのいかにも恐怖の組織然としたナザリックで休暇なんてあるのかと驚いた。

そしてデミウルゴスと話す隙をもじもじと窺っていたイビルアイは休暇中という言葉聞いて攻勢に出る。

「あつ、あの！　休暇中なら…その…」

しかし誘い文句は幾つも思い浮かぶのに、口からは出ていかない。数百年を生きる吸血鬼も恋愛に関しては形無しである。

「わ…：…な、長い休暇を出すなんて、すごく思い遣りのある方だなあ…」

挙げ句の果てには明後日の方向へ話を繋げてしまう体たらくだ。しかしこの場合は最高の攻めどころだろう。

「その通りです！」

「ひゃっ!？」

ずずいと顔を近づけたインズの優しさと偉大さと慈悲深さなどを語り始めるデミウルゴス。それを見てここだ、と判断したガガーランはもう一度取っ掛かりを作ろうと話しかける。

「なあ、イビルアイももっと話を聞きたいだしよかったら少しだけ一緒に行動しねえか？　俺達はこれから南下して村を回って行くんだ。終着点がカルネ村だからナザリックも近いし」

少しだけ考える素振りを見せた後、暇をもて余していたので丁度いいですねと提案を受け入れるデミウルゴス。

アウラも、シャルティアも、アルベドも——そしてデミウルゴスだって、少しずつ変化している。それはナザリックにとって良い変化なのか悪い変化なのかは、今は誰にも判らない。

だがインズが彼等の変化を見たならば、笑いながらきつと前者だと断言するだろう。

オデンキングとアイنزの魔法講座 3

コンコン、と扉がノックされる。さして広くもない部屋でアイنزとオデンキング、それにフルーダが3人並んで座っていた。

「お入りください」

アイنزが扉の外の人物に声を掛けの中に入るように促す。

「し、失礼致します」

挙動不審に入ってきた禿げ頭の男の名はカジットと言い、ナザリツクの情報源の一つである。キヨロキヨロとしている彼にどうぞお掛けくださいとオデンキングがすすめる。少し笑いを堪えている風なのはみまちがいではないだろう。

「では始めましょうか…ベジットさん」

「カジットです」

「失礼、カジットさん。えー、まずは軽く自己紹介を…あと経歴と使える魔法をお願いします」

カジットはそれに応え自分の目的である母の復活や、元は法国で信仰系統の魔法を学んでいたがそれでは目的を達することは出来ないの見切りをつけたことなどを赤裸々に語る。

「成る程。つまり最終的には蘇生魔法の極みに達することが目標というわけで、アンデッドになることはその一環だと」

「はい」

カジットの生きる理由を聞いてひそひそと密談するアイنزとオ

デンキング。

「(意外と理由が重いんですが)」

「(人に歴史ありと言いますし、本人が望んでいるのならいいのでは?)」

「(うーん、まあ、そうですね…)」

彼等が何を目論んでいるか、それはずばり人体実験である。ある程度のレベルに達した人物が種族を変更した時の変化や、レベルを上げる際に指向性を持たせる事が出来るかなど、色々と試したいことがあるのだ。

しかしまさに悪の所業といった実験に難色を示したオデンキング。それならばとアインズは人外になりたいと望んでいる人ならいいんじゃないかとある人物を思い出した。

取り引きをした時にその目的はアンデッドになることだったと聞いていたカジツトである。連絡を取って提案したところ、それに二もなく飛び付いたカジツト。

多少のリスクはあると説明されたものの自力でエルダー・リッチを目指すよりは遥かに現実味があると快諾したのだ。

「希望はエルダー・リッチと聞いていますがそれでよろしいですか? 何なら吸血鬼やゾンビ、特殊なところだと竜種も出来なくはありませんが」

「い、いえそのままで大丈夫です」

「解りました…では早速実験に移りましょうか」

そう言つて立ち上がる3人。お茶目で面接風にしたのはいいもの特に意味もなかったようだ。

「(なんか罪悪感がちくちくと…)」

「(考えすぎじゃないですか? Winwinの関係なんですからもっと気楽に考えましょう)」

「(うむ、研究に犠牲は付き物ですな)」

「(犠牲前提はやめましょう!?)」

ひそひそと会話している3人を見て非常に不安にかられるカジツトであった。

兆し

「ふむ…」

帝国の皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは下から上がってくる膨大な案件に目を通しながら、その中にあった重要な報告について思索していた。

「森がそのような事になっているとはな…」

ワーカーという職業の中ではそれなりに信頼されているチームから、衛兵を通して伝えられたトブの大森林の現状。それが事実ならば厄介な事だと調査隊を出したジルクニフだが、帰ってきた結果はまさに報告通り。人間の領域以外は関せずといったスタンスがこの事態を招いたのは間違いないだろう。

「さて、ナザリックの方が気付いていない訳は無いだろうが…どう出るか」

しかし様子見をしている余裕は無いなど少しばかり思考に耽った後、部下を呼び出す。

「王国への休戦の申し入れをする。それと戦の準備は3割ほどはこちらに流用出来るだろう。ゴブリンとはいえ数が数だ、極力被害を抑えたい」

今の王国ならば休戦協定はもっつけの幸いとばかりに受け入れるだろう。ゴブリンのために戦を取り止める訳ではないが、時代が大きく変動している今余力は充分に残しておくべきだとジルクニフは考える。

「王国の方はどう出るか…いや、森の範囲と領土を考えると協力して事にあたることも考えなければならんな」

帝国の領土からだけの対策では少なくない数のうち漏らしが王国の村を襲うだろう。領土を増やすことは先帝からの命題とはいえ、荒れ果てた領地など侵略しても旨味は少ない。そして、それ以前にジルクニフは周辺諸国との関係を考え直す必要があると考えていた。

『人類って争ってる余裕なくない?』…か。まさに耳に痛い言葉だったな」

人類の脆弱性や生存圏の狭さは知識としては持っていたものの実感してはいなかったジルクニフ。クレマンティーヌから聞いた法国の、そして漆黒聖典の考え方は過激で極論といった部分があるものきつと間違つてはいないのだろう。

人類の生存圏を確かに護り続け、帝国からすればとるに足らないような小国を滅びの憂き目から人知れず救つてきた法国。その立場から見れば人類同士の小競り合いを繰り返す王国と帝国はさぞ愚かに映つていたことだろう。

「今までの政策が間違つていたとは思わんが、変革の時がきたということなのだろうな…。とはいえ法国の考え方に沿つては滅びは必定」

ナザリツクの実態を知つてなお、人類以外を認めないなどと言う妄言を吐くのならばその報いは手痛いしつぺ返しどころでは済まないだろう。沈みゆく泥船に乗る訳にはいかないと、ジルクニフは帝国という巨大な船の舵取りを必死で模索しつつも、人類そのものの救済も考えながら机に向かう。

「最近独り言が増えた気がするな…」

人間種が団結するための第一歩は——まずは帝国の皇帝が踏み出した。行く先は繁栄か衰退か、それはきつと進まなければわからないのだろう。

「こうも立て続けに不測の事態が起きるといふのは、何かの兆しか？」

王都リ・エステイーゼの居城で、蒼の薔薇のメンバーから上がつてきた報告に頭を抱えるランポツサ三世。このままではゴブリンが森

を埋め尽くし、いずれ溢れだすだろうという情報は職務に追われる彼に新たな悩みの種を植え付けた。

「しかし帝国の休戦協定自体はありがたい」

だがゴブリンの群れの掃討程度のことでは休戦協定、それどころか共闘の申し入れまでしてくるのはあまりにも不可解に感じるランポツサ三世。

何か裏があるのではないかと推測するものの、情報が少なく結局は受け入れる選択肢しかないのが王国の王である自分と帝国の皇帝である相手の差を表しているようで憂鬱さを助長している。

「出来ればこのまま毎年のような戦などなくなってしまえばよいのだがな……」

今までの苦労を水の泡にするようなことを帝国がするはずもないかと、都合のいい妄想を振り払って王は返事を考える。しかしそれを遮るように室内にノックの音が響き渡った。

「入れ」

またもや政務の追加かと身構えるランポツサ三世だが、その予想に反して部屋に入ってきた男は自分が最も信頼する戦士であり、王国最強と謳われる武人ガゼフ・ストロノーフであった。

「お忙しいところ申し訳ありません。ですがどうしてもお耳に入れておきたいことが」

実直でまさに質実剛健といった言葉が似合うこの男は見事なお辞儀をしながらも、貴族のように装飾過多な挨拶や空々しい美辞麗句などは一切使わず用件を告げようとする。

「ふ、こつるさい貴族も今は随分と静かになったのだから気にせずともよい。だがお前が直々に来るといふのは気が沈むな」

大したことではなければ通常の書式に則って報告をすれば問題ないのだ。つまり態々ここに来たということはそれなりに重要なことなのだろうと、厄介事が増える予感に溜め息をつくランポツサ三世。

「はは、心中お察しします。……しかし軽々しく扱う問題ではないと考えましたので参った次第です」

真剣な顔で王の顔を見詰めるガゼフ。

「やれやれ、老骨の身には堪えるものだ。優秀な後継ぎがいればこんな席などいくらでも譲るのだがな」

ランポツサⅢ世は顔をしかめつつもガゼフに用件を話すよう促す。「会って頂きたい者がいます」

簡潔に一言で伝えるガゼフだが、短い文句とは裏腹に鹿爪らしいその表情からは重々しさが窺える。それを察してかランポツサⅢ世の方も姿勢を整えながら言葉の続きを待つ。

「カルネ村の件で世話になったマジックキャスターの話は覚えておられますか？」

「む…ああ、覚えているとも。忘れるものか」

マジックキャスターの件というよりも、ガゼフが貴族達に嵌められて装備もろくに整えられず命を落としかけたという事で鮮明に記憶しているランポツサⅢ世。そのマジックキャスターと会えばいいのかとガゼフに問い掛ける。

「は。旅のマジックキャスターと聞いていたのですが、改めて話を聞いたところ何らかの事故によりその拠点ごと王国の領土に転移したというのが事実だったようです」

「なに？」

なんとも信じがたい事実疑問の声をあげる。王国の歴史を紐解いてもそんな珍事はまず無いだろうことを思えば、仕方の無いことではある。

「それは…事実、なのか？」

「蒼の薔薇によれば今まで影も形も無かった場所に巨大な墳墓が広がっているとのことです。まず間違いないでしょう」

王国でも数少ないアダマンタイトの冒険者の報告だ。自分の愛娘とも親しい彼女達の言ならばランポツサⅢ世にとって疑う余地は少ないだろう。

「そうか…。いや、大墳墓と言ったか？」

ガゼフは拠点と言ったが、普通に考えて大墳墓が拠点などというのは趣味が悪いというレベルではない。

「はい。それに関しては…その」

この部屋に入って初めて歯切れ悪く言い淀むガゼフ。何度か逡巡しながら、しかし意を決して口を開く。

「そこは…その拠点の勢力の殆どは、アンデッドや異形の者達で構成されているそうです」

驚きで声も出ない様子のランポツサ三世。自分の領地にアンデッドの一大拠点が出来ていたともなればそれも当然かもしれない。

「ですが陛下。かつて話した通り、その大墳墓のトップは温厚で義に篤い優秀な方なのです。いえ、優秀などという言葉では表すことが出来ないかも知れない」

「…どういうことだ？」

問われたガゼフは答える。大墳墓に入った蒼の薔薇が見たもの、感じたもの、そして思い知らされたこと。

何でも無いように、礼だと言つて国宝級のアイテムや高価な消耗品などを大量にぽんと渡された事実を。又聞きではあるが充分に伝わってきたアインズの勢力の脅威。その紳士的な対応なども余すことなく伝える。

「にわかには信じられんが…他ならぬお前の言うことだ。真実なのだろうな」

一番信を置く部下がこれほど熱弁して擁護する人物。アンデッドといえどもそういう者もいるのかと、ひとまず偏見や色眼鏡で見ることとは無くなったランポツサ三世。

「しかし、国を滅ぼしかねないという言葉は些か大げさではないか？」

大墳墓といっても街より大きい訳ではないだろうに」

「…」

その言葉を聞いて俯き、複雑な表情で声を絞り出すガゼフ。

「国墮としての伝説は…ご存知でしょうか？」

その問いに勿論だと頷くランポツサ三世。国王ともなればその程度の知識は持っている当たり前だ。たった一人で国を滅ぼした恐ろしい吸血鬼の逸話。そしてそんな話を急に持ち出したということは、そういうことなのだろうかと顔を歪める。

「それは、つまりそれほどの戦力を持ち得ているということか？」

確かにそれは敵対したくはないなど空笑いするランポツサⅢ世。しかしガゼフはゆつくりと首を横に振り、衝撃の事実を告げる。

「蒼の薔薇のイビルアイ。彼女がその国墮とし張本人であると聞きました」

「な……！」

諸国にも知れわたる名高い冒険者チームの一人が伝説の吸血鬼であった。驚くなどという方が無理というものだ。

しかしランポツサⅢ世はその驚愕を更に塗り潰すほどの事実を既に聞いていることに気付き、それと同時に今度こそ声を失った。

「つまり小国ならば単騎で滅ぼしかねないイビルアイ殿が、更に手も足も出ない存在が何人も居る場所。それがアインズ殿の拠点、ナザリック地下大墳墓というところなのです」

少しばかり呆け、一瞬だけ我を失った。だが彼は王だ。例え凡庸と言われようとも、いつまでも茫然自失などとはしてはられない。

「つまり帝国の不可解な動きは…そういう訳であったか」

「恐らくは」

椅子に深く座り直し、少し考え込んだ後に口を開くランポツサⅢ世。

「……まずは、非公式にと言うことだな？」

「それがよろしいかと」

今日一番の深い溜め息をつきながら天を仰ぐ。王の座について奔走してきた日々があり、そしてようやく斜陽の国を再興させる目が出てきた。目の回るような忙しさもそれが国のためならばと、疲労しつつも充足感を得ていた。

だがしかし、王冠は——王の座というものは、王を休ませるといふことを知らないようだ。

「ガゼフよ」

「はっ」

「王とかどう？」

「はっ!?!」

疲労とはかくも恐ろしいものである。

ペコペコと頭を下げながらナザリツクを後にするエルダーリツチを見送り、実験室に戻った3人。

「実に有意義な実験となりましたな」

「ええ。とくにスキルツリーの規則性を多少なりとも把握出来たのは大きい」

「ユグドラ的に糞みたいなスキル構成になってましたけど…」

剣も使えて拳も使える、歌って踊れて回復も出来るネクロマンシーなアンデッド。スーパークラジットの誕生であった。全てが中途半端というのは触れてはいけない部分である。

「さてと、これから少々忙しくなります。お二人もよろしく願いますね？」

「了解です。ま、気楽にいきましょう」

「争いが減れば魔法の研究に没頭出来ますからな」

そう言って帝国に戻るオデンキングとフルーダ。見送るアインは予想外に大事になった事態に溜め息をつきつつも、周辺諸国との良好な関係が築けそうだと安堵する。

各勢力の思惑が混じりあい、大森林にて収束する。対する敵は役者不足のゴブリン達。強者達の邂逅は世界に何をもたらすか。

——そして密やかに策謀を巡らしていた彼女も、遂に動きだす。
「く、くふ、くふふふ」

緻密に組まれた悪魔の計画。何人たりとも侵せない、邪魔さえ出来ないマヌーヴァー。

「永遠に一緒です。アインズ様……」

その手に握られた恐ろしき計画書。一枚目のタイトルは——

『ブライダルプラン』

そう、書かれていたのだった。

悪気はなくとも

「(そろそろ始めますねー?)」

「(ええ)」

「(帝国軍、準備完了しております)」

「(王国軍も問題は無い)」

トブの大森林を囲むようにして出来上がった、戦力過多とも言えるような磐石な布陣。東を帝国の軍1000、西を王国軍500と雇われた冒険者500。そして南にはナザリックと蜥蜴人の戦士達が待ち構えていた。

計2000超とゴブリンの数に対して10分の1といったところであるが、戦力比で言うならば逆に1対10ではきかないほど離れているだけに、もはや大勢は戦う前から決していると言っても過言ではない。

帝国は職業軍人の育成に力を入れているだけはある、ゴブリンなどもの数ではないだろう。王国の方は軍人の質では帝国に一步も二歩も劣ってはいるが、その分冒険者を多数雇っている。ゴブリンとの戦闘経験がない冒険者など、それこそ駆け出しくらいの者だろう。

クーデターの一件で大貴族を含む幾つかの名家がとり潰され、領地や財産は全て国に接収されたが故に出来る金の使い方である。

そして作戦の根幹を担い、始まりの鐘を鳴らすのは帝国の客人であり最高レベルの実力を持つマジックキャスター、オデンキングだ。トブの大森林の上空でふわふわと浮かびながら各勢力の準備完了を待っており、暇だからと着いてきたクレマンティーンと駄弁っている様は大規模な戦闘の前とはとても思えない有り様だ。ちなみにクレマンティーンが浮いているのはオデンキングが渡したマジックアイテムによるものである。

「(了解です。∴では)」

それぞれの勢力の指揮官と《メッセージ／伝言》でやり取りし、問題なさそうだと判断したオデンキングは作戦を開始した。

「いやー、研究の成果が早速役に立つとはね」

オデンキングが広範囲にわたり使用しているのは、低レベルのモンスターを恐慌状態にさせる魔法だ。位階は低く元々の効果もレベル40を下回る者にしか効かない、ユグドラシルでも初期以外は使われないような魔法である。

しかしアインズとフルーダとの研究により魔法の効果範囲や出力などを変化させる事に成功し、効果のあるレベルが40から下がり、耐性で弾かれる確率が上がったものの範囲を飛躍的に拡げることが出来たのだ。

つまりオデンキングは羊を追い立てる牧羊犬の役目だ。ゴブリンを暴走させ森の外まで向かわせて待ち構える者達に殲滅させる。特にマジックキャスターを多く擁する帝国などは鴨撃ちの如く容易に対応でき、人的被害は相前に抑えられるのは間違いない。

「しかしそう上手いこと同士討ちにはならないな：ん？　今なんか抵抗感が…？　気のせいかな」

僅かに弾かれた感触があったことに疑問を覚えるオデンキングだが流石に一回の魔法の使用で広い森をカバー出来る筈もなく、まだまだ仕事はあると気にせず移動していく。それが予想外の被害拡大の火種になるとは、思いもよらずに。

クアイエツセ・ハゼイア・クインティア。彼は法国の特殊部隊漆黒聖典の一人であり、多数の殲滅という領域に於いては人類の中でも最上位といえるほどの実力を持っている。

通称「一人師団」と呼ばれる理由は数多くの強力な魔物を次々と召

喚し、使役するという戦いかたにあった。特に難度でいえば百近い強さを持つギガントバジリスクすら複数従えることが彼の類い稀なるティマーとしての実力を表していると言えるだろう。そしてそんな彼は今、トブの大森林に足を踏み入れていた。

先日漆黒聖典の一部がこの周辺を探索した際にゴブリンの異常発生に気付き、その報告を受けた法国が殲滅に最適な彼を派遣したのだ。そして彼は森の中ほどまで踏み入り、自身が使役出来る最大の数を召喚して殲滅を開始しようとしたところで——悲劇に見舞われた。

「ぬおおおお?!」

何らかの波動を感じ、何とも言えない違和感が辺りを覆った。そしてその瞬間に起きたのは召喚した魔物達が恐慌状態になり制御不能になった挙げ句、蹂躪するはずだったゴブリンの群までもが暴走するという事態だ。

彼は優秀なティマーだ。召喚した魔物の質も数も、人類という枠組みならば最高と言えるだろう。だが、だからこそ直接的な戦闘は不得手としているのだ。

もちろんレベルとしては十分に高いものがあり、レベル差によるゴリ押しでギガントバジリスクの一体程度ならば己のみで打倒することも出来ないことはない。

しかしティマーやサモナーの強さというものは総じて、個ではなく群れとしての強さなのだ。暴走状態の高位の魔物の群れ、それに暴走状態の無数のゴブリン。それを体一つでなんとか出来るかといえれば——無理と言わざるを得ないだろう。

だから彼は全力で森を疾走している。ティマーとして自分が操っている筈の魔物に殺されるなど笑い話にもならない、そんなことを考えながら久しぶりの命の危機に心臓を鳴らしてひたすらに、ただひたすらに走り続ける。

「ぬぐう…それなりに散らばってしまっているようですねえ…! どううしましょう」

このままでは人類を守護するどころか、被害を増加させるだけなの

は間違いない。しかしどうしようもない。

「くっ…一体何が…？ 自然現象とは思えないがうおっ！ クソがあ
！」

何処のどいつのせいだちくしょう！ と叫びながら華麗に紙一重で攻撃を捌きつつ丁寧な口調が次第に崩れていくクアイエッセ。その誰とも知れぬ者への罵倒がクレマンティーンとよく似ていたのは、まさに兄妹故と言えるだろう。

「うおおおお死ぬ！ マジで死ぬ！ ……え？」

そしてバラバラに散ったギガントバジリスクの内3体が何故か執拗に追い回してきたため、方向も解らずにひたすら回避と逃走を繰り返していたクアイエッセ。

もはや誰だお前と言うほどに崩壊したキャラはその逼迫した状況と彼の必死さを物語っている。だがその内の一匹が上から降ってきた人間によって一瞬で絶命させられ、クアイエッセに間抜けな声を上げさせる。

「無様ねえええ…お兄ちゃん？ こんなのに執着してたなんてー、か
つてのわた」

「助けてマイシスタアアアー!!」

「誰だお前はああー!!」

空を飛んでいると懐かしい声が聞こえた気がして出所を探し、クアイエッセを発見したクレマンティーン。もはや大した感情も抱いていない兄ではあるが、かつて無いほどに醜態を晒す兄を見て取り敢えず馬鹿にしてやろうと降下したのだ。ちなみにオデンキングにはちよつと所要と言つて離れたため、お花を摘みに行つたと勘違いされている。

しかし悲しいかな、少しの憧憬と狂おしいほどに憎悪したかつての兄はもういなかった。南無。

「お兄ちゃんと呼んでくれるなんて嬉しいですよクレマンティーン」

「皮肉に決まってるだろうが！」

「照れるな照れるな」

「ぐあああ…!! やっぱり殺そうかな…!!」

頭をガリガリと搔いて苛立つクレマンティーヌ。ちなみに二人とも絶賛全力疾走中である。ギガントバジリスクも2体ならばなんとかなると気を緩めたクアイエッセ。

そしてナザリツクでの出来事を法国で聞いていたためクレマンティーヌにここにいる理由を問い掛けた。既に口調も戻っているのは命の危機が消えた故か、それとも妹の変化を兄として感じ取ったからか。

「ところで何故ここに？ 隊長から異形種の巣窟で慰みものにされていると聞いていましたが」

「どんな伝わりかた!？」

「というのは冗談で、なにやら遅い春がきていたと聞きました」

「は、はあ？ ナニソレ」

なんともわかりやすい反応になるほど、と頷くクアイエッセ。態度が随分と軟化しているのはきつとそれのおかげなのだろうと当たりをつけた。

「しかし何なんですかねこの状況は。何か知りませんか？ 愛しの妹よ」

「死にたい?」

「冗談です」

報告を聞く限り既に自分よりも強いのだろうと推測しているクアイエッセ。しかしどちらにしても魔物を使役出来ない今の状態では以前のクレマンティーヌにすら容易く殺されるのは間違いない。

だが不思議とそんな事にはならないだろうという確信がクアイエッセにはあった。むしろこれが普通の兄妹のやりとりなのかと思うと頬が弛むほどだ。

残念ながら普通の兄妹はゴブリンと高位の魔物が渦巻く森で全力疾走しながら談笑などしないが。

「で、どうな……おや?」

改めて此処にいる理由とこの状況の説明を問い掛けようとしたクアイエッセ。だがその前に森がひらけ平原に出る。恐るべきは人類最高クラスの移動速度であった。この場合は着いてくる事が出来

たギガントバジリスクを褒めるべきだろうか。

スタートした場所にいたゴブリンなどは既に遠く置き去りにされているものの、道中にいたものや他の魔物も引き連れて——といよりは追いたてて、といったほうが正しいだろうか、とにかくにも魔物の軍勢を率いるような形で森を出てしまった二人。目の前に広がるのは平原、それも冒険者や兵士がちらほらと見える。

「お、おい？　なんだよあれ。ゴブリンどころか……！」

予定していたゴブリンの群れとは違い、それ以外の魔物——特に、紛れている高位の魔物を見た彼等是不安そうにぎわめきだす。

「冗談じゃねえ！　こんなところに居られるか！　俺は街に戻らせてもらうぜ！」

そして低ランクの冒険者のほんの一部が死亡フラグを立てながら敵前逃亡をはかる。とはいえゴブリンと戦うということで請け負った依頼が、自分では到底勝てない魔物と戦う形になれば仕方のないことではあるだろう。

依頼の放棄で失う信用、それもギルドの調査不足という大義名分があるような致し方ない形と、自分の命。後者を選ぶのを悪というものは少数派である。とくに冒険者など命あつての物種だ。

「く、各班に伝達。高位の魔物はゴールド以上の冒険者複数で当たらせよ！　陣を後退させつつ時間稼ぎに徹させろ、応援を呼ぶ！」

不測の事態があればナザリックから応援を出す。指揮官には通達されている情報だがいきなり異形種や亜人種が姿を見せても混乱のもとであり、まず呼ぶことはないだろうと事情を話されている誰もが考えていた。

しかし状況を鑑みた指揮官達は早々に決断した。遠からず戦線が崩壊することを考えれば英断だと言えるだろう。

「蒼の薔薇はどうしている！　出来ればあの一番厄介そうなのを受け持って欲しい！」

巨体で暴れまわり、近くの間人達を次々とその魔眼によって石化させていくギガントバジリスクを見てアダマンタイト冒険者になんとかしてもらおうと部下に尋ねる指揮官。

「それが、あの魔物を率いてきた不審な人物と交戦中でして…」
「く…やはり人為的なものか？ まずいな」

帝国の陰謀やナザリックとやらの策略が脳裏に過る指揮官だったが、出来ればそうであってはほしくないものだど頭を振りながら《メッセージ／伝言》を使用する。

「(こちら王国軍指揮官のセシルだ。予想外の事態のため至急増援を
——」
戦況は加速していく。

「何者だお前たち。あれだけの魔物を引き連れてきてよもや無関係とは言わないだろうな？」

「…不運が続きますねえ」

森を抜けたところで邂逅したクインティアの兄妹と蒼の薔薇。流石にこの不審な人物を捨て置くことは出来ないと行く手を遮り問い詰めるイビルアイ。対してクアイエツセはやれやれと肩を竦めて溜め息をつく。

そしてクレマンティーヌはというと——

「でー？ 無関係じゃなかったらどうするのー？」

にやにやと嘲りを含んだ表情で煽り始めていた。久々に手応えのありそうな相手ということもあり、戦闘準備万端である。

「ふん、捕まえて尋問するまでだ。その癩に触る顔がいつまで持つか数えておくがいい」

「縛りかたに期待」「最近陰薄いね、ボス」

「そ、そんなことないわよ。今日こそ私の暗黒刃超弩級衝撃波が炸裂する時…！」

「おい、嫌な予感がするんだが」

イビルアイが調子に乗ると強敵が現れる。最近負け続きなガガランの予想はぼつちりの中である。

「二人で戦うのは始めてですね。さて、どうしたものか」

「あつははは！ 死ねオラアッ！」

飛び出すクレマンティーヌに呆れつつ、支援魔法を自分と妹に掛けるクアイエッセ。そうはさせじとティアとテイナも飛燕の如く動き出した。

更に更に、戦況は加速していく。

「ちっ、いくらなんでもこれは……！」

着の身着のまま王都を飛び出したブレイン。森に向かうと決めた彼であったが、当然旅装もなにもない状態で何日もかかる森に辿り着ける筈もない。

心の袂にあった熱い思いも、胸の嚮けとしていた友の勇姿も、現実の空きっ腹に勝てることなく行き倒れることと相成った。しかし幸運なことに通りがかった商人に助けられ、かなり遠回りになったが帝国の村を経由して森に向かうことが出来たのだ。

しかしいざサバイバルだと奮起して、1日ほど経ったところで魔物の津波に襲われる。特に一対一でも厄介な魔物が複数となれば撤退しかないかと攻撃を捌きつつ、帝国の方向へ向かうブレイン。

暫し走り続け森を抜けたところで、外に拡がり魔物と戦っている帝国軍に驚かされる。

「魔物の暴走は折り込み済みか……？ いや、それにしても苦戦し過ぎだな」

魔物を待ち構えるような陣形の軍を見てこれが人為的なものと推測したブレイン。しかし随分と苦戦している様を見て首を傾げる。「まあなんでもいいか。だがあのデカブツはいい練習相手になりそうだ」

ニヤリと微笑みギガントバジリスクに蹂躪されている一角に突撃していくブレイン。それは悲劇の始まりだとも知らずに。

王国軍と同じく苦戦の様相を呈している帝国軍。まだ完全に崩れていないのは練度の差が如実に表れているのだろう。そして少し焦りながらも的確な指示をしている指揮官の横に現れる黒い霧。そこから出てきたのは見目麗しい少女と多数の蜥蜴人の戦士達。

「応援の要請により参上したであります。私は勝手にやるではありませんから蜥蜴人に指示をやつて。同士討ちには気を付けてくんまし」

出てきた少女——シャルティアに一瞬見とれていた指揮官だが、その言葉にはっとして急いで兵士達に伝達し始める。

とはいえ戦闘中、それも混戦といつていいほどに乱れた戦線でまともな連絡網は機能していない。

だが急に蜥蜴人達が戦線に入り込んだとはいえ、自分達を助けているのを見れば聞かずとも解ることだ。特に帝国の軍は鍛えられた精鋭であり、現場の判断もしっかりしている。この状況に即応したのも当然の結果であった。そしてシャルティアの方といえば、空から戦場を俯瞰しながら少し逡巡していた。

「まとめて吹っ飛ばしたいであります…」

随分と不穏当な発言だが、一番最適なやり方は兵士を全員引かせた後にシャルティアが一気に蹂躪すれば手っ取り早いのは確かだ。し

かしアインズにより共闘せよと命じられたシャルティアは、その考えを捨てて地上に戻る。

「…」

一拍置いて、蹂躪が始まった。

紅い鎧を身に纏い、特殊な形状の槍を持って戦場に佇む無言の少女。

鎧のせいで大部分が見えずとも、圧倒的な美しさは隠せない。

噛いながらもありえぬ速度で魔物を屠る。

隙間隙間を縫うように、通れば残るは死骸のみ。

瞼を数度瞬かせれば、紅い軌跡が奇跡を起こす。

死の間際を何度も救い、その存在を知らしめる。

人ではありえぬその牙も、気付いたものは居たけれど。

戦場に立つ戦乙女が人ならざる者であったとて、何を気にすることもなく。

彼等はそれに奮い起つ。意気軒昂に、意気揚々と、士気は最大で意気は最高。

シャルティアの暗く紅い輝きは全てを魅了して、綺羅星のように戦場を照らす。人も、蜥蜴人も、彼等が息をついたとき全ては終わっていた。

血の一滴すらその身に着いてはおらず、美貌を損なうことなく戦場を終わらせた彼女は、正しく英雄であった。

だが――

「ひっ、ああ、うわあああー！」

彼女を化物と断じて逃げ出す男が一人。その狂態に、その恐怖に彩られた表情に「吸血鬼」の三文字が脳裏に甦る兵士達。

英雄か、悪鬼か。男が狂乱し、誇りもかなぐり捨てて逃げた方向は偶然にも軍の責任者の元であった。

肩を掴み、どうしたのかと問い詰める。やはりそれほど危険な存在

かと、応援を呼ぶべきではなかったのかと、考えながらも問い詰める。
「おい、彼女に…何か、あるのか！」

機嫌を損なわれるのは恐ろしい。曖昧な表現で言葉を濁す。これだけの人数にも関わらず、静かすぎるその場には男の声がよく響くだろう。

「あ…あああ、そうだ、あ、あいつは化物だ！」

「…！ 何か、いや、何をされた？」

緊張が走る。そして漸く男の正体に気付いたシャルティアも苦虫を噛み潰したような表情になった。だが今動けばろくな事にならないのは彼女にも解っている。結果として、誰も彼もが男の言葉に固唾を呑んで見守った。

「俺の、いや…俺以外、殺されたんだ。あんなの、あんな奴勝てる訳が…やっぱり駄目だ…俺には無理だ」

「…何があった？ 何故殺されたんだ。何処かに所属していたのか？」

「女を拐って、あいつらが楽しんでいたんだ…。誰も敵わない、敵うはずがない…。俺は、俺はあいつらを、死を撒く剣団を囿にして…」

まさかの自白だった。

「…」

「…」

「…」

「…」

「捕らえろ」

「のあああああ!!」

自業自得である。

そして一気に空気が緩み、皆が口々に英雄を讃える。

「あ、あの！ お名前は…」

「あなたの様に美しい方を始めて見ました…！」

「先程は命を救われて…」

「結婚して——」

称賛と感謝の嵐が巻き起こる。人間も、蜥蜴人も隔たりなく輪に

なっている様は、きつとアインズが目指す諸国との友好関係の理想だろう。

「へ？ え？ わ、ちょよ、ちょっと待ちなんし」

戸惑うシャルティアが少しだけ嬉しそうな顔をしているのは、見間違いではないのかも知れない。

人間に対する見下しや侮蔑の感情は無くなりはない。それは、そうあれかしと創られた彼女の根幹なのだから。それでも純粋な正の感情を向けられた時、悪で返さずにいられるのはアインズとオデンキングの苦勞が芽吹いたからなのだろう。

「ふむ、なにやらゴブリン以外の魔物もそこそこ混じっているようだな」

森の南側を受け持ったアインズ達。蜥蜴人は先に避難させておき、共に戦いたいと希望する戦士は同じ戦場に居た。

「そのようで御座いますアインズ様。しかし所詮は有象無象、アインズ様の前には塵と芥程度の違いでしょう」

んぱつと手を広げアインズを褒め称えるパンドラズ・アクター。

「しかし良かったのでしょうか？ これでは諸国との関係もたかが知れたものとなりますが」

「いいのだ、パンドラズ・アクター。無理を通せば何処かに必ず歪みが出来る。まずは共に闘ったという事実だけでいい。我等は悠久の時を生きるものだ、急ぐ必要は無い」

「かしこまりました。アインズ様の御心のままに」

結局は三方協力作戦となったこの騒ぎ。ともあれ帝国のトップと王国のトップとは真の姿を曝して顔合わせが出来たのだ。外堀はゆっくり埋めていけばいいとアインズは考えている。

「…充分に引き付けたようだな」

立ち上がり、超位魔法の準備を始めるアインズ。蜥蜴人には初手はこちらで行うと通達したため、心置きなく放つことが出来るのだ。

「消えろ」

神の域に達する魔法。ただの一撃で見渡す限りの敵を消滅させた有り様を見て、蜥蜴人達が完全に同盟と言う名の服従を選んだのは当然の帰結だろう。

「ゴブリン以外にも結構住んでるんだなあ森」

途切れた敵を見て眩くアインズ。少なくとも彼にとっては雑魚には変わりなかったようだ。

アルベドの結婚計画 1

「で、どうかしらデミウルゴス。私としてはこっちのプランがいいと思うのだけど」

かなりの時間を掛けて作った渾身のブライダルプランの内、幾つかのパターンにわけている部分をデミウルゴスに相談しているアルベド。barで飲んでいる際中だったため、隣には興味深そうに眺めているコキュートスの姿もある。

「…」

呆れているのか、諦めているのか、眉間に指を当てて揉んでいるデ

ミウルゴス。はあ、と溜め息を一つついた後、計画書に目を通す。無視しない優しきは彼が苦労人である証左でもあるのだろう。

「…ふむ」

やっていることはともかく、有能な守護者統括だけあって粗が無く無理もない、けれど華やかなプランだ。

「いいのではないでしょうか。予算もこの程度ならば…。しかしアインズ様はご存じなのですか？」

「まだよ。面倒な部分は妻が全てやってこそ内助の功と言えるのではないかしら？ くふ、くふふ」

妄想にトリップしたアルベドを見て駄目だこれはと匙を投げるデミウルゴス。

「…はっ！ 危ない危ない。まだ我慢よアルベド、ヴァージンロードを歩くその日までは…」

「ム、呼ンダカ？」

「ヴァ・ア・ジ・ン・ロ・オ・ド。ヴァーミンロードはお呼びじゃないわ」

ちよつとしたお茶目はアルベドの冷たい視線によって切り捨てられた。その冷たさたるや冷気に対する完全耐性を持つコキュートスですら寒気を覚えるほどだ。以後この計画について不用意に口出さぬよう肝に命じたコキュートスであった。

「しかしこういった事には私も貴女も詳しいとは言えませんし、万全を期すならオーデイン様に助言を頂いてはどうでしょう」

「ええ、そのつもりよ。なんといってもアインズ様の一番の御友人だもの」

間違いなく録なことにならないだろうが、それを止める者はここにはいない。

「楽しみだわ…。くふ、たのしみーだわー」

椅子の上で膝を抱え、頬を染めながら微笑むアルベド。少し幼児退行気味なのは幸せに浸かりきっているからだろう。大墳墓が別の意味でアインズの人生の墓場になるのか、それはまだ解らない。

続く。

「ふう…」

やりきった顔で空を飛びながらクレマンティーンを待っているオデンキング。花を摘みに行つたと思つていたが、大きい方にしても流石に遅すぎるなど思いそろそろ探しに行こうか思案していた。

しかし急に《メッセージ／伝言》がとんできたかと思うと、なんとゴブリンだけではなく高位の魔物なども押し寄せ戦線が崩壊しかねないという凶報が入つたのだ。

帝国の方はシャルティアが向かつたとアインズから報告されたため、急いで王国の方へ向かう。

「…この場合って責任とらされるんだろうか。この森にそんなに高位の魔物は居ないって聞いてたのになー…」

そんなことを心配するあたりが小市民たる所以なのだが、本人は気付いていない。気付いたところで気にはしないだろうが。

「…つと…？ なつ!？」

そしてそろそろ着く頃合いかと視線を先にやり、王国の軍や冒険者が豆粒ほどの大きさに見えてきたところで横からの飛来物に気付き一旦停止するオデンキング。

それが目の前にきて何者かを認識した瞬間、驚愕の声を上げる。

「え…？…ペロロンチーノ、さん?」

居る筈のない、見覚えのある弓を装備した旧友。人間から見れば感情が窺い知れない顔でオデンキングを見つめているバードマンがそこに浮いていた。

それはギルド「アインズ・ウール・ゴウン」が誇る至高の41人の一人であり、シャルティアの創造主でもあるペロロンチーノその人であつた。

しかしオデンキングはなんとも言えない違和感に気付き、少しだけ落胆したような雰囲気を出したあと残念そうに口を開いた。

「あ、パンドラズ・アクター…?」

「はっ」

そう、それは懐かしい友ではなくドツペルゲンガーであるパンドラズ・アクターが扮した仮の姿であった。彼は至高の41人の姿を全て真似る事ができ、その実力さえも8割近く引き出すことが可能な万能タイプのドツペルゲンガーなのだ。

「びつくりしたー。まさか次元を越えて自分の理想の嫁に会いに来たのかと…」

酷い言い草だが実際にシャルティアやその他美女美少女がリアルに生きていると知れば、なんとしてでもこちらに来ようとするのは間違いないだろうという確信がオデンキングにはあった。

「今の混戦状態ではペロロンチーノ様の御姿がよいとアインズ様が仰いましたので」

「…まあ、確かにそっか」

空を飛びつつ弓で属性攻撃を雨霰と降らせる絨毯爆撃に定評のあるペロロンチーノだが、ターゲットイングしてピンポイントに速打ちで射ぬいていく技術も相当なものである。

今の混戦状態ではまとめて魔法で掃討することは難しいため、アインズの指示は的確ではあるのだろう。だが単に自分を驚かそうとした部分も絶対あるだろうと、オデンキングはいつか意趣返しでもしてやると心に誓った。

「ま、人に慣れさせる意味でもヴァンパイア、リザードマン、バードマンが最初ってのはありか」

少なくともいきなりヴァーミンロードやオーバーロードが姿を見せるよりはマシではあるかもしれない。そんなことを考えつつ遠目に見える王国軍の方へ急ぐオデンキング。

横に並ぶパンドラズ・アクターを見て少し嬉しそうな様子なのは、結局アインズの悪戯が成功している証明なのだろう。

ほぼ、互角。

蒼の薔薇とクインティア兄妹の戦闘を評するならその言葉が一番相応しいだろう。実力的に抜きん出ているのはクレマンティーヌであり、次いでイビルアイだ。

レベル的にはクアイエツセもそこまで劣るものではないが、いかんせん彼は近接戦闘に於いて取れる手段が少ない。生粋の戦士であるガガーランや変幻自在の忍術を駆使するティナとティアを相手取るには少しばかり荷が重いのだ。

加えて蒼の薔薇は連携の取れたチームワークで逐一有利な状況を作り出し、付け入る隙を見せない強かさがあった。連携のれの字も見えぬ兄妹には無い強みだろう。

「ち…厄介だな、っ！ 下がれラキュース！」
「くっ…い！」

しかしそれでも拮抗しているのは、やはりクレマンティーヌの猛攻によりイビルアイとラキュースが防戦を強いられているからだろう。

魔法と支援と回復手段、この三つを自由にしているのはさしものクレマンティーヌも苦戦せざるを得ないと判断しているのだ。特にラキュースは近距離と中距離の攻撃、支援に回復とチームの要と言っているほどの役割を果たしている。つまりクレマンティーヌ達にとっては最優先で倒すべき目標だ。

しかし当然蒼の薔薇のメンバーもそれを理解しており、ラキュースへ攻撃が集中しそうになるとその機会を逆に隙と見て即座に連携を組み直す。まさに一進一退の攻防、入れ替わり立ち替わりの目まぐるしい動きは常人には何が起きているのかすら認識出来ないほどだ。

「やるねー。だ・け・ど…」

蹂躪ではない久方ぶりの殺し合いに興奮しきりのクレマンティーヌ。ここ最近で穏やかになってしまった気性が、どんどんとかつての

残酷さと鋭さを取り戻していく。そう、人の本質とは容易には変わらないのだ。強敵との殺し合いは萎んでいた殺意と狂気を芽吹かせるには充分だった。

「この私に勝てるわけが…ねえんだよおっ！」

今日一番の渾身の一撃。疾風と形容することすら生温い、振るわれる武器の速度は音速を越えて、凄まじい衝撃と共にラキユースの腹部に空洞を残す。

「かつ…は…！」

動揺し、隙を見せて総崩れになる蒼の薔薇。それを逃す二人ではなく、今までの嘘のようにあっけなく戦闘は終了する――

ラキユースに致命傷を与えた後、そんな状況になるだろうと考えたクレマンティヌ。

しかし現実は予想に反して、それどころか逆に無理をしてラキユースを狙ったことでイビルアイへの対策が疎かになりまともに魔法の直撃を受ける羽目になった。

オデンキングによって彼女の装備が、この世界のそれとは一線を隔すものに変わっていなければ勝負は決していたかも知れないほどの魔法の威力だ。

「――っ、く…！ 仲良しこよしの甘ちゃんだと思ったら…！」

魔法だろうが回復だろうが、あそこまで重傷では発動も覚束ないのは間違いない。

つまりラキユース以外に回復手段がなければ仲間の死亡が確定した瞬間だったのだ。そしてこれまでの動きから癒し手は一人だと確信していたクレマンティヌ。

いくら最高の冒険者チームと言われる蒼の薔薇でも微塵の動揺すら無かったのは想定外だったようだ。しかしそんな衝撃も霞む事態が起きる。

「なっ…！」

クレマンティヌの驚愕の声。それは既に完全復活を果たしているラキユースに対して上げたものである。

間違いなく致命的な一撃だった。一般人ならば即死でもおかしく

ないほどの重傷だ。ならば何故何事も無かったように立っているのか、クレマンティーンには解らない。

いや解りたくなかったのだ。実際にはその理由はしっかりと把握している。

だが認めたくないためにその場で固まってしまったのである。

「大丈夫かー」

「ふむ…」

その様子を見てガガーラン達とクアイエッセも一旦攻防を終了させ、対峙した当初の間合いまで引き下がった。

「ちっ…」

一方魔法の直撃でも大したダメージにならなかったクレマンティーンを見て苦々しい顔をするイビルアイだが、一先ず仕切り直しの間は出来たとラキユースの傍に走りよる。

「どうだ？」

「試しに使った時から思ってたけど、凄いわねこれ…」

致命傷すら完全に治癒したポーション、それが入っていた壺を見て呆れと感謝がないまぜになった声で呟くラキユース。

何故彼女が容易く復活したか——それは凶刃に倒れた後、即座にポーションを使用したためであった。

だが、たかがポーション如きであの重症を治癒出来るのかと聞かれれば、それは否だ。巷で売られているポーションはあれほどの効果を持つことは無い。

厳密に言うならば無くはない、作れなくはないが、保存の難しさやコストパフォーマンスの面から見て今この場であの凄まじい効果のポーションがあるというのは不自然極まりないのだ。

ならば、何故か。それは無言で立ち尽くすクレマンティーンが一番よく知っているのかもしれない。

「…」

神の血と呼ばれる赤いポーション。

通常は青い色をしているポーションであるが、劣化をしない完全な魔法薬となれば血のごとき真紅に染まるのだ。そしてそんな伝説の

代物はクレマンティーヌの知る限り非常に限られた場所、あるいは人しか持ち得ない。

一つは自分の相方。

一つは自分がかつて所属していた国の秘蔵の品。

そして最後の一つは、地獄の鬼でも裸足で逃げ出す悪魔の巣窟。死が支配する亡者の墳墓。自らの感性や常識を粉々に砕いた恐怖の場所、ナザリツク地下大墳墓である。

可能性を考えるなら、王国の冒険者である蒼の薔薇が法国と関係があるとは思えないため、これは却下してもいいだろう。

オデンキングが王国に行った際に知り合った。これはあるかも知れない。

残る可能性はナザリツクの関係者であるかもしれないということだが、これこそがクレマンティーヌが固まった理由の一つである。

だがしかし。そんな事は些末な事だ。

兄に会ったことや強敵との邂逅で彼女が忘れていた事実がある。それはこの合同作戦に関わっている勢力の一つがナザリツクであるという、絶対に忘れるべきでは無かったことだ。

「やば……」

白目でだらだらと冷や汗を流すクレマンティーヌ。自分のせいでこの作戦が失敗に終わればいたいどうなってしまうのか、それを考えると戻りつつあった残酷さも鋭さも、狂気すらも急速に冷めていく。

「……？」

疑問の表情はクレマンティーヌ以外の全員が浮かべたものだ。そもそも彼女が発端となった戦闘であり、いきなり攻撃など仕掛けなければクアイエッセとて事情を完全に話すことは出来ずとも不可抗力のことだと説明するつもりではあったし、蒼の薔薇に関しては言わずもがなだろう。

その彼女が完全に戦意を喪失し立ち竦んでいれば戦闘が動かないのは至極当然だ。

「……………」

たっぷり十秒間。それがクレマンティーヌが悩み、そして言い訳を考え付くのに要した時間だ。

その間に誰も動くことが無かったのは、それだけクレマンティーヌの困惑と焦燥が透けて見えた証でもある。そして発した言葉は――

「あ、あれー？　ここはどこ？　私は一体…？」

そう、発した言葉は彼女の人生でワーストスリーに入る酷い言い訳であった。

自分でも心の中で無理だろそれと突っ込みを入れているのが物悲しきを感じるところだ。

「は、はあ…？」

「何を急に…」

そんな返しも当然のことである。しかしあまりに白々しい態度に逆に信憑性を少しだけ感じてしまう蒼の薔薇。正常とはとても言えなかった邂逅時のクレマンティーヌの狂気も一役かっていたりするの不幸中の幸いである。

「森の中にいたらー、急に恐慌状態になっちゃって…」

なんだかんだで現状を一番把握しているクレマンティーヌ。作戦を説明されている彼女達には充分に信じる事が出来そうな説明でなんとか窮地を脱しようと試みた。

「(どう思う…?)」

「(なくはないんじゃないかしら)」

「(胡散臭えけどな)」

「(猫耳が可愛い)」「(男の方に聞くのは?)」

ひそひそと会話する蒼の薔薇。結局男の方にも話を聞いてみようということになった。ちなみに現在絶賛戦線崩壊中である。

「そちらはどうなのかしら？　魔物達と無関係とは思えないのだけど」

「ええ、無関係どころかあれらは私が召喚したものですから」

物凄くぶつちやけたクアイエッセの言葉に霧散しかけていた戦闘の空気を戻しかける彼女達。

しかしそれを気にもとめず話を続ける彼の凶太きは流石である。クレマンティーヌの事も考えると、案外クインティアの血筋故なのかもしれない。

「ああ、そう色めき立たないで下さい。別に好き好んでこんなことをしている訳ではありませんから」

そうしてクアイエツセは事がここに至った事情を説明する。

ゴブリンの群れを掃討するために来たこと、手持ちの魔物を召喚したはいいものの急に暴走してしまったこと、クレマンティーヌとの関係は兄妹であること等々。

法国の特殊部隊「漆黒聖典」であることこそ話しはしないが、蒼の薔薇ほどの者達であればそれなりに推測も立つと考え素性に関しては一切を省いて説明した。

「ふむ…」

「なんて問の悪い…」

おおよその事情を把握した彼女達。嘘には見えないクアイエツセの言、それに十分な整合性もあるためようやく力を脱いて溜め息をついた。だがそんな蒼の薔薇に追い打ちを掛けるようにクアイエツセは言葉が続ける。

「ところであちらの加勢はよろしいのです？ 崩壊しかけていますが」

彼らが話している間に総崩れと言つてもいいほどに戦線が乱れている王国軍。それを見て慌てて加勢に向かう彼女達だったが――

――結論から言うとその必要は全く無かった。

「…！」

「わあ…！」

「おいおい」

「わ、私のモンスター…」

花火もかくやと言ったほどの空に瞬く光の軌跡。兵士や冒険者が苦戦する魔物をただの一発で貫き絶命させるその様は、英雄という領域を遥かに越えた神業を想起させる。

それを披露するのは猛禽のような目で戦場そのものを蹂躪する一人のバードマン。

そしてそんな奇跡のような力を見せる男の横に居る、一人の人間がクレマンティーンの元へ降り立つ。

「こんなところに居たんだけ？ あ、蒼の薔薇の皆さんもお久しぶりです」
平常運転のオデンキングである。異形種への風当たりが少しでも弱まればと、蒼の薔薇にも出陣してもらっていると聞いていたオデンキング。クレマンティーンと一緒にいるのは意外だったが、まあそういうこともあるかと特に気にしていないようだ。

「え、ええ。こちらこそ。…あの方はそちらの？」

上空から弓で攻撃を繰り返すバードマンを見て問いかけるラキユース。内心で弓での攻撃と認めたくないのはここだけの秘密である。

「ええ。すぐに終わらせてくれますよ。それよりこの状況は…？ と
いうか…つと、ちよ、クレマンティーン？」

オデンキングの腕を掴み、引きずり少し離れたところに移動するクレマンティーン。ひそひそと小声で耳打ちし始める。

「実はかくかくしかじかで…」

「まるまるうまうまと…。じゃなくて何やってんの!？」

「めんご」

謝意の欠片も感じない謝罪だが、掴まれ続けている腕に当たる柔らかい感触に怒るに怒れないオデンキング。男なら仕方ない。

「ま、まあその辺は上手いこと誤魔化しとくから…」

その言葉に花が咲いた様に笑うクレマンティーン。ただし花の種類は首切り花か死人花か、ろくなものではないだろう。

「で、あの男の人は？」

そしてこちらの様子をちらちらと窺っているクアイエッセを見て問いかけるオデンキング。

少し嫌な顔をしながら答えようとするクレマンティーンだが、視線が自分に向いたことを感じ取ったクアイエッセがそれより先にオデンキングに近寄り自己紹介を始める。

「どうも、クレマンティーンの兄のクアイエッセと申します。妹が随分と御迷惑をお掛けしているようで…」

「ああ！ 貴方が噂の……！ いえいえ、こちらもお世話になっている部分も多々ありますので……」

ごく普通の一般人のような会話をする二人。しかし此処は弾幕飛び交う戦場で、二人ともに世界で上から数えた方が速い実力者であることを考えるとなんと奇妙に頓珍漢だ。

「じゃじゃ馬なんて言葉じゃ表せない妹に夫が出来るとは感慨深いですわね……」

「へ？ あ……はい……」

夫という言葉に口調が乱れる。クレマンティヌをちらりと見れば蒼の薔薇の女性達と何か語り合っている。クアイエツセが近寄って来る時に渋い顔をして離れていき、そちらの方へ離れたのだ。

そんなクレマンティヌの後ろ姿を見て、彼女との関係はどう表せばいいのかと改めて考えるオデンキング。

最初はただの利害関係だった。解っていないながらも色仕掛けに引っかけた面倒事を引き受けたのだ。

そしてナザリックでの生活で少し変わったように見受けられ、慕われていることは疑わなくなった。その後、帝国で少しの間だけ旅をしてなんとなく絆が深まったように感じたのは勘違いではないだろう。

長く滞在している帝都では少しばかり離れていたけれど、彼女からの親愛は消えていないように思うオデンキング。

どうにも口にしづらい関係であり、懇ろの仲でありながら自分から愛を囁くなどといったことは一度も無かった。

それは猫のような気まぐれさがある彼女に明確な関係を迫って、今の関係が崩れるのを恐れたからかもしれない。

真剣に言葉を送って、返事を聞くのが怖い。

そう、オデンキングは――

小学生レベルの恋愛初心者である。

この後の顛末は語るほどでも無い。

パンドラズ・アクターが早々に戦いを終らせた後、惜しみ無い称賛を受けながらアインズの元へ戻った。オデンキングは事の次第をそれぞれに説明し、不幸な行き違いによる事故だったということになったのだ。

無論詳細な説明はごく限られた者にのみだけで、殆どの者はゴブリン以外にも脅威が蔓延っていたのだという認識に落ち着いている。不満はあったが起こってしまったことは仕方ない。

死者が奇跡的におらず、石化したものや怪我を負った者は残らず治癒されたことで不満は最低限に抑えられたのだ。

特に冒険者の方は特別報酬が出たため一部は喜んでいたりもしていた。

王国の財政担当は渋い顔をしたそうだが。

ともかくにも異形種と人間種が共闘して事に当たり、助け合ったという事実は出来た。ほんの小さな一歩だが、踏み出さなければ何も始まらない。

ここからの舵取りは手を取り合って協力出来るのか、出来たとしても船頭が多くなれば船も道先を失うかもしれない。

課題は大量、問題は山積み。それでも歩みは止められないのだ。きつと長い時を要する種族の垣根を越えた融和、それはもしかするとアインズやオデンキングの様な楽観的に事を進める者の方が案外上手いくのかもしれない。

「アインズ様」

ナザリツク地下大墳墓、玉座の間。作戦終了後の雑事が終わり、ある筈のない疲労を感じながら深く腰かけるアインズ。そんな彼にアルベドは声を掛けた。

「アルベドか…どうした？」

分厚い冊子を抱えたアルベドに何だろうと首を捻るアインズ。

「はい…！ アインズ様も待望されているアレの段取が出来ました」
「アレ…？」

いったいなんだろうと「アレ」の正体を考えるアインズであったが、デミウルゴスがアルベドに仕事の引き継ぎをしたのを思いだしその正体に見当がついた。

「ああ、こここのところの事態で有耶無耶になっていたな。忘れていた訳ではないぞ？ 私もそれについてはとても大事なことだと思っ
ているとも」

延び延びになっている蜥蜴人の協定や王国からの招待。それぞれの国が恐る恐るナザリックとの関係を手探りをしている今こそ、その重大性が解ろうというものだ。

「ア、アインズ様……！ 私も……私もでございます。いえ、これより大事な事などありません！」

「そ、そうか……？ それほどに関係を大事におもっていてくれたとは嬉しい限りだ。段取りについてはお前に全てをまかせるとしよう」

いつのまにやらナザリック以外にも目を向け、蔑みも無くなっているアルベドに満足気なアインズ。勘違いとは夢にも思わない。

そしてうかつにも持ってきた書類には目を通さず、日時が決定すれば報告するようにと申し付けた。

うかつ過ぎである。

「必ずや素晴らしい式に致します！ ああ……くふう……！」

「式典というほどの盛大さは……いや、それもありか……？ だがやり過ぎないようにはだけは注意してくれ。王国や帝国のトップについては話も通しているのだな、アンデッドに対する忌避感も見られなかったし無理をしすぎなければ大抵の事は大丈夫だろう」

悲しいほどにすれ違う二人。行く先は悲劇か喜劇か。

「そこまで考えていて下さったのですね！ アルベドは、アルベドはもう……。アインズ様あー！」

「うおお！ 落ち着くのだアルベド！ ちよ……」

誤解の深まる丑三つ時。盛大な結婚式には人間も少し混ざりそう
だ。

四方山話

「ほう、結婚式の招待状だと？」

「そ、ナザリックがどんな所か知ってる人だけでも呼ぶんだってさ」

帝都の城の政務室で、アルベドに招待状を託されたオデンキングがジルクニフへとそれを渡す。アインズの言葉により各国の上層部も招待するのだと勘違いしたアルベドは、その役目をオデンキングにお願いしたのだ。

「しかし……くくっ」

「ん？　なんか面白いことでも書いてた？」

招待状を見て呆れ笑いのようなものをこぼすジルクニフに問い掛ける。

「いや、文面は至って普通だとも。しかしこの豪華な招待状、これだけで庶民には一財産になるんじゃないか？」

気合いの入ったアルベドお手製の招待状だ。羊皮紙の質感からして最上級で、金の装飾に加え蠟の部分には小さい宝石まであしらわれている。招待客が少ないからこそ出来たこともある。

「ああ、そこか。嫌味だし止めといた方がいいって言ったんだけどなあ……」

常識的に考えてそれは無いと指摘したオデンキング。しかし結婚式を前にしたアルベドはブライダルハイな躁状態。「これくらい必要だわ！」の一言で指摘は切って落とされた。

「いやいや、これはこれで悪くない。招待されたものにはナザリックの強さはさておいて、未知の場所には違いない。これほどのものを送るのならばどういった場所かも想像がつくと言うものだ」

文化が違うとやり方も変わる。未開の地に招待されたから華美なドレスで行けばいいというものではないのだ。場にそぐわぬ格好は余計な軋轢を招く。

その点この招待状は常識はずれの財を知らしめるような装飾がなされているものではあるが、こちらの感性とさして変わらぬことを示している。

「そんなもんかねえ、いいんならいいけど…。じゃ、出席ってことで大丈夫？」

「もちろんだ」

それを聞いてリストに丸を付けるオデンキング。

「ナザリックが大丈夫そうな人なら何人連れてきてもいいってさ。じゃあ宜しくー」

そういつて手をひらひらと振りながら転移していくオデンキングを見て、ジルクニフは一人ごちる。

「このタイミングで結婚式…いったい何が目的だ？ まさか暗殺などということはある得んしな…」

話を聞く限りではこちらに転移してきてある程度は経っているものの、地盤はまだ固まっていない筈だ。友好的に接してくれているのは解るが、こんなタイミングで結婚式をする意味も自分を招待する意味も今一不鮮明である。

各国の要人をまとめ一網打尽にする可能性も少し過ったが、そんな面倒なことをせずともやりようは幾らでもある筈だと却下するジルクニフ。

「…案外何も裏はないのかもな」

種族も強さも、その人格とは比例しないのだとオデンキングを見て理解しているジルクニフ。ばつちり正解を当てつつも連れていく者を選別し始めるのであった。

「お久しぶりです、皆さん」

王都の冒険者ギルドで依頼を見繕っている漆黒の剣に声が掛けられる。

「オーデインさん！ お久しぶりです。帝国へ戻られたんじゃ…？」

ペテルが驚いた顔をしながらも笑顔で応える。ルクルツトやニニヤ、ダインも同様だ。直接の功労者ではないとはいえ、姉妹の再会を膳立てしてくれた物の一人なのだ。好意を持って接するのも当然のことだろう。

「ええ、ちよつと所用で転移してきました」

「て、転移ですか…？」

ちよつと近所まで、といった風に何でもないと答えるオデングにニニヤが疑問の声を上げる。

戦闘で使える近距離の転移ならば、高位のマジックキャスターが使う魔法にそんなものがあつたと知識として持っているニニヤ。しかし帝都から王都まで転移してくるなど、控えめに言っても人間技ではない。

「あー、その辺も含めて少々お話したいんです。アインズさんと一緒に冒険しただけならともかく、ナザリックの正式な預りになったメイドさんの身内なので…」

ツアレは既にナザリックのメイドとしての立場だ。そうなるとその妹であるニニヤや、その仲間達も無関係ではいられないという判断から招待することと相成つたのだ。

「…？ 解りました」

この後セバスとソリュシャンが詰める館にて説明がなされ、漆黒の剣による驚きの声が何度も響きわたったそうなの。

「お初に御目にかかります。ナザリックからの名代として参りました、オーデイン・キニングと申します。招待状を預かっていますので

お渡しさせて頂けますか？」

王であるランポツサⅢ世に謁見するオデンキング。いきなり会いたいと行っても門前払いは見えるため、ジルクニフに口利きしてもらったのだ。

人脈さまさまである。

「おお、先の戦では世話になった。して、招待状とな？」

直接話したのはアインズのみであったが、ゴブリン掃討戦の報告を受けた際に耳にした名前を聞いて礼を言うランポツサⅢ世。

目の前の男は怪我の治癒や石化を解くためにポーシヨン等のアイテムを惜しげもなく使用してくれたと聞いていたのだ。

実を言うと単に責任を追及されるのが嫌だっただけである。

「はい、この度ナザリックの主であるアインズ・ウール・ゴウン、そしてナザリック階層守護者統括のアルベドが婚姻を結ぶ事となりました。つきましては実情を知るものだけでささやかな披露宴を開くこととなりましたので、招待状をお持ち致しました」

「ほう、それは目出度い。是非とも参加させて頂こう」

特に穿った見方はしないランポツサⅢ世。秘密裏に行ったアインズとの会話が終始和やかだったのが大きいのだろう。

「ありがとうございます。……何か？」

早々においとましようと、その意を述べかけるオデンキングだがランポツサⅢ世の少し問いたげな雰囲気を感じて踏みとどまる。

「うむ、いや……少々不躰な質問になるのだが……」

「答えられることなら何でも答えますけど」

既に慇懃な態度のメツキが剥がれてきているオデンキング。所詮は一般人である。よくみるドラマなどを真似してそれっぽく見せたいもの、ここまでが限界だった。

「ああ、そなたは帝国の重鎮と聞いていたのだが、ナザリックとはどういった関係なのかと疑問に思っただけ。見る限り随分と親交がありそうだが……」

何だかんだで人を見る目はあるのが王たる所以。むしろそれがなければ王とは言えないだろう。

ナザリツクの事を話すときの気安い雰囲気を見抜き、名代で来た事実を考慮に入ればそれなりに推測も立つというものだ。

「じゅうち…あのお馬鹿皇帝め。単なる客分ですよ、どちらかと言うとナザリツクの方に所属してます」

「そ、そうか…ふむ、人間も居るのだな。通常のアンデッドと違うのは充分に理解していたが、やはりそう聞くと安心するものだ」

帝国の皇帝をお馬鹿呼ばわりするオデンキングに汗を垂らすランポッサ三世。しかしナザリツクに人間も所属していると聞いてほっとする。

先の言葉通り人間に隔意を持たないのは充分に理解しているものの、根元的な恐怖は中々拭えないものだ。

自分は大丈夫だが、これからナザリツクの事を広めていくにしたがつて否定的な者は必ず表れる。その際に人間も所属しているという事実は、説得の一助くらいにはなるだろう。

「あー、はは、完全に無害とは言い難いかも…」

ぶつちやけるとアインズの指示がなければバリバリ危険です。とは口が裂けても言えないオデンキング。乾いた笑いをしながら誤魔化した。

そして暫しの談笑の後、第三王女も是非お誘いくださいと言って退去するのであった。

「必ず行きますとお伝え下さいな」

ラキユース達蒼の薔薇にも招待状を渡したオデンキング。快諾した彼女達に感謝の言葉を述べて次の目的地へと向かおうとするが、そ

れをガガーランによって引き留められ、話が聞こえないように部屋の隅に連れていかれる。

「ひ、ひい……。お、俺には心に決めた人が居まして……」

「違えよー」

性的に襲われるのかと身構えたオデンキングに突っ込みを入れるガガーラン。自分の獲物は童貞だと高らかに宣言した後、用件を伝える。

「マジすか……?」

「ああ、マジだ」

それはイビルアイがデミウルゴスに懸想しているという、驚きの事実であった。

「ふーむ……。デミウルゴスに春が来たとな。……だけどなー……」

「やっぱ難しいか?」

「というよりもまずナザリックとそれ以外で相当差があるからなー、デミウルゴス。たぶん外部の人だとそれだけで最低条件にも満たないと思うけど」

そもそも恋愛感情あるんだろうかと疑問に思うオデンキング。アインズが誘えばあるいは……と思ったところで吐き気を覚え考えるのを止めた。

「そうか……」

考え込むガガーラン。仲間の恋を応援してやりたいと思う気持ちは本物だが、イビルアイが蒼の薔薇を抜けるのも悲しい。それに恋仲間なら恐らく自分達を取るだろうという確信があるため、成就しそうな恋の行方を思い溜め息をついた。

「まあ、俺の主観だから。本気なら応援するのも吝かじゃないし」

仕事に追われて倒れたデミウルゴスを思い出すオデンキング。息抜きに恋愛というのはありなんじゃないかと、お節介なおばちゃんのような考え方で前途多難な恋を応援することに決めた。

「ああ、宜しく頼む。成功したら俺が体でお礼しても……」

「じゃ、お疲れっす」

最後まで聞かずに転移したオデンキング。賢明である。

「んー、これで終わったかな…」

ガゼフ、カジット、蜥蜴人の代表等にも招待状を渡し終わり帰路につくオデンキング。ナザリックへ到着しアルベドに会う前にアインズへと挨拶しに私室を訪ねた。

「こんにちわー…ん？ 何してるんですか？」

「ああ、オーデインさん。いえちよつとアイテムの整理をしまして」「へー…お、それは…」

アインズが持つアイテムを見てなんだったかな、と声に出すオデンキング。

『『完全なる狂騒』です。あんまり使いどころの無いネタアイテムなんですけど…何故か9個もあるんですよ』

「あー、それぞれ。俺も3個持ってます」

「なんで!?!」

個人で持てるアイテムには限界がある。枠に限りがある以上無駄に持ち歩くのは憚られるものだ。

「ギルドに所属してなくてもホームに置きませんか？ 普通」

「いやー、ほら。最後だったから色々適当に詰め込んでたり、貴重なアイテムは手持ちにしてたりで」

「一応最後までPK結構いたでしように…」

最後だからこそ暴れまわる愉快犯もそれなりには居たのだ。全てが消えるまで幾許もなかったといえど、最後にキルされてロストするのは悔やみを残すのが普通である。

「最後は初心者mapのとこ居ましたからねー。過疎ってる上にあんなとこじやPKも居なかつたですよ」

「へー、そうなんですな。じゃあ結構貴重なアイテムも持ってるんですか？」

ぐいっと食いつくアインズ。やはり重課金者であり余暇のほぼ全てをユグドラシルに注いでいただけにコレクター魂が刺激されたのだろう。

「ナザリツクに無くて俺が持つてるアイテムとか無いと思いますけど…」

そう言いながらポイポイ中身を取り出していくオデンキング。その様は百年以上昔から続くアニメの某青タヌキが焦った時のようだ。

「ふむふむ……。こ、これは…！」

「あ、これが一番レアですね」

アインズが驚きの声を上げたアイテム。それは課金ガチャで手に入る『流れ星の指輪』を目にしたからである。このレアアイテムの効果は『ウィツシュ・アポン・ア・スター／星に願いを』という超位魔法を三回まで使えるというものだ。

それだけ聞くと回数制限のある超位魔法の数が増えるのみ、と思う者もいるかも知れない。しかし『ウィツシュ・アポン・ア・スター／星に願いを』は回数制限もそうだが、何よりも経験値を消費して発動するというのが非常に使用を躊躇わせる原因だ。

ユグドラシルではレベルダウンしてしまうと——特に99から100へ上がるのに掛かる時間はそれなりだ。

この世界の一般人で換算するならば10万人殺したところで尚足りぬ莫大な経験値を、その消費なしで三回も使えるアイテムと言うことで超レアという位置付けがされているのがこの『流れ星の指輪』である。

しかし、それを持っているだけならばアインズは驚かない。ならば

何故驚愕の声を上げたのか。それは――

「なんで3個もあるんですか!」

そう、アインズがボーナスをはたいてようやく一つ手に入れたこのアイテムをオデンキングは三つも所持していたのだ。

「え? あー、ガチャ引いたら三回連続で出てきました。流星においお:ちよっ! アインズさん! 絶望のオーラ止めて!」

絶望のオーラ(物理)がその場に撒き散らされオデンキングをちくちくと攻め立てる。

「俺のボーナス全額!」

四つん這いになって落ち込むアインズ。かつて仲間のやまいこが同じガチャを引いたときも、一発で引き当てた事を思い出してへこんでいるのだ。

「いいじゃないですか! 俺なんかワールドアイテムとか触ったことも無いですよ!」

部屋から出てドアの隙間から声を投げ掛けるオデンキング。ちなみに彼が使った金額はアインズの100分の1以下である。

「ああ:すみません。少し取り乱しました」

「貴方アンデッドでしょう」

部屋に入り直したオデンキングから鋭い突っ込みが入る。しかしきつと耐性を越える絶望だったのだ。

「そーいや《ウィッシュ・アポン・ア・スター/星に願いを》ってどうなってるんでしょうね」

ふと思いついたようにオデンキングが口に出す。ユグドラシルでは幾つかの選択肢から任意に選ぶ形であったが、この世界は割と現実にも則したように魔法が修正されているのだ。もしかすると本当に願いが叶う指輪になっていたりかもしれない。

「試したいんですけど勿体無かったの:。でも」

3個もあるならいいよね? という無言の圧力で1つは実験に使われるのが決まったのであった。

「ま、まあそれは置いといて。指輪と言えば、式の指輪は用意してあるんですか? 一つ持つてるってことはまさかそれとか:」

見た目も美しく、レア度は最高ともなれば結婚指輪には相応しいだろう。無理矢理に話題を変えたオデンキングは雰囲気を変えるために結婚式の話を出した。

「はい？　なんで種族同士の友好を示す式典に指輪が要るんですか？」

「え？　いや…え？」

「…？」

本気で不思議がっているアインズを見てオデンキングも同様の状態になるが、その一瞬後にピンときて黙りこむ。

「あの、オーデインさん？」

「…あ、いやいや言葉の綾です。それよりちよつとアルベドのここに行ってください」

「は、はあ…」

「あ、この『完全なる狂騒』要らないんだつたらもらっても？」

「ええ、別に構いませんが」

見送るアインズは首を傾げたままだ。それを背にして歩くオデンキングの顔には、悪そうな笑みが張り付いていたのだった。

——そして遂に。波乱の結婚式が幕を上げる。

「ちわー。おつ、アインズさん格好いいじゃないですか」

各人が集まり、披露宴直前のタイミングでアインズの元へ赴いたオデンキング。なんとも符に落ちない様子のアインズを見て笑いを堪える。

「ああ、オーデインさん…。その、なんというかこの格好って礼服というより…」

新郎が着るような服じゃありませんか？ と問われたオデンキングは遂に吹き出した。そしてそのタイミングでセバスが呼びに来る。

「アインズ様。準備が整いました」

「あ、ああ」

吹き出したことに疑問符が浮かぶばかりのアインズ。そしてまだ口元をひくつかせたまま、オデンキングはセバスへ話し掛けた。

「セバス、結婚式場の様子はどうか？」

「はい。皆様方、内装に感嘆しておられる御様子。料理の方も準備万端でございます」

「…え？」

結婚式場。その言葉にも、それを聞いて驚かないセバスにもポカんとするアインズ。

「あ、今更ですがご結婚おめでとうございますアインズさん。本当にお似合いだと思いますよ、アルベドと」

これは嘘偽りない本心ではあるが、悪戯心バリバリだ。

「え？」

そしてさらに追い討ちを掛けるオデンキング。鬼である。

「ていつー！」

「おわっ!? それはー！」

オデンキングがインズに向けて使用したアイテム。それは先日もらい受けたばかりの『完全なる狂騒』であった。

説明しよう！

『完全なる狂騒』とはステータス異常に完全耐性のあるアンデッド等にも精神系魔法が効くようになる優秀なアイテムであるが、使用制限や効果範囲、使用条件のせいでネタ認定された残念なアイテムである！

しかし現実にはこの世界ではそれが緩和されており、ワールドアイテム所有者すら無力化してしまう凄まじい宴会用アイテムなのだ！

そしてユグドラシルには表向きの効果とは別に、隠された効果のあるアイテムが多く、御多分に漏れずこの『完全なる狂騒』にもそれは存在していた！

それはこのアイテムが8個存在し、アンデッド、インプ、デュラハン、ドツペルゲンガー、ワーウルフ、シヨゴス、アラクノイド、オーマトンが周囲にいる場合、勝手に効果が発動し全ての種族を狂騒状態にするという非常に都合のいい能力である！

しかし更に更に隠された効果がこのアイテムにはあるのだ！

それはこのアイテムが10個存在し、人間、竜人、アンデッド、デュラハン、ドツペルゲンガー、ワーウルフ、シヨゴス、アラクノイド、オーマトンが周囲にいる場合勝手に効果が発動し、その効果範囲は通常の1000倍となり全ての種族を狂騒状態にするという非常に非常に非常に都合のいい能力である！

引用：ユグドラシル@wiki

「なんてことするんですかオーデインさん！」

「いやー、ほら。パンドラズ・アクター使って驚かされた意趣返しとい
いますか」

「ええー!!」

普段から耐性のお陰で色々と取り繕っていたアインズ。ここぞとばかりに取り乱している。そしてそんなアインズの声をありえない遠さから非常に都合よく聞き付けたプレアデスのメイド達が部屋に押し入る。

「アインズ様！ どうなさいましたか！」

ちなみにこれで人間、竜人、アンデッド、デユラハン、ドツペルゲンガー、ワーウルフ、シヨゴス、アラクノイド、オートマトンが揃ったことになる。

「い、いや、そそそれがだな…うおっ!?!」

そしてオデンキングが持っていた残りの『完全なる狂騒』が勝手に表れ、突如光り出した。

「へっ?」

「きやつ!」

「ぬうっ!」

それはナザリック全てを包み込むほどの大きさだ。会場に居た者も区別なくアイテムの効果を受けたことで、通常よりも慌てやすくなり普段は隠しているような本心も出やすくなるような中途半端な狂騒状態へと陥った。

「いったいなんだったん…うおわあ!! 骨ええー!」

「ええー!?!」

アインズを見て叫びを上げるオデンキング。既に彼も効果を受けているのだ。恐怖心が膨れている時に人骨が隣にいれば無理もない。

「あ、アインズさんか…。びっくりした」

「ええー…」

色々ありすぎて混乱中のアインズ。しかし無情にも開催の時間は迫っているのだ。セバスが少し焦りながらアインズを急き立てる。

「アインズ様。そろそろ時間が推しております。式場へと参りましょう」

「う、うむ」

そうしてそろそろとアインズの後ろへ付くセバスとメイド達。一見普通の状態であるが、彼女達も効果は充分に受けている。

「なんか落ち着かないな…」

最後に出たオデンキングはソワソワとしながら式場の方へと向かい、アインズ達を追いかけた。

しかしその行く手を阻むように最後尾に居たソリュシヤンがオデンキングに抱きつき、キスでもするのかわかというほどに顔を近付ける。

「ちよつ！ ソリュシヤンちゃん!？」

今までそんな感情は欠片も見せたことが無かったソリュシヤンの行動に驚くオデンキング。

「オーデイン様あ…。私…前からずっとオーデイン様を…」

「え、いや、マジ?」

蕩けるような顔をして体を押し付けるソリュシヤンにたじたじだが、その感触に少しにやけているのが押し返さない理由を表している。

「はい…。オーデイン様を少しでいいから溶かしたいって…」

「え? いや、マジ」

最後までセリフを言えずにオデンキングはソリュシヤンの口によつて口を塞がれた。

もちろんキスではなく、人間の限界を越えた大きさでオデンキングの頭を丸のみにしたソリュシヤンの口によつてである。

「……………!!」

視界が暗くなりヌメヌメとしたものに頭が包まれる不快感に声が出ない。だがレベル差による身体能力の違いにより無理矢理抜け出したオデンキング。ソリュシヤンの体液でベトベトである。

「あん」

「あん、じゃないから！ 死ぬから！」

もう少しだけ、とさらに溶かそうとしながら体を擦りよせてくるソリュシャンから逃げ回り廊下を進む。そしてその先には冷たい視線のナーベラルが待ち構えていた。

「あ、ナー」

「不潔よ、下等生物」

「ええー……」

頭がベトベトで不潔なのかソリュシャンにベタベタされているのが不潔なのか難しいところである。

「大体前から思ってたけど……」

ぐちぐちぐちと愚痴のオンパレードである。呪詛のようなそれを聞き流しながらさらに廊下を進む。すると今度はオートマトンのシズ・デルタが待ち構えていた。

「ここは通さない……」

「なんの中ボスラッシュ!?」

「嘘。早く行く。」

抑揚の無い声で冗談をかますシズ。3人を伴って更に廊下を進むオデンキングだが、ここまでくれば後の展開も解ろうというものだ。

角を曲がり、恐らく待ち構えているであろう残りのプレアデスを警戒して防御の体勢をバツと取る。

「何をしているの？ 下等生物」

「居らんのかいっ！」

ナーベラルが蔑んだ目で見下しつつ、微妙な体勢で固まっているオデンキングの横を悠々と通りすぎていった。

「俺ってこんな突っ込む役だっけ……」

自業自得である。

そつとオデンキングが式場に入ると、アインズが来賓への挨拶を行っているところであった。

「と、ということでは…我々は種族の垣根を越えて手を取り合うことが出来ると私は確信しており…」

アンデッドなのに冷や汗だらだらのアインズ。少なくともオデンキングにはそう見えた。

「さらに下級なアンデッドは安価な労働力となり生産性を増すことが国力の増強に…」

もはや結婚式で話す内容では無いところまで言及しているあたりが混乱の何よりの証拠である。

「で、あるからして…」

(助けて下さい！ オーデインさん！)

喋りながらオデンキングにメツセージで話し掛けるアインズ。混乱しているとは思えない器用さだ。

「あー…」

自分の悪戯のせいであるが、少し可哀想になってきたので助け船を出すオデンキング。微妙に話の道筋を修正させながらこう言った方がいい、などとメツセージを返す。

「そして、もちろんジルクニフ…：：：ジル」

(な、名前なんでしたっけー!?)

(ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスです！)

「：：ルーン・ファアロード・エルⅡニクス殿におかれては…」

(セーフ)

(アウトです)

ちらりとこちらを見たジルクニフと目が合ったオデンキングは、絶対に気付かれたなと確信した。しかし拘っても仕方ない。

そろそろ終わらしてもいいんじゃないかと言うオデンキングの言

葉にアインズは話を締めにかかる。

「少々話が長くなつてしまつたようですね。ではこの辺で一旦締めさせて頂きましょう。最後に…」

(やつと終わる…)

(はは、絶対に何人か気付いてますよ、動揺しまくってるの)

(誰のせいですか!)

「最後に、態々私達のために集まっていたいただいた皆さんに…」

(まあまあ、別にただの嫌がらせだけじゃないんですつて。人間くさいところを見せればきつと皆もアインズさんを身近に感じて…)

(今考えましたよねそれ)

(いやいや)

(いやいやいや)

「…感謝を述べさせて頂きます」

(俺にですか?)

オデンキングも少し調子に乗っているのは『完全なる狂騒』せいなのだろうか、それは解らない。

ただ解ることは、こんな多重思考が必要な行為は慣れていなければ失敗するのは間違いないということだけだ。

(本当にお集まり頂き、ありがとうございます)

「即死魔法掛けていいですか?」

(……)

(……)

(逆うーうー!! 何十年前のネタですか!!)

(間違えたあーうー!!)

場が凍つたように静まりかえる。恐ろしい見た目の骸骨が即死魔法を掛けるなどと言つては当然の反応だ。

ましてやこの場には皇帝や王が選別したとはいえ、異形の者達など見たことが無いものすら要るのだ。『完全なる狂騒』が効果を発揮している今、もはや大混乱は目前である。

しかし――

「ぶふっ…くくくっ…」

破裂する直前の緊張状態であるこんな状況に、全くそぐわない笑い声が響き渡る。

「くくっ…ア、アインズ殿は…ジョークも一流のようだ…」

その声の主は、机に手を付きながら腹を抱えるジルクニフであった。彼はオデンキングとアインズの視線の動きや雰囲気を見て何が起きているのか、そのおおよそを察していたのだ。しかし彼は場を静めるために笑ったのではなく、本心から爆笑していた。

『完全なる狂騒』がもたらす効果は割と個人差があるのだ。アインズは混乱しやすくなり、オデンキングは突っ込み役になった。ソリュシャンは食欲が抑えられなくなり、ナーベラルは普段の不満が膨れ上がった。シズは可愛い。

そしてジルクニフは——笑い上戸になった。

「ぶふっ…くくっ…フウーハハハ！」

しかしとにかく非常事態は回避されたのである。皇帝の笑いにより、なんだジョークだったのかと穏やかな雰囲気が出た。皇帝スマイルはまさにプライストレスなのだ。

「わ、笑ってもらえて何よりだとも」

安堵の溜め息をつき、話を終えたアインズ。司会のセバスが順番が前後したことを詫びながら挙式の準備を始める。

華やかな式場。華美でありながらも嫌みさなど一切感じさせないこの場所で祝福に包まれながらアインズとアルベドは人生の伴侶と口付ける。そして永遠を誓い、指輪の交換を行う。

それはこのナザリックで最も重要な指輪、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。これほど交換に相応しい指輪もないだろう。

「アインズ様…」

しずしずとアルベドが恥ずかしそうにアインズへと寄り添う。誰もが溜め息をつくほどに美しい。普段からは考えられないほどに淑やかなその佇まい。

——当然『完全なる狂騒』の効果である。

元から暴走しやすかったアルベドや腹黒であつたルプスレギナなどは性格が反転していたのだ。

しかしまさに理想の良妻賢母で才色兼備を地で行くような今のアルベドには、現状の精神が揺らぎやすいアインズもくらくらである。

「アルベド…」

こうして幸せの絶頂の中で挙式は終了した。

挙式終了後は、立食パーティーの様な形で披露宴を進める。それぞれの面通しが目的でもあるためこの形態が一番良かったのだ。

アインズが一通りに挨拶をした後、各々で挨拶を始める。しかし『完全なる狂騒』により中々面白いことになっているようだ。

「皇帝陛下はどこへ？」

「呼吸困難で医務室へ運ばれたそうだ」

「ええー…」

「ハムツ、ハフハフ、ハフツ！」

とある四騎士は姿を消した主を探していたり。

「おお、お久し振りです大將軍殿」

ナザリック地下大墳墓第六階層。地下にも関わらず生い茂るジャングルと、美しい星が瞬く夜空が見える階層だ。

「あ、居た。おいクレマンティーン…？」

拳式が終わった直後から姿が見えなくなつたクレマンティーンを探して、探知魔法などを頼りにここまで上がってきたオデンキング。「どしたのさ？」

高い木の枝の上に座り込み、物憂げな表情で膝を抱えるクレマンティーン。オデンキングが横に座つても大した反応を返さない。

「……」

地下だというのに吹く風が二人を撫でる。ざわざわと葉の擦れる音はなんとも言えない物悲しい雰囲気を助長しているかのようだ。

「…結婚式で、何か思うことでもあったのか？」

「…」

ぴくりと反応を返して横を向くクレマンティーン。それはその指摘が間違っていない証明だ。

「……」

「……」

少しの沈黙の後、ぽつりぽつりと言葉が紡がれていく。

「前にも話したけど、私の家ってぜんぜん普通じゃなくてさ」

「ああ」

「普通の家庭って想像しにくいんだ。笑顔が無かったとは言わないけど、それは私には向けられなかったし、向けられてる兄貴もどっか歪んでた」

「うん」

風が止み、クレマンティーヌの声だけが静かに虚空へと消えていく。

「あのアルベドって人、信じられないくらい嬉しそうだったよね」

「ああ」

「家庭を築くつてのがどんなものかよくは解らないけど、あの二人が不幸になる姿は想像つかないなーって思ったら、なんとなく変な気分になっちゃって」

「そっか…」

短い相槌だけで会話を続けるオデンキング。彼女が慰めや同情などは一切求めていないことは解っているのだ。ただなんとなく話をしたいだけなのだろうと思ひ、聞き役に徹している。

「なーんて、柄に合わないかあ。冗談冗談、結婚なんて一生する気なんかないしー」

杖を支点に膝をくるりと回して一回転を決めるクレマンティーヌ。その勢いで立ち上がり幹を背にしてオデンキングを正面に見据える。

「え？　じゃあ俺、もしかして一生結婚出来ない？」

「…」

少し白々しいような棒読みで言葉を返すオデンキング。言葉の意味するところはどんなに鈍い人間でも解るだろう。

「はつきり言わないとこがへタレだねー」

「じゃあ行動で示そうかね…」

星明かりが二人の影を映し出し、黒いヒトガタが重なり合う。

——寸前、『完全なる狂騒』の効果が切れた。きっかり1時間。それがこのアイテムの制限時間だ。物憂げクレマンティーヌ終了のお

知らせである。

「ぶはっ!! こ、行動で——っ! し、示そうかねえだつて! あつはははは!」

「おまつ! ちよ、ないわ! それはない! シリアスどこ行った!」
「ぎーんねん! クレマンティーヌ様はそれほど安い女じゃないんですー」

20メートル以上も下にある地面に向かって飛び降りるクレマンティーヌ。木の上に居るオデンキングに対してにやにやと煽りを含んだ笑みを溢す。

「そうだなー。世界でいっちなばんの指輪でも持ってきたら考えてもいいかなー」

そんな照れ隠しの言葉を口に出しながら離れていく。だがそのセリフを聞いたオデンキングは、少しだけ思案した後の一つの指輪を取り出す。

「じゃ、これでいいか?」

「え?」

そつと近付き左手の薬指にはめる——なんてことはせずにポイッとクレマンティーヌの辺りまで投げるオデンキング。

「わわっ! ……これが世界で一番?」

美しく威容を感じるものの、世界で一番と言われれば首を傾げるようなシンプルな指輪。

「なんでも願いを三回だけ叶えてくれる指輪。世界で一番稀少じゃないか?」

「…ふーん」

じろじろと見回した後、左手の薬指に指輪をおさめるクレマンティーヌ。先程とは違う質の笑みが口元に貼り付いている。

「そーいやまだ何も食べてないし、戻ろ?」

「はいはい」

そういつて横に並んで六階層を後にする二人であった。

全ての来賓がナザリツクを後にして、滞りなく結婚式は終了した。本当に滞りが無かったと言えるのかは触れてはいけない部分だ。

静かな玉座の間でアインズとオデンキングが話に興じている。取り敢えず今日の騒動については手打ちとなったようである。

「でも今日ほど焦った日はありませんよ本当に」

「ははは。まあ楽しかったからいいじゃないですか」

「まったたく…」

そして暫く益体もない話が続いた後、少し真面目な雰囲気のアインズが話し出す。

「法国はやっぱり何か切り札があるみたいですね。プレイヤー、真なる竜王、神人。色々とキナ臭いことあるみたいですよ」

「ワールドアイテムもまだあるかもですね。光輪の善神なんて持つてたら洒落になってないですよ」

こちらを刺激しないようにしてはいるものの、服従する姿勢は全く見せない法国。やはりなにかしらの手段はあるのだろうと推測される。

「…で、ですね。色々と不安要素もありますし、少し提案があるんですけど」

「提案？」

緊張した面持ちでオデンキングを見詰めるアインズ。まるで告白でもするかのような張りつめた雰囲気にごくりと唾が喉を通りすぎる音がした。

「これ、受け取ってもらえませんか？」

アインズが差し出した物。それはナザリックに於いてとても重要な意味を持つ指輪だ。

「……いいんですか？ ナザリックは異形種じゃないとギルメンにはなれないでしょう？」

「…」

ふう、と両手を顔の前に組み合わせて俯くアインズ。ギルドメンバー達との楽しかった思い出や、少しづつ仲間が離れていく寂しさが脳裏を駆け巡る。

「…ナザリックの方針の決定は多数決です」

そう、それもナザリック規則の一つなのだ。そして今のギルドメンバーはアインズただ一人。

「先程多数決により、ギルメンには例外で人間を入れてもいいことになりました」

「あはは、何ですかそれ」

呆れ笑いを浮かべながら指輪をはめるオデンキング。少しの照れ隠しも含まれているのだろう。

「それに、皆が帰ってきた時の言い訳もちゃんと考えてますよ？」

「へえ…？ どんなですか？」

得意気に指を立てて説明を始めるアインズ。骸骨のどや顔は微妙にうざい。

「これから私達は種族の枠を越えて友好の輪を拡げ、繁栄を導きます」

「えらい偉大な感じに言ってますけど何も考えてないですよね」

「導きます！」

「はあ…」

つまり偉大なる功績を遺すための第一歩を踏み出すのですと語るアインズ。それがいったいどういう言い訳に繋がるのかと首を傾げるオデンキング。

「つまりそれを成し遂げた時、誰もが称賛し、我々を讃えるでしょう。もちろんオーディンさんも」

「まあ、成し遂げれば…そうでしょう」

「偉業を達成したオーディンさん…即ち偉業種ということですよ」

「…」

「…」

まさかのオヤジギャグであった。

「く、ふっ…！」

あまりのつまらなさに逆に笑いが込み上げるオデンキング。友人のペロロンチーノやへロへロが帰ってきた時の反応が見物だな、と笑い続ける。

「ま、あんまり肩肘張って生きてても仕方ないでしょう？ ゆったり進めば、世はおしなべて事も無し。徒然なるまま行ければそれで充分ですよ」

「そうですねえ。こんな意味もない、適当な話で暇を潰す日常が続けばそれが一番ですから」

「あはは、そうですね。…なんて言いましたっけ、そんな感じの言葉」

「ええ、確か——」

——四方山話、です。

その後

ナザリツク地下大墳墓が誇る美しき戦闘メイド集団、その名はプレアデス。一人一人が傾国の美女とも言えるほどの容姿を持ち、そして戦闘においても転移した世界でならばトップクラスの实力を持っている。

そんなプレアデス聖団に所属する内の一人、ナーベラル・ガンマは激しく後悔していた。

「どうしよう…どうすれば…」

何故彼女がこのように陰鬱な気配を漂わせているか、それは前日の結婚式において敬愛している主の友人に非常に無礼な口を聞いてしまったからだ。

確かに普段から少し思うところはあったものの、正面切って言うほどに嫌っていたわけでもない。それなのに何故か昨日は酷い愚痴をくどくどと溢してしまったのだ。

「謝れば…赦して頂けるかしら」

どちらかというとおデんキングに許してもらえないことでアインズの耳に入る可能性があることに怯えているナーベラル。またもや失望されるやも知れぬとなれば焦燥が彼女を包むのは当然だった。

「ソリュシヤンはすぐ謝って赦してもらったって言っていたし、大丈夫よね」

ナーベラルよりよっぽど無礼な行いをしたソリュシヤンはさつきと謝罪して赦しをもらっていた。普段から割と仲が良かったというのもあるが、やはり性格の違いが大きいのだろう。ナーベラルはうじうじ悩む性格なのだ。

「…ふう」

よし行くかと自分に喝を入れて客室へ向かうナーベラル。なんだかんだでオデんキングが甘いことを知っているため、大丈夫大丈夫と自分に言い聞かせるのだった。

ナザリツク地下大墳墓が誇る至高の41人、その末席に加わり42人目の支配者となったオデンキング。彼は今、非常に悩んでいた。

「耐性が低下するのは怖いし…やっぱこっちな」

悩みの元、それはアインズに貰った指輪リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをどの指に嵌めるかである。

もちろん左手の薬指がどの指ではなく、8個までしか付けられない指輪のどれを外すかだ。

それぞれがそれなりの性能を持ち、ステータスを増強するものや耐性を高めるものがあるのだ。どれを外すか悩むのも仕方ないことだろう。

ギルメンの証をわざわざ貰ったからには嵌めておくのが義理人情、それにナザリツクに居るならばこれほど便利なものもないだろう。そう考えたオデンキングは遂に外す指輪を決めてつけ直す。

「よしと…ん？ はい、どうぞ」

ノックの音が響きナーベラルの声が聞こえてきたため入室を許可して、ベッドの上でだらけていた姿勢を直す。

「失礼いた…し…っ!？」

固まるナーベラル。それは寝起きで髪が崩れているオデンキングを見たから…ではなく、少しはだけている服装を見たから、でもない。

オデンキングがナザリツク地下大墳墓の支配者たる気配を発していたからだ。

ナザリツクに所属するNPCには主のことを間違わないよう、どんな姿を取ろうとも判るように主の気配を感じ取れる能力がある。それが告げているのだ。目の前の男は自分の主であると。

「え……あ、え？ オ、オーデイン様……？」

「そうだけど……どうしたのナーベラルちゃん」

「あ、あの……」

口をパクパクとさせて驚愕するナーベラル。もはや彼女には何かなんだか解らない。部屋と廊下の境で固まったまま立ち竦むことしか出来なかった。

そしてそんなナーベラルに、オデンキングに朝食の用意が出来たことを告げにきたルプスレギナが後ろから声を掛ける。

「何してるつすか？ ナーちゃん。そんなところで……」

「あ、ル、ルプー。その、あの」

戸惑うナーベラルに不審なものを感じながらひよいと部屋に顔を覗かせるルプスレギナ。

「オーデイン様ー。朝食の用意が出来たつ……す……」

当然ルプスレギナも気付かない訳はない。だがナーベラルと違って楽観的かつ堅苦しくないのがルプスレギナの長所であり短所だ。すぐにどういふことなのかを察して元に戻った。

「オーデイン様におきましては至高の御方となられたこと、心よりお祝い申し上げます……つす」

なんちゃって。と最後に冗談まじりにいつもの口調に戻る。何を隠そうプレアデスで一番オーデインと仲が良いのは実はルプスレギナなのだ。単に敬語を使わなくてもいいからかもしれないが。

「あれ、もう知ってるんだ？ 後で驚かそうと思ってたのに」

「ギルドに所属したなら、みんなすぐ解るつすよー」

そうなんだ、と納得したオデンキングだが依然固まったままのナーベラルを見ていったいなんなんだと近付いていく。

「おーい、ナーベラルちゃん。ほんとにどうしたの？」

近付いてきたオデンキングに対してガクガクと体を震わせ、ナーベラルが発した言葉は。

「あ、う。し………！」

「し……？」

「死んでお詫びを!!」

「ちよっ!？」

「ナーちゃん!？」

切腹致す! と、どこからか取り出した脇差しで腹を切ろうとするナーベラル。ちなみに彼女は腹を切った程度で死にはしない。

「止めないでルプー!」

「ナーちゃん、こっちの武器の方が攻撃力高いっすよ!」

「うおいつ!？」

腹黒人狼メイド、ここにあり。そしてすったもんだの末に何とか止めることに成功したオデンキング。また衝動的に死のうとされるのは堪らないと、両腕を自分の両手で掴み事情を尋ねる。

「至高の御方に危害を加えかけ、あまつさえ暴言の数々で御耳を汚してしまった罪は命で償うしか…」

「懐かしいな!？」 というか気にしてないから、死ぬの禁止! 命令です命令!」

そんなオデンキングの慈悲に涙を流しかけるナーベラル。昨日までの彼への認識とは120度くらい変わっているが、至高の御方もなればこうなるのも仕方ないのである。

あまり好意を抱いていなかった人物が敬愛すべき主となり、優しく慈悲をかけてくれた。つまり不良が良いことをした理論だ。

しかし、更に場を混沌に落としこむ登場人物が現れた。

カラン、と銀のお盆を床に落とす音が廊下に響く。

「オーデイン様…」

戻ってこないルプスレギナを心配してやってきたプレアデス姉妹の長姉、ユリ・アルファである。そして戦闘メイドの中でも一番に沈着冷静で聡明な彼女は、瞬時にこの状況を理解した。

支配者の気配を感じるオデンキング。両腕を掴まれて涙を流しかけているナーベラル。傍観しているルプスレギナ。先程廊下の角を曲がる前に聞こえた「命令」の声。

総合的に判断すれば答えは一つしかないユリは考えた。

即ち支配者となったオデンキングがナーベラルを無理矢理手込めにしようとし、ルプスレギナにそれを手伝わせようとしているという

ことを。ならば彼女が、妹を大切にする優しい彼女が取る手段は一つしか無い。

「オーデイン様、宜しければ私がご相手を務めさせていただきます。何卒二人にはご容赦を……」

「!?」

「!?」

「ぶふっ（笑）」

最後がルプスレギナなのは明白である。彼女は人狼故の鋭敏な聴覚でユリが近付いてきている事は知っていたが面白そうだと考え、あえて指摘はしなかったのだ。

「あ、あのユリさん。何か勘違いしてませんか？」

「そ、そうよユリ姉さん。オーデイン様はただ、私に御慈悲を下さって……」

「そうっすよ。無理矢理なんてことはないっすよー」

見事な棒読みで誤解を助長させるルプスレギナ。もう一度言おうと、彼女は腹黒である。

「オーデイン様……」

慈悲を与える。つまり命の精をおそそぎ申すとも言っているのかと、ユリ視点では無理をしているようにしか見えないナーベラルを救うため、彼女は行動に移す。

「ボ、ボク、一生懸命にい……きやつー！」

素が出て僕っ娘口調になるユリ。無理に迫ろうとした結果、足が絡まりステンと転んでしまった。

彼女を創ったのはドジっ子教師のやまいこである。つまり彼女もそれを受け継いでいるからこそ、この勘違いとドジっぷりなのだ。

「ちよ、大丈夫……うおっ!?」

転んだ衝撃で頭が外れてオデンキングの頭にユリの顔面がヒットした。彼女は首無し騎士であり、首に着けているチョーカーで頭を留めているだけなので意外と外れやすいのだ。

「オーデイン様……」

鼻血を出しながらその頭を抱えて尚も迫る首無しメイド。ちよっ

としたホラーである。首無し騎士が鼻血を出すかどうかは考えてはいけない。

「ひ、ひい…」

その迫力と光景に後ずさるオデンキング。首無しのアンデッドが人間を追いかけ回す。正統派なホラー映画の絵面だ。だが事実を考えばホラーの上にコミカルがついているのは間違いない。

そしてようやくその騒ぎに起き出してきたクレマンティーヌがその光景を見て首を傾げている。

「なにこれ…?」

鼻血まみれの首無しメイドが相方を追いかけて回し、ドツペルゲンガーはおろおろしながら見ているだけで、人狼がケラケラと笑っている。

控えめに言っても、意味不明な状況だった。

長い説得と釈明の果てに、ユリの誤解を解くことが出来たオデンキング。少し疲労感を感じながら配下の者に挨拶回りに行く。アインズは皆を集めて大々的に告知しようと思案したが、それを拒否してそれぞれの元へ足を運ぶことを選ぶのが小心者であるオデンキングだ。

とはいえ新参で人間な自分が新たな支配者だとふんぞり返ると、いらぬ反感を買うかもしれないと思うのは仕方ないだろう。

ちやつちやと済ませるか、とオデンキングはリング・オブ・アイン

ズ・ウール・ゴウンを使用してそれぞれの元へ転移し始めるのであった。

Case 1 シャルティア

「オーデイン様！ 遂に吸血鬼になる決心をしたでありますね！」
「何でそうなる!?!」

大丈夫、調整すれば下級吸血鬼ではなくもつと上位に！ と迫るシャルティアを力の限り抑えつつ必死に拒否するオデンキング。

「先つちよ、先つちよだけでいいでありますよ！」

「刺さる刺さる！ ちよ、こらシャル…」

ギャーっという叫び声がナザリツクに響き渡るのであった。

Case 2 アウラとマール

「おめでとうございますー！」

「お、おめでとうございます」

「やー、改めて言われると照れるというかなんとか…」

シャルティアとは違い素直に祝福してくれるダークエルフの姉弟。オデンキングの首筋に齒形がついているのは触れない辺りが優しさである。

「そうそうマールちゃん、アインズさんがまたお風呂に入ろうって伝えといてだつてさ。今度は俺も一緒させてもらうな？」

「はは、はい！ 喜んで」

顔を赤く染めて嬉しがるマーレ。それを見たオデンキングは本当に男だよなと疑問に思いつつ、自分はノーマルなんだと言いつける。

「あ、あの、私も…」

「えっ」

「えっ」

支配者になったオデンキングを見て恋する乙女モードが再発動したアウラ。恋に恋するお子さまエルフはミーハーで惚れっぽいのだ。

「え、えー…」

これが元で後にどたばた騒ぎに発展するのだが、それはまた別のお話である。

Case 3 コキユートス

「オメデトウゴザイマス。我が忠誠ヲ受ケトリ下サイ」

「んん、ありがとうコキユートス。まあ別に今までとそんなに変わるわけでもないから、気楽に接してもらえるとありがたいかな」

「ハッ」

今までで一番平穩に終わりそうな予感にほっとするオデンキング。ついでにガガーランとの約束を思いだし、デミウルゴスと親しいコキユートスに恋愛について聞いてみる。

「デミウルゴスって恋愛とかどんな感じか知ってる？ 実は想い人とか居たりしちやったり」

「フム…ソウイエバコノ前魅力的ナ女性ニ出会ツタト言ツテイマシタ」

「おおー！」

「ナンデモイママデ最高ノ悲鳴ヲアゲタ犯罪者ダツタト」

「おお…」

今は既にスクロールの生産は中止しているため、王都で捕獲した時の犯罪者かな、と推測してげんなりするオデンキングであった。

Case 4 デミウルゴス

コキュートスと同じように、デミウルゴスから祝福の言葉を受け取ったオデンキングは直球で聞いてみることにした。

「デミウルゴスって恋愛とかしないの？ 吸血鬼とか金髪の美少女とかさ」

直球どころかデッドボールである。むしろアンデッドボールというべきか。

「…イビルアイ嬢のことでしょうか」

「え？ あ、いやうん、そんな感じ」

何故バレたと本気で思っている辺り、シャルティアに噛まれた影響が出ているのかもしれない。

「確かに彼女は長い年月を生きているようですから、貴重な情報源となるかもしれません。…オーディン様がお考えの策、見事に成功させて御覧にいきましょう」

彼の二つ名は、深読みのデミウルゴスとかにするべきなのか。オデンキングはそう思った。

「ああ…うん。お願い。いっぱいデートとかしてあげて…」

「はっ」

まあこれはこれでいいかと投げっぱなしにするオデンキングで

あった。

Case 5 アルベド

「あら、やっとそうなったのね」

自室を訊ねてきたオデンキングを見て、開口一番でそんなセリフを吐いたアルベド。

「あれ、やっとなって…?」

「アインズ様の様子を見れば近い内にこうなることは解ってたもの。一応おめでとうと言うべきかしら」

なんだかんだでアインズをよく見ているアルベド。その有能さといまわってバレバレだったようだ。

「ただし…!」

「っ!」

息を感じる程に顔を近付け、瞳孔が開いた瞳で睨み付けてアルベドは宣言する。

「アインズ様をおいて死んだり、消えたりするようなことがあれば…その時は私が殺すわ」

狂気すら感じるその脅迫に、しかしオデンキングは怯まずに宣言仕返した。

「じゃあアルベドがアインズさんをおいて死んだり消えたりしたら—

—」

シャルティアを次の妃に添えるから、とおどけて言い放つ。

「…絶対に死ねないわね」

「はは、同じく。死んでから殺されるのもこの世界じゃ無いとは言えないし」

笑いあい、空気が緩む。しかしそんな抱き合うほどに近付いている二人の所へ、アインズが非常にタイミングよく入ってきた。

「入るぞアルベド………浮気!?!」

「えっ!?!」

「えっ!?!」

どたばたな日常は続いていくのであった。

外伝

学院1

帝国魔法学院。

帝国が誇る、周辺諸国でも最大の学術機関であるこの学院はその名が示す通り魔法を学べる学校である。とはいえ魔法を使う人間の割合はというと実のところかなり少ない。ならば何故態々と「魔法」などという言葉をつけているかというと、それは魔法なしには国が成り立たないからに他ならない。

マジックキャスターが使用する第1位階以上の、才能ありきの魔法とは違い第0位階とも言うべき生活魔法というものは庶民でも使える者は多い。それは衣・食・住その他あらゆる物事に密接に関わりを持ち、それ故に魔法を使えなくとも理解するべき事柄が非常に多い事を意味している。

つまり魔法を使えずとも理解し、学ぶ。それが魔法学院という名の由来だ。さらには帝国の首席魔法使いフールーダ・パラダインが設立に深く関わったことも一つの要因ではあるだろう。

なんにしてもこの学院を卒業したならばある種のエリートとも言える、将来を約束された人種となる。勿論将来の選択の自由は当然の権利としてあり、それこそワーカーになろうが盗賊になろうが本人の問題ではある——勿論相応の金額を国に納めれば、の話だ。行政の役に立つ人材を育成しているのだから、それを反故にするために違約金とも言うべきものを支払わなければ当然とも言える。しかし素晴らしい学舎でありながらこの施設は、帝国に大して愛着を持ち愛国心を育ませるような一種の刷り込み染みた教育も行っている。それは無理矢理帝国に奉仕させるような洗脳ではなく、如何に帝国に身を置くことが素晴らしいかを随所で深層心理に植え付けるようなものにはある。そういった理由もあり、結局はこの学院に通う生徒で国に関係しない職業に就くものは稀だ。

そしてそんな学院に通う苦学生、ジエットは今非常に困っていた。

それは近く行われる昇年試験においてメンバーが揃わない事がある。学院では1年ごとに昇級試験があり、筆記や実技などの試験に合格しなければ留年、下手をすれば退学もあり得るのだ。これでもジエットはそれなりに優秀な方であり成績については心配していない。しかし実技の方に関してはまず団体行動のために最小で5人、最大で8人のパーティを集めなければならないのだ。

これはパーティを作る行動力や人望、団結力なども評価に含まれるためだ。

つまりそこで躓くジエットにはそこが足りていないのかというと——そういうわけではない。

友人は少い方ではあるが、それでもパーティを組むのに不自由するほどではない。

ならば何故そこで悩むのかというと、それはとある貴族の嫌がらせに端を発する。どこにでも折り合いが悪い人間というのはいるものだが、ジエットにとってそれが位の高い貴族だったというのは不幸というしかないだろう。

本格的な嫌がらせをしてくるならば、吹けば飛ぶような平民の身であるジエットなど相手にもならない。しかし相手は玩具で遊ぶ程度の認識でこちらにちよっかいを出してくる性格の悪い貴族だ。貴族ながらも友人であり妹のようにも思っている少女にもそのせいで迷惑を掛けていることにジエットは非常に申し訳なく思っている。今は母親のかつての雇い主、その娘——ジエットが最も尊敬する貴族の少女だ——のライバルであり友であった生徒会長がなにかと便宜をはかってくれているために大事には至っていないが、そんな彼女も今年で卒業。何とかしなければと悩み、そもそも性悪貴族のせいで集まっていないメンバーをどうにかしなければ生徒会長が卒業する以前に自分が強制的に卒業になる。悩みの絶えないこの状況にジエットはため息をつくばかりだ。

「ほんとどうするかな……ん？」

沈んだ気分のままに食堂に到着したジエット。いつものように注文をして食事を始めようとしたところで、同じテーブルに団体が座つ

たことに疑問を覚える。まだまだ空いている机はあるのに態々こへ座ったということは、またもや嫌がらせにでもきたのだろうかと顔を確認した。

「貴方がジエツトさんですか？」

「へ？ あ、はい…」

しかしそこにいたのは見たこともない生徒らしき人物が4人。そして見知った5人目——今はどこに消えたかも知れぬ貴族の少女、アルシエがそこにいた。

「お、お嬢様…!？」

「もうお嬢様じゃない。アルシエでいい」

「い、いえ、そんなことは…」

「いい」

勢いに押されて頷くジエツト。一体何が起きているのか解らず、混乱した頭で状況の説明をアルシエに求めた。

「また通う事になった。同じ学年だからよろしく」

「は、はい、よろしくお願いします…じゃなくて！ えー…ええー？」

あまりに簡潔すぎる説明に疑問しか浮かばないジエツト。しかしアルシエは昔からこんな感じだったなと諦めた。

「えーと、自己紹介していい？」

「あつ…はい、すいません」

再会の衝撃のせいで声をかけられた事をすっかり忘れていたジエツト。慌ててそちらに目をやり、改めてその顔を確認する。

声をかけてきた男は10代半ばから後半といった年頃の特徴がない男だ。いや、顔こそ特徴がないといえるものの身に纏うアクセサリーは凄まじく高価なものを確信させる煌めきがあるため、それが特徴といえれば特徴だろうか。

続いてその横に立つ同じ年頃の女性は、こちらもかなり良質な服装と装飾品を身につけていた。何故か猫耳と尻尾をつけているが、そんな可愛さと整った顔つきとは裏腹にちよつと意地悪そうな雰囲気があるため、ジエツトはなんとなく苦手なタイプだなと考えた。

そしてもう一人の男といえば、信じられないほどに普通の男だ。まるでこれが人間の基本ですよと言わんばかりに中肉中背、顔も普通で雰囲気も普通。びっくりするほど普通だ。これで名前がピエールならば「T H E 普通チャンピオン」を名乗れるかもしれない。

そして最後、艶やかな黒髪を後ろに纏めている少女。ジエットは一瞬目を疑った。世界で一番の美貌と言われても信じられるくらい美しい女性が何故こんなところにいるのかと。

一度見れば絶対に忘れられないであろうその美貌は、恋愛に興味が薄いジエットをして緊張してしまうほどのものだ。

「えー、私達はアルシエちゃんの友達です。今日から学院に通うのでよろしくお願いします」

「よろしくー」

「どうも」

「…よろしく」

「は、はあ…」

こんな時期に学院へ入学するなど、どんな力が働けばそんな無茶が通るのかと呆けるジエット。この学院は国家直轄で運営されており、それこそ最高クラスの貴族か皇帝でもなければこんなことはありえない。極めつけにアルシエの存在だ。貴族位を剥奪された彼女に再度入学が許されるなどもはや一体どうなっているのか。

——だが、しかしだ。

混乱しつつもしかしこれがチャンスであるのはジエットにも十分に理解できた。恐らく自分にちよつかいをかけてくる貴族よりも上の立場の彼等。それが親交のある元貴族の少女の仲間だという。さらには割と友好的に接してくれているこの事実。

つまり彼等次第ではあるが、試験のパーティに入れてもらえるならば全てが解決する可能性がある。ならば即決即断。駄目で元々、当たって砕けろの精神でジエットはお願いした。

「昇年試験は受けるのでしょうか？ 実は恥ずかしながらまだメンバーが集まっていなくて…よかったらご一緒させていただけません

か？」

その問いにひそひそと囁きあう男二人。昇年試験でなんだろうと聞こえてきたような気がするが、ジエツトは気のせいだろうと判断した。まさかこの時期に入学してきてそれを知らないなんてありえないのだから。

「二応私は2年目ですから、雑事の面で色々とお役に立てると思います」

本来ならば第一位階の魔法もいくつか使えるという部分は充分に売り込めるのだが、生憎と目の前の小さな少女は若くして第三位階を使いこなす天才だ。比較するのも烏滸がましいだろう。それよりは、学院に入ったばかりで勝手の解らない部分をフォローすると言った方が有用に思われるというものだ。

「私達は見ての通り5人ですが、そちらは？」

「2人です。8人には足りませんが、そこは実力でカバー出来るかと」
もちろんアルシエが居るからこそその発言だが、こういった言い方をすればそれなりに気をよくしてくれるだろうと思つてのことだ。貴族の扱いには充分気を付けなければならぬというのは骨身に染みている。

特に貸しや借りを重視する彼等には、言葉の使い方というのを考えなければ酷いことになる。それは言葉の丁寧さという意味ではなく、言葉尻を捉えられて貸しを作られたりしないように気を付けるという意味でだ。

でなければ、いつのまにかその貴族の派閥に組み込まれているような事態に陥るのが貴族社会の怖いところなのだ。平民であるジエツトにはそこまで気にしななければならないことではないが、やはり気を付けるに越したことはない。

実力でカバー出来るというのも、主語を抜いたために自分の実力もあるという意味を多少は含まれている。試験に受からないような人間を自分達が導いてやったという認識をされては困るのだ。

「…ふむ。どうしますかアインズさん」

「うーん…いいんじゃないですか？」

どうやら力関係は男二人が高いようだ。決定権はそこにあると言
うように全員が答えを待っている。

「ではよろしくお願いできますか?」

「…はい! こちらこそよろしくお願いします」

トントン拍子に事が進んでいるが、これもお嬢様のお陰だとジエツ
トは感謝する。入学できたことすら彼女の口利きなのだから、もはや
足を向けて眠れない。

「おっと、自己紹介がまだでしたね。私はオーデインと申します」

「アインズです。よろしくお願いします」

「…ナーベラルよ」

男達が話し掛ける度にナーベラルと名乗る彼女の機嫌が悪くなっ
ているような気がするが、気のせいだとジエツトは思うことにした。
思わなければそのプレッシャーに押しつぶされるからという本能の
警告であったりするのだが、それに気付く前にアインズのチョップが
ナーベラルに入ったため事なきを得たようである。

「あれ? クレマンティーヌ?」

そしていつの間にか消えていたもう一人の女性、クレマンティー
ヌ。

ジエツトがふと周りに視線をやれば、なんと自分にちよっかいをか
けてくる性悪貴族——ランゴバルト・エック・ワライア・ロベルバ
ドに彼女が声を掛けている。

気安く接しているクレマンティーヌとは裏腹に、ランゴバルトの方
といえは顔が引き攣っている。その反応を待っていた、とでもいうよ
うにクレマンティーヌは喜色満面である。

やはり睨んだ通り彼ら彼女らは、ランゴバルトをして動揺させるほ
どの大貴族なのだろうとジエツトは確信した。そしてオーデインと
名乗った男性が慌ててそちらに向かい、元のテーブルに彼女の手を
しっかりと繋いで帰ってきた。

「なにやってんのさ…」

「んー? ほら、あの邪神の時のアレ。パトロン」

ひそひそと話す二人。若干危ない発言が聞こえた気がしたジエツ

トだが、努めて無視する。彼は慎重で賢明なことに定評があるものの、既に賽は振られているのだから仕方ない。毒を食らわば皿までの精神で行くしかないのだ。アルシエがパーティーにいることもその行動を助長している。そして密談が終わり、ジエツトの方へを向きなおる二人。

「おっと、失礼しました。まま、とにかくよろしくお願いします。物見遊山で入っただけなのでそんなに頻繁に通うわけではないですけど仲良くしましょう」

「はい、ありがとうございます」

突っ込まない、突っ込まないぞと内心でジエツトは我慢する。もはや疑いようもないが、彼らは皇帝の関係者なのだろう。でなければここまで学院で自由気ままにできるわけもない。とにかく今は自分たちの未来が繋がったことだけを喜べばいい。そんなジエツトの葛藤には気付かず、また後で、という言葉を残して去っていく集団。

「ではでは次の授業に向かいます。午前は校長先生の案内だけで終わっちゃいましたし、楽しみですねアインズさん」

「ええ。しかし想像してたのは結構違うものですね…」

「あー…アインズさんは小学校出てるから学生経験あるんですねー」

結局何故自分のところに来たのか解らないまま、談笑しながら去っていく彼らを見送るジエツト。仲間の知り合いだったからという理由だけとは思えない。もしかして自分に宿る魔眼が目的かと一瞬間に過るものの、あれほどの権力者が執着するにしている理由が弱すぎる。幻術を看破する程度の魔眼などマジックアイテムでいくらでも替えがきくのだから。

「前途多難だな…」

やれやれと肩を竦めるジエツト。平民なのに貴族の可愛い幼馴染を二人持ち、弱きを助け強きを挫く。力の宿りし魔眼を封じるために片目を眼帯で隠し、病弱な母親を救うために必死に生きる彼は、まさに物語の主人公のようであった。

時は遡り、アインズ達が学院へ通う数日ほど前。急に訳のわからないことを言い出した友人にアインズは奇異の目を向ける。

「学校へ行こう！」

「何ですか急に……」

ナザリック地下大墳墓のサロンにてボードゲームで遊んでいるアインズとオデンキング。正直内容はお粗末そのものであるが、当人達は充分に楽しめている。デミウルゴスが見ていればまたもや意味深な勘違いをしてくれそうだが、生憎と今はイビルアイと冒険に出かけているのだ。観戦者は傍に控えるナーベラルとソリュシヤンであるが彼女たちはゲームなどしたこともないのでその下手さ加減は知られることがなかった。

「いや、帝国に魔法学院であるじゃないですか。そこに通ってみたいなどと思ひまして。研究もひと段落しましたし、法国も動きがないので余暇を楽しむのもありでしょう」

「そこで学校になる理由が解らないんですが」

「青春というやつを味わってみたいなど」

荒廃した世の中。小卒ですらエリートと呼ばれる22世紀。学生生活を、青春を堪能した人間というのは裕福な人間の証拠であり、そこに憧れを持つ者は多い。オデンキングはもちろん経験していない方の大多数側であり、多分に漏れず学生生活というものに羨望と憧憬があった。

「いや、ほら。アインズさんも人間になれるようになったじゃないですか。一人で通うのも悪いなと思ってたので待ってたんですが、随分早く成功したので…」

「ああ、だからあんなに急いでたんですね…学校かあ…」

カジツトの協力により飛躍的に進んだ種族変更の研究。そのおかげでアインズが人化することには成功したものの、やはりステータスの低下は避けられないものとなった。そのうえ外見はユグドラシルの人間アバターの基本そのままというおまけつきだ。種族変更に伴いオーバードロードの骨格は人間のそれとは全く違っているというのにいったいどういうことだと憤慨したアインズであった。まあその憤慨という感情自体も久方ぶりとあってすぐに感動に変わったのだが。

更には別の可能性の兆し——レベル上限の突破という素晴らしい可能性も見つけることができた。形になるのはまだ先だろうが、プレイヤーとしてはワクワクせずにはいられないだろう。

そんなこんなで偶に人間に戻ってリフレッシュすることが出来るようになったアインズは喜んだ。食事が美味しい、空気が美味しい、そしてNPC達がちよつと怖い。特にアルベドはアインズ様のウールにゴウンがついたと喜び、色々とハツスルすることになった。

「まあそれはいいですけど…全員反対しそじゃないですか?」

「そこはほら、この世界の常識を知るためでもありますし。必要は行動の母ですよ」

「ふふ、何か違いますかそれ」

悪くない感触のアインズにオデンキングは嬉しがるが、横に控えているナーベラルがそわそわしているのに気付き声を掛ける。

「ナーベラルちゃんは反対?」

「そ、その…僭越ながら申し上げます。至高の御方であらせられるお二人が今更学ぶことなどあるのでしようか? それにナザリックを離れて行動されるのは非常に危険です。どうかご自愛下さいませ」

「じゃあナーベラルちゃんも一緒に学生生活するってことで」

「ならば一切問題ありません」

変わり身早いなど突っ込むオデンキング。ギルメンになってから一番変わったのはナーベラルの反応なのだが、いまだにその変貌ぶりには感心せずにはいられないほどだ。だがナーベラルもナーベラルで色々と考えているのだ。

アインズとよく行動を共にするせいで嫉妬と羨望の嵐に揉まれたのは記憶に新しい。危害を加えられないとは解つていても自分のレベルに倍するような者達からのプレッシャーは相当なものだった。

とはいえそんなものは至高の御方の傍に居られることと比べれば些末なことだ。しかも今回は数もダブルで幸福も2倍、こんな機会を逃す者がナザリックにいるだろうか。いや、いないと断言できる。

例え嫉妬が2倍になろうとも、凶太きが増した彼女には何の問題もない。そう、現在進行形でソリュシヤンからの重圧を受けていようともだ。

「じゃあちよつとジルに頼んできます」

「まだ言つてなかつたんですか…」

大丈夫大丈夫とそのまま転移出来る場所まで指輪の力で跳び、帝国へ向かうオデンキング。学校というものに行けるとなると気分もウキウキ、精神も若返るといふものだ。精神は肉体に影響を受けるといふが、それが本当ならアインズが早々に人間に戻るようになったのも喜ぶべきことだ。どんどん精神が人間のそれと乖離していき、いずれは対立するなんてことになれば目も当てられない。それが研究を急いだ理由の一つでもある。

「クレマンティーヌも誘えば来るかな？」

気まぐれな彼女のことだからどうなるかはわからないが、付いてきてくれるのならば花の学園生活に彩が添えられるのは間違いない。そんなことを考えながらオデンキングは皇帝の元へと向かうのであった。

「魔法学院ねえ…」

オデンキングに誘われたクレマンティーンは少し悩んでいた。学校に通っていたという訳ではないが、それに近いところで教育を受けたことはある。両親は敬虔な信者であり、その2人が将来有望な子を設けたとなれば聖典の候補生として勧誘されるのも法国では偶にあることだ。

とはいえ親元を離れるほどの長期間というわけでもなければ周りに勉学を励むクラスメイトがいるというわけでもない。どちらかといえば私塾の個人授業のような形だろうか。

「行くの？」

「んー、どうしようかな。暇ではあるけど…」

アルシエと帝都をぶらつきながら返答を考える。青春だのなんだのと言っていたが、帝国の魔法学院といえば役人や軍人の養成所のようなものだし一般的にもそんな認識で間違いないだろう。いったいどこにそんな要素が隠れているのだろうかとかクレマンティーンは首を捻った。しかしアルシエが随分と興味を示しているのに気付き問いかける。

「珍しく興味津々ねー？　なんかあるの？」

「まだ貴族だった頃通っていたことがある」

気にかけていた幼馴染もまだ在籍しているだろうし、中途半端に就学を終えたのは自分自身でも気になっていたのだ。とはいえアルシエの使う魔法は既に第三位階であり、学院の教師陣と比べてもなら遜色はない。行く意味があるかと聞かれれば、微妙だと答えるしか

ないが。

「行くのならついていきたい…かも」

「ふーん…ま、暇つぶしにはいいかな？」

結局アルシエの要望に沿う形になったのは偶然か気遣いか。問われれば前者だとクレマンティーヌは言い張るだろうが、近頃頼に仲良くなっている2人の関係性を考えれば答えは明白だろう。

こうして色々と騒動はあったものの、最終的にはアインズ、ナーベラル、オデンキング、クレマンティーヌ、そしてアルシエが学院に通うことになった。ちなみに集合の際にオデンキングとアインズの強大な魔力をダブルパンチで喰らいアルシエが吐きそうになったのは余談である。

学院編 2

帝国の首都アーウィンタール。人類の生存圏の中でもトップクラスに発展しているこの都市は名所ともいえる場所がいくつもある。その中でも最も人数が集まり熱気に包まれる場所がこの闘技場である。

腕自慢の猛者達が魂を削りあい、時には死人すら出るほどの熱き祭典。どんな素性であれ強ければ認められ、持て囃され、憧憬を集める。名が売れば騎士として皇帝に見初められることすらあるのだからこの場所に栄達と野望を求めて闘志溢れる者たちが集うのも必然だろう。

そんな場所で今、この世界の頂点に近い強者達が勝敗を競い剣を打ち合わせていた。その名はオデンキングとアインズ。一部の者しか知らぬ「プレイヤー」であり、その気になればこの首都も大した時間は掛けずに滅ぼせるような存在だ。とはいえそんな事は殆どの観客は知る由もない。彼らに解るのは圧倒的な強者が拮抗しながらも凄まじい威力の剣技をお互いに打ち合っていることだけだ。

「すげえ…剣が当たる度に衝撃波みたいなの出てるぜ…」

「ああ…間違いなく闘技場の歴史でも一番の闘いだ」

視認すら難しい剣戟、しかし音だけで解る異常な威力の一撃一撃を理解して感嘆の声を上げる観客。彼らの言うことは間違っていない。剣で戦う彼らの実力は難度三桁を超える脅威の魔獣すら容易く屠るのだから。

——しかし、見る者が見ればこう言うだろう。なんてひどい闘いだ、と。

「武技↑←↓↑← B C P K →↑!」

「今のどうやって発声したんですか!?!」

彼らは所詮近接の素人。上位の戦士から見れば、身体能力が異常なだけの人間——つまり技術の無い、格下の戦士にも倒されかねない猛獣のようなものである。

闘っている彼らもそんなことは重々承知している。ならば何故こ

んなことをしているかというのと、言ってしまうえば単なるお遊びだ。闘技場に興味を示したアインズを見てオデンキングが誘った結果こうなっただけの話なのだが、やはりプレイヤーとしてPVPには負けたくないのは当然だろう。

無意識に真剣になっっているあたり彼らのユグドラシル愛は根っからのものと窺える。元的能力値で戦えば被害は甚大どころではないのでこのような形での決闘と相成ったのだが、最近習得出来た武技というものをちよいちよい出していくのは試験運用の意味も含んでいるのだろう。

ちなみに先ほどの武技は発動すれば剣が光る、それだけだ。

「うおっ、眩しっ…」

「隙ありっ！」

「ような気がしましたが無効化でした」

「ぐわああー！！！」

意外と目くらましには使えるじゃんかと怯んだアインズを見て突っ込んだオデンキングだが、視覚を目に頼っている訳ではないアインズには効果がなかったようだ。単なる振りだったのだが、見事に騙されて返り討ちにあった。

「く…なんて卑怯な…」

「どつちがですか」

いったん間合いをとって離れる二人。観客と二人の認識は絶望的な温度差なのだが、知らない方が良いこともあるものだ。少なくとも大半の客からすれば世紀の名勝負であり、これ以上はないほどの見世物なのだから。

「そろそろ決着といきましょうか…アインズさん」

「…いいでしょう。お互いの切り札で最後にしますよ」

緊迫した雰囲気は二人を包んだ。近付く決着の時に観客もゴクリと唾を呑み込み、闘技場の中央へと視線が集中する。

「パーフェクト・ウオリアー！」

「武技——ってぎげんな骨え！ その姿で魔法詠唱出来るのにおかしいだろ！」

「何事も抜け道はあるんです」

「ぐわぁー！！！」

ステータスの構成が魔法詠唱者から純粋な戦士のそれへと変化する魔法、パーフェクト・ウォリアー。とはいえスキルの構成までが変化するわけではないのでユグドラシルでは使いどころのほとんどない魔法ではあった。

しかし戦士縛りで闘っているこの状況では歴然の差が出るのは当然である。だがオデンキングの指摘も尤もなのだ。そもそも彼らが自分の魔法で作った鎧で闘っている間は魔法が使用できない制限があるのだから、オデンキングもその手段は最初から想定していない。「私の勝ちですね。では約束通り班のリーダーはオーデインさんということで」

「く、また無駄な責任が…」

ただ闘うだけではつまらないということで学院の昇年試験の班長を決める賭けをしていた二人。面倒くさそうなその役職を押し付けあっていたのだが、結局オデンキングが無理やりに肩書を背負わされたようである。

「ところでさっきのどうやったんですか？」

「後で教えますよ。といっても使いどころは多分ないと思いますが…」

いまだ熱気冷めやらぬ闘技場だが、そんなものは無視して通路にそそくさと姿を隠す二人。今更に技を叫んでいたりに羞恥を感じ始めたのだ。特にオデンキングは過去にも似たようなことをしたのに教訓を生かせていないあたりがポンコツっぷりを感じさせる。「ところでそろそろ学院に行きませんか？ アルシエちゃん達はもう行ってるみたいですし」

「ええ、そうしましょうか」

「幻術かけ忘れないでくださいね…あ、ちよつと露店に寄っていいですか？ あそこのレインフルーツってやつが中々いけるんですよ」

始業時間を大幅に過ぎていているが、自由すぎる二人には関係ないようだ。そもそも気が向いたら出席するという不良生徒ならぬ、特別生徒

だ。校長すらもとある理由から懐柔できているのだからこの二人を注意するものなどそれこそ互いしかいないだろう。

そして転移する前に忘れないようしっかり骨の体から人間に見えるよう幻術をかけるアインズ。種族の変更は少々面倒な手順を踏むために普段はこれでいっているのだ。露店で間食を購入した後《ゲート／転移門》を使用して学院のすぐそばまで転移する二人。ちやうど昼食を終える時間帯のためそのまま授業に参加しようとしたのだが、今日は午前で授業が終わり昇年試験のための準備に当てるらしいとジエツトから聞いて肩透かしを食らってしまった。

「無駄足か…あ、一応班長ということになったのでよろしくお願ひしますジエツトさん。それで準備ってどんな感じで用意すればいいですか？」

「解りました。そうですね…基本的には学院側が用意してくれていきます、馬車の手配や食料などですね。その選別や地図の管理、積み込みなどは生徒が各自でしなければいけません」

「ふむふむ、なるほど。付き添いの兵士の方はもう決まっているんですか？」

「いえ、不正を防ぐためにも当日にしか解りません」

いくつかの問答の後、話を終えるオデンキングとジエツト。あまり時間を取らせても悪いかなと、苦学生でこの後も仕事があるのだという彼に別れを告げようとしたのだが、オデンキングは前々から少し気になっていたことを問いかける。

「そういえば…眼帯をされていますが、怪我なら治しましょうか？」

差し出がましいことでしたらすいませんが」

そう、中二病患者が御用達のアイテム『眼帯』だ。もしかして痛いファッションなのかと思って触れずにいたアインズとオデンキングだが、話すうちにそんな性格でもないと解ったために問いかけてみたのだ。

アルシエからは昔の知り合いとしか聞いていないためジエツトの事はあまり知らない二人。しかし少しの間とはいえパーティとなるのだから、その好で怪我を治すくらいはいいだろうと考えたオデンキ

ング。しかし帰ってきた返事は想像を超えた中二度であった。

「いえ、これは魔眼を封じているものでして…」

「——おっふ」
「…っ」

元の世界で眼帯を付けた人間がこんなことを言い始めたら頭の残念な人なのだろうという感想しか出ないが、生憎とここは異世界の魔法学校故にそんなことだって無いとはいえない。しかし現代人の感性からして少しだけ腹筋が緩むのは仕方ないだろう。アインズは顔を背け、オデンキングは自分の頬を抓って笑いを堪えた。

「そふっ、そうですか…ちなみにどんな魔眼かお聞きしても？」

「正直大したものでもありませんけど」

そういつて眼帯に手をかけ外しながら説明するジエツト。実際の通り、幻術を見破り更には看破してしまえば相手にも伝わってしまう程度の魔眼なのだからさして貴重といえるわけでもない。むしろ常時展開していればトラブルの種になりかねないのでわざわざ封じているほどだ。

「幻術を見破る魔眼なんですけどね、ほらぶっちゃけ外しても見た目には解らないで」

「——レインボンバァーッ！」

「目があああー！？」

先ほど購入したレインフルーツを弾けさせてジエツトの目に果汁スプラッシュをくらわせるオデンキング。まさかそんな都合の悪い魔眼だったとは思わず、動揺してしまった結果だ。ちなみにアインズはジエツトがうずくまっっているうちに退散済みである。

「な、なにを…っ」

「し、失礼しました。蠅が飛んでいたのです」

「どんな理由ですか！　どうか何か叫んでいたでしょう」

「いや、ほんと申し訳ない、はは。偶にありますよね、持っている果実を弾けさせたくない時」

「……」

本当はもつと突っ込みたいジエツトだが、相手が相手だ。むしろ

さっきの突っ込みもたちの悪い貴族相手なら問題だろう。渋々と追及を諦める。そしていつの間にか姿を消したアインズに首を捻るが、慌てながら誤魔化すオデンキングのある発言によってそんな疑問は吹き飛んだ。

「いや、はは何か用事があるとかで：うん。———そ、その、お詫びと言ってはなんです何か困っていることがあつたら力になりますよ、ほん」と

「本当ですかっ！」

「おわっ、いや、私が出来る事に限りますけど」

ジエツトが魔法を使って仕事をし、魔力が尽きても雑用までして金を稼ぐのには訳がある。それは病気の母親を治療するという目的があるからだ。普通の病気ならばジエツトが一月も働けばなんとかなる程度の金額で賄えるのだが、不幸にも母親の罹った病は高位の魔法でしか治療が望めない類のものだ。

扱える神官や冒険者も一握りである以上、非常に高額な金銭を要求されてしまう。ジエツトが卒業して騎士団入りを目指しているのもそのためである。国仕えのエリートともいえる騎士団はそれだけ給金も高い。今の小遣い稼ぎ程度の———それでも魔法を使っている以上普通に暮らせるだけの金額ではある———そんな端金とは文字通り桁が違ってくるのだ。

しかし今日の前の人物が言ったことはその苦労を一気に飛ばせる可能性があつた。ジエツトも別段樂をしたいわけではない、しかし母親がいつまで持つかも解らない以上早期的な解決はなによりも優先されるべきだ。

こんなことで言質を取ったように捉えていいのか、というのは貴族には通用しない。彼らが特権階級であるのはその発言に責任が伴っているからなのだ。高位の貴族であればあるほどに自分の発言には気を使うのだから、皇帝に気安く接していると思われるほどの彼らが前言を撤回するわけもない。そして無理やりに学院に入学出来るほどの権力を持つ彼らが母親の病を何とか出来ないわけもない。何より「詫び」と言ったのだ。「貸し」ではない。つまり払うべき対価が存

在しないのだから、後になって恩を笠にきて無理難題を言われる可能性が非常に低いということだ。

「お願いがあります、病気の母を治していただけませんか」

「は、はあ…そのくらいでしたら問題なく。生きてさえいれば何とかなると思っています」

「——っ！」

未曾有のチャンスだと、そう思って即座に願いを言ったジエツト。果たしてそれは、あっさりとは肯定された。言質を取っただのと喚いても結局は相手次第なのだ。ましてや貴族と平民、それも本来ならば学院という接点があれば出会うはずのないほど断絶された差のある関係。だが目の前の男は間違いなく約束した、母を治すと。

気負いもなく、大したことでもないように。外連味もなく、何でもないように。

治すと約束した。

「ありがとうございますっ！」

「あっはい…」

だいぶ温度差がある二人だがジエツトは肩の荷がおりたような気分には晴れやかな笑顔を、オデンキングは誤魔化した事に安堵の笑顔を浮かべていたのであった。

「てな感じでルプーに《ヒール／大治癒》で治してもらってきたんですよ。まさかあんなタレントがあるとは」

「ですねー…完全にアウトだと思いました」

「まあよく考えれば知られても記憶を弄れば済む話でしたけど」

「仮にも皇帝の前で国民の洗脳の話とかやめてくれないか？ あ、その一萬ロン」

「また!? 山越とかやめてくれない!？」

「はは、中々に面白いなこの麻雀とやらは。貴族に広めれば儲かりそうだな、それはそうと飛びだぞオーデイン」

「…なら今度はこの魔法のベルトを」

「余は本当に身ぐるみ剥がされる人間をみたのは初めてだ」

「もうやめておきませんか？ オーデインさん」

次は運が向いてくるからと謎のポジティブさで続行を叫ぶオデンキング。彼ら——オデンキングとアインズ、それにジルクニフとランポツサ三世が何をしているかというと22世紀でも廃れることなく続くギャンブルの代名詞、麻雀である。

偶に組織のトップ同士で集まり歓談しているのだが、今日は異世界の遊びに興味を示したジルクニフとランポツサに麻雀を教えることとなったのだ。ルールを説明した後に賭けをしようと提案したオデンキング、初心者から筆る気満々であったがそこは天才の皇帝ジルクニフ。瞬く間にルールを把握して逆にオデンキングから魔法のアイテムなどを筆りとっている。

「む、和了っておるな…天和だったか？ ざんにオール」

「ば、馬鹿な…これが王の天運か…っ!？」

「だからやめようって言ったのに…」

「くっ、領地が削られた…」

王と皇帝は麻雀で領地を取り合っているようだ。最悪である。

「領地と言っても人類未踏の森ではな…余が生きている間に開拓出来るとも思えん」

「だが放っておけば同じ轍を踏むことになるだろう？ 蜥蜴人と友好を結ぶのも急務とは言わんが進めなければならんしな。まったく、お互い頭の痛いことだ」

「然り」

とはいえ語り合っている通り、削りあっているのはトブの大森林の一部のみ。放置すればまたぞろゴブリンの脅威が発生するかもしれないのだから、これは領地というよりも監視しなければならぬ領域というべきか。下手をすれば割合が増えるのは負担でしかない。もちろん開拓が進めば潤沢な資源が出てくる可能性が大きいのだが、損というわけではないが、やはり最初の持ち出しが大きいというのは王国からすると厳しいものである。

「いつそのことナザリックを国家にしてしまえばいいんじゃないか？ 迫害を受ける者たちの拠り所にもなるだろうし」

「いやいや勘弁してほしいですね。支配者というだけでもきついのに王様とか…ねえオーデインさん」

「魔導王アインズ・ウール・ゴウン…意外といいんじゃないですか？」「実行するならば余も労力は惜しまんな」

「3対1か…くく、これはどうしたものだろうなアインズ殿？」

すわ裏切りかとオデンキングに視線をやるアインズだが、そんなものはどこ吹く風とばかりに理牌しているのは昼間のパーフェクト・ウォリアー事変のことを地味に根に持っているからだったりする。

器の小さい男、オデンキングである。

「いや待ってください…ナザリックが国になれば王になるのはオーデインさんじゃないですか？」

「はい!? いやいやあり得ないでしょう。俺のどこに王要素があるんですか」

というかナザリックに所属する全員が認めないですよとアインズの悪足掻きを跳ね返すオデンキング。しかし彼は気付いていない、あの意味この場で最も自分が王であることに。

「要素も何も…あなたの本当の名前はオデンの王様じゃないですか」

「あ…」

「ロン、インパチ」

「ああ…」

「あ、余もそれロン。満貫」

「だあああ——！」

単なる冗談ではあるが、ナザリツクは今日も平和である。

学院編 3

帝国の魔法学院の昇級試験。これは帝国が誇る騎士達が学生につき、街の外に出て魔物の恐ろしさや現実の厳しさを感じてもらおうことを兼ねた訓練のようなものでもある。

実のところこの方法はごく最近始められたものであり、今年から昇級試験を体験するものは少々不幸というものだろう。なにせ騎士がつくといえども街の外は魔物が跋扈する人類の生存圏外。生徒の母数が多ければそれだけ不測の事態に遭う者が出る可能性が高くなり、最悪の場合は命を落とすこともあるのだ。

それは貴族も平民も変わりなく、みな平等に危険を体感することになるということだ。皇帝の強権なくば間違いなく許されないこの試験は、一つの意味がある。それは過酷な旅の中で騎士に護られることを実体験として味わうことで彼らへの憧憬や、ひいては帝国への信頼に繋がるという意味だ。もちろん騎士達もそれをある程度は知っているためになるべく格好をつけた言動で良い印象を持たれようと頑張っているのだ。洗脳のようにだということ聞こえは悪いが、これも帝国が強国であり続けるために必要なことである。

———そう、必要なことだった。———

今もって人類は魔物や亜人種、異形種の驚異に晒され続けているのだからそれは間違っていない。しかしここ最近の各国情勢の変化はその認識と風向きを変えざるを得ないほどの変革が起きていることも確かなのだ。つまり皇帝の意向が存分に反映されるこの学院において、皇帝の認識が変われば気風も変わる。何をか言わんや、昇級試験の内容が変わるのもまた必然ということだ。

権力の強い皇帝、その鶴の一声のもと昇級試験の内容はカツツエ平野に蔓延するアンデッド駆除と相成ったのだ。当然学生主体でそんな危険な事をする筈もなく、帝国と王国の共同作戦に同行する形である。未来の帝国を担う若き学生達をそこまで危険には晒せないとい

うことで、短時間、大人数、そして護衛の質の良さは非常に高いものとなっている。たかが学生の試験にそこまで大規模に金を掛ける価値があるのか、ましてや王国に学院など無い以上友好政策以外のメリットはないだろうという疑問はもつともだ。しかし発端をいうと実は逆である。

まず最初は仕事の少なくなっている冒険者達への対策、その話し合いが王と皇帝の間で交わされていた。それは両国とも頭を痛めていることであり、元々が犯罪者予備軍と言えなくもない彼等は困窮すれば当然野盗に成り下がるような者も出てくる。なにより生活が立ち行かなくなつて冒険者を辞めるものが続出すれば、いざ有事の際に収集できなくなることもあるだろう。母数が少なくなれば競争して研磨されることもなくなり、質の低下にも繋がる。それは人類の戦力低下にも繋がり、ただでさえ拮抗しているとすら言えない状況に拍車がかかってしまう。そんな状況を解決するために王と皇帝が考案したのが帝国騎士、王国兵、王国冒険者、帝国冒険者の合同でのカツツエ平野駆除作業だ。

これには大きく分けて四つの意味がある。一つ目は王国と帝国の貴族や民に対する周知。もはや両国は争う意思がないと知らしめるための意味合いだ。二つ目は前述した通り冒険者達への依頼の斡旋、及びそれに付随して効果があるであろう経済の活性化。三つ目は人の住めない領域を浄化し、曖昧な領土の線引きを穏便かつ明確に決定すること。

そして四つ目、むしろこれこそが重要な点なのだが、法国への意思表示である。そもそも法国が暗躍する理由は人類の足並みが揃わないことにあるのだ。それは元漆黒聖典の隊員からの情報もあり、かなり信憑性の高い事実である。

協力が出来ないなら支配してしまえばいい。極論で暴論だが、それは無駄な争いをしていた王国と帝国が指摘出来るものではない、もし出来たなら厚顔無恥も甚だしいだろう。そんな訳で彼等は、この協力をしたという事実をもって法国への表明とする予定なのだ。何を好き好んで法国を敵と見なす愚を犯そうか。手を取り合うことが出来

るならば間違はなくその方が良い。

まだ足りないから、もつと欲しいから、隣の芝生が青いから。戦争の発端はそんなものだ。しかしその結果はどうだろう。

王国は領土を増やすために既存の領地を、田畑を相当数荒地地に変えた。兵士が必要だからといって徴兵ばかりしていれば、それは当然の結果だろう。それが無かっただけでもどれほどの食料が生産されただろうか。どれほど飢えて死ぬ者が減っただろうか。

帝国はそれを承知で収穫の時期に戦争を幾度も仕掛けた。どれだけ無駄な命が消えたであろうか。その費用を民のために使えばどれほど潤っただろうか。

無論全ては空論で、そもそも政治はそこまで単純でもない。あらゆる思惑が絡み合い、今があるからこそこのたればだ。後からこうすれば良かったのだと吠えることほど空しいこともない。それでも彼等は今を見つめて最善を尽くす。過去が愚かだといって未来まで続かせる必要もない。後に自分達が愚王と愚帝と蔑まれる世の中になつたならば、それは彼等にとって本望だろう。自らの行いはまさしく正しく無知蒙昧、それが「そう」だと子孫が言うならば、その世はまさしく正常だ。

とはいえ課題は膨大で、なにより足並みを揃えるのに一番の問題は法国の人類至上主義にあるのだから中々難しいだろう。なにしろ法国は末端の一般人にいたるまで亜人蔑視が浸透している。国民性まで変化させるとなると数世紀以上掛かっても不思議ではない。それでも一步を踏み出さねばと、王と皇帝は手を取り合ったのだ。融和政策、経済政策、犯罪抑制、領土拡大、意思表示。一石五鳥のこの作戦を始まりとして。

そして皇帝はついでにそれを試験に利用しようと思いついた訳だ。それは学生達のためを思つてこそその提案であり、決して麻雀で負けて王国の冒険者の依頼費用まで出さなければならなくなったからではない。騎士達の動員費用を節約しなければならなかったからではない。

——ない。

「到着し、いやー壮観ですな。アインズさん。これだけのまぜこぜな編成軍っぷりは中々ないんじゃないですか？」

「ええ。急な編成だというのがよく解りますね。オーデインさんがやめ時を誤るから……」

「だってあんなに役満が飛び交うとか思わないですよ。飛び交うってうか一方向から役満ビームが拡散されてただけですが」

「やはり王とは豪運の塊ですね」

オデンキングも運は良い方だが、ランポッサのそれは格が違った。

王——そう、『王』だ。

日本語で『王』英語なら『キング』ドイツ語なら『ケーニツヒ』イタリア語なら『レッ』言い方は数あれど、唯一にして絶対の『王』とはかくも侵せぬ神聖なるものであるようだ。

「ジルも最後は汗だらだらでしたね。気持ちちは解りますが」

「私はランポッサさんの笑顔が目には焼き付いて離れませんよ。どれだけ費用が浮いたことが嬉しかったのやら……。やはり王様なんてなりたいものではありませんね」

益体もないことを話しながら馬車の外を覗いて感嘆の息を吐く二人。金以下の冒険者はまばらに散って遊撃部隊。騎士、兵士、それに信頼と実績のある高位冒険者は色々と振り分けられているが、特に優秀な者は生徒に付いている。それぞれ均等に配置されているのはやはり両国の関係への配慮が見えるようだ。

ジルクニフが滝のような汗を流して白金以上の冒険者は仕事もあるから雇う必要はないと熱弁をふるっていたのだが、それに対するラ

ンポツサの答えは大明槓からの嶺上開花で字一色、大四喜、四槓子であった。もちろん包はジルクニフである。食らった瞬間の真っ白に燃え尽きるほどの悲壮な顔がアインズとオデンキングの脳裏にこびり付いていた。

数は少ないがミスリル、オリハルコン、果てはアダマンタイトも含まれているとなればジルクニフの狼狽っぷりが理解できるだろうか。ミスリル以上の十にも満たないパーティを雇うだけでそれ未満の大勢の冒険者全員分以上の金が掛かると思えばそれも仕方ないだろう。依頼は強制ではない、というよりよっぽどの強権を発動させなければ原則国の支配下ではない冒険者ギルドを動かすことなど出来はしない。必然、依頼を受ける高位パーティが少ないことを願うジルクニフだが、それは儂い夢と散ったようだ。

人類一金持ちと言っている帝国皇帝だが、ギャンブルに負けて無駄金を使うとなれば冷や汗ものである。これならいっそ話に聞いた、点数を血でやりとりする狂気麻雀の方が良かったと錯乱する程度には焦っている皇帝であった。鮮血帝ならぬ献血帝の誕生は近い。

閑話休題。ともかくとしてそんな裏事情があつてのこの昇級試験であるが、やることはさして変わらない。その辺を彷徨いて、敵が出てくれば実戦の空気を多少なりとも味わい、街の外の危うさを実感する。ただそれだけだ。両国も一回ですべてを終わらそうとしている訳でもなく、戦争の代わりといつてはなんだが毎年の恒例行事にするのもありだろうという程度に考えていた。

「よし、降りましょうか。ここからは徒歩です。ちやちやつと巡回するだけのようなものですし、危険地帯とはいえ元々の対比戦力を比べればさして何も変わっていないでしょう」

「ですね。我々が通るルートはどうなってるんですか？」

「あ、なんか担当の冒険者さんが持つてるそう。というか生徒は浅い部分だけですしその辺に見えるチームの後ろでも追っとけばそれですむような気がしますけどね」

「そんな実も蓋もない……」

道中もほとんどオデンキングとアインズが喋っていただけなのだ

が、それは当然のことでもあった。クレマンティーヌはアインズがいるためおとなしく、ナーベラルは至高の御方の会話を邪魔してはいけないと沈黙し、アルシエは元々が無口である。そして外様とも言えるジエツトとネメル。この兩名はというと、アインズ達の話の内容が出るだけ脳内に残らないよう頭の中を神への聖句で埋め尽くしていた。

ちらちらと聞こえる皇帝の名前と王の名前。どう考えてもそれらと対等のような関係で喋っている彼らに二人はもはや震える羊状態である。何か機密事項を聞いてしまった暁には処刑されるのかもしれないとネメルは怯えていた。ジエツトの方は母親の治療のこともありそこまではしないだろうと考えていたが、とにかく二人の正体のほうに気がいつてしまう。

考えないようにしなければと思いつつも狭い馬車の中だ。嫌でも耳が勝手に聞き取ってしまうのも仕方ないといえば仕方ない。街の外に出るだけでも御免被りたいのにカツツエ平野まで足を伸ばさなければならぬと聞いた時は耳を疑ったが、それが皇帝のギャンブル敗北のせいだなどとジエツトは聞きたくはなかった。しかし人間というものはそうしななければと意識するほどそれに集中してしまう。つまり聞きたくないと思う程、逆に内容が記憶に残るのも当然といえば当然なのかもしれない。

「あー疲れた。デインちゃん私帰っていい?」

「まだ来たばかりだけど!」

「馬車がこんなに窮屈とは思ってなかったしー、体が固まっちゃった。皇宮で寝てるから終わったらまた呼んで」

「ええー……」

幼少時は法国から出ることなく過ごし、漆黒聖典に入ってから移動は徒歩が多かったクレマンティーヌ。そもそも漆黒聖典に入れるような輩は馬より速く、牛より持久力がある。貴人の護衛や、間に街が無い未開の地にでも行かない限りは馬車を伴う必要もないのだ。そんな訳でガタガタ揺れて速度も遅い馬車での移動はストレスでしか無かったというわけだ。何気にちよくちよくオデンキングにレベ

リングに付き合ってもらっているため、彼女の強さは漆黒聖典隊長に迫っている。そういつた事情もあってカツツエ平野のアンデッド如きには食指が動かないというのもあるだろう。行く前はピクニツク気分であったが、今は窮屈な馬車を我慢した上に目の前に広がるのは陰鬱なアンデッドの巣窟だ。気分屋の彼女が我儘を言うのは必然であった。

「まあいいけどさ……。《ゲート／転移門》」

「ありがとう。おやすみー」

お疲れーと言いなながら残る者に挨拶をして出ていくクレマンティーン。アインズは、もしかして狂気系の厨二キャラから奔放系のやれやれ厨二キャラへ変わったのかなと推測し、ナーベラルはお二人を差し置いて不敬なと憤慨していた。そしてジエツトとネメルは何位階かすら推測も出来ない高位の転移魔法を気軽に使う様子を見て押し黙った。色々と彼らの正体に想像を巡らしていたが、もしかして何かとんでもない勘違いをしているのかと考える。特にジエツトは果実スプラッシュをくらった時の事を思い出し、その不可解なタイミングと人間に扱えるのかも疑問な魔法の行使を見てもしかして彼らは化物なのかと疑ってつい眼帯をずらしてしまった。

しかし結果は白。左右の目で確認しても全くもって違いがない様子にほっとしつつ、故にさらなる疑問が募る。たんなる訳アリ貴族のお遊びかなにかと推測していたが、今の魔法を見てまだそう思う程ジエツトも馬鹿ではない。そもそも全く貴族らしくない彼らを見てもっと早く気付けという話だろう。

「あ、あの、今のは？」

「ん、ああ今のは《ゲート／転移門》という魔法です。割とどこにでもいけるので重宝しますよ」

「……なるほど」

何かなるほどなんだと首を縦に振る自分へ脳内でドロップキックをかますジエツト。望む答えはそういうものじゃないだろうと自分に活を入れて更に問いかけようとした。したのだが、横から感じる殺気に振り向けば黒髪の美女がなに気安く話しかけてんだコラとガン

をつけているのが目に入り諦めざるを得なかった。

結局アインズとオデンキングの正体は依然謎のままである。そしてそんな喜劇を繰り広げる彼らの前に担当の冒険者が姿を現す。

「お久しぶりですお二人共。後の方は初めまして、アダマンタイトの冒険者『蒼の薔薇』です。今日はこちらの班の護衛をさせていただくわ……必要とは思えないけど」

「おおラキユースさん、お久しぶりです。皆さんが担当とはこれまた偶然……なわけないか。なに考えてんだあのおバカ皇帝」

「おう、久しぶりだな。そりやまあ地図を見りや解るぜ」

「……？ どれどれ……なるほど」

「デ、デミウルゴスは来ていないのか？」

一気に人数が増えて騒がしくなる一団。予定調和の如く『蒼の薔薇』が彼らにつくことになったのは、ガガーランのいう通り地図を見れば一目瞭然である。通常の生徒が通るルートは外周部のほんの少しだけであるのに対して、オデンキング達のルートは中心部一直線。お前恒例の行事にする気ないだろというものであった。完全にカツツエ平野を殺しにいつてます本当にありがとうございます。『蒼の薔薇』はどう考えても必要ないが、普通の学生がいる手前一応外聞を考えてというところだろうか。配慮する部分が間違っているとしか言えないだろう。

「デミウルゴス呼び捨てになってる……もしかして結構進展してるのかな？」

「ななななにがだ!? 私は別にそんな意味で聞いたわけじゃ……」

「いい感じに利用されてる」

「いい感じに搾取されてる」

「なるほど、みなまで言わずとも結構です」

ティアとティナの言葉のナイフは正確過ぎるほどに的を射ているが、恋は盲目故に当人は気付かない。大体を察してオデンキングは言葉を押しとめた。そして知っている者同士だけで盛り上がるのも何なのでジエツトとネメル、そしてアルシェの紹介を始めた。ちなみにアインズの事は当たり前ではあるが全く気が付いていないようなの

でこっそり耳打ちしている。はえーと感心する彼女達を可愛いと
思ってしまったのはオデンキングだけの秘密である。勿論『彼女達』
の中にガガーランは含まれていない。ガガーランはガガーランとい
う一つの生命体なのだ。

「ま、話はこんなところにして行くとしましようか」

「ええ、闇に潜みしアンデッドが巣くうこの地ならば我が剣と魔は最
高の力を発揮します。我らを襲う闇黒は魔剣キリネイラムで斬り祓
い、我らを閉ざす晦冥は浄化の光が照らすでしょう」

ラキユースの言葉にオデンキングは手に持つ杖で頭を叩きはじめ、
アインズは右の拳で自らの頬を殴りはじめた。全ては笑いを耐え、つ
いでに自分の若き日の妄想を振り払うためでもある。ラキユースの
ことは天真爛漫で自由奔放なお嬢様冒険者だと思っていた二人だが、
まさかこのような人物であったとは予想外だったのだろう。おそら
くこの世界にきて一番の笑撃であったのは想像に難くない。

ちなみにジェットとネメルは流石名高い冒険者だと憧れの目でラ
キユースを見ている。アルシエとナーベラルはいったい何事かと、狂
態を見せる二人を心配して傍に寄る。なんらかの精神攻撃を疑い、し
かしこの二人でどうにもならないのならばどうしようもないと焦燥
にかられた。一方は身を挺してでも二人を守ると覚悟を決め、もう一
方は杖を握りしめて身を構えた。まさに見当違いも甚だしいが、これ
は誰のせいでもない。そう、たとえば異世界ですら存在する悲しき病が
悪いのだ。

ずんずんと進むラキユースを先頭に彼らは動き出す。何とか復帰
したアインズとオデンキングはジェットとネメルを守るような布陣
で進み、雑魚を蹴散らしながら奥へ奥へと入っていく。しかし危険と
も言えない状況のために少々緊張が緩んでいた。その点『蒼の薔薇』
は流石である。談笑しながら歩きつつも全く警戒を怠っていない。
この辺りが順当に経験を積んで叩き上げてきた者と手軽に強さを手
に入れてしまった者の違いだろう。

とはいえ彼女達もアインズ達の強さは充分に承知しているのでそ
こまで強く警戒しているわけではない。それはガガーランがジエツ

トに迫ったりしていることから見て取れる。ちなみにティナの方はネメルに迫っており、迷惑を受けている二人からすればアダマンタイト冒険者への憧憬はもはや幻想と成り果てていた。

和気藹々とした会話は続き、会話が一瞬途絶えたタイミングでそういえば、とガガーランが少し気になっっていることをオデンキングにこっそり問いかける。

「……ラキュースの事について少し相談したいんだがいいか？」

「いいけど、仲間にも出来ないなら役に立てるか怪しいもんだ」「いや、なんつーか……あいつは心配かけまいと必死に隠していることだから出来れば秘密裏にな。アインズの旦那もいいか？」

「聞くだけは聞くが、オーディンさんも言っている通り役に立てるかはわからんぞ？」

「ああ、それでいい」

そしてガガーランは語りだす。ラキュースが持っている魔剣キリネイラムは十三英雄が所持していた伝説ともいえる剣であり、しかしその性能の高さ故にある種呪いのような何かをラキュースに齎しているのではないかと。本人は隠しているようだが、偶に内なる闇の人格というものが彼女を蝕んでいるようなのだと。

どれだけ詳細に鑑定してもそんな呪いは存在しない筈なのだが、確かに彼女は何かに対して耐えているのだとガガーランは言い切った。

「……それは、その……本当にそんな機能は無」

「超技！ 暗黒刃超弩級衝撃波！」

「いひんだよなふあつ！ ガガーラン」

「……どうした？」

「なんでもなふいつ」

先頭を歩くラキュースの必殺技の叫び声、そしてどう考えても邪氣眼に侵されている彼女のプライベート情報はオデンキングを自傷させるに至った。無理やり頬の内側を歯で挟んで必死に耐えているのは気遣いか、それともただの衝動か。

「アインズの旦那はどうだ？ なんか心当たり無いか？」

「そうだな……なんとというか、別にそこまで気にしな」

「我願う！　いと尊き水神よ、愛しき兄弟達に祝福を与えたまえ！
そして悲しき亡者に救いの御手を……！」

「ふへいんじやないかはっ!？」

「そ、そうか、悪いな……?？」

もはやアインズとオデンキングは息も絶え絶えである。何が悲しくて異世界にきてまでこんな抱腹絶倒と過去の黒歴史の掘削を体験せねばならないのかと、体をピクピクと震わせながら脇腹を抉るようにセルフボデイブローを繰り返す。少し前に出すぎているラキユース達に更に遅れて歩みを進めた。

一つ言うならば彼らの腹筋が限界に近いのは——つまりラキユースがいつもの三倍増しで痛々しいのは、ジエツト達がいるからである。彼らに冒険者のカツコいいところを見せるべく彼女は奮闘しているのだ。それにいつぞやの対シャルティア戦で実力のじの字も見せられなかったせいでもある。貴方達には敵わないけどこれでも最高の冒険者なのよ、という可愛い自己アピールとも言えるかもしれない。実際は自己アピールではなく事故アピールになっているのが悲しいところだ。確かに二人の感情をここまで乱したという点ではこの世界一かもしれないが。

「闇の炎に抱かれて消えなさい……！」

そしてこの最後の一言で二人は撃沈した。四肢を地面につかせながら、あとからすぐ追いつきますと彼女達に告げてパーティだけを先に進ませた。当然ナーベラルは二人を残して進むなど承服出来るわけもなく、三人がその場に残された。暫し沈黙が流れ、そのあとアインズとオデンキングが目を合わせて頷きあう。そしてその数秒後に二人そろって吹き出した。

「あれはない……あれはないでござる……ごぶつごほっ!？」

「それがし、もう限界でござる、ごござつごほっ!？」

何故ハムスケと同じ口調になっているのかは永遠の謎である。バンバンと肩を叩きあい、共に腹を抱えて仲良く笑う。流星にあれば反則過ぎるだろうとラキユースの決め台詞を思い出し、更に笑いが止まらなくなる。そしてひとしきり笑い終えたあとようやく二人は落ち

着いた。ナーベラルは訳が解らずおろおろとするばかりであったが、とりあえず大事はないと認識しておずおずと問いかけた。

「その、アインズ様、オーデイン様。いったいどうされたのですか……で、ご、ござる？」

謎の侍口調に合わせるあたりがメイドとしての優秀さを窺わせる。小首を傾げながら問う様は落ち着きかけていた二人を更に沈静化させた。というよりほっこりさせた。

「ごめんごめん、もう大丈夫だから」

「うむ、心配を掛けたなナーベラルよ」

「い、いえ！ 至高の御身がご無事ならば何も問題ございません。謝罪など私には過ぎた——」

ナーベラルが言葉を言い切る前に前方から戦闘音が轟く。音量からしてかなり強力な魔法と推測でき、二人はまたもやラキュースが新たな必殺技を繰り出したのかと想像し、やはり着いていかなくて正解だったと安堵した。こんな状態で新たな技など見せられたらどうなるかは解りきついているというものだ。取りあえずは早く合流するかと立ち上がり、そして追いつこうと足を動かした瞬間さらなる戦闘音が響き渡る。継続して続くその音の意味は、つまり『蒼の薔薇』ですら簡単に勝負を決することが出来ない存在の証明だ。

「はて、もしかして伝説(笑)のデス・ナイトでも出ましたかね？ よつぽど運が悪くないと遭遇しないと聞きましたが」

「ふむ……なんにしても急ぎましょう、オーデインさん。このカッツェ平野で『蒼の薔薇』が倒せない敵は居ないとは言っていました、ジエットさん達三人に関してはそうでもないでしょう。流石に死んだりされると寝覚めが悪い」

「了解です」

三人は薄い霧の中を足早に駆けていき、さして離れていたわけでもない彼女達に十数秒程度で追いついた。そしてそこには彼らをして予想外と言わざるを得ない光景が広がっていた。

後ろ寄りに戦闘を見守っているジエットとネメル。その二人の近くに位置取りながらも隙あらば魔法を放てるよう構えているアル

シエ。そしてその前で彼らを守るような布陣で戦っているのが『蒼の薔薇』である。

彼女達を警戒させ、それどころか圧倒するような雰囲気を見せる謎の高位アンデッド。イビルアイの魔法をいなし、ガガーランの刺突戦鎚を真つ向から受け止め、ラキュースの支援魔法すら阻害する手段の多さ。骨の体に似合わぬ業物の剣を携え、しかし見た目通りに高位の魔法も使いこなす。時には不思議な動きで翻弄し、ティナとティアの変幻自在の攻勢すら防ぎきってみせた。

まさに強敵というのに相応しい、圧倒的強者。『蒼の薔薇』の方が挑むような形であるというのがその存在の特殊さを際立たせている。正に死の具現、死の象徴、死の恐怖そのもの。人を超えた異形の化物がそこにいた。

その魔物の名は――

「フフフ……この程度が王国最高の冒険者とはな。何やら随分と周りが騒がしいようだが、まさかこの儂を討伐でもし」

「あ、カジットさんだ」

「ほんとですね、なんでこんなところに」

「ししししにきたのですか？」

――カジット・デイル・バダンテール。世界で一番器用貧乏な男であり、マザーコンプレックスエルダーリッチとして一部では有名な人物であった。

「ほ、本日は御日柄もよく」

「いや、めちやめちや霧が深いですけど」

蒼の薔薇と戦っていたカジツトだが、アインズやオデンキングの知り合いだったということまでひとまず戦闘は終了した。そもそもアルベドとアインズの結婚式で顔を合わせていないのかという疑問があつたのだが、まずは動揺するカジツトを宥めるのが先決だと二人は的外れな挨拶をする彼に突っ込みを入れた。

「えー、とにかくですね、彼はそこまで危険な訳ではないので取り敢えず和解してもらっていいですか？」

「ほんとかよ？ 顔を合わせるなり襲い掛かってきたんだが」

「それは……ほら、ね。ガガーランが……な？」

「どういう意味だオイコラ」

「イエ、他意はナイです。ガガーランⅡサン」

「他意しかねえだろうが！」

暗にお前の顔が怖いからだよと、含む言葉ありありでオデンキングがカジツトを庇う。やはり本人が望んだこととはいえ人体実験にまで付き合わせた以上、多少の罪悪感が残っているらしい。

「というか披露宴で会ってないの？ 大した人数でも無かったし顔合わせくらいはしてるもんだと思ってたけど」

「いやあ、知らねえな。ほんとに居たのか？」

「居ましたよね？ カジツトさん」

「えー、そうです、スライムに溶かされかかって居ました」

「それ居るって言わねえよ」

「そういえばソリュシヤンちゃんの体から出てきてましたね……」

そもそもあれだけしつちやかめつちやかになつた披露宴なのだから、異形種だらけのナザリックにおいてエルダーリッチを見た程度で印象に残るわけもないのだ。というより普通の人間は骨の違いなど解らない。そして見るからにアンデッドと仲が良さそうな彼等を見てついにジエツトから疑問の声が飛んだ。

「あのー……そろそろ説明していただいけませんか？」

「え？ あ、ああ……えー、ううん……」

どうしましうかとアインズに小声で相談するオデンキング。ここまできては誤魔化しようもないし、何より記憶の改竄は非常にMP消費が激しいため気軽に使用は出来ないのだ。こそこそと二人で相談しながら、どう説明したものかと二人で頭を悩ます。とはいえ既に時遅し、そう判断した二人は結局はそのまま全てを話すことを選択した。

「ジエツトさん……実は俺達、普通の人間じゃないんです」

「知ってます」

「え？」

「え？」

どう考えれば普通に見えていたと思うのだろうか、ジエツトは非常に突っ込みたい衝動に駆られたが何とか我慢した。何せ王国でも名高い冒険者チームを個で圧倒する存在が、更に怯えるような存在なのだ。とぼけた様子は演技とは思えないが、だからと言ってむやみに逆鱗に触れるかもしれない行動をおこすのは愚かだろう。

「なんだ、やっぱりあの時見られていたみたいですよアインズさん」

「まあタイミング的には微妙でしたからね。ジエツトさん……黙っていてくれたこと感謝しますよ」

そう言って人化を解くアインズ。人になるのは面倒な手順が必要な魔法なのだが、戻る時は一瞬だ。ついでとばかりに装備も普段のものに戻したその恰好は、まさに魔王もかくやと言わんばかりの威圧感を放っている。

更についでと言わんばかりにオデンキングも装備を普段のものに戻したのは、単なるカッコつけである。更に更についでにナーベラルがメイド姿に戻ったのは空気を読んだ結果で、出来るメイドであることを主張するためだ。頭に輝く白いホワイトブリムはその美しさをさらに引き上げており、ティアに涎を垂れさせるほどだ。

最後にアルシェだが、吐いた。

「ちよ、アインズさん、装備装備！」

「あ、すいません」

アイنزは装備を変えた際、魔力を隠蔽する装備をつけ忘れていた。つまり、アルシエちゃんごめんちゃいということである。ちなみに間違っただけとはいけないところだが、別にアルシエは強大な魔力に敏感だとかアイنزを極端に恐れているという訳ではない。

アイنزが近くに寄るとその魔力の凄まじさに気付くのはある程度のマジックキャスターならば当然であるし、魔力を可視化できるといふ技能は元からアイنزの事を知っているのならば吐く要素は無い。

ならば何故吐いたのかというと、これは単なる条件反射である。車酔いを起こしやすい子供が車の匂いを嗅いだだけで気分が悪くなるのと同様に、アイنزと初めて会った際にシヨックを受けたアルシエは嘔吐が癖づいてしまったのだ。俗に言うパブプロフの犬状態というやつである。

「う、うむ……すまんアルシエ。大丈夫か？」

コクリと頷くアルシエに水差しを用意しながら背中をさするアイنز。ナーベラルが嫉妬したのは言うまでもない。そして何も反応を見せないジエツトとネメルだが、なんと気絶していた。

「あれ……何故に。アイنزさん間違えて絶望のオーラ出してませんか？」

「いやいや流石にそれはないですよ」

どうしたんだろうと首を捻りつつ、まあそのうち起きるだろうと休憩の準備を始める二人。クリエイト系の魔法で椅子や机を創り出し、帝都で評判のお菓子と紅茶を並べていく様子を見てナーベラルが慌てておしとどめるのはここ最近のお約束でもある。

そして少し落ち着いたところでカジツトに何故こんなところに居たのか問いかける。確かにアンデッドにとって住みやすい場所ではあるが、だからといって元人間の感性で此処に住もうというのは普通躊躇するだろうと。

「ああ、いえいえ。儂も儂で高みを目指す研究をしております。なにせお二方でも母の完全な復活は難しいとのこと。まずは自分を

高めようという結論に至りまして。この場所でも自然に死の螺旋のような状況を作り出せるのではないかと推察しておるのですよ。事実ここ最近ではデス・ナイトやエルダーリッチ等の高位アンデッドの自然発生率が上がっております。お二方が言う『れべる限界』でしたか？ あれを前の実験とは別方向にアプローチしておりまして、上手くいけば死の螺旋で発生したエネルギー全てを取り込んで限界を突破出来るのではないかと」

「へえー！ そりゃ凄い……けど、出来てもアンデッド限定、かな。アインズさんならいけたりするんじゃないですか？」

「ええ、気になりますね。ただどういう理論に基づいて検証しているのか……カジットさん、今レベルどのくらいでしたっけ」

「おおよそ50強といったところですね。その辺りで成長が止まったと前回の実験で仰っていたでしょう？」

「ああ、そうでしたね……ふむ。限界というのはそれ以上が無いからこそ限界足り得ると、そう結論が出ていたんですがね。だからこそ私達は人化という、存在そのものの変質に可能性を見出してその方面から——」

喧々諤々と議論を交わす三人。最近とみに進みだした、レベルの研究に力をいれているだけはあって議論に熱が入るのも仕方のないことだろう。カジットが成長して自分達に危害を及ぼさないかという危険性は考慮しない。何故なら実験前に契約を交わしてその可能性を潰しているからだ。

「おいおいおい、ちよつと待ってくれや。聞いてると随分物騒な話じゃねえか？ 色々言いたいことはあるんだが、取り敢えずこれだけは確認させてくれ。今ここに來てるやつらは大丈夫なのか？」

「え？ あ……そういえば。カジットさんどうなんですかそのところ。流石に実験よりは人命を優先したいんですが」

「む……？ ここに來ている、というのは……」

オデンキングは今のカツエ平野の現状をカジットに説明し、生徒や騎士の安全は大丈夫かと問いかけた。高位のアンデッドが出現す

れば生徒達や並みの騎士では対抗しきれないのは明白であるし、デス・ナイトクラスになると高位冒険者でも厳しいだろう。死の螺旋とやらの興味は尽きないが、流石に人の命には代えられないのだ。

「ふうむ、そういう訳でしたか。まあ深くへ入ろうとしなければ大丈夫でしょう。基本的には高位のアンデッドが出現すればそれに引きずられるようにして出現率とアンデッドの質が上がるようですが、儂がそこそこの期間滞在してこの程度ですから直ちにどうこうなるということはない筈です」

「ああそれなら良かった。でも中止にはした方がよさそうですね。えーと緊急時の連絡網、と」

当然、生徒の安全のためにパーティごとに《メッセージ／伝言》を使用出来る者が随伴している。不測の事態があれば救援を求めることも出来るし、全体に撤退を促す際の手順も決められている。

「えーこちら2―B班。全パーティ撤退を伝えるようお願い致し……え？ マジですか？ はい、はい……」

「どうしたんですか？ オーデインさん。何やら慌てているような雰囲気でしたが」

「出たみたいですが、エルダーリッチ。幸い高位冒険者のチームだったみたいなので撃退したら幸いですけど」

「運が悪かったんですかね……？ とりあえず撤退を始めてるなら問題ないでしょう」

「ええ。あ《メッセージ／伝言》がきました。はいはいこちら――ええ!？」

明らかになにかあったようなオデンキングの驚きかたに全員の注目が集まる。《メッセージ／伝言》での通信を終えた彼に視線が集まり、それに対して心得たと頷き先ほどの通信の内容を話し始めるオデンキング。

「なんとデス・ナイトまで出てきたそうですよ。今は持ちこたえているようですが不味い事態です。救援に向かいましょう」

蒼の薔薇の面子にナザリック組、そしてカジットは予想外の事態に面くらいなながらも立ち上がって戦いの準備を始める。カジットはど

う考えても行かない方がいいが、雰囲気的にやられたらしい。

「カジットと言ったか？ 先ほどの言葉に嘘は無いらろうな。流石にタイミングが良すぎて疑念を持つぞ」

「む……まあ確かに状況的には疑われても仕方がないがな。儂がこの二人相手に嘘をつくと思うか？」

「まあ、あまり気にしなくてもいいだろう？ イビルアイ。所詮はデス・ナイト程度のものだ。私やオーディンさんにかかれらどうということもない」

イビルアイがカジットに不信の目を向け、アインズがそれを宥める。中々に珍しい役回りを取り合わせだが、三人共がアンデッドということを考えれば意外と自然なのかもしれないとオデンキングは面白そうに眺めていた。そして彼らを見つめて、やっと思い至った。カツツエ平野に限らず、アンデッドはアンデッドを呼び水として湧き出るものだ。つまりそれが極まったものが『死の螺旋』であり、そしてカジットの言が真実ならこのカツツエ平野において高位のアンデッドが集中すると強いアンデッドのポップ率が跳ね上がる。

ということとは——

「ふうむ……しかし何故こんなことに。儂の検証結果からすればこんなことは——」

「まったく、この面子で普通に終わると思っていなかったがいったい誰のせいだ誰の——」

「学園生活を楽しむ筈だったのにな……なんなんだこの状況は、まったく——」

ぶつぶつ文句を言っている三人を見て、オデンキングは限界まで息を吸い込んで叫んだ。

「お前らのせいだよ!!」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

「せいだよ、せいだよ、せいだよ……と木霊した声は、空しく霧の中に吸い込まれていったのだった。

クレマンティーヌのナザリック事情 1

《ゲート／転移門》により帝都に転移させてもらう筈だったクレマンティーヌ。しかし彼女は今途方に暮れていた。《ゲート／転移門》の先は柔らかいベッドかそれとも皇宮の前か、どちらにせよ凝り固まった体を休めようと靄をくぐった彼女だが、その先はなんとナザリック地下大墳墓の真ん前だったのだ。

「あのばかちんめー……どうやったたらそんな間違いするのよ」

そんな間違いをするからオデンキングなのである。本人に詰問すれば、めんごめんごと軽く返されること請け合いだろう。マーカーを付け間違えたバーカーを相方にしたクレマンティーヌが悪いのだが、だがバーサーカーな彼女にはお似合いである。

「入るべき……？ いや、でも、ぐぬぬ」

オデンキングがギルドメンバーになった時点でクレマンティーヌの扱いも結構なものにはなっているのだが、当然そこには至高の御方に近い人ということということで嫉妬の感情も含まれる。調教された猛獣とはいえ、近くにいれば緊張するのは人として当然だろう。

「まあいいか。お邪魔しまーす」

どのみち旅装も何も持っていないのだから選択肢はあつてないよ
うなものだ。徒歩でここまで来たことのないクレマンティーンには
街の場所などおおよその方向ぐらいしか解らない。腹を括って魔窟
へと侵入するのであった。

「おや……クレマンティーン、何故ここに？ 至高の御方らと出かけ
たと聞いたでありんですが」

「ちわー、ちよつとね。ナーベラルが独り占めしたいって言うから」

「な、なんですつてえ……あの小娘……グギギ」

ナチュラルにナーベラルを売り渡すクレマンティーン、これこそ外
道というやつだろう。歯ぎしりをして悔しがるシャルティアを見な
がら両手を合わせて合掌しているが、後悔の念は欠片も持ち合わせて
いないあたりが彼女らしいとも言える。自分の安全のためならば人
身御供ならぬドツペル御供も躊躇しない決断力が彼女にはあるのだ。

「おおこわ。私は客室まで行くからまたねー」

「ちよいと待ちなんし、せつかくだからわらわもついていくでありん
す。たまには腹を割った『じよし会』とやらも悪くないでありんしよ
う?」

「…物理的に腹を割ったりしない?」

「せんでありんすよ」

気の進まないクレマンティーンをよそにシャルティアの中ではも
う決定事項となっているようだ。のろのろと進むクレマンティーン
の横を優雅に、そしてパッドがずれ落ちぬよう細心の注意を払って横
並びで歩く。

「ところでクレマンティーン、知っているでありますか？」

「…何を？」

「くふ、アウラが……あのおチビがオーディン様を狙っているという話でありますよ。至高の御方になられたら心変わりなんて意外と現金でありますの」

「は？ ええ……マジで？」

「マジもマジ、大マジであります。うかうかしていると横から搔っ攫われるでありますよ。今日はそのへんも話合いますよ？ 具体的に言えば私とアインズ様が結ばれる方法とか」

「え、いや、ええ？ ディンちゃんってそんな趣味あんの？」

「それはもう、我が創造主ペロロンチーノ様と趣味を同じくされておられるのよ？ 間違いなくバツチこいであります」

彼女達の間には一つ重大な齟齬が発生しており、それはアウラが見た目的に男の子であるという事実から発生しているものだ。クレマンティーンはアウラの事を中性的な男性だと認識しているし、シャルティアが同性愛もいける変態だということも知っている。

つまり彼女は今オデンキングの事をシヨタもいける変態だと勘違いし、アウラもシャルティアと同様に同性愛趣味の、ホのつくダークなエルフだと認識してしまったということだ。

「いや、ええ、その、ど、どつちが攻め？」

「何故に返しがそうなるのかまったくもって解りませんが、まあおチビが積極的に行くでありますよ。そうなりたくないのならまず私と作戦会議であります！ 解っていると思いんですが、ギブアンドティクは基本。同時にアインズ様の——」

「……っ！ か、可愛い顔して！ せ、攻めなんだ。意外とあっちの方は、絶倫とか？」

こんな状態のクレマンティーンのことをどう表すか。こことは違う異世界にまだ残る名言でいうなら間違いなくこうだろう。『ホモが嫌いな女子なんかいません!!』と。異世界に新たな性癖の風が吹いた、そんな瞬間であった。

「ぬし、もしや寝取られ趣味が？」

「はあ!? いやいやそれはない……ない、けど。ちよつと見てみたいかも」

「…変態でありんす」

「いや、あんたが言うな」

「そういえばその恰好もよく見ると……! そ、その尻尾はどこへ繋がっているでありんすか!」

「尻を見るな尻を! どう見ても腰に繋がってんだろうが!」

「ど、ど、ど言葉に遠慮がなくなっていく二人。これも仲良くなったといえるのだろうか。クレマンティヌとシャルティアは《ゲート／転移門》を使用するのも忘れて横並びで意見を交わしあっていく。

「ふーん、アインズサマとねえ……じゃあシャルティアもその方面でいけば?」

「ど、どういうことでありんすか?」

「つまり奥さんが邪魔してくるなら奥さんから落とすとか。騎獣乗りを殺すならまず騎獣から殺すじゃない?」

「な、なるほど! それは盲点でありんした!……いえ、よく考えたらダメでありんす」

「なんで?」

「あの大口ゴリラを愛するのは流石のわらわも無理無理無理。わらわも選ぶ権利がありんす」

「ゴリラ……? どこが?」

アルベドに関しては結婚式での素晴らしい美女っぷりしか記憶にないクレマンティヌ。大口ゴリラなんて言葉とはかけ離れていることに首を捻るが、まあこの場所のことだから化物に変身するぐらいのことはやってのけるか、とかなり正確に見抜いていたりする。

「とにかくもつと建設的な意見が欲しいでありんすよ!」

「うーん……まあ男なんて結局単純だからねー。一人の女を愛しきるなんて幻想だって、幻想。奥さんに飽きた頃合い見計らって寝取れば?」

「うむむ……それだといつになるか解つたもんじゃありません。わらわは一刻も早く寵愛をいただきたいのよ」

話している内に階層を通り抜け、客室すら過ぎ、Barに繰り出した二人。恋の話には酒が必要だろうということ得意気投合したようだ。しかし中には先客がおり、少々険悪な雰囲気まで漂っている。

「私がツアレを保護しているのはアインズ様も認めるところ。彼女はまだ情緒不安定なところもありますから、無闇に刺激するのは控えてください」デミウルゴス

「おや、私は単に人の恋愛の機微について質問をしたただだよセバス。なにせオーデイン様からの『勅命』は中々難しいものでね。彼女もナザリックの一員として役立てば認められると思わないかい？ このままでは単なる――」

「彼女は今メイドとして訓練をしています。それ以上はツアレの存在を認めたアインズ様をも貶めることになりませんか？ デミウルゴス」

「これは失敬。しかし恋愛というのは中々に理解し難くてね。どうだろうセバス、この際君にご教授願うというのも選択肢の一つだろうか」

「……私からツアレにそのような感情はありません」

表面上は穏やかな会話だが、その裏には含むところだらけの恐ろしい会話である。どんな勇者もこの会話には首を突っ込めないだろう。出来るとすれば、それは空気の読めないおバカちゃんだけである。

「珍しい組み合わせでありんすな。しかも丁度恋愛話！ わらわ達もまーぜーてー」

「おい、ちよ、おまつ……あ、あははー、こんにちはー。わ、私はこれで失礼しよつかな、なんて」

「これはシャルティア様、クレマンティーヌ様。失礼致しました、こちらへどうぞ」

「おや、そちらも珍しい組み合わせですね。もちろん結構ですよ」

このナザリック地下大墳墓で、異色過ぎる組み合わせの会話が今まさに始まるうとしていた。

「じゃあ後よろしくお願いしますね」

「じゃ、じゃあな。ふふ、ふふふ」

「儂もこれで失礼致そう」

アインズ、イビルアイ、そしてカジット。彼等が居ればどんどん状況は悪くなるだろうと判断したオデンキングによって、三人は《ゲート／異界門》でナザリックに一時撤退することとなった。イビルアイの顔がにやけているのは御察しである。ちなみに気絶したジエツトとネメルもナザリックに運ばれており、気絶から覚めればまた気絶すること請け合いの状況である。

「とりあえずこれで沸きは止まるかな……？ さ、とにかく急ごう」
「はっ！」

救援を求めているであろう場所を地図上で確認し、足早に向かう一行。だがその内の一人、ラキユースからオデンキングへと一つの問いが投げかけられた。

「あの、オーディンさん。デス・ナイトというのはやはり相当の強さなのですか？」

「え？ あー……どうだろ。イビルアイなら勝てると思うけど」

「やはりそのレベル……まずい状況ですね」

「や、その割にはそこまでやばいって感じの雰囲気じゃなかったけどなー」

その言葉にラキユースは首をかしげる。おそらくはアダマンタイトか、もしくはそれより下のクラスが束になり犠牲を大勢出さなければいけないレベル。イビルアイを比較に出すとはそういうことだとラキユースは推測したのだが、被害状況はそこまででもないという。よほど優秀な冒険者か、それとも兵士でもいるのか。そんな強者がいれば自分も知っている筈なのにな、と疑問に感じながらも走り続ける。

「まあデス・ナイトくらいなら何とかできる人は居るって、うん」

「うーん……」

それは強者の理屈だろうと、内心で思いつつも口には出さないラキユース。どちらにせよ現場につけば謎は解けるのだから。

帝国の皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスは有能な人物を身分問わずに重用することで有名な男である。それはたびたび闘技場に足を運び、趣味を兼ねて人材発掘をしていることからも察せることだろう。古く頭の固い貴族たちはそのようなことを認めない者達が多数であったが、そんな輩は既に粛清されて久しい。有能だと思えば例え犯罪者、それどころか敵国の戦士を戦場で誘うほどにジルクニフは才ある者を認めているのだ。

そしてそんな皇帝だからこそ、今カツツエ平野に存在を許されている二人の人物がいた。罪人ではあるがその実力は確かであり、ともすればかの王国戦士長にも匹敵し、凌駕しかねないほどの人物と言えはその凄さが解るだろうか。闘技場で名を馳せた――そして冒険者やワーカーの中にまで名が通っている二人。一人は記憶をなくしたまま訳も解らず処刑されるところを皇帝に救われ、一人は失意のどん底

で処刑を待つ身から浮かびあげられた。

その過程は割愛するが、とにかく彼らは今帝国所属の騎士であり、そしてこの作戦に参加する戦士なのだ。

「よおエルヤー、なんだかきな臭い匂いが漂ってきてねえか？ いや、貴族の坊っちゃん共の青臭い匂いってわけじゃねえが」

「知らぬ。我はただ皇帝に恩を返すため働くのみよ、ブレイン」

「……」

「なんだ？」

「いや、なんか唐突に『誰だお前』って言いたくなってるな」

「……？ 我はエルヤー。皇帝の剣にして盾なり」

「……そうか」

なんだか釈然としないものを感じながら、それでも周囲を確認して注意を払うブレイン。何かが起こっているという訳ではないが、戦士の直感故か不穏な空気を感じているようだ。

「おい、坊主共！ 離れすぎだー！」

「なに……おい貴様、今誰に向かつて——」

鼻持ちならない貴族の子弟達、その護衛。ブレインとエルヤーが割り振られたのはそんな仕事であった。そもそも彼らは皇帝に見初められた特別枠として、このような場所に来る立場ではない。それでも今ここに居るのは偏に皇帝の幾度にわたる箱割れのせいである。周囲が止めなければ四騎士すら投入しかねなかった程に、徹マン明けの皇帝は憔悴しきっていたのだ。

なんにしても振られた仕事はきっちりしなければと離れすぎている護衛対象達に声を掛けるブレインだが、その言葉に敬意など欠片も含まないのは彼らしいとも言えるだろう。

当然ながら、たかが騎士如きが気安い態度で接してくることを我慢できるほど器の大きくない子弟達は、暴言で返そうとした。むしろここまで我慢してきたことこそが帝国の騎士に多少なりとも敬意があることの証明かもしれない。だがこれで何度目の不敬かと苛立ちがピークに達したところで、遂に叱責を与えようとしたその刹那——

「——離れすぎだ、って言ったよな」

「…っい!? は、はい…」

深い霧の中から現れたスケルトン。まさにそれが生徒達を襲わんとしたところで、一瞬で距離を詰めたブレインが一刀のもとに切り伏せる。視認すら出来ぬ一閃が自分の傍を通り抜け、背後に迫っていた敵を屠る。子弟達にしてみれば確かに今、命の危機であったと再認識させられた出来事であった。

「おいエルヤー」

「言われずとも」

しかし雑魚を易々と蹴散らしたブレインも、そして後方にいたエルヤーも今まで以上に精神を集中し、気を尖らせていた。その訳は、数瞬後に現れた魔物が答えそのものである。

「坊ちゃん共よ、下がってな。魔法の援護なんざあいらねえ——お?」

エルダーリッチといえは高位のアンデッドで有名な魔物である。当然ながら学生如きにどうこうできる存在ではないためにブレインはすぐに生徒を下がらせた。そして下手に魔法で邪魔をされると逆に危険なため何もするなと指示をだそうとする。

しかし生徒達も己がエリートだという自負がある。流石に戦闘に横入りするほど愚かな者こそいないが、それでも《アンチイービル・プロテクション／対悪防御》を始めとする補助魔法を二人の護衛に掛けることぐらいはしてみせた——怯えていても、そのくらいの気概は見せたのだ。

「上出来だ」

「うむ……切り捨て御免」

戦士と魔法詠唱者の戦いは、如何にして距離を詰めるかということと同義である。よほどの実力差がない限り、接近戦において戦士がマジックキヤスターに後れをとることはないだろう。逆もまた然り、ある程度の距離が存在する場合マジックキヤスターが戦士に完封することもよくあることだ。つまり今この場において、エルヤーとブレインは圧倒的に有利であり、そして素の実力でも勝っている。

「あらよっ……と」

「……はあっー」

あまり使い手のいない刀という武器。その使い手であり、そして強さをも兼ね備えた二人の剣閃はまさに舞のような美しさでエルダーリッチを圧倒する。さして時間もかからずに高位のアンデッドを倒したところだが、彼らの実力を如実に示しているだろう。

「やっぱなんかおかしいな……坊主共、念のため他のパーティにも伝達しといてくれや」

「は、はいっ！」

エルダーリッチを倒したにも関わらず、ブレインの直感はいまだに警鐘を鳴らしている。そもそもこんなカツツエ平野の端程度で高位のアンデッドに遭遇するほうがおかしいのだ。何かが起きていると推測するのも当然だろう。ブレイン達は撤退も視野にいれ、予定のルートを外れて元の集会所へ向かう。

「さて、他にもエルダーリッチが出てるとすれば笑えねえな。難度どんくらいだったよ？ エルヤー」

「オリハルコンクラスならば十分勝機はある、といったところだ。厚い護衛のついた生徒達に関しては問題なからう。むしろそれ以下のクラスの冒険者や兵士が心配だ」

「そうか……っ！ おい！」

「うむ！」

エルダーリッチなど比較にならぬ強者の気配。霧深き道の奥から漏れるその脅威を、二人はしっかりと感じ取った。彼らはそういった技能を持ち合わせているわけではないのだが、周囲の全てを感じ取る特殊な戦闘技能やここ最近の強者との邂逅によりことさら敏感になつていたのである。

「ふむ、ちつときつか……？」

「立ち塞がるなら切るのみよ」

濃厚な闇の気配を漂わせ、その巨体から威容を発しているアンデッド。かつて帝国が多大な犠牲を払って捕獲した、正真正銘の化物だ。二人はそれぞれ能力を上昇させる武技を使用し、更にはマジックアイテムにより補助魔法をかける。掛け値なしの本気モードだ。

「坊主共、近付くな……だが、離れるなよっ！」

既にアンデッドの領域外に近いため、これ以上戦力を増やされまいと撤退戦を敢行する二人。じりじりと追い詰められているように見せかけ、その実味方が集合しつつあるだろう場所へと進んでいるのだ。流石にこのレベルを相手にして生徒に配慮出来るなどは彼らも思えないのだろう。少なくとも生徒の安全を確保できるまでは、ともに戦闘に入りはしないと二人は視線で確認しあった。

「強い……なっ！ おらあっ！」

「嬉しそうだな、ブレインよ」

「まあな、つと！ 強者との戦いつてのはやつぱこうだよな、いや、こうであるべきだ！ 恐ろしい化物つてのも頑張れば打倒できるくらいが普通だよなあ!？」

「何を悲壯感を漂わせておるのだ」

「そうだ、俺は強い、強い、強い。そしてこいつを倒してもつと強くなるんだ……!」

「余所見をするな」

精神病の患者のように譫言を繰り返すブレイン。それでも戦闘はきっちりこなしているのが彼の凄いとこころである。何合もの剣戟が交わされ——そして十数分の後、戦闘は一つの決着を見せた。すなわち冒険者や兵士が集合する手筈の場所、そこへの到着である。

「よし、とりあえずは……っておいおい、マジかよ」

「予想されて然るべきであったな」

そこに居たのは撤退の報を聞いて帰還した生徒、冒険者、兵士。そしてそんな人間の群れに惹かれて集まってきたアンデッドの集団である。なんともアクシデントが続くものだと思えるブレインであったが、救いがあるとすればそれは全く危なげなく戦っている状況そのものだろうか。いまだブレイン達が戦っているような高位のアンデッドは姿を見せていないため、その数に多少の苦戦はしているものの問題なく駆逐していると言える。

「このままあっちへ行くと混乱させるか……おいエルヤー、坊主共をあっちまでやってくれや」

「む……よいのか?」

先か、といった具合だろう。

だがそれは自分一人の場合において、だ。ほどなくしてブレインが戻ってくるであろうことを考えれば限りなく勝算は上がるだろうとエルヤーは考えた。そしてその期待に応えるようにブレインはその場に颯爽と帰還した。

「待たせたなちくしょう!」

「何を興奮して……なっ!? もう一体だと!」

そう、帰還したはいいのだが余計なものを複数引き連れていた。更なるデス・ナイトを後ろに引きずってくるブレインはまさにトレイン野郎である。

「残念、更にもう一体だ」

「なにい!? ええい、こつちへ戻ってくるな! あつち行け!」

「酷いな!」

記憶が無くなってもほんの少しの残照や記憶の欠片が何かを感じさせたり、かつてのその人物の面影が出たりするのがハートフルストーリーの王道であるが、エルヤーに限ってはその残照が腐りきっているのでハートをフルブレイクするストーリーにしかないだろう。

何が言いたいかというと、窮地に陥ったエルヤーからちよつと腐った部分が覗いてしまったということだ。記憶を失おうが人の本性は中々変わらないらしい。

「くっ……まずい、ぐあぁっ!」

「ブレイン……っ!? しまっ」

元々のレベル差がある上に、更には数の上でまで不利になれば勝敗は見えている。むしろ十数秒程度とはいえ食い下がったことが奇跡とも言えるほどだ。

そして彼らに共通して言えることだが、実は悪運が強いのだ。実力と粘り強さ、そしてその悪運が混ざり合って出た結果が今から起こる終劇に間に合った彼等への救いだ。

「くらいなさい……アルベイン流奥義!! 冥空斬翔剣!!」

「ああああ……」

「ど、どうされたのですか!? オーデイン様！」

「な、なんでもないよ、うん」

「ボスの新技が出た」

「まあ確かに剣が飛んでるから斬翔剣なのは解るけどよ……なんで家名のアインドラじゃなくてミドルネームのアルベインなんだろうな」
「きつとノリ」

まるで緊張感のない空気で現れた蒼の薔薇とオデンキング一行。ラキユースが見せる早速の『アレ』にオデンキングは心を抉られるが、同士のアインズが居ないため頑張つて耐えた。とにもかくにも、この集団が来た以上それは戦闘の終了と同じである。

蹂躪が始まる――

「それでー、アインズ様にはやはり側室くらい必要だと思うのよデミウルゴス。私の方は準備万端だからそれとなく囁いてほしいでありんすよ、その重要性を」

「ふむ」

「……」

「……」

ナザリックのBARにて異色の組み合わせで会話が進んでいる。基本はシャルティアが喋っているのみであるが、たまにデミウルゴスから相槌の言葉が返される。セバスとクレマンティーヌは若干蚊帳の外のような雰囲気になってはいるが、そもそも四人だけなのだから蚊帳もなにもないだろう。自然二人は話をする事になった。

「あー……さつき何かあったの？　なんか変な雰囲気だったけど」

「いえ、お話しするほどのことではございません」

「そ、そう？」

何か話の種でもないかと先程の雰囲気について聞いてみたクレマンティーヌだが、セバスにサクツと拒否された。話が続かねーじゃねーかちくしょうと内心で愚痴っているのは内緒である。とはいえ彼女はセバス相手にならそこまで配慮するわけではない。ナザリック最後の良心とまで言われる完璧執事が自分に害を加えることはまづないだろうと確信しているからだ。ちなみに最初の良心はユリ・アルファである。

逆にデミウルゴスの方はというと非常に苦手としており、一見した柔らかい物腰とは裏腹に非常に恐ろしい一面があることを知っているのだ。

それはそうとして、パーフェクトな執事であるセバスが客の持て成しができないなどということがある筈もなく、話題に悩むクレマンティーヌに対して話の種を提供する。

「クレマンティーヌ様は何故こちらへ？　学院の行事へご参加と聞いておりましたが」

「んー……なんか面倒くさくなっちゃって。初めて馬車に乗ったのがここだからさー、あんなに揺れるとは思わなかったっーか」

「なるほど、道理ですな。そもそもナザリツクの馬車はマジックアイテムでございますので」

「へー。そうなんだ」

それぞれ話に花が咲いているようだが、実を言うと今ここに仲間外れが一人居る。それは人間種であるクレマンティーヌ——ではなく、真祖の吸血鬼シャルティア・ブラッドフォールンその人である。何故彼女が仲間はずれなのかというと、それはこれからの会話ですぐに解るだろう。

「そういえばデミウルゴス。あのちんちくりんの吸血鬼とはどうなのよ?」

「イビルアイ嬢のことでしたら、いまいち進展が無いと言わざるを得ませんね。それもあってツアレに助言を頂いていたのですが、セバスがいい顔をしなかったもので」

「おんやあ? セバス、セバス、もしや嫉妬でありんすかえ? メイド達の噂は本当? くふ、くふ」

「御戯れを。彼女とはそういった関係ではありません」

「性格悪うー…」

一瞬だけ交錯した——もとい睨み合ったセバスとデミウルゴスの視線の意味をしっかりと把握したクレマンティーヌ。能気なシャルティアの笑みを見てため息をついた。なんとか話題を逸らそうと悩み、そういえばとシャルティアを意味ありげに見つめて話し出す。

「イビルアイっていうとあのアダマンタイトの奴よね? で、セバスにもお相手が居る、と。ねえシャルティア? もしかしてあんた——」

誰も相手居ないんじゃないの? と真実の刃がシャルティアを抉る。人間関係、もとい異形関係もこなれてきたことでクレマンティーヌのサドっ気もまた復活してきているのだろう。ピシリと固まったシャルティアの笑顔を見てニタリと口を歪める。

「なananなんですってえ!? ならぬしは——」

「デインちゃんが居るし」

「ぐぬぬ……! わらわに相手が居ないなどは片腹痛いでありんす

！それはもう毎夜の如く吸血鬼の花嫁達とぐつちよんぐつちよんの――」

「部下に無理やり、かー。どう思う？ セバス」

「あまり褒められたことではありませんな」

「ううう……！」

普段なら自分に意見できることではないとお茶を濁すセバスも、先ほどのシャルティアの絡みに若干イラついていたのか執事にしては辛辣な返しである。しかしシャルティアは尚も食い下がる。自分が相手が居ないのはただ一人を想っているからこそだと。だがそんな彼女に背後から予想外すぎる声が掛けられた。

「わ、私にはまだアインズ様が」

「私がどうかしたか？ シャルティアよ」

「アインズ様!? な、何故こちらに!?!」

「わ、私も居るぞデミウルゴス」

「これはイビルアイ嬢。ご機嫌麗しいようで何より」

「儂も居るぞ……久しいなクレマンティーヌ」

「誰だよ」

アインズの登場に驚きつつも頭を垂れるデミウルゴス達。その後はそれぞれ挨拶をしているが、元秘密結社仲間の再開は中々に辛辣な言葉で返されたようだ。とはいえ知人ではあるものの、骨になった同僚に気付けというのは無茶な話だろう。この場合憤慨しているカジットと首を傾げているクレマンティーヌのどちらが悪いのかは難しいところである。

「カジットちゃん……? はい? 何がどうしてそうなってるの?」

「うむ。それには並々ならぬ訳があつてな。あれは貴様が姿を消してからのことだ、あの後」

「あ、そういうのいいから」

「何故だ!?!」

「めんどい」

残念ながら同僚と気付いても辛辣さに変わりはないらしい。ぎやあぎやあとなりがたりたてるカジットとうるさそうにしているクレマン

ティーンは、さながら頭の硬い中年オヤジとそれをうざがる女子高生のようである。

アインズとプラス二人を交えて、場は更に混沌としていくのであった。

MOTTAINAI。

勿体ない。勿体ない精神。それは昔から受け継がれてきた日本の善き心。百年前ほどには諸外国でもMOTTAINAIという言葉が少しばかり流行ったこともあるほどだ。少々面倒でもリサイクルの精神でエコを貫き通していたならば、今ほど世界は汚染されていなかっただろう——という、今は名ばかりの自然保護団体の言葉をオデンキングは思い返していた。

「ああ勿体ない。いや、ほんとに勿体ないな……」

何が勿体ないのか。それはオデンキングの眼下に広がる光景、屠殺場と化したカツツエ平野が答えである。超位魔法……まあ魔法とは名ばかりのスキルのようなものではあるが、当然魔法職のカンストプレイヤーであるオデンキングにもいくつかは使用できる。

魔法の数に膨大を誇るユグドラシルの中でもそこまで種類があるわけではないが、意外と似たような効果を持つものも多い。例えば広範囲の破壊を目的とするならば《ソード・オブ・ダモクレス／天上の剣》や《フォールンダウン／失墜する天空》などが挙げられるだろう。広範囲の敵の殲滅及び、それを贄とした存在を召喚する《イア・シユブニグラス／黒き豊穡への貢》や、特殊なものならば特定の願いを叶えることができる《ウィツシユ・アポン・ア・スター／星に願いを》など、多岐に渡る。

今オデンキングが使っているのは、いわゆる「湧き系」というやつだ。普通の位階魔法にもある《アンデス・アーミー／死者の軍勢》などに代表される、雑魚を大量に召喚できる魔法——の超位版といえれば解りやすいだろうか。

巨大な軍隊蟻のようなモンスターが次々と湧き出し、敵を屠る様は圧巻だ。ユグドラシル時代には『おい、地球防衛軍呼んで来いよ』『誰だよあの迷惑魔法使ったの』『蟻だー！』などと親しまれており、大群に無双するカッコイイ自分をムービーに撮る目的で割と使用されていた魔法である。

そんな蟻の群れに蹂躪されるアンデッドを見て、オデンキングが思うことはただ一つ。『経験値が勿体ない』だ。いくら雑魚とはいえ、自分が召喚する蟻のように次々と湧き出る様を見れば、プレイヤーである彼がそう思うのも無理はないだろう。言ってしまうえば、一円玉が次々と碎かれているのを見ているかのような感じだろうか。たかが一円、されど一円。たった数ポイントの経験値、されどあの数ならばかなりの経験値。ゲーマーには耐えられない光景だ。

オデンキングがはまだソロのプレイヤーであり、ナザリックに所属していなかったなら話は別だった。カンストしているのだから、どう足掻いても経験値など無駄にしかならないのだから。けれど今は知っているのだ、ナザリックが保有するワールドアイテムの一つ『強欲と無欲』の存在を。

装備している状態での余剰経験値を溜めることができる、破格のマジックアイテム『強欲と無欲』 前述した《ウィツシュ・アポン・ア・スター／星に願いを》など経験値を消費して使用する超位魔法はいくつかあり、いちいち使うごとにレベルダウンしてしまうのはデメリットが非常に大きい。それを覆すのがこのワールドアイテムの存在であり、敵と戦うならばできるだけ装備していたいアイテムだ。

「つか湧き過ぎだろ……なんなのこれ。あれか。イビルインズ効果とでも名付ければいいのか」

とはいえ、ユグドラシルではそうもいかなかった。なにせ装備している状態で戦えば盗られるリスクもあり、貴重なワールドアイテムをそうホイホイと持ち出す愚を犯さないのは常識である。しかも廃人同士の戦闘において装備品枠の一つを戦闘用ではないものに替えるとなると、その差が如実に表れるのだ。

そんなわけでナザリックでもあまり使う機会が無かった『強欲と無欲』であるが、この世界では装備品の枠を一つ潰そうがあまり関係はない。なにせレベル100とまともに戦闘できるものが極々僅かしかいないのだ。警戒を怠るわけにはいかないものの、あまり警戒しすぎるのも臆病というものだろう。

だからオデンキングは、とても迷っているのだ。まだアンデッドが

湧き出る内に『強欲と無欲』を借りてきた方がいいんじゃないかと。ワールドアイテムのナザリック外への持ち出しは一回ごとに話し合いで決める取り決めがなされているが、これは仕方ない、アインズさんも納得してくれる筈だ——とオデンキングは考える。

何せアインズは割と勿体ない主義者……ぶつちやけて言うとは貧乏性である。使える者は親でも使え——とまではいかないが、日々事あるごとに人材がー、お金がー、アンデッドは疲労しないんだから積極的に使うべきだー、などと言っているのだから、そのエコ精神は推して知るべしだろう。

まあ支配者として正しい姿勢であるし、そもそもナザリックの運営を真面目に考えていないオデンキングに問題があるのは間違いないのだが。それはデミウルゴスが優秀すぎるといいうのもあれば、ぶつちやけて言うとはあんまり学が無いので口出しする方が無駄じゃないかと思っっているというのものもある。自分は自分でやれること……つまり人間であることを利用した、種族間の融和や調整などに精を出すべきだとも思っっているのだ。

「——つ駄目だつ、勿体なさすぎる」

そして彼は遂に限界を迎えた。99から100に達するまでの経験値、その数パーセント程はすでに溜まっていたかもしれないのだ。オデンキングからすれば勿体ないお化けが出るレベルである。

「ナーベラルちゃん、ちよつとナザリックに帰ってきます。大丈夫だとは思うけど、蟻が暴走しないか見ててくれる？」

「かしこまりました。何かあればすぐに御報告致します」

よろしくー、と言っつてその場から転移するオデンキング。その時点で蟻の湧きはストップしたが、既に十分な数が存在しており、そもそも一体一体のレベルはバラつきがあるとはいえ60前後にもなるのだ。カンストプレイヤーに対して効果はあまりない——腐つても超位魔法ではあるため、使い方次第では極悪な効果を発揮することもあるが——とはいえ、カツツエ平野のアンデッド程度に後れを取ることなどまずありえない。

そして一方、オデンキング達が来る前まで奮戦していた冒険者や兵

士はというと、目の前で起こっていることに啞然としていた。たった一人のマジックキャスターが使用した魔法で、自分達が苦戦していた全ての敵を壊滅させようとしているのだからそれも当然というものだろう。

そしてその集団の中で上位にあたる強者、ブレイン・アングラウスは――

「お家帰る」

「な、何を言っているのだブレイン」

「絶対あの化物の関係者だ。もうお家帰る」

「ブレイカーン!?!」

幼児退行していた。だがそれも仕方のないことだろう。ガゼフに敗れた後、血の滲むような修練に励み自信を手に入れた。そしてフルブレイク。どん底に落ちた後、クライムという眩しい輝きを見て自信を取り戻そうとした。そしてフルブレイク。

そして今。皇帝の側近という地位を手に入れ、かつどの兵士をも凌駕する自分の実力を再確認し、逸脱者たるフルルーダとて接近戦でならば充分勝機があると調子に乗って――現実逃避とも言う――いた。しかし何度も自分の心を折った化物の同類を間近で見ても、今度もきつちりフルブレイク。ブレインの心はもう限界なのだ、これは家に帰りたくなるのも仕方ない。

「あれは……ブレイン・アングラウス？ 帝国で騎士になっていたのね」

「へえ、噂に聞く人物像じゃそんなイメージじゃなかったけどな。おおかた皇帝になんか弱みでも握られてんじやねえか？ ブレイン・アングラウス程のやつを手に入れて大々的に宣伝しねえってのもおかしい話だしよ」

当たらずとも遠からずである。まあしいて言うならば、宣伝しないのは単にジルクニフの中の戦力比較が狂ってきているからだだろう。今更王国戦士長クラスの人材を手に入れたからといってそこまで喜べるものではないのだ。勿論有能な人材には変わりないため重用はしているものの、自国の主席魔法使いも王国戦士長3人分（主観）ぐ

らいにはなっているだろうし、法国の特殊部隊の方も王国戦士長1.5〜2人分くらいの猛者はごろごろしているらしいと聞いては有難味も薄れるというものである。

一番不憫なのは物差しの単位に使われている王国戦士長かもしれないが。

「あつ、蟻の群れに突っ込んで…?」

「…跳ね飛ばされたな。何やってんだあいつ?」

「なにか錯乱してみたいだった」

「もしくは自殺志願かも」

お家の方向に一直線なのはいいが、動揺しすぎである。そのまま蟻の波に引きずられていくと思われたが、エルヤーが見事な救出劇を披露していた。新生エルヤーは意外と仲間思いなのだ。

「おいおい、あいつも相当だな。帝国だけどころん戦力増えてんじやねえかこりゃ」

「そうね…でも終戦の宣言は出されている訳だし、悪い事ではないでしょう? むしろああいった人材を出し惜しみなく送ってきていることでそれがよく解るってものよ」

「まあそうだな。ちょいと前までなら示威行為にも見えたっちゃ見えだが…」

「アインズさん達の存在あればこそ、ということなんでしようね」

「ま、そういうこったな。人類側からすりや頭が上がんねえぜ」

腕組みをしながらそんなことを言っている彼女達は、物語によくある強キャラ臭が漂っている。これで影でも差して顔がよく見えていなかったら完璧だろう。まあ冒険者の頂点ではあるので間違っではないのだが。そしてそんな彼女達の前にオデンキングを見送ったナーベラルが降りてくる。

「良く解っているようで何よりです。そこまで理解できているならば、至高の御方達にタメ口を聞いてよいかどうかなど解りきっているでしょう? さっさと改めなさい」

「あ、ナーベラルさん…オーデインさんはどこに行っただんですか?」
「一旦ナザリツクに帰還されました。あと、様を付けなさい下等生物」

「すいません、ナーベラル様」

「そこじゃないっ!？」

若干ナーベラルの扱いがぞんざいになってきている蒼の薔薇。まあナーベラルが忠義を捧げている存在と割と気安く喋っているためだろう。人間とは無意識のうちに格付けしてしまうものなのだ。勿論強さにおいて劣っているのは理解しているが、自分達に危害を加えればナーベラルが怒られるだろうということもきっちり理解しているのだ。意外としたたかである。

「…それと、一回目だな」

「? 何を言っているの? 下等生物」

「二回目ね」

「…何を言っている、と聞いているのだけど? その小さな脳みそじゃ理解できなかったかしら、下等生物」

「三回目」

下等生物と言った数、その回数である。下等生物と書いてガガンボと聞こえているあたり、この世界の強制翻訳の優秀さが垣間見れるというものだ。まあそれはともかく言う度にカウントされるのだから、ナーベラルにも何を数えているのかは解った。しかしそれが意味しているところは不明であり、額に青筋をたてて不機嫌さを主張している様子が見て取れる。

「いえ、オーディンさんが『そう』言われたら回数を数えておいてって仰っていたものだから」

「え」

「みんな仲良くしまししょうつつってる組織の人間だからなー。そりやそういうことは気にしてるんじゃないかねえか?」

「え、ちよ」

「冒険者にとって報連相は大事。しつかり伝える」

「なっ、待っ…!」

教師がどこかに行った瞬間、イジメっ子が本性を現した。しかしイジメっ子ナーベラルにとって予想外だったのは、なんとボイスレコーダーで暴言を記録されていたことだった——みたいな感じだろうか。

そしてちよつと涙目になっているナーベラルへ、ティアから更なる追撃が入る。

「黙ってほしかったら、脱ぐべきあぶつ!？」

「ごめんなさい、この子ちよつと変態なの」

追撃が入りかけた、が正解だろう。ラキユースの見事な力カト落しが決まり、その美脚から繰り出された一撃によりティアはダウンした。

「でも貴女の主様二人が人間と仲良くしましょうって言ってるんだから、頑張るべきだと思わない？ 私達もナーベラルさんと仲良くできれば嬉しいなって」

「……」

「別にマジで告げ口するって訳じゃねえさ。つーかオーデインも本気で俺達がそうするとは思ってねえだろうよ。言わば俺達への信頼でもあるし——お前への信頼でもあるんじゃないやねえか？ それを裏切るかどうかは知らねえけどよ」

間違つてもそんな高尚なことを考えるオデンキングではない。単に仲が悪そうなら少し仲裁しなきゃと思っただけである。

「……………努力はしましょう。上等生物」

「もう少し努力できないかしら!? というか上等生物ってなに!？」

「くつ、まだ足りないの?」

「まだもクソも、名前で呼べばいいだろ？ ほれ、ガガーランだ。ガガーラン」

「…………ガガー…」

「そうそう」

「ガガー…ランボー…」

「混ぜてんじやねえよ!」

ガガンボとガガーラン。まあ似たようなものだろう、ナーベラルが間違うのも無理はないというものだ。ガガーランとランボーも似ているので、それも無理はない。全てはガガーランがガガーランたる由縁である。

結局、オデンキングが帰ってくるまでこの喜劇は続くこととなるの

だった。

ナザリツク地下大墳墓のとある廊下。尻尾を揺らして楽しそうに歩いているルプスレギナと、帰還したオデンキングがぼったり鉢合わせる。

「あれ？ ルプー、何してんの？」

「ちわつすオーデイン様。散歩つす」

「ああ……犬だもんな」

「狼つすよー！」

「（人狼じゃなかったっけ……？）あ、そうだったっけ。ところでアイズさん知らない？ さつき帰ってきてる筈なんだけど」

休暇を嫌がるナザリツクの配下ではあるが、ルプスレギナは割ときくつと休暇を楽しんでいる。それはアイنزの命令ということもあるし、あのデミウルゴスでさえ休暇をとったのだから下の者もそれに

習うべきかという風潮が広がったせいでもある。意外な効果が出て
アインズも少しほっとしたことは言うまでもない。

「《メツセージ／伝言》も繋がらないんすか？」

「えっ」

「：オーデイン様、忘れてたんすね」

「い、いやほら。結構重要なことだから。《メツセージ／伝言》は割と
信憑性に欠けるって常識だからね、うん」

「ナルホド、さすがオーデイン様っす」

「いま絶対嫌味なほうの『さすが』だった気がする…」

「気のせい気のせい」

ナザリックで一番オデンキングに気安く接するルプスレギナ。そ
れゆえにオデンキングも一番話しかけやすく、さばさばとした彼女の
話し方は聞いていて心地よいと思えるほどだ。なお中身が黒いこと
も当然知っているが、そもそもナザリックで黒くない者を考えた時、
数えるほどしかないためそこは気にしないようにしているらしい。
「取り敢えず《メツセージ／伝言》で居場所聞けばいいんじゃないんす
か？」

「…いや！ 重要なことだし！ 詐欺にあうかもしれんし！」

「なに意固地になつてんすか…」

「別に普通なんですけど！」

「りようかいっす。じゃあ一緒に探すの手伝いがてら散歩するっす
！」

「散歩がメインなんだ…」

何故かナザリック探索を始めなければならなくなったオデンキン
グ。人間、見栄を張ると碌な事にはならないというよい見本である。

六階層、森林にて。

「絶対こんなところに居る訳ないか？」

「私の本能が囁くっす！　ここに何かがあると！」

「そりやなにかはあるだろうけどさ……」

ガサゴソと草木をかき分けて進んでいく二人。こんなところにアインズがいるわけないとオデンキングは思ったが、しかし次の瞬間ふと思い当たる。アルベドとの逢瀬をこの森でひっそりと楽しんでいる可能性もあるか、と。それはそれでどっちにしろ探してはいけないし、そもそもカジットとイビルアイを招いている時点でそんな状態になっているわけではない。が、オデンキングは割と馬鹿なのでそのまま探し続ける。まあ本当の理由はルプスレギナが楽しそうにしているからではあるのだが。

ちなみにカツツエ平野のアンデッドはそろそろ殲滅完了しそうな勢いである。彼はいったい何をしにきたのだろうか。

「ほらオーデイン様、あそこっす！」

「…？　何かあるか？」

「私の鼻は誤魔化せないっすよ、シーちゃん！」

「へ？ ……ああ、なるほど。《シースルー・インヴィジビリティ／透明化看破》 ……トトロ？」

果たして、そこに居たのは巨大なトトロに乗ったメイちゃん——ではなく、スピアニードルにしがみ付いて……というより張り付いているシズ・デルタの姿であった。彼女はこのスピアニードルしかり、某イワトビペンギンしかり、動物愛護ロボットのような面があるのだ。

まあ愛護というよりは無理やり愛でているだけなので基本的に迷惑がられているだけなのだが。

「シズちゃん？ そのスピアニードルさんすごい嫌がつてそうなんだけど」

「問題ない」

「あっはい」

「そこはビシツと言ってやらなくちゃ駄目っすよオーデイン様！」

「えー……ルプーがお姉さんなんだから、むしろそっちの方が」

「りようかいっす！ シーちゃん、駄目っすよ！ お姉ちゃんの言うこと聞くんっす！」

「拒絶拒絶拒絶」

「無理っすオーデイン様！」

「速いなおい!! 姉の威厳は!?!」

「ないっす！」

プレアデスの中で一番威厳と無縁な存在がルプスレギナであるのは間違いないだろう。為す術もなく無視される二人は、自分達が存在しているのかすらちよつと自信がなくなってきたほどである。それにしてもこの支配者、全然支配できていない。

「次行くっす！」

「あ、ほつとくのね…」

負け犬と負け支配者。仲良く六階層を後にするのであった。

二階層、黒棺にて。

「絶対嫌だ！ こんなところにアインズさんが居る訳ないだろ!？」

「私の直感が囁くつす！ ここになにかあると！」

「嘘つけ！」

ゴキブリ蠢く黒棺。ナザリツクの傑物達ですら恐れる最悪の場所である。そこかしこを埋め尽くす小ささまざまなゴキブリは、生理的な嫌悪感を最大限に催させる。当然ルプスレギナも怖気が走る場所なのだが、オデンキングが顔を青くしているのを見て我慢しているのだ。敬意を払い、けっして侵せぬ存在が怖気づく様はルプーに奇妙な満足感を与えてくれる。そのためならば少しの我慢などどうということはない、と酷すぎる性癖を思う存分満たしているルプスレギナであった。

ここの主、恐怖公はまだ見当たらず、ゴキブリが這いずり回る音と——奇妙な咀嚼音が聞こえてくる。ポリ、ポリ、ポリ、とこの場に見合わぬ軽妙な音だ。その音の方に彼等が進んでいくと、この恐ろしい部屋に一輪の花が咲いていた。

「エ、エントマちゃん?」

「オーデイン様あ? ご機嫌麗しゆうございますわあ」

「あっはい。…うっぷ」

「このようなところに、どうされたんですのお?」

「いや、アインズさんを探しに……っっている訳ないか、はは、は。あんまり食べ過ぎて、お腹壊さないようにね」

「お気遣い、ありがとうございますっ」

そそくさとこの場を後にするオデンキング。ちなみにルプスレギナはいつのまにか外に退避していた。黒棺を出た後、外でチョココンと

体育座りをしていたルプスレギナに拳骨をかまし、頬を引つ張る。

「俺って一応ギルメンだよね！ そうだよね!？」

「ほうひえんでごあいまう、おーふいんはま」

「この駄犬がー!」

「おおふあみつふ」

しばしこねくり回した後、さらに探索という名の散歩は続く。オデ
ンキングは退く時は退くし媚びるのは得意だが、美女が居る時はあん
まり省みないのだ。アホともいう。

9階層、 皇家套房にて。

「あの、お風呂場とか居る訳……いや、なくもないかもしれないけど
さ」

「私の中の何かが囁くつす！ ここに何かあると!」
「……」

絶対ねーよ、と思いつつ少しだけお色気的なトラブルを期待するオ
デンキング。懲りない男である。

「どれどれ……ってソリュシヤンちゃん？ なんでこんなところに」

「…っ！ オーディン様。失礼致しました」

「あ、いやそれはいいんだけど、ここ男湯……」
「…ルプスレギナをお連れしているということは、湯浴みでございま
すか？ ならばこの私に是非御命令ください!」

「ええっ！ なんかキャラが違……じゃなかった、いったいどうした
のさ？ 何かあったんならできる限り聞くけど」

「……」

思いつめたような顔で懇願するソリュシヤン。いつも優雅にそつ
なくこなす様子はそこになく、焦りともつかぬ感情が見え隠れしてい

るようだ。

「…アインズ様は、偶に湯浴みをされています」

「うん？ ああ、そう聞いてるけど」

「ですが、三吉君を使われるなら、私を使っていたら嬉しいです！

私であれば三吉君の代わりを充分に勤め上げられる筈です！ メイドの本分を果たしたいのです！」

「(ルプー、三吉君って?)」

「(アインズ様の体を洗ってるやつです)」

「(ふーん……？ ソリユシャンちゃんが洗いたって言ってんならやらせてあげりやいいのに。アルベドに気を使ってるのかな?)」

「(どうっすかねえ)」

涙ながらに力説するソリユシャンに、オデンキングは肩に手をおいて優しく微笑みかける。見る人が見ればいやらしい笑みだとも言うだろうが。

「別にそのくらいいいよソリユシャンちゃん。メイドの務め、立派に果たしてもらおうかな」

「オーデイン様……！」

「アインズさんにやっているとって、充分腕を振るってくれればいいよ。仕事ぶりをアインズさんに伝えれば、ソリユシャンちゃんに洗ってもらおうこともあるかもしれないし」

「は……！」

役得役得と、お風呂に入る準備をするオデンキング。彼の察しがあう少しよければ三吉君の正体と、何故ソリユシャンが洗いたがっているかも理解出来ていただろう。しかし彼は、美女が絡むと馬鹿になる。

「じゃあよろしくー」

「はっ！」

喜び勇んでソリユシャンに背を向けるオデンキング。ちなみにルプスレギナが何をしているかという点、こっそり覗き見をしていた。オデンキングの裸体を見たかった——などという訳はなく、これから起こることを既に予見してのことである。ニマニマとした笑みはそ

の腹黒さを存分に感じさせている。

「では、洗わせていただきます」

「は——もがっ!? ちょ、むぐっ!?」

「ぶふっ! オーデイン様、最高っす!」

三吉君とはアインズの体を洗う『スライム』であり、当然ソリュシャンの洗い方も彼と同様になるのは自明の理だ。なんだかヌメっとした感触とともにソリュシャンへ沈んでいく自分の体を見て、オデンキングは一つだけ思った。

「(狼って調教できるのかな…)」

まあ調教しようとしても手玉にとられるのは間違いないだろう。満足げなソリュシャンと、腹を抱えているルプスレギナが男湯に居るシユールな湯浴みの光景であった。